

福岡市
高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ

博 多

— 高速鉄道関係調査(1) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集

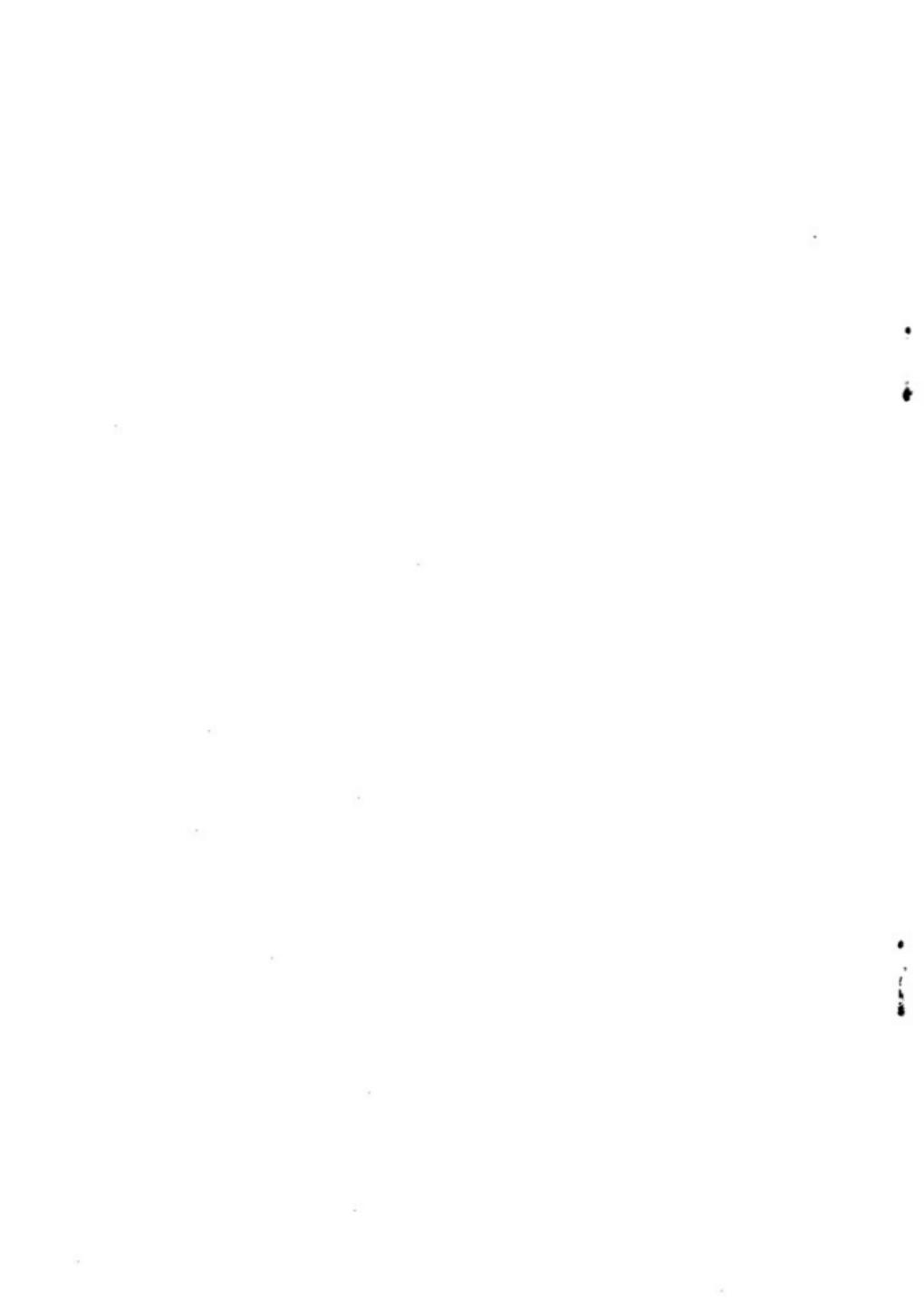
1984

福岡市教育委員会

福岡市
高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ
博 多
— 高速鉄道関係調査(1) —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集

1984

福岡市教育委員会





1. 青磁類



2. 青白磁、天目





3. 陶器類



4. 白磁壺・陶器類

6

6

6

6

序 文

福岡市教育委員会では、交通局の委託を受け昭和51年以來地下鉄線内の埋蔵文化財の調査と出土資料の整理に携わり現在もつづけています。

本書は昭和52年12月から調査を実施した博多関係の遺跡について報告するものです。

旧博多部は中世における大陸文化流入の門戸として栄えたところとして知られ、夥しい輸入陶磁器の出土量がそれを裏付けるものとして注目されています。

この報告書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、研究資料としても活用いただければ幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまで、交通局をはじめ指導委員の先生方など多くの人々の御協力に対し深甚の敬意を表するものであります。

昭和59年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津 茂美

例　　言

1. 本報告書は福岡市交通局（旧高速鉄道建設局）が福岡市教育委員会に委託した、高速鉄道（地下鉄）建設地内における発掘調査の報告書であり、博多遺跡群内で行なった発掘調査の第1集にあたる。本書を「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」とする。
2. 本書に用いた全体遺構配置図は、福岡市教育委員会が、東洋航空株式会社に委託した写真測量の成果をもとに再編集したものであって、座標は第II系を用いている。
3. 本書の遺物整理にあたって各方面の多くの方々の御指導があった。一々氏名を掲げる余裕はないが、心から感謝の意を表したい。
4. 本報告書の遺物実測図中に示したグラフは、土師皿類の計測値であり、土師皿の良好な出土状態をもった造構を主に掲げた。実線が糸切底、点線がヘラ切り底を示す。また、横軸が底径・口径を半径で示し、縦軸が器高を示す。銅錢の縮尺は、すべて $\frac{1}{2}$ である。
5. 発掘調査は、A・B区を折尾尾、山崎龍雄、浜石哲也、池崎謙二、出入口2・3区を飛高憲雄、折尾、力武卓治、池崎が担当した。
6. 本書の執筆は、折尾、池崎、小畠弘己、森本朝子が行ない、分担は、本文目次に記す。
7. 遺構の実測は、A・B区を浜石、山崎、池崎、長沼孝、富田逸郎、村野隆男、杉野悦郎、坂本章一、柴田喜瑞、青木郁夫、嶋田誠二、松木美枝子が行ない、出入口2・3を折尾、飛高、力武、池崎、日野孝司が行なった。それ以外は、航空写真測量の成果から、小畠、木村幾多郎、池崎が起こしたものである。
8. 遺物の実測は、森本、木村、小畠、池崎があたり、遺構、遺物のトレースは、溝口美津代、小畠、木村、池崎があたった。
9. 写真撮影は、A・B区現場関係を折尾、浜石、山崎、池崎、白石公高、宮島成昭が、出入口2・3現場関係を力武、白石があたり、遺物写真は全て白石が担当した。
10. 博多遺跡群地形図の作成には、山崎博之の協力があった。
11. 英文要旨、中文要旨の訳文は、それぞれ林田憲三、竹下ひろみが行なった。
12. 遺物数量表作成、復元をはじめとする遺物整理は、以下の方々によるところが大である。木村厚子、溝口美津代、里村寿子、山山由美子、江藤百合子、有島美江、伊藤裕子、榎崎多佳子、田尻寿麻子、今村淳子、田子森牧子、豆田陽子、下尾美成子、撫養久美子、近藤聰子、秋山順子、的場由利子、能美須賀子、竹下ひろみ、佐々木智子、西原年枝。
13. 本書の編集は、折尾、力武、浜石、山崎と協議の上、森本、木村、白石の全面的な協力を得て、小畠と池崎が行なった。また、付録の博多出土貿易陶磁器分類表は、有島の助力を得て、森本が作成、編集した。題字は故筑紫豊先生の揮毫による。

本文目次

I. 高速鉄道関係埋蔵文化財調査概要	1
第1章 調査に至る経緯	折尾 学 3
第2章 組織の構成	折尾 4
第3章 路線内遺跡の調査概要 2号線関係調査区	小畠弘己・池崎謙二 6
II. 博多 - 地下鉄路線内の調査(1)	9
第1章 遺跡の自然環境と歴史的環境	11
1. 遺跡の立地と自然環境	池崎 11
2. 遺跡の歴史的環境と調査研究	池崎 14
第2章 本体部A・B区の調査	18
1. 調査の経過	池崎 18
2. 調査の概要	池崎 22
1) 造構と造構出土の遺物	池崎 22
2) 造構外出土の遺物	森本朝子 96
3) 変棺墓	小畠 108
3. 小結	池崎 115
第3章 神間駅出入口2・3の調査	117
1. 調査の経過	池崎 117
2. 調査の概要	118
1) 造構と造構出土の遺物	池崎 118
2) 造構外出土の遺物	森本 154
3) 変棺墓	小畠 161
3. 小結	森本・池崎 165
第4章 結語	167
英文要旨	168
中文要旨	170

挿 図 目 次

Fig. 1	高速鉄道線内遺跡地図 (縮尺1/75,000)	2
Fig. 2	筥崎宮櫻門	6
Fig. 3	地下鉄路線と筥崎・馬出遺跡 (縮尺約1/3,000)	7
Fig. 4	馬出西工区調査風景	8
Fig. 5	馬出西工区木棺墓出土の青磁碗 (縮尺1/3)	8
Fig. 6	博多周辺航空写真	10
Fig. 7	博多古図	11
Fig. 8	博多遺跡群付近ボーリング図	12
Fig. 9	博多遺跡群地形図 (縮尺1/7,500)	折込み
Fig. 10	博多港沖引揚げの天目碗 (縮尺1/3)	16
Fig. 11	東長寺付近古絵図	18
Fig. 12	博多遺跡群地下鉄1号線関係調査区全体図 (縮尺1/400)	折込み
Fig. 13	A・B区グリッド設定図 (縮尺1/200)	19
Fig. 14	A・B区土層断面図 (縮尺1/40)	折込み
Fig. 15	A-2区調査風景	21
Fig. 16	1・3号土塙実測図 (縮尺1/30)	23
Fig. 17	2号土塙実測図 (縮尺1/30)	24
Fig. 18	2・3号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	25
Fig. 19	4号土塙実測図 (縮尺1/30)	27
Fig. 20	4・7号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	28
Fig. 21	8・10・13・26号土塙実測図 (縮尺1/30、1/60)	29
Fig. 22	5号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	30
Fig. 23	8・10号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	31
Fig. 24	12号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	32
Fig. 25	14・15・18・19号土塙実測図 (縮尺1/30)	34
Fig. 26	14号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	36
Fig. 27	15号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	37
Fig. 28	16号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	38
Fig. 29	17・18号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	39
Fig. 30	19号土塙出土遺物 (縮尺1/3)	40

Fig. 31	20・21・23・25・27号土塙実測図（縮尺1/30、1/60）	42
Fig. 32	20号土塙出土遺物（縮尺1/3）	43
Fig. 33	21号土塙出土遺物（1）（縮尺1/3）	44
Fig. 34	21号土塙出土遺物（2）（縮尺1/3、1/6）	45
Fig. 35	22・23・25号土塙出土遺物（縮尺1/3）	47
Fig. 36	27号土塙出土遺物（縮尺1/3）	48
Fig. 37	29・30・31号土塙実測図（縮尺1/30）	50
Fig. 38	29号土塙出土遺物（縮尺1/3）	51
Fig. 39	31号土塙出土遺物（縮尺1/3）	52
Fig. 40	32・34号土塙実測図（縮尺1/30）	53
Fig. 41	32号土塙出土遺物（1）（縮尺1/3）	54
Fig. 42	32号土塙出土遺物（2）（縮尺1/3）	55
Fig. 43	32号土塙出土遺物（3）（縮尺1/3）	56
Fig. 44	34号土塙出土遺物（縮尺1/3）	58
Fig. 45	35・36・41・63号土塙実測図（縮尺1/30）	59
Fig. 46	41・42・43・47号土塙出土遺物（縮尺1/3）	60
Fig. 47	44・48号土塙出土遺物（縮尺1/3）と45号土塙出土土師皿類計測グラフ	61
Fig. 48	52号土塙出土遺物（縮尺2/3）と59号土塙出土土師皿類計測グラフ	62
Fig. 49	64・65・73・74号土塙出土遺物（縮尺1/3）	65
Fig. 50	66・67・74号土塙実測図（縮尺1/30）	66
Fig. 51	76・79号土塙出土遺物（縮尺1/3）と78号土塙出土土師皿類計測グラフ	67
Fig. 52	78・79・80号土塙実測図（縮尺1/30）	68
Fig. 53	80号土塙出土遺物（縮尺1/3）	69
Fig. 54	81・82号土塙実測図（縮尺1/60、1/30）と82・84号土塙出土遺物（縮尺1/3）	70
Fig. 55	81号土塙出土遺物（縮尺1/3）と83号土塙出土土師皿類計測表	71
Fig. 56	85・86・89・93号土塙実測図（縮尺1/30）	72
Fig. 57	94・95号土塙実測図（縮尺1/30）と95号土塙出土遺物（縮尺1/3）	73
Fig. 58	A-1～Ⅲ区検出の磁石列実測図（縮尺1/60）	76
Fig. 59	1号溝出土遺物（1）（縮尺1/3）	77
Fig. 60	1号溝出土遺物（2）（縮尺1/3）	78
Fig. 61	2号溝（5号溝）土層断面図（縮尺1/40）	79

Fig. 62	2号溝（5号溝）出土遺物（1）（縮尺1／3）	80
Fig. 63	2号溝（5号溝）出土遺物（2）（縮尺1／3）	81
Fig. 64	2号溝（5号溝）出土遺物（3）（縮尺1／3）	82
Fig. 65	2号溝（5号溝）出土遺物（4）（縮尺1／3）	83
Fig. 66	2号溝（5号溝）出土遺物（5）（縮尺1／3）	84
Fig. 67	2号溝（5号溝）出土遺物（6）（縮尺1／3・2／3）	85
Fig. 68	3号溝（谷状落ち込み）実測図（縮尺1／40）	88
Fig. 69	3号溝出土遺物（1）（縮尺1／3）	89
Fig. 70	3号溝出土遺物（2）（縮尺1／3）	90
Fig. 71	3号溝出土遺物（3）（縮尺1／3）	91
Fig. 72	3号溝出土遺物（4）（縮尺1／3）	92
Fig. 73	3号溝出土遺物（5）（縮尺1／3・2／3）	93
Fig. 74	6号溝出土遺物（縮尺1／3）	95
Fig. 75	A区造構外出土遺物（1）（縮尺1／3）	97
Fig. 76	A区造構外出土遺物（2）（縮尺1／3）	98
Fig. 77	A区造構外出土遺物（3）（縮尺1／3）	99
Fig. 78	A区造構外出土遺物（4）（縮尺1／3）	100
Fig. 79	A区造構外出土遺物（5）（縮尺1／3・2／3）	101
Fig. 80	B区造構外出土遺物（1）（縮尺1／3・1／6）	102
Fig. 81	B区造構外出土遺物（2）（縮尺1／3）	103
Fig. 82	B区造構外出土遺物（3）（縮尺1／3）	104
Fig. 83	B区造構外出土遺物（4）（縮尺1／3）	105
Fig. 84	B区造構外出土遺物（5）（縮尺1／3・2／3）	106
Fig. 85	甕棺墓出土状況実測図（縮尺1／30）	110
Fig. 86	甕棺実測図（1）（縮尺1／12）	111
Fig. 87	甕棺実測図（2）（縮尺1／12）	112
Fig. 88	甕棺実測図（3）（縮尺1／6）	113
Fig. 89	甕棺実測図（4）（縮尺1／6）	114
Fig. 90	1・3号上塙実測図（縮尺1／60）	118
Fig. 91	祇園駅舎出入口2・3調査区造構全体図（1／100）	折込み
Fig. 92	1号土塁（井戸）出土遺物（1）（縮尺1／3）	119
Fig. 93	1号土塁（井戸）出土遺物（2）（縮尺1／3）	120

Fig. 94	1号土塁（井戸）出土遺物（3）（縮尺1/3）	121
Fig. 95	1号土塁（井戸）出土遺物（4）（縮尺1/3）	122
Fig. 96	1号土塁（井戸）出土遺物（5）（縮尺1/3）	123
Fig. 97	1号土塁（井戸）出土遺物（6）（縮尺1/3）	124
Fig. 98	1号土塁（井戸）出土遺物（7）（縮尺1/3）	125
Fig. 99	1号土塁（井戸）出土遺物（8）（縮尺1/3）	126
Fig. 100	1号土塁（井戸）出土遺物（9）（縮尺1/3）	127
Fig. 101	1号土塁（井戸）出土遺物（10）（縮尺1/3）	128
Fig. 102	1号土塁（井戸）出土遺物（11）（縮尺1/3）	129
Fig. 103	1号土塁（井戸）出土遺物（12）（縮尺1/3）	130
Fig. 104	1号土塁（井戸）出土遺物（13）（縮尺1/6）	131
Fig. 105	1号土塁（井戸）出土遺物（14）（縮尺1/6）	132
Fig. 106	1号土塁（井戸）出土遺物（15）（縮尺1/6）	133
Fig. 107	2号土塁（1号溝）出土遺物（縮尺1/3）	136
Fig. 108	3号土塁出土遺物（縮尺1/3）	137
Fig. 109	7号土塁実測図（縮尺1/30）と出土遺物（縮尺1/3）	138
Fig. 110	10・15・16・21・23・27・30・32号土塁出土遺物（縮尺1/3）	139
Fig. 111	35号土塁（井戸）実測図（縮尺1/60）と出土遺物（縮尺1/3）	140
Fig. 112	41・43・44号土塁実測図（縮尺1/30、1/60）	141
Fig. 113	36・41号土塁出土遺物（縮尺1/3）	142
Fig. 114	43・44号土塁出土遺物（縮尺1/3）	143
Fig. 115	45・53・67号土塁実測図（縮尺1/30、1/60）	145
Fig. 116	45号土塁出土遺物（縮尺1/3）	146
Fig. 117	48・50・53号土塁出土遺物（縮尺1/3）	147
Fig. 118	54・55・56・61・64・67号土塁（井戸）実測図（縮尺1/60）	150
Fig. 119	54・56・63・64号土塁出土遺物（縮尺1/3）	151
Fig. 120	67・71号土塁出土遺物（縮尺1/3）	152
Fig. 121	遺構外出土遺物（1）（縮尺1/3）	155
Fig. 122	遺構外出土遺物（2）（縮尺1/3）	156
Fig. 123	遺構外出土遺物（3）（縮尺1/3）	157
Fig. 124	遺構外出土遺物（4）（縮尺1/3）	158
Fig. 125	遺構外出土遺物（5）（縮尺1/3）	159

Fig. 126	甕棺墓出土状況実測図（縮尺1/30）.....	162
Fig. 127	甕棺実測図（1）（縮尺1/12）.....	163
Fig. 128	甕棺実測図（2）（縮尺1/6）.....	164
付 図	A・B区遺構全体図（縮尺1/100）	

表 目 次

Tab. 1	地下鉄路線内遺跡調査一覧表.....	3
2	博多遺跡群調査一覧表.....	17
3	地下鉄祇園駅2・3号出入口 1号土塁（井戸）出土遺物観察表.....	134
付表	A・B区および2・3号出入口の出土遺物遺構別数量表	

写真図版目次

卷頭写真1	出入口2・3区 1号土塁（井戸）出土遺物（1）	
2	出入口2・3区 1号土塁（井戸）出土遺物（2）	
PL. 1	博多眺望 博多駅上空より	
PL. 2	(1) 調査区遠景 (2) 路線内試掘調査風景	
PL. 3	(1) 中間杭試掘調査風景（店屋町工区） (2) A-2区調査風景	
PL. 4	(1) B-I区調査風景 (2) B-III区調査風景	
PL. 5	(1) A-1区北側土層断面 (2) A-1区東側土層断面（3号溝落込み部）	
PL. 6	(1) A-1区遺構全景（東より） (2) A-2区遺構全景（東より）	
PL. 7	(1) B-II・III区土層断面（東より） (2) B-II区上部遺構全景（南より）	
PL. 8	(1) B-II・III区下部遺構全景（南より） (2) B-III区下部遺構（東より）	
PL. 9	(1) 2・3号土塁上部石組（東より） (2) 2・3号土塁下部遺構（北東より）	
PL. 10	(1) 2号土塁遺物出土状態 (2) 21号土塁（火葬墓）遺物出土状態（西より）	
PL. 11	(1) 22号土塁（火葬墓）土層断面 (2) 23号土塁（井戸掘方・北より）	
PL. 12	(1) 25号土塁遺物出土状態 (2) 27号土塁遺物出土状態	
PL. 13	(1) 29号土塁上部石組 (2) 30号土塁遺物出土状態	
PL. 14	(1) 31号土塁遺物出土状態 (2) 32・34号土塁、4号溝（西より）	

- PL. 15 (1) 32・34号土塁（北西より） (2) 32号土塁遺物出土状態
- PL. 16 (1) 76・77号土塁（南東より） (2) 76号土塁
- PL. 17 (1) 77号土塁 (2) 78号土塁遺物出土状態
- PL. 18 (1) 84号土塁（井戸）遺物出土状態 (2) 84号土塁（井戸）主体部
- PL. 19 (1) 82号土塁 (2) 86号土塁
- PL. 20 (1) A-2区2号溝遺物出土状態(東より) (2) A-2区1・2号溝(完掘後・東より)
- PL. 21 (1) A-2区2号溝上面遺物出土状態(北西より) (2) A-2区2号溝遺物出土状態(北西より)
- PL. 22 (1) B区2号溝（5号溝）調査風景（西より） (2) 2号溝（5号溝）調査風景
- PL. 23 (1) 2号溝（5号溝）全景（東より） (2) 2号溝（5号溝）全景（西より）
- PL. 24 (1) 2号溝（5号溝）上層断面1と上部遺物出土状態
(2) 2号溝（5号溝）土層断面1（下部掘下げ後）
- PL. 25 (1) 2号溝（5号溝）土層断面2と上部遺物出土状態
(2) 2号溝（5号溝）土層断面2（下部掘下げ後）
- PL. 26 (1) 2号溝（5号溝）遺物出土状態 (2) 2号溝（5号溝）遺物出土状態
(3) 3号溝遺物出土状態 (4) 3号溝遺物出土状態 (5) 3号溝遺物出土状態
(6) 3号溝牛齒（上顎骨L.1）出土状態
- PL. 27 (1) 4号溝（南より） (2) A-1区礎石列（東より）
- PL. 28 (1) 2号甕棺墓と6号溝（北東より） (2) 1号甕棺墓
- PL. 29 (1) 8号甕棺墓 (2) 9号甕棺墓
- PL. 30 (1) 10・11号甕棺墓 (2) 11号甕棺墓 (3) 12・13号甕棺墓
- PL. 31 (1) 出入口2・3区夜間調査風景 (2) 出入口2・3区夜間調査風景
- PL. 32 (1) 出入口2・3区35号土塁（石組井戸）
(2) 出入口2・3区35号土塁（石組井戸内面）
- PL. 33 A区 遺構出土遺物
- PL. 34 A・B区 遺構出土遺物
- PL. 35 A・B区 遺構出土遺物
- PL. 36 A・B区 遺構及び遺構外出土遺物
- PL. 37 出入口2・3区 遺構出土遺物
- PL. 38 出入口2・3区 遺構外出土遺物
- PL. 39 出入口2・3区 1号土塁（井戸）出土遺物 (1)
- PL. 40 出入口2・3区 1号土塁（井戸）出土遺物 (2)
- PL. 41 出入口2・3区 1号土塁（井戸）出土遺物 (3)

- PL. 42 出入口2・3区 1号土塁（井戸）出土遺物 (4)
- PL. 43 出入口2・3区 1号土塁（井戸）出土遺物 (5)
- PL. 44 出入口2・3区 1号土塁（井戸）出土遺物 (6)
- PL. 45 A・B区 墓書集成 (1)
- PL. 46 A・B区 墓書集成 (2)
- PL. 47 出入口2・3区 墓書集成
- PL. 48 A・B区出土櫛棺
- PL. 49 出入口2・3区出土櫛棺

I. 高速鉄道関係埋蔵文化財調査概要

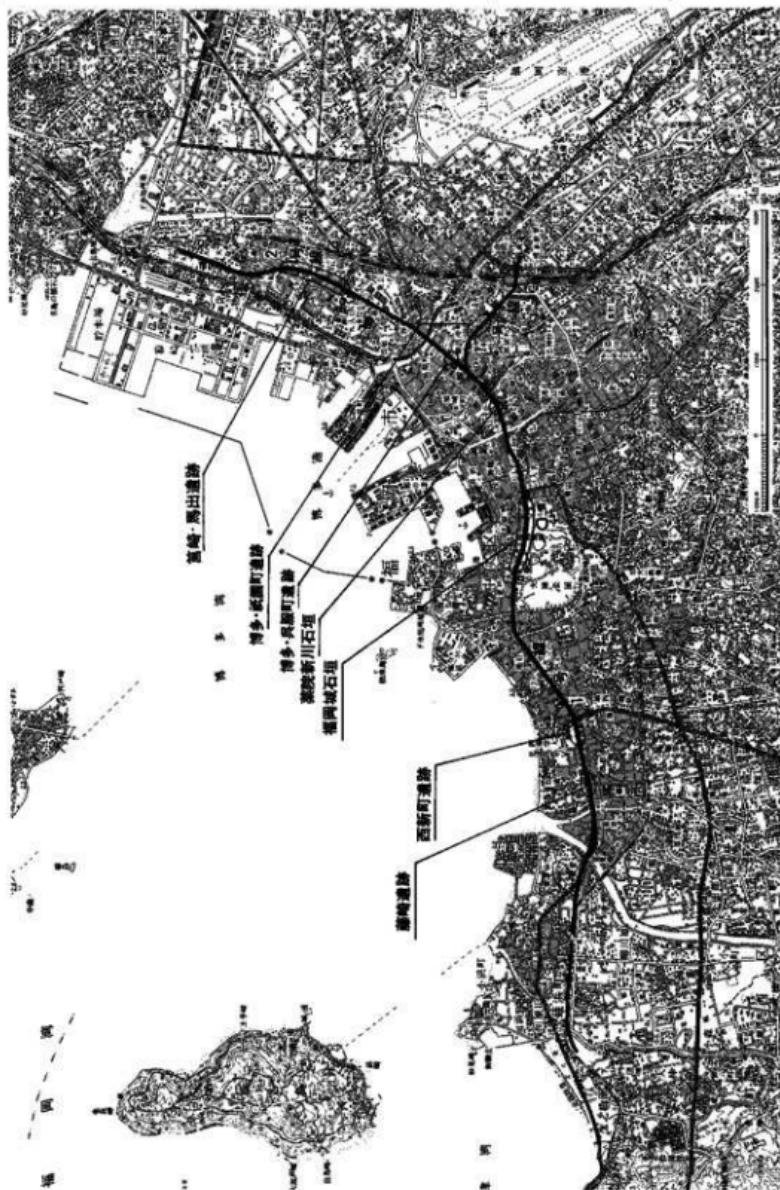


Fig. 1 高速鉄道路線内地図 (1/75,000) 原図：国土地理院5万分の1地形図「福岡」

第1章 調査に至る経過

昭和58(1983)年3月22日、福岡市高速鉄道1号線は開通した。福岡市にとって記念すべき1日である事を思い、又関係各位の御苦労に対し少しあいの拍手を、まず贈りたいと思う。

本路線内遺跡の調査を昭和51年8月に始めてこの方7年有余の歳月が流れた。福岡市の海岸線は、古来人々の海の彼方に対する想いをつのらせ、実際その想いを現実のものにして来た。古くは邪馬台国論争の象徴的存在である「漢委奴国王」の金印、西の都「大宰府」の迎賓館であった大宰府跡、そして中世の港町であった博多袖ノ瀬等々は、大多数の市民に親しまれる歴史事象である。

このような意味において、地下鉄が海岸線に沿い走り抜ける事は文化財サイドにとっては恐怖でもあり、又千載一遇の機会でもあった。隧道建設担当の交通局、文化財担当の教育委員会双方が自己の立場を主張し協議する事、数十回、実際調査にとりかかるまで2年有余の日月が流れ、安堵の境地に至ったのは昭和51(1976)年6月であった。そして同年8月調査はゆっくりではあるが確実な足取りで始動したのである。昭和58年12月には、地下鉄2号線箱崎・馬出区の調査が完了し、想定した路線内遺跡調査の99%を消化し、残すところ祇園駅P2出入のみとなつた。調査した遺跡の調査工程は下表を参照されたい。下表に記述できない調査始動までの道のりは次のとおりである。

昭和49、50年、調査について協議。昭和51年5月、工事で福岡城石垣発見。昭和51年6月、路線内の文化財の調査について協議成立。昭和51年8月、西新町遺跡の調査開始。

Table 1. 地下鉄路線内遺跡調査一覧表

遺跡名	所 在 地	時 代	性 格	調査期間	面積(m ²)	分 類 日 数	備 考
麻 岛 遺 跡	西区麻崎西区役所前	弥生時代	貝 壳 墓 地	昭和52年4月 ～昭和53年4月	4,925m ²	340 (36)	
（寺 湾 二 四）	西区若狭町	弥生時代 ～古墳時代	牛 活 神 群	昭和52年10月 ～昭和54年4月	920m ²	40 (12)	麻島と西新町 に入る
西 新 町 遺 跡	西区佐賀郡高松町	*	其 他 遺 踏・牛活神群	昭和54年8月 ～昭和55年4月	4,210m ²	231 (37)	
福 司 鎮 内 墓・古 墓	中央区東戸・大字門・平和町・ 赤坂	江戸時代	墓 - 古 墓	昭和55年12月 ～昭和56年9月	14,900m ²	205 (10)	
福岡城闇殿御用石垣	中央区天神(近衛府前)	*	武家の跡と諸多家の人 田とを分けた石垣	昭和56年3月 ～昭和56年6月	500m ²	18 (2)	
博 多 遺 踏	糸都町丁区 (御幸通り)	博多区・土屋町・糸都町・轟塚 (御幸通り)	諱名 ～御幸時代	中世の糸都町 中世の諱名	昭和56年1月 ～昭和56年5月	200m ²	54 (1)
	山都町工区	博多区御幸所町東方町	*	中世の博多の街	昭和56年12月 ～昭和57年1月	1,832m ²	216 (37)
	祇園町工区	博多区祇園新町	*	*	昭和56年2月 ～昭和56年3月	4,500m ²	207 (34)
博 多 航 積 工 作	博多区博多駅前	築 壁 ～室町時代	*	昭和56年12月 ～昭和57年3月	4,500m ²	122 (10)	
博 多 遺 踏 跡	博多区博多駅前	博 多 遺 踏	台 地	昭和56年1月 ～昭和56年3月	約 4,000m ²	30 (3)	現在のハシケ ノ坂
竹 末 宮 遺 踏	東区青峰宮参道・馬出	築 壁 ～室町時代	青峰宮・門跡	昭和57年4月 ～昭和58年12月	約 5,000m ²		
					計	47,534m ²	1,366 (139)

第2章 組織の構成

調査指導委員

考 古 学	鏡山 猛（前九州歴史資料館長）	森 貞次郎（九州産業大学教授）
	杉原 芳介（前明治大学教授・故人）	乙益 重隆（国学院大学教授）
	岡崎 敏（九州大学教授）	賀川 光夫（別府大学教授）
	横山 浩一（九州大学教授）	大塚 初重（明治大学教授）
	藤田 等（静岡大学教授）	白木原和美（熊本大学教授）
	山中 琢（奈良国立埋蔵文化財センター長）	
	西谷 正（九州大学助教授）	三島 格（前福岡市歴史資料館長）
	藤井 功（福岡県教育庁文化課長）	
日 本 史	筑紫 豊（前福岡県文化財保護専門委員・故人）	
	三宅安太郎（前福岡県文化財保護専門委員・故人）	
	田村 國澄（九州歴史資料館長・前熊本大学教授）	
	川添 昭二（九州大学教授）	
人 類 学	永井 昌文（九州大学教授）	
岩 石 学	種子田定勝（前九州大学教授）	
水工土木学	山内 豊聰（九州大学教授）	
地 質 学	浦山 英夫（九州大学教授）	
建 築 学	上田 充義（九州大学助教授）	
歴史地理学	日野 尚志（佐賀大学助教授）	

福岡市交通局 — 調査委託

交通事業管理者	大石 秀雄	
理 事	岩佐 長生	松原 弘和
総 務 部 長	石橋 秀敏	総務課長 關部 隆浩 経理課長 行友 雅浩
工 事 部 長	米澤 福徳	工事課長 川原 隆幸 第1工事事務所長 川口 広恭 第2工事事務所長 山中 和敏
技 術 部 長	理事兼務 設計課長 表 友廣 計画課長 静 純一	計画第1係長 吉田 豊治 中村 俊喜 横木 正明

教育委員会－調査主体

教育長 西津茂美

文化部長 中田 宏

文化課長 生田征生

埋蔵文化財第1係長 柳田純孝

事務担当 岡島洋・古藤国生

調査担当 折尾 学・塙屋勝利・浜石哲也・山崎龍雄・池崎謙・小畠弘己

調査協力 山崎純男・井沢洋一・力武卓治・飛高憲雄

調査協力団体

蘿崎遺跡 佐藤工業（株）福岡支店 取締役支店長 梅木正二

西新町遺跡 青木建設（株）福岡支店 取締役支店長 前田三男

戸田建設（株）九州支店 支店長 栗飯原延胤

福岡城石垣 清水建設（株）九州支店 取締役支店長 森井哲也

鴻池組（株）福岡支店 五十嵐章

日本国土開発（株）九州支店 支店長 伊藤幸郎

大成建設（株）福岡支店 取締役支店長 里見泰男

梅林建設（株）福岡支店 取締役支店長 平岡義季

薬院新川石垣 間組（株）福岡支店 常務取締役支店長 西村重信

興服町遺跡 大日本土木（株）九州支店 取締役支店長 越山萬作

紙園町遺跡 熊谷組（株）福岡支店 常務取締役支店長 勝元 元

三井建設（株）福岡支店 取締役支店長 龍岡一巳

博多駅前周辺 竹中工務（株）九州支店 支店長 長野和郎

博多駅東周辺 日産建設（株）福岡支店 支店長 今津孝二

首崎宮周辺 西松建設（株）九州支店 支店長 甲斐栄一

（株）地崎工業福岡支店 支店長 大和田國彦

大成・梅林共同企業体代表者 大成建設（株）九州支店長 横内利治

その他の協力者交通局関係 木暮洋（前理事）・原一夫（前工事部長）・本多修一（前技術部長）
野田義一（前総務課長）・平山幸生（前工事課長）・永松正典（前第1工事事務所所長）・津高正高（第2工事事務所所長）教育委員会関係 古村澄一・戸田成一（以上前教育長）・清水義彦・井上剛紀・甲斐貞行
(以上前文化課長)・三宅安吉（前埋蔵文化財第1係長）

第3章 路線内遺跡の調査概要

地下鉄路線内における遺跡の調査は、昭和59年4月に予定されている1号線、祇園駅舎P2出入口の調査を以て完了することになる。それまでに手がけた遺跡は、Fig. 1 及び Tab. 1 に記したとおりであるが、藤崎遺跡、西新町遺跡、福岡城址については、それぞれ下記の報告書において既に報告している。

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ 「藤崎遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集
1981 (藤崎駅舎本体部の調査)

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ 「西新町遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集
1982 (西新工区隧道一般部の調査)

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ 「福岡城址—内堀外壁石積の調査—」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集 1983 (福岡城址堀石垣および兼院新川石垣の調査)

『藤崎遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 1982 (藤崎駅舎出入口部の調査)

また、博多については、本報告において触れるので重複を避け、ここでは、2号線筥崎宮、馬出周辺遺跡に関して、その概要を紹介することにしたい。

筥崎宮周辺における遺跡については、一帯が既に密集した市街地となっており、分布調査等一般調査でその実体を知ることは困難であり、福岡市教育委員会が昭和56(1981)年度発行した「福岡市文化財分布地図(東部Ⅰ)」においては、わずかに元寇防星の推定線のみが記載されているにすぎない。しかしながら、筥崎宮(Fig. 2)が、博多と同様に对外貿易の重要な拠点の一つであったことは明確で、『筑前國続風土記 卷之十八』によれば、茅元儀によって記された明代の兵法書『武備志、二百三十一・日本考』にこの近辺に関して、「……法哥熱機」と名付く。すなはち廟先なり。

一街あり。大廣街と名付く。
唐人かしこに留りて相傳れり、
今盡く倭となる」とあり、また
筥崎宮宝物館に、境内から出土したと伝えられる中国製白磁碗が収蔵されていることなどからも、遺跡の存在することは当然のことと思われた。

福岡市教育委員会では、遺跡の範囲を工事発注後の側壁



Fig. 2 篭崎宮 標門

柱布掘の立会調査によって決定し、遺跡の存在が確認された時点で、本調査へと移行することにした。なお、千代町～九大病院間は、県庁舎新築前の試掘調査で遺跡の存在が認められていないことや、筥崎宮参道以北は路線が江戸時代の汀線部を通過するため遺跡の所在が考えられないことから、布掘の立会は、馬出東、馬出西、筥崎宮参道の三工区約900mについて行った。

筥崎宮参道工区の立会は、昭和57(1982)年4月から9月まで断続的に行なった。この工区では、元寇防壁の推定線が路線内を斜断しており、その存在も当然考えられた。しかし、路線全区に立会したにも拘らず、石塊の存在すら認められなかった。この事実は、元寇防壁推定線の再検討を要するのか、それとも、後世の石材抜取によるものか、再考を必要とする。この工区では、地表下約50cmで黄白色地山砂層に達し、また、1m強の深さで湧水が見られるなど、遺物包含層は、全く見られなかった。

馬出東・西工区は、昭和58(1983)年3月から6月にかけて立会調査を行なった。この工区は、古砂丘上を南北に走る大学通りを境に、東西の工区に分かれる。馬出西工区では、現馬出電報電話局付近に、「お綱池」と呼ばれる池があって、この池の西方は東公園に続く松原であったと言われている。立会調査の結果でも、この池の東側から遺物が出土しはじめ、

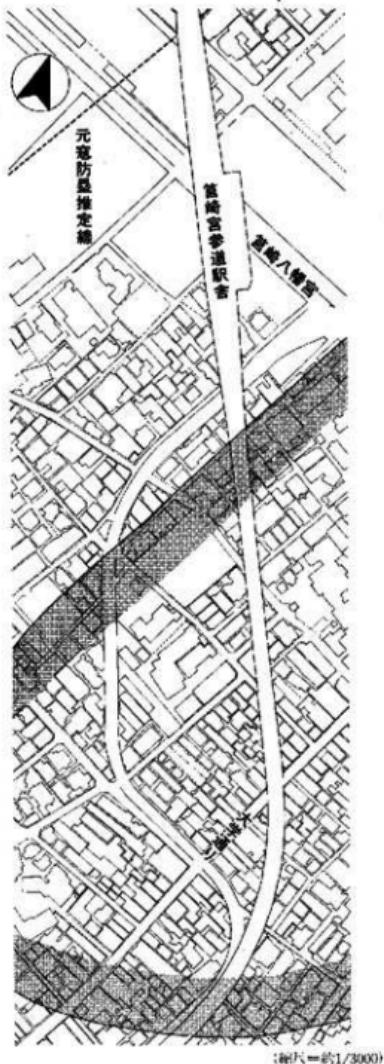


Fig. 3 地下鉄線と筥崎・馬出遺跡



Fig. 4 馬出西工区調査風景

馬出東・西工区における遺跡推定地内の発掘調査 (Fig. 4) は、同年7月4日から開始し、12月18日をもって完了した。遺跡北側では、バス路線の南に、地下鉄路線を斜断する現町筋平行の室町期の溝3本が検出され、この溝を境に、海側では遺構、遺物が見られず、この溝が中世集落の西端を区画したものと思われる。また、この溝は、字図に残された集落部と畠との字名の変換線と驚く程一致している。大学通りを挟んだ両側では、道路に面して間口3間から3間半程の細長い掘立柱建物が並び、何回もの建替えが看取された。これらの柱穴の中には、礎石を置くものも見られた。建物の年代は、15・16世紀頃に位置づけられ、おそらく道路沿いに発達した商家であると思われる。遺構には、これ以外多くの木桶組井戸が検出されており、水位が浅く、桶の遺存状態は良好であった。また、13世紀頃の木棺墓も点々と有り、うち一基には、同安窯系の櫛描文青磁碗 (Fig. 5) が副葬されていた。出土遺物は、11世紀後半から16世紀にかけてのものが、殆んどを占め、博多と同様の中世集落址であるが、その密度は比較的低く、調査区は遺跡の西端にあたっていると思われ、その中心部はやはり筈崎宮の近辺にあると考えられる。

遺跡の西端が、ここに求められることが明白になった。東工区においては、西鉄バス路線の南側で包含層がはじめて現れ、中世の遺物包含層が、南側に延びることが明らかにされた。こうして、筈崎・馬出遺跡範囲の一部は、Fig. 3のように推定された。

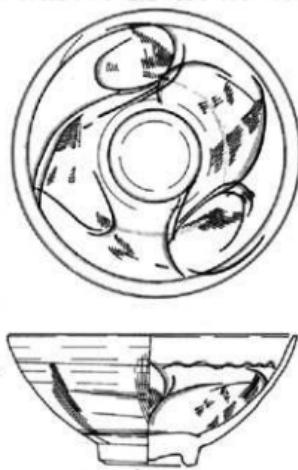


Fig. 5 馬出西工区 木棺墓出土青磁碗

II. 博 多

— 地下鉄路線内の調査(1) —



Fig. 6 博多周辺航空写真

第1章 遺跡の自然環境と歴史的環境

1. 遺跡の立地と自然環境

まず初めに、本書で一般的に用いている「博多」について、その地域を明確に規定しておく必要がある。「博多」の認識のされ方には、それぞれの時代の実態に即して、①博多湾をとりまく地域という広義の理解と、②大宰府鴻臚館を控えた現福岡城近辺という古代における認識と、③黒田入城時以来の城下町「福岡」に対する商業都市「博多」(中世における「博多」が、基礎になっている)と、更には、④現在の福岡市行政区における「博多区」など様々なものがある。本書で通例用いる「博多」は、③の中近世における「博多」であり、福岡市教育委員会が、文化財保護の立場からその範囲を推定したところの「博多遺跡群」(Fig. 9)を表わすものと理解していただきたい。

福岡市は、西南部を背振山(1055m)を主峰とする背振山地によって佐賀県と区画され、東部を三郡山地の支塊、立花山塊によって、東南部を同じく四王寺山塊によって区切られており、北面を博多湾を経て玄海灘に面している。福岡市域の大半は、これら東部および南部の上部白



Fig. 7 博多古図

亜紀の花崗岩などからなる山地を除いて、頁岩、砂岩などからなる古第三期層によって基盤が構成されている。この古第三期層中には、姪浜炭田、宇美炭田などに見られるように、石炭層も発達している。また、この基盤には、北西方向へ延びる大きな断層が多く見られ、地点によりその浅深の差は極端である。市街地は、これらの山地の北側に形成された福岡平野や早良平野などの沖積平野や、それぞれの山塊から断層に沿って海側に延びる低支丘、およびその周辺の洪積層から成る低丘陵などに營まれている。

海岸部に目を転じてみよう。博多湾は、北辺に志賀島に繋がる海の中道、西に糸島半島があり、更に湾頭には玄界島、能古島があって、玄界灘の荒波を遮るこれら自然の防波堤によって抱かれた波静かな良港である。博多湾岸には、湾内を左転する海流と、瑞梅寺川、宝見川、那珂川、多々良川など花崗岩山地に源を発する諸河川の砂の搬出とによって、砂丘の発達が著しい。この砂丘は、既に弥生時代には形成されており、今宿横浜遺跡、姪浜新町遺跡、藤崎遺跡、西新町遺跡などの斐檜墓地をはじめとする遺跡が残されている。また、沿岸には、糸島門山、愛宕山、荒戸（津）山など島嶼状の独立丘陵があって、これらの丘陵は、湾に向って右方向に延び砂嘴として発達した砂丘と接し、陸繫島を形成している。これらの砂嘴、および陸繫島の背

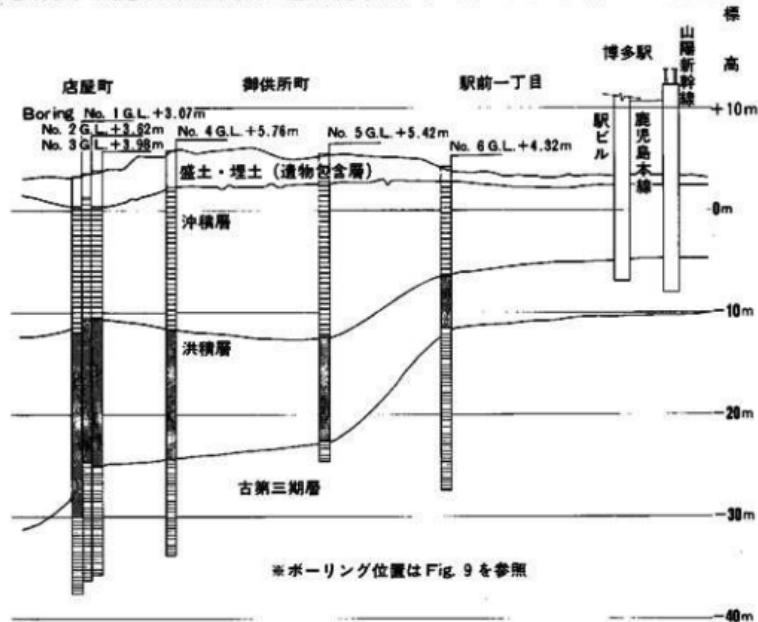


Fig. 8 博多運跡群付近土層ボーリング図

凡例

博多地区群発地図定線
現在の地形変換基準

発掘調査で確認された主な溝・道路
数字は調査次数を示す。Tab. 2 参照

●数字はモーリングNo. Fig. 8 参照

アフターモットは公事事業部による実地調査

加賀城跡調査区（堀跡・城郭跡）

伏見町地区調査区（地下鉄駅付近）

C 店屋町・祇園町・博多駅前工区調査区

（地下鉄関係）

D 都市計画道路（博多駅～築港駅）延長都調査区

（昭和10年分）

カタカバは大正時代に築いた遺物発見地

イ 中洲、日添・堀川地区（観光ホリデー）、弥生土器出土

ロ 中洲、世界館（現東映グランド）、弥生土器、石鍋等出土

ハ 二郎町、井戸掘削中青磁、白磁等出土

ニ 下西町、井戸掘削中青磁、白磁、瓦等出土

ホ 本魚町周辺、井戸掘削中青磁、白磁出土

ヘ 福慶寺境内、山門と大雄宝殿の間で木柱、白磁等出土

ト 店屋町、山口銀行、富国生命ビル、青磁、白磁出土

チ 伏見町、東邦生命ビル（現エレナ寿星）、杭列、貨鐵、青磁、白磁出土

リ 矢倉町、井戸掘削中青磁、白磁出土

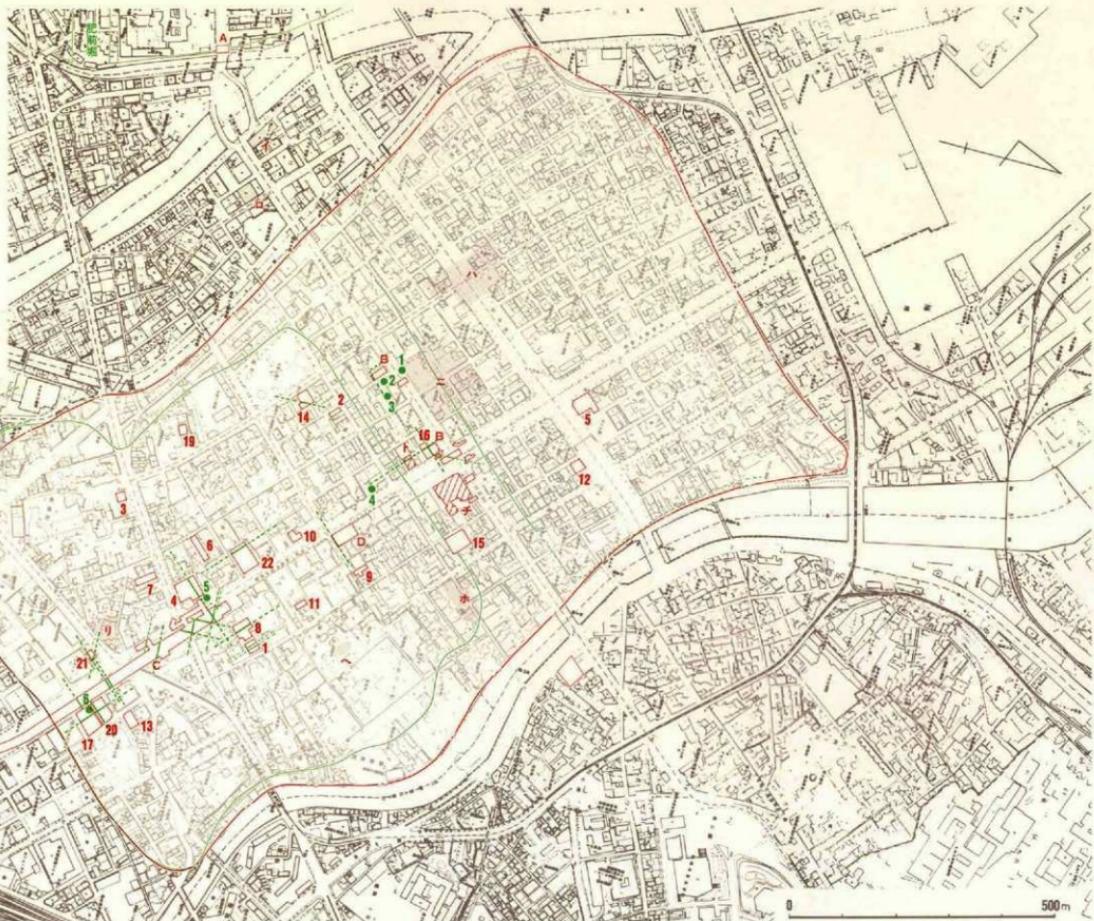


Fig. 9 博多遺跡群地形図

面には、入江もしくはラグーン状の低湿地を形成している。Fig. 7 は住吉神社に奉納された絵馬の模写である(註1)。この絵図は江戸時代に以前の地形を想像して描かれたもので、各方面でのデータと細かな部分で異なる部分も多く、全面的に信用できるものではないが、陸繫島、砂嘴と入江の存在が看取できる。柳田純季の中世博多湾の地形復元(註2)によると、これらの入海は、港として古代、中世にかけて貿易の重要な拠点となっていたのは明らかで、今津湾と鶴見郡、荒津と大宰府鴻臚館、冷泉津・袖の瀬と博多、筥崎の瀬と筥崎宮および頭孝寺などの関係がその好例として挙げられよう。

博多(遺跡群)は、これら古砂丘のうち、那珂川の右岸に形成された「博多浜(櫛山浜・袖の浜)」「沖(急)の浜」と通称される二つの砂丘上に立地している。この地域は、江戸時代においては筑前国那珂郡に属し、現在は福岡市博多区の北端に位置しており、福岡市都心部の一角を占めている。博多は、Fig. 9 のように西を、那珂川および中洲とともに形成するその支流博多川によって区画され、東を江戸時代初頭に開削されたと伝えられる石堂川によって区画されている。永禄6(1563)年以前に描かれたと伝えられる「聖福寺古絵図」(註3)によると、承天寺から、聖福寺の裏手に堀割が存在しており、石堂川の開削もこの堀割を大改修したものであろう。また、その東には松原が描かれており、博多の砂丘も本来は、千代松原、箱崎松原と続く一連の砂丘であったものと思われる。南は、石堂川開削以前は那珂川に合流し遺跡南側を流れていた旧比恵川およびその氾濫原によって区画される。北側の中世海岸線については、現在のところ資料不足で明確な判断はできないため、江戸時代宝暦頃の古地図による海岸線を仮にあてている。

博多の地質に関しては、先述した福岡市域内の例と同様である。Fig. 8 は地下鉄工事関係のボーリング調査結果をもとに、博多について再編したものである。古第三期層の岩盤に従って洪積層がそれを覆い、その上に砂、礫、砂質シルトなどからなる沖積層が堆積している。この沖積層の最上面は砂からなる。ボーリングNo.1～3 は現呉服町交差点付近に位置し、ここで地山砂層の落ち込みが明確に観察される。この落ち込みによって先に述べたように、「沖の浜」「博多浜」の二つの砂丘に区別される。このうち「博多浜」部は甕棺墓の出土から弥生時代以前に形成された古砂丘であるが、「沖の浜」部は地山砂層から碇石が発見され、より新しい砂丘であることが知られる。また、最上部の盛土、埋土層は遺物包含層と考えても差支えなく、その厚さは遺跡群内で厚く、それよりはずれる駅前一丁目付近では薄いことがわかる。

註1. 金子堅太郎「黒田如水傳」 文獻出版 より

註2. 柳田純季「中世の博多湾の地形と貿易港」 Museum Kyushu 10号 1983年

註3. 鏡山猛 「中世町割と条坊遺跡(上・下)」 史蹟105・6号、109号 1971、72年 に紹介されている。

2. 遺跡の歴史的環境と調査研究

北部九州一帯は、大陸と一衣帶水を隔てるのみという位置的優位性から、稻作文化をはじめとする大陸先進文化を受け入れる窓口として、日本史上特異な立場を保持していた。中でも、福岡平野を中心とする博多湾沿岸は、宣化元（536）年に那の津の官家がそのほとりに設置されることによって、以後の発展の基本的な方向が決定づけられることになった。すなわち、「大宰博多津」として、大宰府の外港に位置づけられ、古代日本における对外交渉の極めて重要な公的港湾となつたのである。持統天皇2（688）年には、筑紫館（後の大宰府鴻臚館の前身）が、外国使節接待のための迎賓館として、既に設けられ、大宰府の職掌のうち蕃客・帰化・娶妻を司る大宰府鴻臚館の名も、承和9（842）年には史料に見える。鴻臚館の位置は、中山平次郎博士によつて、現福岡城址内に比定されて以来、定説となつた。寛平6（894）年の遣唐使の廃止を以て、鴻臚館の性格が、対公人から対私人（商客）応接機関と変化してゆき、ここが唐宋商人の交易の場となつた。大宰府や鴻臚館址を中心に各地で出土している越州窯系青磁をはじめとする初期貿易陶磁は、そのほとんどがこうした中国商人によつてもたらされたものである。律令制の衰退とともに、各地に多くの荘園が発生した。時は11世紀の後半、貿易奢侈品の需要が高まる院政期にあたり、鴻臚館における管理貿易から、不輸不人の特権を持つ荘園に宋商人が目を向け始めたのは当然のことであった。

本書で扱う博多遺跡群は、まさにこの頃萌芽を見るが、博多も大宰府天満宮の神宮寺安樂寺の領有する荘園であった。鴻臚館とは目と鼻の先にある博多に商船を引き込んで貿易が行なわれるようになつたのである。これら権門と結びついた宋商が博多に多数居留したことは、聖福寺を創建した崇西の中し状に「宋人百堂」が、また『武備志』日本考に「大唐街」の語が見えることからも充分に推量される。博多の発掘調査の結果からも、11世紀後半から12世紀前半にかけての遺物が特に多く、当時の繁栄ぶりの一端を窺うことができる。のち仁平元（1151）年の大宰府官人による筑崎・博多の大追捕によって、その繁栄は一時影をおとすものの、保元3（1158）年平清盛が、大宰大式となり、再び隆盛を迎えることになる。中山平次郎博士の説によると、それは日宋貿易に積極的であった清盛によって、貿易港としての「袖の湊」が築かれたからである。また「袖の湊」は後の大輪田泊港の基本になつたといふ。

鎌倉時代になると鎮西探題が博多に置かれ、名実ともに九州支配の中心が大宰府から博多へと移る。それとともに、博多には多くの社寺が建立され、对外貿易もこれらを拠点に行なわれるようになる。文永11（1274）年、弘安4（1281）年には、二度にわたる蒙古の襲来もあり、博多も戦場となつたが、これも一重に博多の政治的経済的重要性によるものである。

鎌倉時代末から南北朝期になると、博多も他地域以上に争乱の渦に巻き込まれたが、室町幕府が成立すると九州探題が設置された。しかし、室町幕府の支配力は弱く、博多は九州探題を

はじめ、小武氏、大内氏、大友氏らによって争奪戦の対象となっていました。以後、断続的ながら戦国時代の末まで争乱は打ち継ぎ、ついに、天正14（1586）年の島津氏の焼打ちによって博多の街はことごとく灰燼に帰した。天正15（1587）年、九州平定をとげた豊臣秀吉により博多の再興がなされ、再び都市としての機能を取り戻したものの、徳川幕府の鎖国政策で、外交の窓口は長崎へと移り、往時の貿易都市としての繁栄を再び見ることはなかったのである。

以上、博多をめぐる歴史を簡単に紹介したが、对外貿易の拠点としての博多の優位性は、それ自体を戦国大名の争奪の対象とせしめ、後の博多研究の重要な史料の多くを焼失するという皮肉な結果をも生み出した。但し、幸いなことに、博多の地中には今なお多くの遺構・遺物が残されており、博多研究への考古学的方面からのアプローチを可能としているのである。

博多における本格的な発掘調査の歴史は、わずかに8年足らずのことであるが、地下鉄、都市計画道路関係を除いてもすでに22次に及んでいる（Tab.2）。しかし、それ以前に遺物の発見や、それらに対する先覚諸先生方の考古学的な研究もある。今、それらを考古学的分野に限って簡単に振り返ってみよう。

博多の遺物発見の歴史は、聖福寺境内を中心に江戸時代にさかのぼる。

- 元禄11（1698）年 聖福寺子院瑞應庵の墓地で壺が出土し、中に金器、花銀、金花銀、金銭、銀銭、團金、金で作った禽獸蟲魚などあり、これらを改鑄して二百三十四両を得る。
〔文獻1・2・7・8〕
- 宝永（1704～1710）年間 聖福寺子院虚白院の地より朱椀五十具が出土。毎具四個からなり、二つの蓋に入っていた。いずれも散逸して現存しない。
〔文獻2・8〕
- 享保元（1716）年 瑞應庵の墓地石塔修補中、多量の金銀器が入った壺を発見。元禄11年と同様の遺物で、金一貫八百七十匁、銀五貫三百二十匁一分を得て、修葺の資となした。出土した法馬の一つには、「往歴郭徳潤 行宣政院福建分院 提調官副使側失監」裏面に、「客商 謝福 花銀肆拾両重 辨駿銀匠彭禎」と刻字されていた。現存しない。
〔文獻1・2・7・8〕
- 享保8（1723）年 瑞應庵の墓地が盗掘され、遺留した銀器一個の中に、白銀九貫六百六十匁、銀製珍器量四百貫、法馬七十三個が出土。法馬の大なる物は五百匁もあり、正面に「客商 謝福 辨駿銀匠彭禎 華銀五拾両重」裏面に「金花銀」などの刻字が残されていた。
〔文獻1・2・8〕
- 宝曆8（1758）年 天福庵の竹林開墾の際、南京窯の瓷器大小27個が出土。現存しない。
〔文獻1・2・7・8〕
- 明治40（1907）年 上奥堂町の佐藤半次郎氏宅の井戸掘削中、地下約16mより碇石が出土。櫛山神社に奉納されている。
〔文獻5・12〕
- 大正（1912～1925）年間 魚町、西町下、行ノ町、矢倉門など博多各地で、井戸掘削時に青磁、白磁、瓦などが出土。天神近辺でも西鉄電車駅、平岡氏宅から青磁、白磁が出土。これらは中山平次郎博士の確認である。また、中洲玉屋アパート西側で、弥生式土器、蜻蛉などとともに石鍋、塩壺が出土。
〔文獻11〕

8. 大正4(1915)年 中山平次郎博士が福岡城内で奈良時代古瓦の大量散布地を発見し、大宰府跡館址であるとの確認を得る。
9. 昭和17(1932)年頃 博多港沖浚渫中、碇石とともに「張網」銘墨書のある大目碗(Fig.10)や中国錢多く(文庫4-5-7-9-30)数が発見される。九州大学蔵。
10. 昭和24(1949)年 福岡城内の平和台野球場造成のため、油謹館址と思われる地点を破壊。この前後、高野孤鹿、大場憲郎氏らによって古瓦、陶磁器が多数採集され、のちに、越州窑青磁が含まれていることを小山富士太氏が確認。福岡市立歴史資料館、出光美術館、九州歴史資料館蔵。
11. 昭和27(1952)年 児服町交差点の東邦生命ビル(旧丸百貨店、現エレテ舟屋)の建設工事中、陶磁器、鍋壺、弥生式土器片、銅錢(五銖銭を含む)など多量の遺物が出土。後に周辺の山口銀行福岡支店、富岡生命ビル等の建設工事でも同様の発見があった。
12. 昭和20年代(1945~1955)聖福寺境内の山門と大宝殿との間の工事中に地下2m付近で、水注一個と皿一枚をそれぞれ発見。九州大学蔵。
13. 昭和33(1958)年 今津勝福寺西の砂丘より、約二百体の埋葬人骨が発見された。百九点の陶磁器や鐵錫、鐵鎌などが二宮八郎氏によって採集された。人骨は体部と頭部が別々に、埋葬され、異様な埋葬形態であることが注目された。九州歴史資料館蔵。
14. 昭和48(1973)年、天神フタバビル建設工事中地下5mから碇石が出土。福岡市埋蔵文化財センター蔵。
15. 発見年代は未確認であるが、筥崎宮境内より白磁碗の完形品一点が出土し、宝物館に所蔵。

Fig. 10. 博多港沖引揚げの天目碗
[文庫4-5-7-9-30]

博多遺物発見史関係文献目録

- (1) 貞原益軒「筑前国統風土記」
- (2) 津田元順・元貫「石城志」明和2(1765)年・大正10(1921)年刊
- (3) 中山平次郎「古代の博多」昭和59(1984)年 九州大学出版会
- (4) 山本博「博多湾出土遺物と元寇役への新資料」『都久志三号』昭和(1932)年
- (5) 川上市太郎「蒙古軍船碇石」『元寇史蹟(地之卷)』福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第14輯 所収 昭和16(1941)年
- (6) 奥村武「博多袖の湊跡出土文化財について」『うわさ25-9~12』所収、昭和34(1959)年・『博多袖の湊跡出土文化財目録』昭和28(1953)年 報告、福岡県教育庁蔵書
- (7) 小畠文鼎「聖福寺史」昭和39(1964)年三宅安太郎訂、聖福寺文庫刊行会
- (8) 岡崎敬「福岡市(博多)聖福寺発見の遺物について」『九州文化史研究所紀要13』昭和43

- (1968) 年所収
- (9) 高野孤鹿「平和台の考古史料」(プリント) 昭和47(1972) 年
- (10) 亀井明徳「博多の中古陶磁地図(上)・(中)・(下)」日本美術工芸447~449 昭和50~1
(1975~6)
- (11) 岐山恭三「博多中洲ものがたり 一前編」昭和54(1979) 年
- (12) 松岡史「碇石の研究」「松浦党研究」昭和56年(1981) 所収、松浦党研究連合会
- (13) 池崎義一・森本朝子「福岡市立歴史資料館収蔵の高野コレクション」弓場知紀「出光美術館の高野コレクション」「高速鉄道関係埋文化財調査報告Ⅲ福岡城址内堀外壁石積の調査」所収、昭和58年(1983) 福岡市教育委員会
- 地下鉄、都市計画道路等の大規模開発を除いた調査地点は以下のようである。

Table. 2 博多造跡群調査地点一覧表

1984年2月現在

次	調査期日	所 在 地(博多区)	対象面積(m ²) (調査面積)	調査方法	備 考
1	78.11~79.1	御供所町 東長寺境内	(360)	納骨堂建設	本調査
2	79.4	店屋町99	約100	ビル建設 (店舗・共同住宅)	立会、土解説作成
3	79.11	祇園町 萬行寺境内	(240)	納骨堂建設	本調査
4	79.12~80.3	冷泉町7-1	1982.9 (1,100)	ビル建設 (マンション)	本調査「博多Ⅰ」; 1981 「博多Ⅱ四版舎」; 1982
5	79.12	下呂田町346	1177.6	ビル建設	試掘調査 地表下4.5mより範囲出土
6	80.3~4	冷泉町155他	1035.14 (640)	ビル建設 (マンション)	本調査
7	80.6~8	祇園町130	(210)	ビル建設 (マンション)	本調査
8	80.8~10	御供所町 東長寺境内	(600)	本気建設	本調査
9	80.9	下呂田町73	197.78	ビル建設	試掘調査 狹少のため本調査不能
10	80.12	冷泉町474-9	358.4 (54)	ビル建設 (店舗・共同住宅)	本調査「博多Ⅱ」1981
11	80.12	御供所町3-30	244.05	ビル建設	試掘調査 狹少のため本調査不能
12	81.6	中島屋町152, 153	463.59	ビル建設	試掘調査、島井宗室重軒跡
13	81.7	駅前1丁目121~127	1639.443	ビル建設	トレンチ調査
14	81.8	店屋町4-15	810.8	ビル建設	本調査
15	81.8	上呂田町569	2275.02	駐車場建設	試掘調査
16	81.9	店屋町246~248	77,511	ビル建設	本調査
17	81.11	駅前1丁目98	810.8	ビル建設	本調査
18	82.1	駅前2丁目8-14		ビル建設	試掘調査
19	83.4	柳田神社境内	(約380)	社務所建設	本調査
20	83.4	駅前1丁目99	1400	ビル建設	本調査
21	83.5	駅前1丁目18-1	220	ビル建設	本調査
22	83.9	冷泉町189他	1566 (800)	ビル建設	本調査

第2章 本体部A・B区の調査

1. 調査の経過

昭和51(1976)年夏、地下鉄工事とともに埋蔵文化財の発掘調査が開始されるにあたり、福岡市教育委員会では、それまでの研究成果をもとに、路線内にかかる遺跡の確認を行なった。1号線路線内で想定された遺跡は、西から藤崎遺跡、西新町遺跡、福岡城址、それに祇園町遺跡であった(Fig. 1)。祇園町遺跡については、それまで本格的な発掘調査は行われておらず、その実体は明確でなかったが、第1章で述べた如く過去に多くの遺物発見の記録は残されていた。西新町遺跡、福岡城址の調査と併行しながら、過去の事實を裏付けるため、同年12月祇園町遺跡における路線予定地の試掘調査を行なった(PL. 2-(2))。その結果、青磁、白磁をはじめとする多くの遺物や遺構が検出され、中世を中心とする遺跡として再確認された。以後、周辺の調査の進展とともに、遺跡はかなり広大な範囲にわたることが明らかになり、従来の祇園町遺跡という呼称も、必ずしも適当とは言えなくなり、現在、福岡市教育委員会では、祇園町遺跡を含む旧博多部を「博多遺跡群」と総称している。

博多遺跡群における1号線路線内の調査区は、店屋町工区と祇園町工区とにわたり、巾10~24m、総延長384mに及ぶ。これらは、調査の便宜上、20mを原則として海側から順に区分して、それぞれA~Sの符号をつけた(Fig. 12)。中洲川端駅から祇園駅にかけての店屋町工区

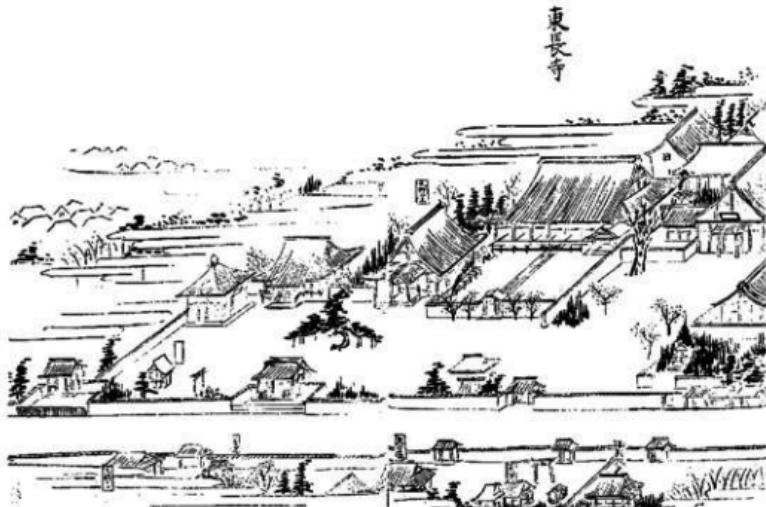
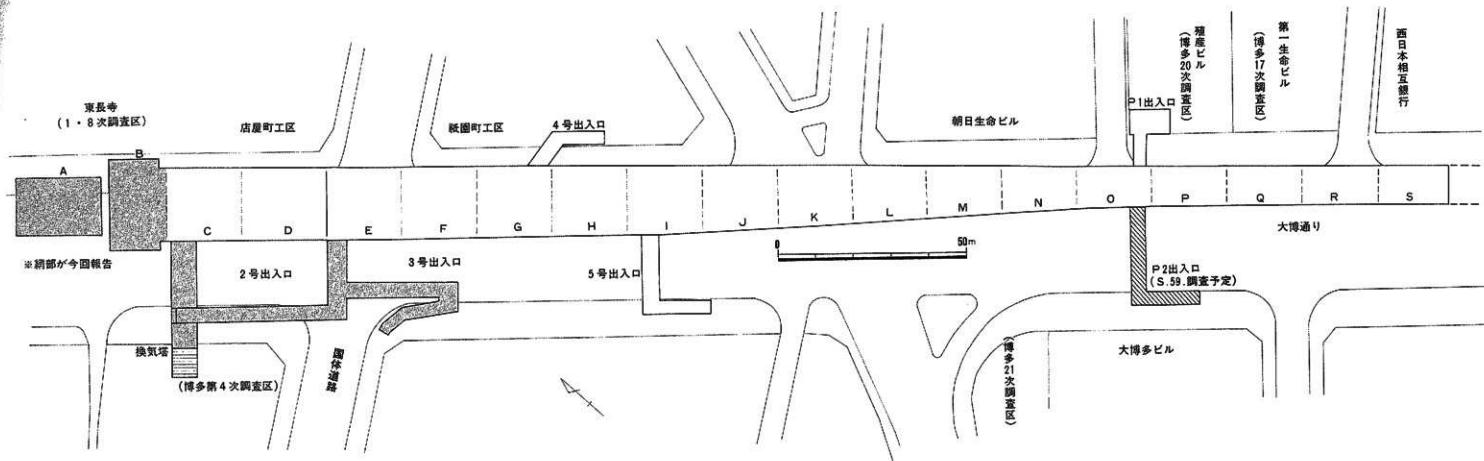


Fig. 11 東長寺付近古絵図『筑前名所図会 卷の二』奥村玉蘭 文政4(1821)年

Fig. 12 博多道跡群地下鉄1号線関係調査区(店屋町・祇園町工区)全体図(1/1000)



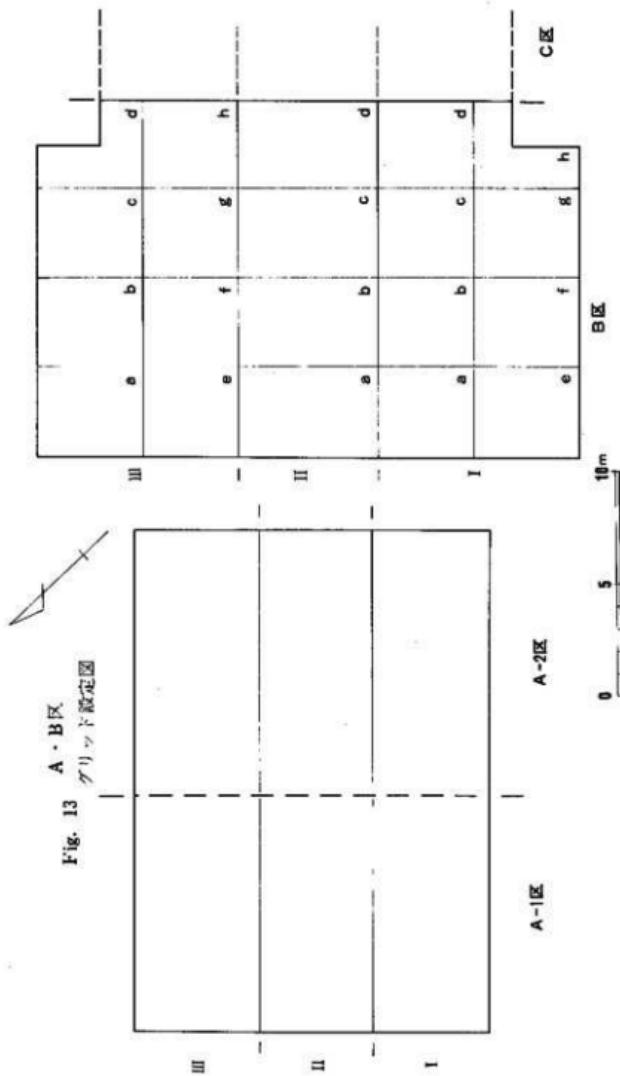


Fig. 13 A・B区アリッド設定図

は、大きなカーブを描いてビル街の下を通過するため、工区の大半をシールド工法によった。そのため、当工区下の要調査部分は、地表面に影響を及ぼす堅坑部(B区)、薬液注入部(A区)と、オープンカット工法による駅舎部(C・D区)であった。祇園町工区は、全面オープンカット工法によるため、その全面が調査対象となった。

試掘調査の結果を受けて、福岡市教育委員会と福岡市高速鉄道建設局は、本調査に向けて、協議を重ね、本調査は、店屋町工区工事発注のあと、昭和52年12月7日より開始し、その事前調査として、46カ所に及ぶ中間杭部の坪掘調査(11月1~11日、PL. 3-(1))、下水管移設の夜間立会(11月19日~12月5日)等を行ない、土層、造構、遺物などの基礎的なデータの収集につとめることとした。その結果、地表1.2~1.5m程度は近・現代の建物基礎等の擾乱で、その下に1.2~3mの厚さで包含層のあることがわかった。また、各坪掘の地山白砂層のレベルにかなりのバラつきがあり、極めて濃密な造構の分布が考えられ、更に甕棺破片の出土から、下層に弥生時代甕棺墓群の存在も推察された。

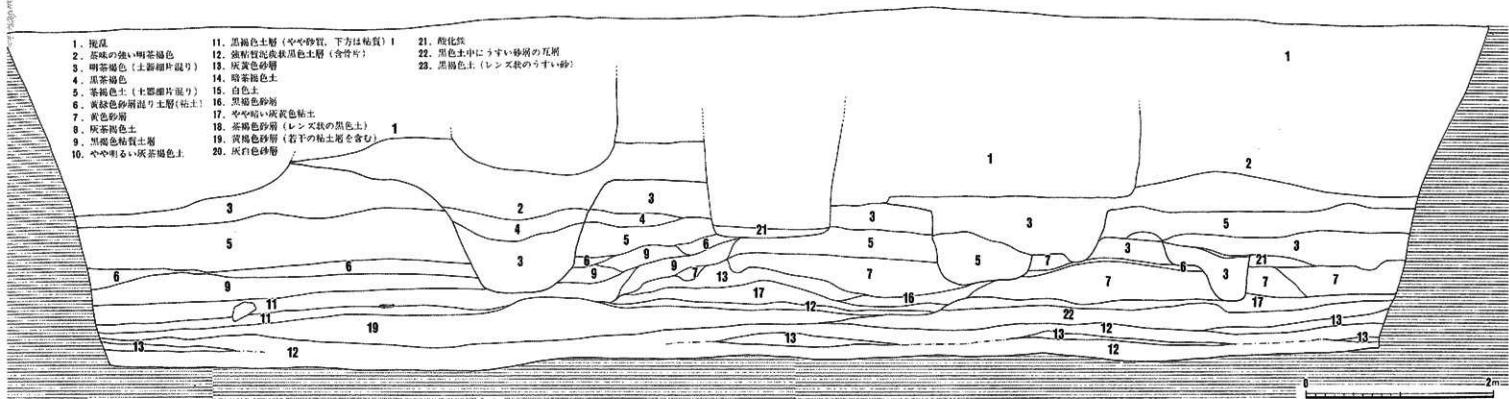
本章では、A・B区について述べるが、この地点は、東長寺の旧境内にあたる(Fig.11)。東長寺は、大同元(806)年、弘法大師によって創建されたと伝えられる真言密教の名刹で、現在、その別格本山として広く知られている。また、同寺蔵の木造千手観音立像は、重要文化財に指定され、福岡藩二・三代藩主黒田忠之、光之公の墓も境内に営まれている。但し、東長寺は、当初、博多行ノ町にあったといわれ、現地へは、江戸時代初期黒田忠之公の時に移転したものである。出土する造構、遺物の大半は、直接東長寺とは結びつかない。

薬液注入部にあたるA区の調査(Fig.15)は、その性格上、本体部の調査に先行し、昭和52(1977)年12月7日から開始し、翌年2月24日に終了した。調査面積は294m²で、排水処理の問題から二分割して調査を行ない、北側部分をA-1区、南側部分をA-2区とした。また、それぞれを5m幅に小分割し、I・II・IIIと呼んだ(Fig.13)。調査は、A-2区を先行し、終了後A-1区へと移った。この調査区が、事实上、博多における目的意識的な発掘調査の第一歩を踏み入れたところである。しかし当区は、同様の色調、土質をもつ包含層が厚く、しかも複雑に堆積しており、福岡市域内の他の遺跡とほとんど違う土質のため、土層の判別が極めて困難で、調査員自体このような土質に慣れるまでにしばらくの時間を要した。また、試掘及び中間杭坪掘調査での知見をもとに、地表面から1~1.5m程の近・現代建物基礎等を含む擾乱層は、機械力を以て除去し、以下を手掘りで精査した。調査区が、市街地内で通行人の多い幹線道路に面していることや、工事用機械が近い位置で稼動しているという条件から、工事関係者とともに安全管理については格別の配慮をしたもの、残念なことに、フェンスを乗り越えて現場に侵入し出土遺物を盗みさるという事件が数回起きた。直接人身事故につながらなかったのは、幸いとせねばなるまいが、今後に活かさねばならぬ反省点の一つである。

A-I区北側土層断面図（上）、B-II・III区土層断面図（下）

L=5.59m

1. 暗緑色
2. 茶味の強い明茶褐色
3. 明茶褐色（土器細片混り）
4. 黒茶褐色
5. 基褐色土（土器細片混り）
6. 黄茶色砂質泥炭土層（粘土）
7. 黄色粘土層
8. 灰茶褐色土
9. 黑褐色粘土層
10. やや明るい灰茶褐色土
11. 黒褐色土層（やや砂質、下方は粘土）
12. 強粘質灰茶褐色土層（含粘土）
13. 黄茶色砂層
14. 灰茶褐色土
15. 白色
16. 黄茶色砂層
17. やや明るい灰茶褐色土
18. 茶褐色砂層（レンズ状の黑色土）
19. 黄褐色砂層（若干の粘土層を含む）
20. 灰白色砂層
21. 鮎化鉄
22. 黒色土中にうすい砂層の瓦列
23. 黒褐色土（レンズ状のうすい砂）



L=4.00m

1. 明るい灰茶褐色土層
2. 茶味の強い茶褐色土
3. 黑褐色土層
4. やや明るい茶褐色土層
5. 黑茶褐色土、若干の鮎化物を含む
6. 明茶褐色土
7. 灰白色土
8. よりやや粘質をおびる
9. 鮎化物および土器片を多量に含む灰褐色土
10. 鮎化物および土器片を多量に含む強粘質黑褐色土
11. 鮎化物を含む、やや砂を含む茶褐色土
12. 9とは同じに、若干明るい
13. 土器片を含む茶褐色土上
14. やや明るい茶褐色土
15. 砂質ブロックを含む茶褐色土
16. 土器片を鮎化物を含む灰褐色土
17. 粘土ブロックを含む茶褐色土
18. 砂層を若干にさむ茶褐色土
19. 17と同じ、やや黒味が強じ
20. 七筋石を若干多く含む黒褐色やや粘質土
21. 18と同じやや黒味が強じ
22. 黑褐色の薄い層を若干含む砂質土（地山の汚れ？）
23. 鮎化物を多く含む茶褐色土
24. より少くやや細粒
25. 鮎化物、土器片を多量に含む灰褐色土
26. 15と同じ
27. 25とは同じに、若干粘質を含む
28. 黄味を帯びた茶褐色砂質土
29. 21よりも
30. 茶褐色砂質土
31. 22と同じ
32. 砂と灰褐色土の織かい瓦列、全体的に

Fig. 14 A・B区土層断面図 (1/40)

B区は、祇園駅～中洲川端駅間のシールド工法による工事の豊坑部にある。発掘調査の開始はA区の調査が終了し、側壁ガイドウォール工事、側壁柱及び中間杭の打ち込み等が完了してからの昭和53(1978)年6月1日からであった。調査面積は350m²である。この調査区では、中間杭を基準に、I・II・III区と分



Fig. 15 A-2区調査風景

け、更にそれを4mを基準にa～hに細分した(Fig.13)。この区は、工区幅が広く、一部が歩道にかかる。それを確保するため、I区については、II・III区調査終了後、覆鋼桁を架けた状態で調査することになった(PL. 4-1)。また、B区の調査を行なっている頃、福岡市では記録的な水飢饉に見舞われ、上部の粘質のある土は固く縮まり、最下面の砂層に掘り込まれた構造は、すぐに崩れてしまうという悪条件下での調査となった。最下面の白色砂の照り返しや、鉄筋材の放熱で、現場内の温度が50℃近くにも達する日が連日続いた。こうして、B区の調査は7月3日に終了し、順次、C、D区の調査へと移っていった。

猛暑、極寒の中での調査であったが、そのような悪条件下で現場作業に参加していただいた方々は次のとおりである。記して感謝の意を表したい。

調査補助員

長沼孝(九州大学)、富田逸郎、村野隆男(以上筑波大学)

白石公高、宮島成昭(以上カメラマン)

調査参加者

永田恭子、河辺チサエ、大衛みつ子、黒木順子、八尋義光、安部国恵、黒木沢子、柴田スマ子、角順治、荒岡慶志、余語健、齊藤経行、有元泰祥、坂本章市、小谷一夫、井上繁信、志磨大二郎、富岡真一、青木郁夫、小田伸子、柴田喜瑞、杉野悦郎、松本美枝子、横山裕平、撫養義則、山下博子、亀山美智子、阿部京子、海津静江、真鍋秀子、真鍋政江、清水文代、諸方チヨエ、高宮ノブエ、高宮久子、海津和子、杉村文子、能美須賀子、西原年枝、藤タケ、高田ヒサノ、塙手真吾、鳴田誠二

2. 調査の概要

発掘調査によって検出された遺構及び出土した遺物は、多種多様である。紙面の都合上、それらのデータを過度なく報告することは困難であり、主要な遺構を中心に述べてゆくことにしたい。遺構出土及び遺構外出土の遺物についても、細大もらさず報告せねばならないのかもしれないが、膨大な遺物の山に面してはそれも不可能である。遺物の実測図等は、良好な遺存状態を示した遺構を主に紙面を費し、その他特殊な遺物などについて実測の可能な限り掲載するようにつとめた。なお、遺物の各遺構毎の出土量については、別冊の「博多出土貿易陶磁分類表」などを基準に付表としてまとめているので、参照していただきたい。加えて、捕岡中に示したグラフは、土師皿・杯類の計測値であり、それらの良好な出土状態をもつ遺構を主に掲げた。実線が系切り底、点線がヘラ切り底を示し、横軸に底径及び口径を半径として、また、縦軸に器高を表している。以上をあらかじめ断っておきたい。

1) 遺構と遺構出土の遺物

1号土塙 (Fig.16) A-2-I区で検出された。上部に人頭大から拳大の礫を配し、下部に長軸1.1m、短軸0.8mの不整円形の平面形をもった掘り方をもつ。上塙断面は、逆台形をなし、深い。土塙内は、黒褐色土によって満たされていたが、周囲の土との識別が困難で、壁の立ち上りの検出が遅れたため、上塙上の配石は、やや浮上した状態になっている。若干の炭化物が含まれていたが、遺物はほとんど検出されていない。配石のレベルが、2・3号上塙と同様に3.50m前後であり、それらと同様の上部に配石をもつ土塙墓であると考えておきたい。

2号土塙 (Fig.17・18, PL.9・10) A-2-II区で検出された。上部に人頭大の角礫又は亜角礫を3.3×0.9mのほぼ長方形におき、その間隙に拳大の小礫をぎっしり詰めている石積を配している。下部には、2.3×1.0mの隅丸長方形の平面形を呈し、深さ0.5m程の皿状になだらかに落込みむ壁をもつ土塙をもっている。この下部土塙の長軸東端には大きな角礫が置かれている。上部配石の主軸は、N-89°-Wをとり、下部土塙の主軸は、N-78°-Wで、若干のずれはあるが、1・3号のように2号上塙と同一レベルの配石直下にはいずれも土塙をもっていることから、2号土塙についても上部に配石をもつ土塙墓であると見做せる。この土塙床面からは、比較的集中して遺物が出土しているが、そのうち確実に副葬品であると判断できるのは1・6の土師皿・杯と12の匙状滑石製品だけであり、他はいずれも破片であって埋葬時の混入であろう。また、上部石組からは、11などの褐釉四耳壺の破片が出土している。また、土塙内からは、鉄釘2点が出土しているが、原位置をとどめておらず、木棺墓であるとは考えられない。また、現場写真撮影後に青磁破片数点が盗難にあった。これは付表に含まれていない。

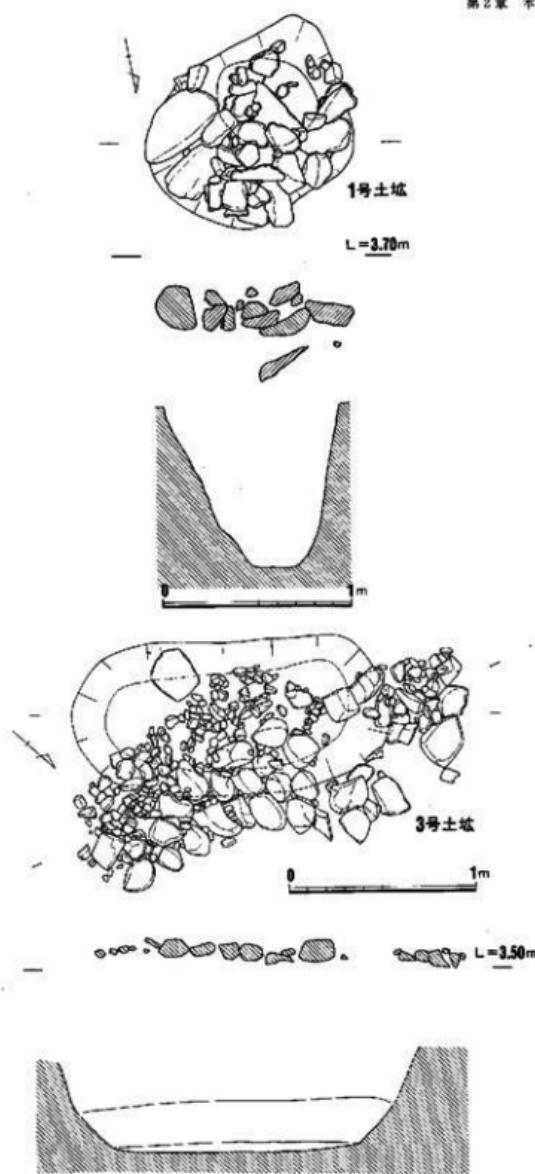


Fig. 16 1・3号土堆実測図

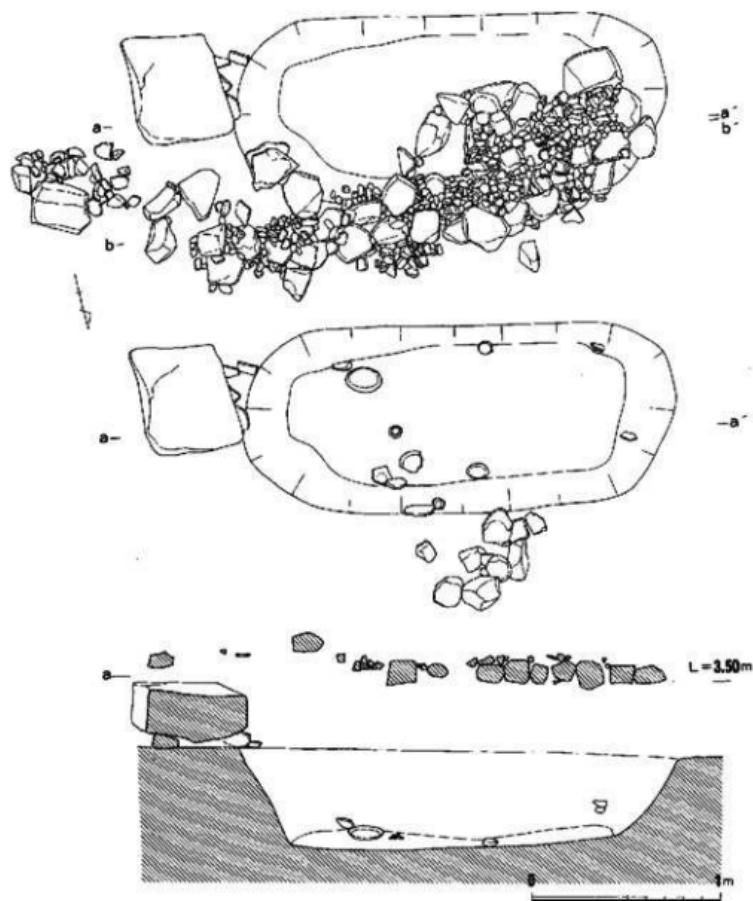


Fig. 17 2号土坡実測図

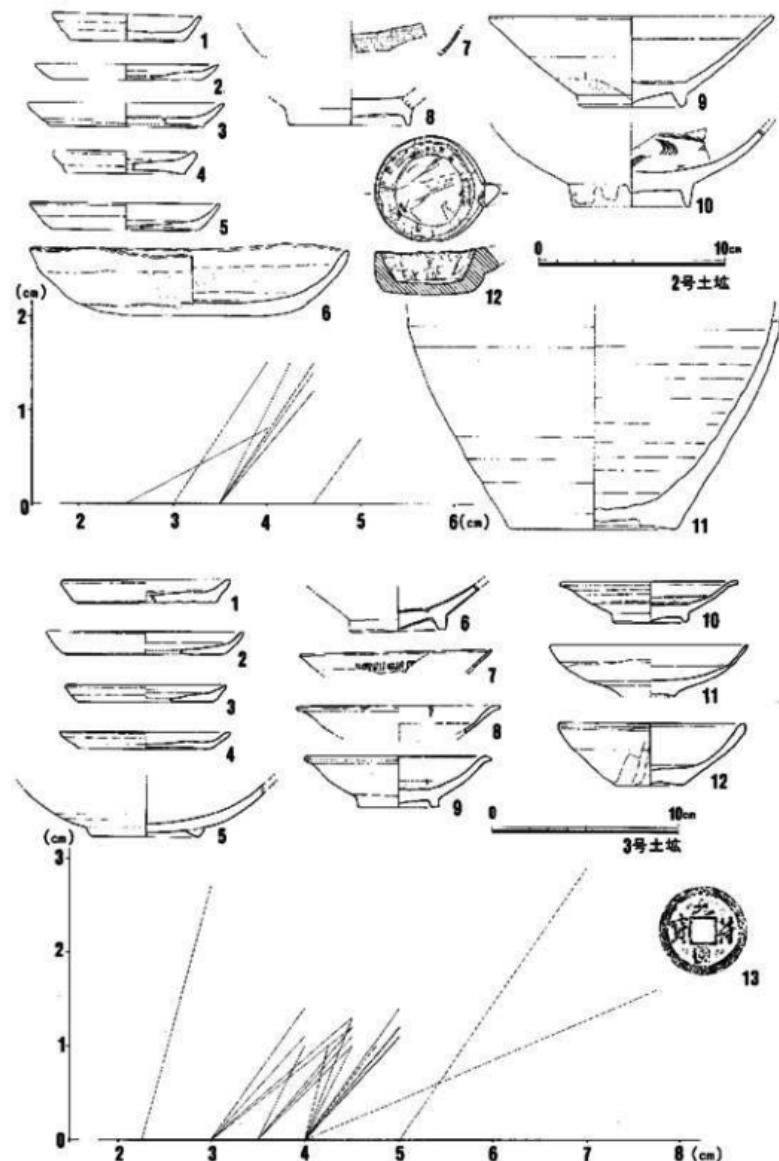


Fig. 18 2・3号土塚出土遺物

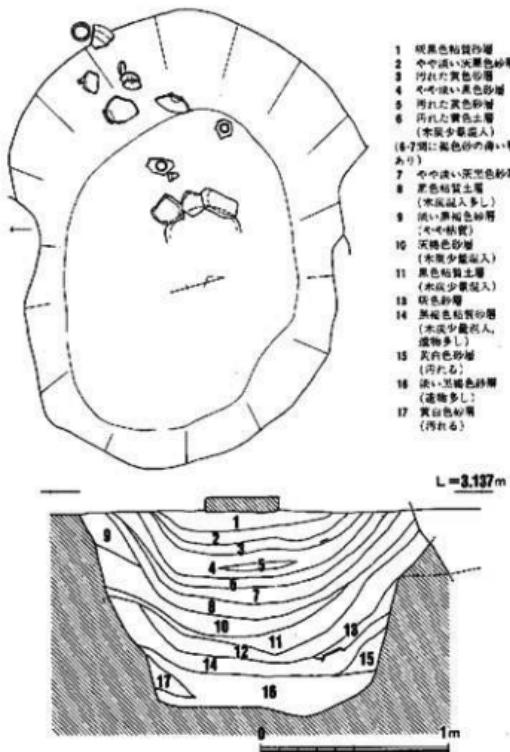
1～6は土師皿・杯、7は青白磁印花文皿、8～10は白磁碗である。

3号土塙 (Fig.16・18, Pl. 9) A-2-I・II区で検出された。上部では標高3.50mの辺りに水平に入頭大の礫を置き、その間際に小礫を詰めている配石をもつ。配石は2.3×1.2mの長方形を呈し、その主軸はN-65°-Wの方向をとる。この中の石材は一部焼けているものがあり、配石下面では木炭粒が比較的多く目についた。この配石直下には、隅丸長方形の土塙(1.8×0.8m)があり、内部の覆土は茶褐色砂質土である。その主軸は、N-42°-Wの方向をとるが、上部配石の方向とは若干のくい違いを見せ、また、上塙確認面と配石間にレベル差が見られる。これらは、2号土塙の場合と同様であり、それぞれ配石と下部土塙とは一对の施設である。3点の鉄釘が出土しているが、いずれも原位置をとどめておらず、覆土からの出土で、木棺墓ではなく土塙墓と考えるのが適当であろう。図示した遺物は1～4が土師皿、5が瓦器碗、6・7が青白磁碗・皿、8～11が白磁皿、12が陶器皿である。この他、付図に示すように白磁碗0-I類、IV類、龍泉青磁碗I類陶器なども見られるが、いずれも破片である上に覆土、配石中からの出土であり、明確に副葬品と判断しうるものはない。13は配石直下出土の元符通宝である。

これら1～3号土塙は近接しており、また同一レベル上に上部配石が営まれていていることから、ほぼ同一時期に属するものと思われる。それらの所属時期を明確にする副葬遺物は乏しいものの2号土塙の土師皿・杯から見ると14世紀頃におよそ位置づけられよう。

4号土塙 (Fig.19・20) A-2-I・II区で検出された。平面形2.5×1.9mの長円形を呈し、1.08mの深さをもつ土塙である。この土塙面には径40cm、厚さ9cmの平坦な板石が置かれていた。土塙内は炭化物層、砂層などが皿状に互層をなして堆積しており、その中に下位の14、16層で完形に近い遺物が出土し、上位では細片が多く出土している。この土塙では、その覆土の状態からすると、中で数回火を焚かれたようと考えられるが、炭化物層に焼骨等は検出されていないので、火葬施設とは考えられない。図示した遺物は1・2が土師皿で、3・4が高く細い高台をもち内面に櫛描文を施す白磁碗、6～8が白磁皿である。うち3の高台内露胎部には「王綱(?)」かと思われる墨書きが残されている。この他、付表に記したように瓦器碗、陶器類も出土しているが、青磁は小破片が2点と少ない。またこの造構では土師皿は糸切り底とヘラ切り底と近い数量を示している。12世紀前半から半ば頃に位置づけられよう。

5号土塙 (Fig.22) A-2-I・II区で検出された。調査区の南側に接し、また西端を2号溝によって切られており全体形は明確ではないが、おそらく不整形を呈していたと思われる。深さ0.5mでなだらかな壁をなす。土塙内は茶褐色砂によって満たされていた。出土遺物のうち図示したものは、1～19が土師皿類で、20～24が白磁碗、25～28が白磁皿、29が白磁四耳壺、30が青磁の壺底部である。13の土師皿の体部外面には、判読できないが仮名文字風の墨書きが残されている。このほか、付表に示したように、白磁碗三角玉縁をもつ皿類、口縁端を水平に引



い。特殊なものとしては窯道具のハマ 1 点も見られた。

7号土塙 (Fig. 20) A-2-1区で検出された。2号溝によって切られており、またその大半は調査区外にかかり、詳細は不明である。上塙内には炭化物が多量に含まれており、火葬墓の可能性がある。遺物は調査面積に比べ多く、付表に示した通りである。図示した遺物は1～3が上師杯で、1が糸切り底、2・3がヘラ切り底である。4は腰の折れた青白磁碗で、外面体部を交差する斜めのヘラ削りで作り出した幾重もの先の尖った蓮弁文で飾っている。外面体部下半まで青白釉が施釉されている。また、外底面露胎部には仮名文字もしくは花押状の墨書きが残されているが判読できない。5は濁った茶褐色のかかった陶器で四耳壺の肩部から頸部にかけての破片である。内面は頸部上半まで施釉される。頸部と胴との接ぎ目が明瞭である。

き出すVI類、内面底の釉を輪状に搔きとるIX類が多く見られるが、龍泉青磁碗III類なども存在しており、輸入陶器から見るとかなり時間幅のある遺物が混在しているようである。上師皿のうち小皿にはヘラ切り底が若干含まれるものの中にはヘラ切りは認められない。全体的には12世紀前半代の遺物が大半を占める。土塙の性格は明確にしえない。

6号土塙 A-2-1区で検出された。その大半は調査区外に伸びておらず、全体形は不明である。5号土塙、14号土塙に接しているが、切合の関係は不明。2号溝の一部であることも考えられる。出土遺物は少なく、白磁碗、龍泉青磁碗、陶器の破片が各1点、国産品では、土師質土器破片3点のほか、糸切り底の杯および小皿が各2点とそれらの細片17点が出土したにすぎな

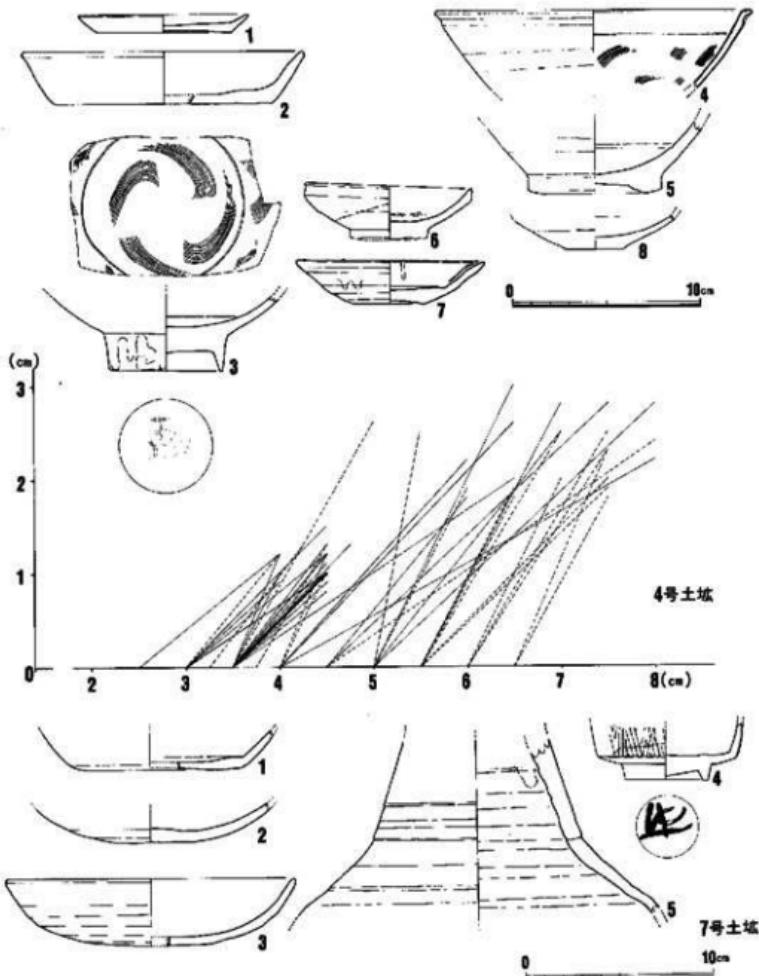


Fig. 20 4・7号土塚出土遺物

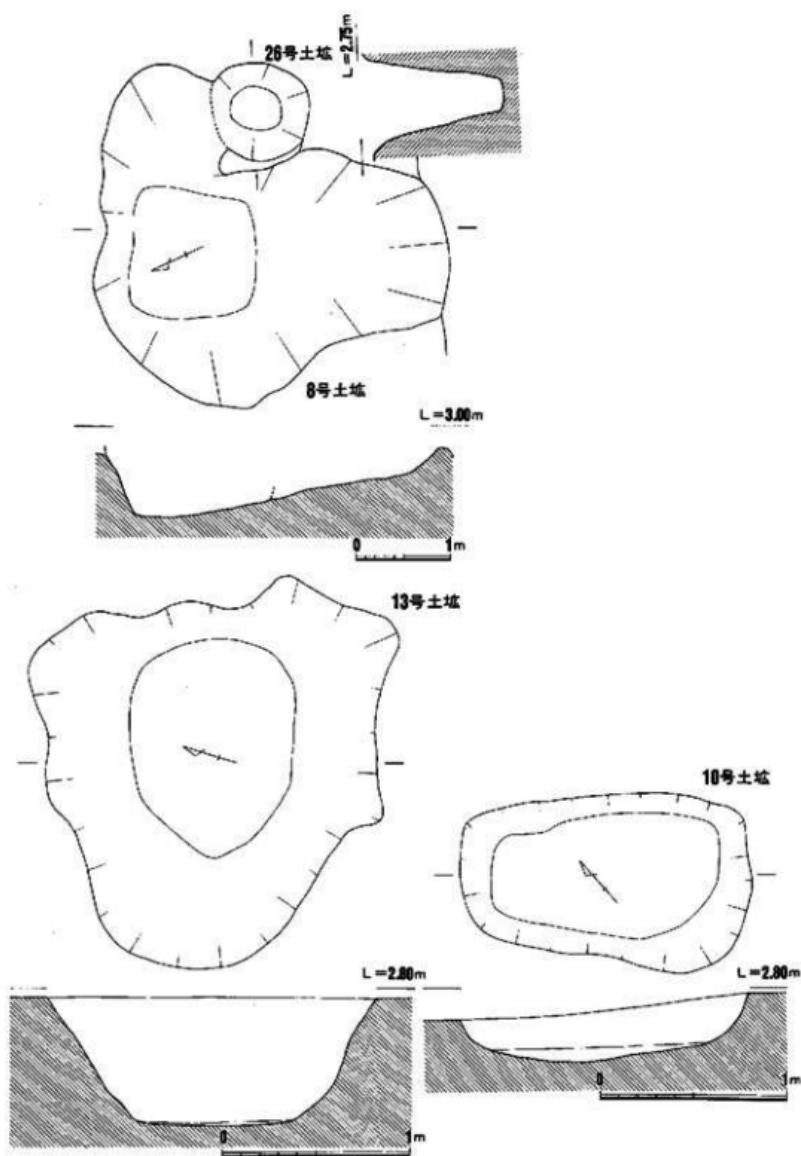


Fig. 21 8・10・13・26号土堆実測図

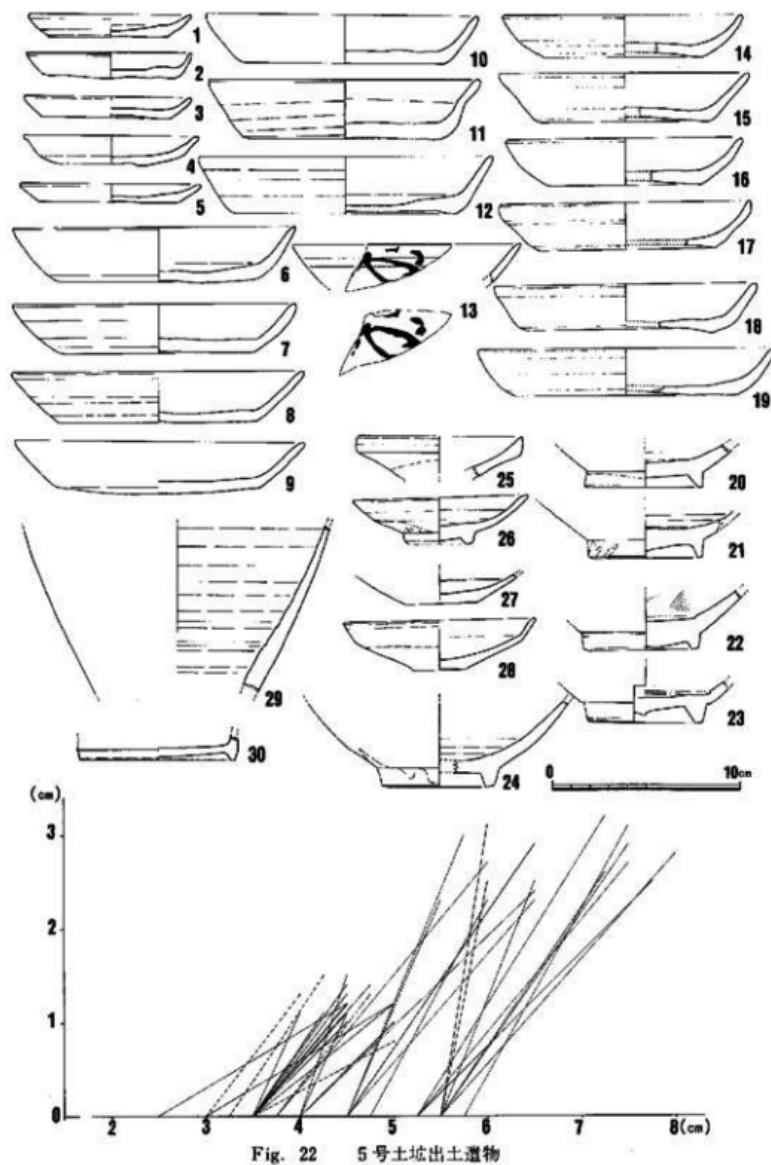


Fig. 22 5号土坑出土遺物

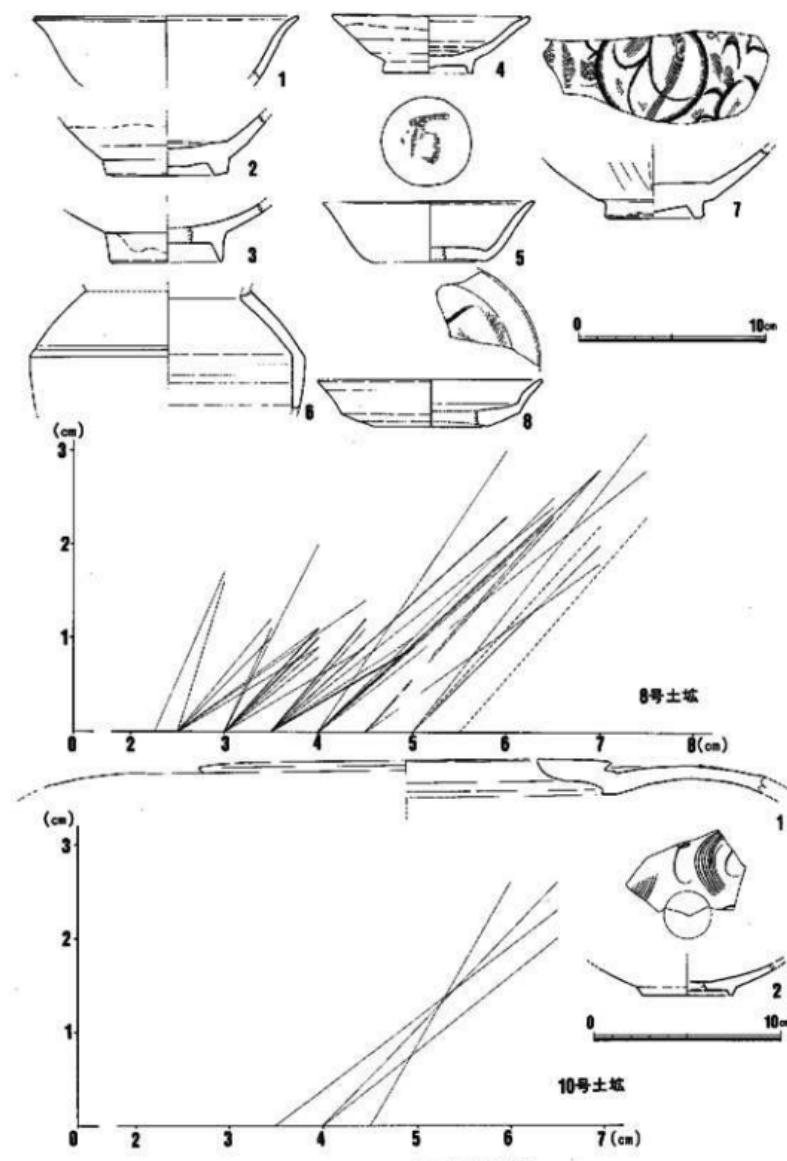


Fig. 23 8・10号土塚出土遺物

II. 博多一地下鉄路線内の調査(1)

32

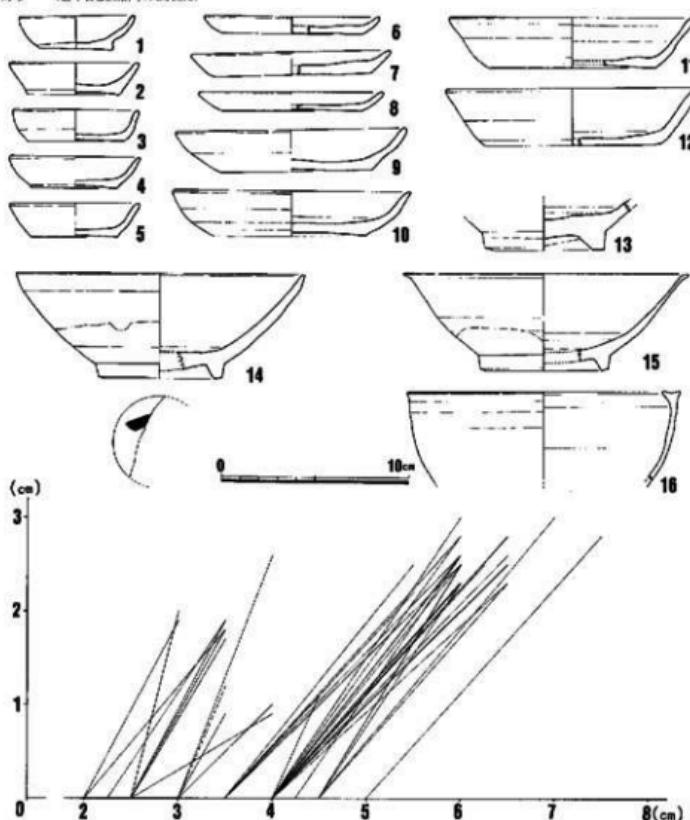


Fig. 24 12号土塙出土遺物

8号土塙 (Fig. 21-23) A-2-II区で検出された。26号土塙と接しているが、8号土塙が新しい。不定形の土塙で $3.7 \times 3.5\text{m}$ を計り大きいが、深さ 0.7m で壁は全体になだらかに傾斜する。出土遺物は付表に示すとおりで、図示した遺物は、1~3が白磁碗、4・5が白磁皿、6が白磁四耳壺、7が内面をヘラ及び櫛状施文具で花文を施し、外面に櫛描文を施した占相の龍泉青磁碗、8が内面見込に櫛描文を施した同安窯系青磁皿である。これらの遺物のうち、1及び5のロハゲの白磁碗・皿が最も新しいもので、この土塙の性格は明確ではないものの、営まれた時期は、13世紀後半から14世紀前半に求められよう。

9号土塙 A-2-II区だが、自然地形の浅い凹みで土塙とは認め難く、欠番としておく。

10号土塙 (Fig.21・23) A-2-I区で検出された。遺構北東部を上留壁柱によって切られている。残存する一辺の長さは1.3mで深さ0.3m、方形もしくは長方形を呈するものと思われる。出土遺物は、ほとんど無頬に近く、肩部が水平に内側にすばまり、平坦ない縁を辛うじて作り出す陶器四耳盃(1)や、内面をヘラ及び柳状施文具による水波文を施した青白磁碗(2)など図示したもののほかに、白磁碗では見込の袖を輪状に削り取る皿類2点を含め計4点、瓦、須恵器、滑石製石鍋など各1点が破片として出土している。土師杯4点もあった。遺構の性格は明らかではない。塵芥等の処理用であろうか。

11号土塙 A-2-I区で検出された。その大半は上留壁柱によって切られており、全体形、その性格等は不明である。遺物もほとんど検出されてない。

12号土塙 (Fig.24) A-2-I区で検出された。13号土塙と接しているが、その前後関係は明確でない。長軸2.5m、底辺2.5mの不整三角形を呈している。深さ40~60cmで浅く、壁は、なだらかな傾斜をもっている。上塙内の覆土は黄褐色の砂質土である。出土遺物は付表に示したとおりである。図に掲げたものは1~12が土師皿・杯で、13~15が白磁碗、16が陶器である。土師皿類では、実測図及び土師皿計測表からも看取されるように、底径4~6mで器高2cm前後の器高の高い土師小皿の多いのが特徴的である。そのほとんどが系切り底である。13・14は見込の袖を輪状に搔きとる白磁碗IX類のもので、14の高台内側露胎部に墨書きが残されているが、破片であるため内容は不明である。15はIV-1類に属し、口縁端が水平に外に開く。16は赤茶っぽく焼締まり、黒褐色の光沢のある袖を施した鉢形の陶器である。胎は薄く緻密である。口縁に受けがつき、恐らく蓋が付くものと思われる。通常この形態のものは取手や注口がつくが、これも恐らく行平形のものであろう。13世紀頃と思われるものの性格は明確ではない。廐棄物処理用の土塙であろうか。

13号土塙 (Fig.21) A-2-I区で検出された。12号土塙に接するが、その前後関係は明確ではない。1.9×1.8mの不整円形を呈し、深さ約80cmを計る。土塙内には薄く汚れた茶褐色砂が充たされていた。この中には若干の炭化物が含まれていた。遺物は、ほとんど含まれておらず、その性格は不明である。

14号土塙 (Fig.25・26) A-2-II区で検出された。4.2×4.0m程の不整円形の平面形をなすと思われるが、一部壁にかかり全体形は不明である。深さ1.25m程で、地山黄白色砂層に皿状に掘り込まれている。井戸の掘り方と考えられるが、井戸棒、井筒等の施設は認められなかった。地山が砂層のために崩壊したものであろう。遺物はほとんどが破片である。恐らく、井戸掘削時と、その崩壊した時点での遺物が混在しているものと思われる。図示した遺物は、1~11が土師皿、12が青白磁碗、13~14が白磁皿、15~17が白磁碗、18が龍泉青磁碗、19が土錐である。土師皿類は、5点の杯と28点の小皿に分れる。うちヘラ切り底の小皿1点を除いて、い

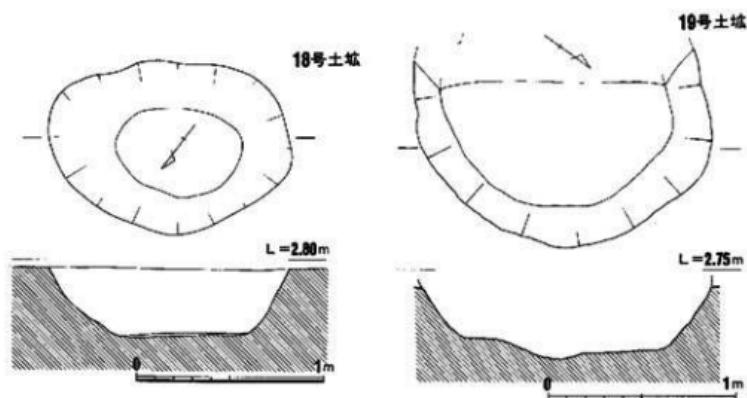
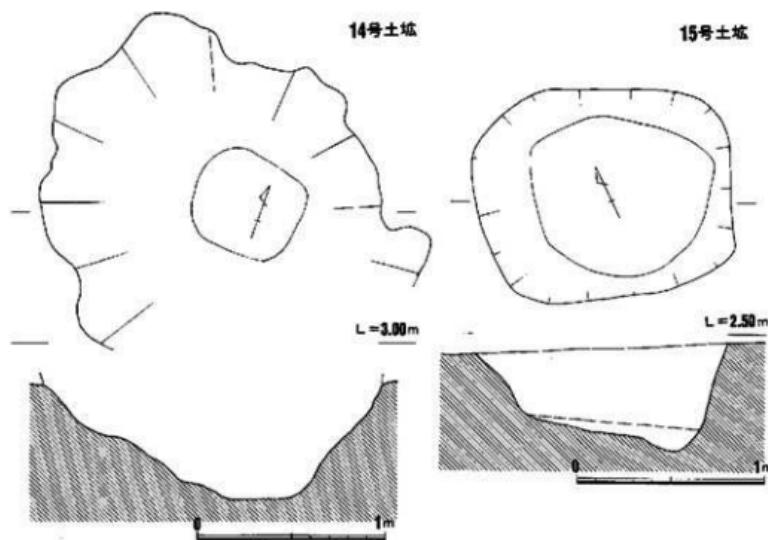


Fig. 25 14・15・18・19号土坑実測図

それも糸切り底である。これら的小破片は134点であった。12の青白磁碗は口縁部を外反させるもので器壁がやや厚くシャープさに欠ける。青味の薄い透明釉がかかる。13は高台をもつII類の白磁皿、14は白磁の平底皿III類である。15はIV類の白磁碗、16がVI類の白磁碗、17が三角玉縁のIV類白磁碗である。18は外面をヘラ切りによって陽刻した蓮弁文で飾る龍泉青磁碗で、内面は無文である。これら図示したのを含めて、それ以外に白磁碗IV類12点、VI類17点、IV類6点、白磁の高台付皿II類3点、平底皿III類3点、その他2点、青磁龍泉碗1点、同安系碗1点、陶器A群2点、B群10点、C群四耳壺2点、こね鉢2点、11縁内折れの大甕2点が出土しているものの、いずれも破片である。

15号土塙 (Fig.25・27) A-2-II区で検出された。1.4×1.2mの隅丸長方形の平面形をもつ上坡である。深さは55cmを計り、壁は長軸の一辺がなだらかで他辺はやや急になっている。地山黄白色砂層まで掘り込まれている。出土遺物は破片が多く、廃棄物処理用の上坡と思われるが、土師小皿の中には完形が多い。出土遺物の数量は、付表に示すとおりであるが、白磁碗ではIV・VII類が目立ち、口ハゲ碗がはいっているのが特徴的である。龍泉青磁碗では、鍋蓮弁およびヘラ描蓮弁をもつ類 (II-1・2) にI-5・6類の古相をもつものが多く混在する。計測グラフに示したように土師皿類はいづれも糸切り底で、うち小皿は底径6~8cm、口径8~9cmに集中し、器高は低く1cm前後のものが多い。これらの土師皿類は胎土には挟雜物が少なく比較的滑らかで焼成もよい。図示した遺物は1~7が土師皿、8~12が土師杯、22は土師質土鍋である。13・14は白磁碗であるが、13は口縁端をやや外に引き出した口縁無釉の口ハゲ碗で、14は三角玉縁をもつVII類碗の底部破片である。15~19は龍泉青磁碗で、15が外面無文で内面口縁直下に一条の團線をめぐらすもの、16が外面にヘラ描きの蓮弁文を施すII-2類、17が外面にやや幅広の鍋蓮弁文を配すII-1類である。16・17ともに茶味の強いオリーブ色透明釉がかかる。18は内外面無文で底部破片、19は見込の沈墨線内にヘラの片切り彫による飛雲文を施している。20・21は青磁皿で20は同安窯系、21は龍泉系である。23は口縁がすばまり外側に三角に突出するB群に属する鉢である。これら出土遺物は、各期の遺物が混在しているが、それらのうちで最も新相のものは口ハゲの白磁碗、龍泉青磁蓮弁文碗の一群でこの遺構の営まれた年代も13世紀末から14世紀前半頃と考えられる。

16号土塙 (Fig.28) A-2-III区で検出された。調査区の東隅にかかり、その全体形は不明である。おそらく長方形に近い形状をなすものであろう。この土塙内部は炭化物を多量に含む灰層で満たされており、火葬墓もしくは火を焚く施設等の性格が考えられる。この上坡の出土遺物は土師皿類が中心で杯15点、小皿27点であり、いづれも糸切り底である。また、それらの小破片は126点、54点を数え、どちらに属するか明確でない細片は126点になる。土師皿類では、径が小さく器高の高い特小皿が特徴的である。この他圓筒形には古窯系の陶器2点、

須恵器、瓦器各1点、土師質上器3点、瓦質土器2点、瓦が3点、土錐1点が出土しているがいずれも小破片である。白磁碗はⅣ類の5点を中心とし13点があり、龍泉窯系碗はⅠ類3点、Ⅱ類2点その他1点がある。皿には龍泉、同安とともに1点づつがある。同安系碗はⅡ類が4点ある。陶器にはA群のものが11点、B群が8点、C群5点があり、その他群不明の大型容器が4点ある。これら輸入陶磁のほとんどが小破片であって、混入したものと考えられる。

17号土塗 (Fig. 29) A-2-Ⅲ区で検出された。A-2区では半分が壁にかかっていたがA-1-Ⅲ区で検出された40号土塗と同一遺構である。井戸掘り方である。平面形はほぼ円形で径2.3m、深さ1.2mを計る。内部には赤味を帯びた茶褐色土がブロック状に堆積しており、ある時期に井戸本体が崩壊したものと思われる。井戸枠は検出されなかつたが、掘り方最下面に入頭大礫が円形に数個並んでおり、これが井戸枠の痕跡を示すものと推定する。出土遺物のうち図示したものは、1~4が土師小皿、5が土師杯で、6は印文花の青白磁合子蓋で、上面に対称する二羽の鳳凰を配し、その間に草花文を置く。外面全体下半以

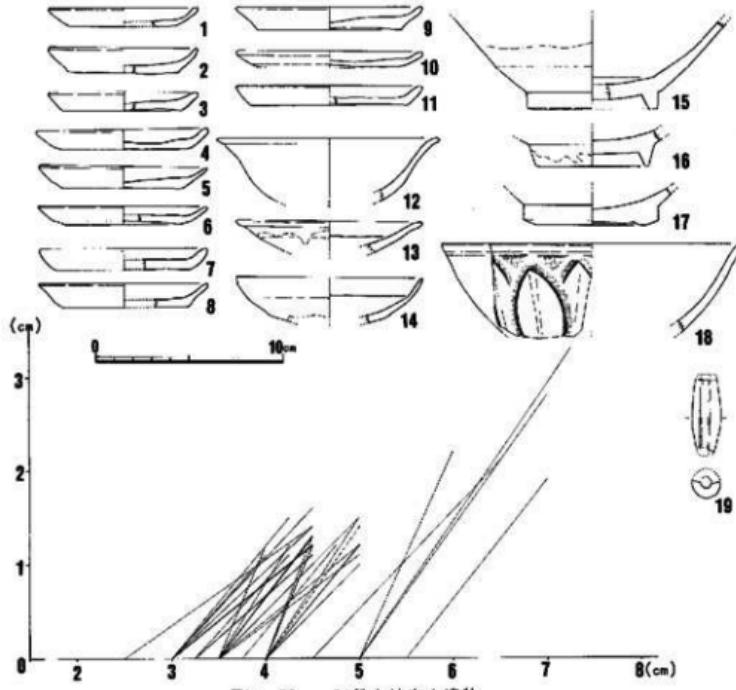
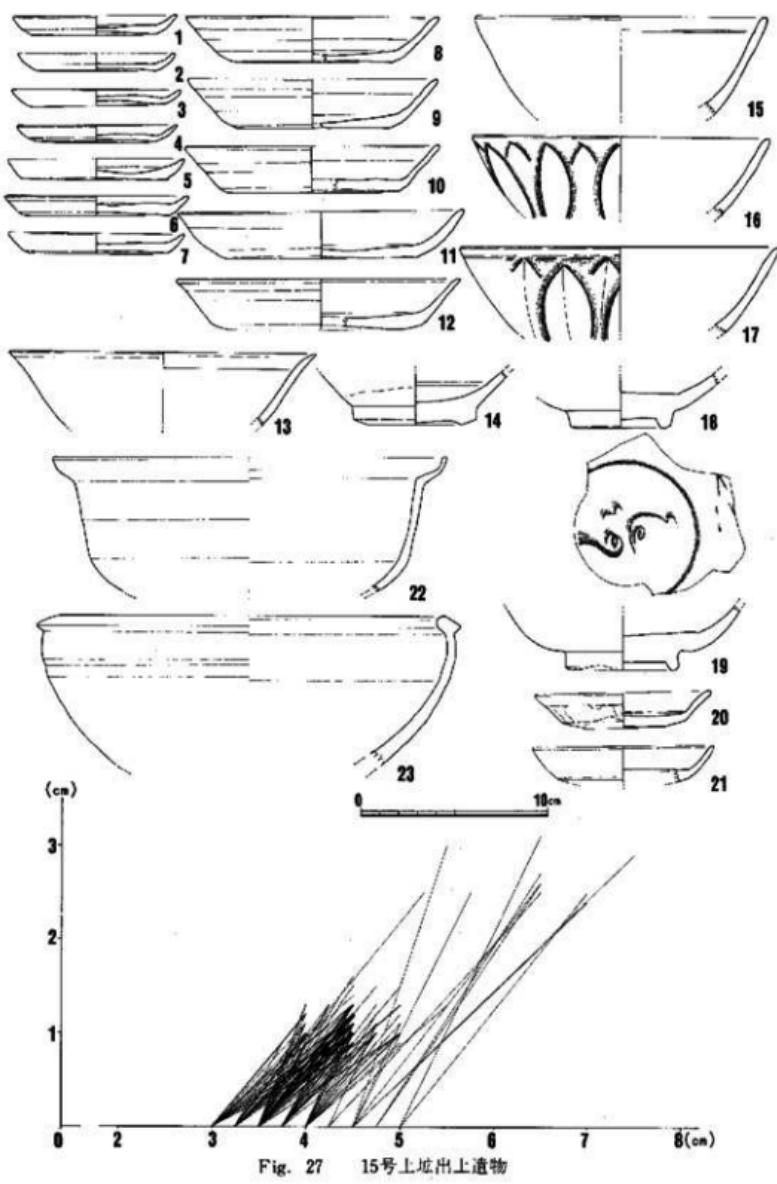


Fig. 26 14号土塗出土遺物



II. 博多一地下鉄路線内の調査1)-

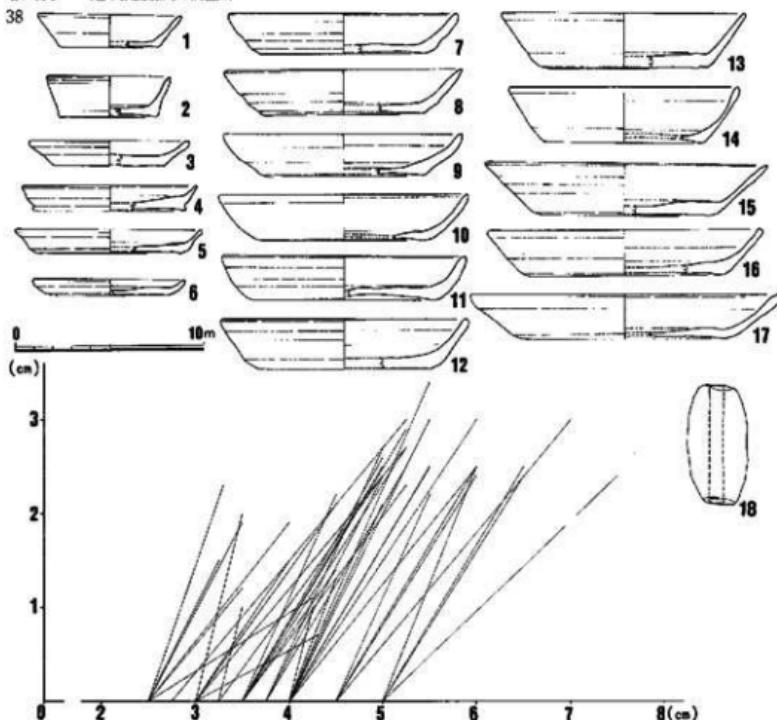


Fig. 28 16号土塚出土遺物

上と内面天井部に青白釉がかかる。外面が厚く、内面はうすい。釉尻は赤褐色に焼ける。
7・9~13は白磁皿で9・10・13は高台をもち、以外は平底である。11の底部露胎部には「行
に墨書が残され「五丁（トカ）…、八万□」と読める。8はV型の白磁碗で、その高台内露胎
部にも墨書が残され、「五十内」と読める。14は白磁四耳壺体部下半の破片である。15、16は龍
泉窯青磁碗である。15は高台が小さく、体部が斜め外方に直ぐにのび、口縁が外反するもので
外面を柳状施文具による方射状の刻線で飾り、内面にはヘラ片切彫りと楷がき文とによって草
花文を施す。胎は灰色で精良、縁の強いオリーブ釉が高台疊付以外を除いて全面にかかる。龍泉
碗0類の古い時期のものである。16は龍泉碗I-1類で、口縁を外反させ、外面体部にヘラ片
切彫りの蓮弁を描き、その上に柳状施文具の描き目を施す。内面はヘラおよび柳状施文具によ
って劃花文を施す。胎は灰色で15よりやや粗い。17陶器皿で、口縁が肥厚し、外底面を上げ底
状にえぐる。この他、柿釉を施した天目碗破片がある。この17号土塚から出土した遺物は土師

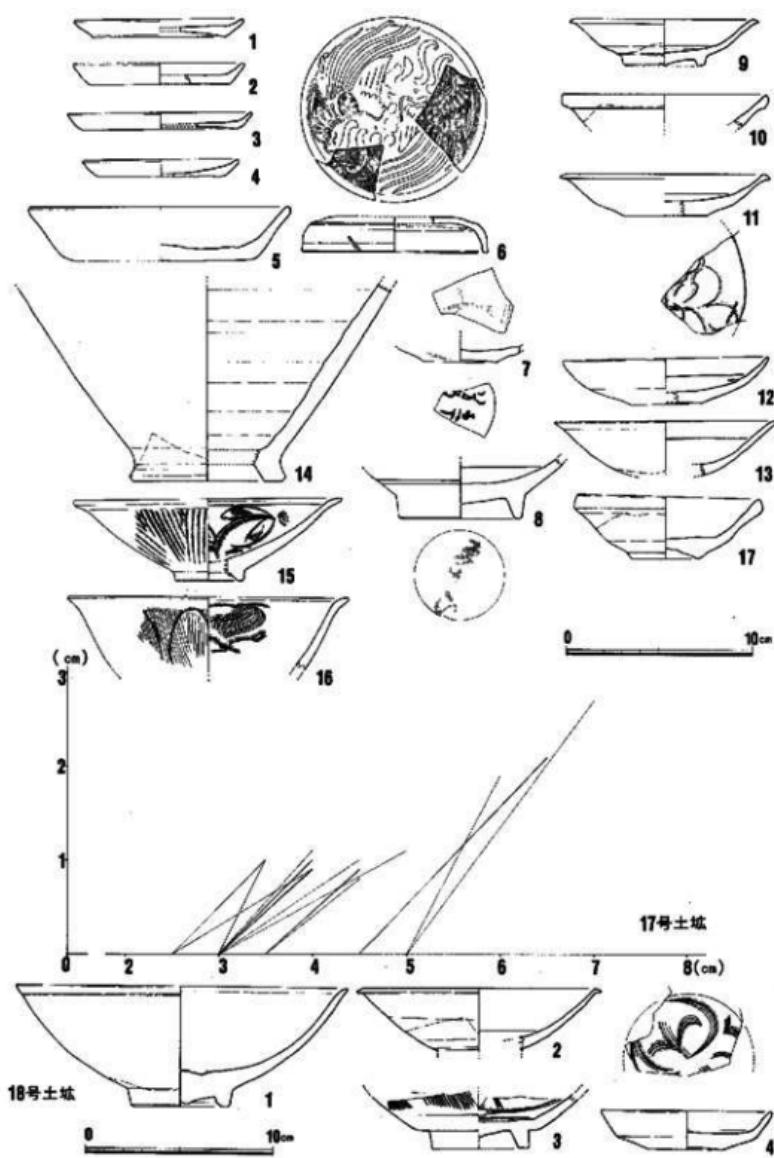


Fig. 29 17・18号土坡出土遺物

II. 博多 一地下鉄路線内の調査1)-

40

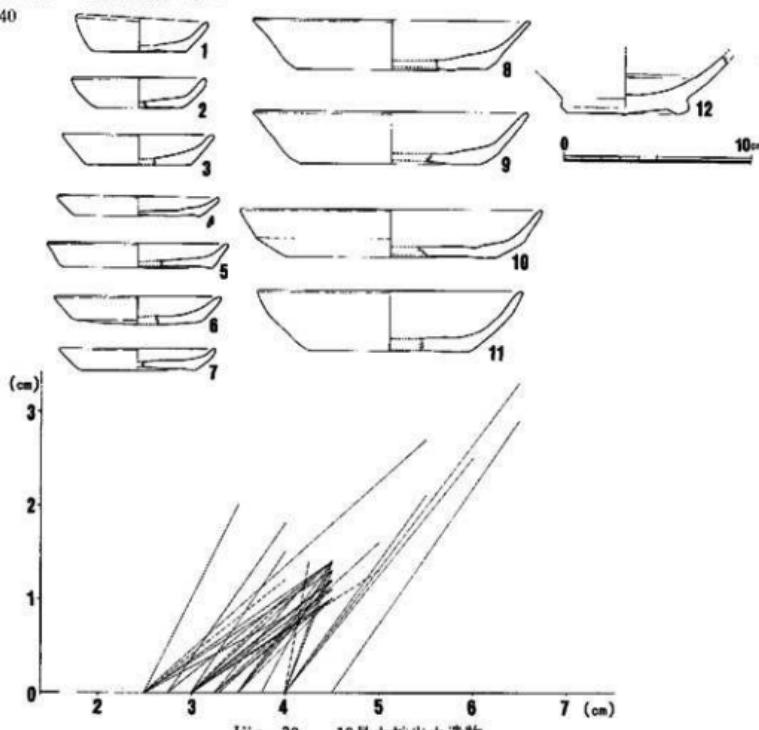


Fig. 30 19号土塙出土遺物

皿類がほとんど糸切りであるが、陶磁類には古相のものが多い。井戸掘削時に下層から紛れ込んだものであろうか。

18号土塙 (Fig. 25・29) A-2-II区で検出された。長軸1.3m、幅0.9mの楕円形をした土塙で縁はなだらかに立ち上り、底面は平坦である。深さ40cmを計る。遺物量はそれほど多くなく、白磁碗4点、白磁皿6点、青磁は龍泉碗I類7点、皿I類1点、同安系碗II類7点、皿1点があり、青磁には輪花碗1点がある。陶器はA群、B群、C群、その他がそれぞれ11点、1点、5点、1点を数え、国産品には、焼き締まった上師小皿21点、瓦11点があったにすぎず、その大半が小破片である。図に掲げたものは次のようである。1が白磁碗で通例みない器形をもち器壁は外方に丸味をもって立ち上り、口縁端をわずかに外反させる。見込には小さな茶漬りを作り、中心部は高まりを見せる。底部には同安系青磁碗II類のような高台をもつ。胎は灰色で気孔がある。高台脇以上に灰色の釉が施され、ピンホール・貫入がある。2は小振りの白磁碗

でⅥ-3類にあたる。3は同安窯系青磁碗Ⅱ類にあたるが、焼きが甘く胎は肌色、釉もわずかに青味のある肌色の発色をしており、細かな貫入が目立つ。4は見込に輪状施文具で草花文を刻した龍泉青磁平底皿I-1類である。

19号土塙 (Fig.25・30) A-2-I区で検出された。東側半分を壁によって切られているがほぼ円形のプランをもつ井戸掘り方である。径3.2m程度で、深さは0.75mを計る。22号土塙を切っている。井戸枠等の構造は確認されなかったが、掘り方最下面に入頭大の繊数個があった。この井戸掘り方も遺物の混在がはげしく、そのほとんどが破片である。出土遺物は次のようである。白磁碗にはⅣ類10点、Ⅵ類12点、Ⅸ類7点、その他判別のつかない小破片30点があり、皿には高台付Ⅱ類2点、平底Ⅲ類31点、同Ⅳ類1点がある。青磁には龍泉碗I-5、6類がそれぞれ6点、1点、皿には平底のI-5類3点、同安窯系には皿2点がある。この他、青白碗2点、皿2点があり、陶器ではA群3点、B群10点、C群10点のはか、群不明の大型容器7点、皿1点があった。国産品には須恵器23点、古墳時代土師器26点、瓦器19点、土師質土器5点、瓦11点があり、鉄釘7点も出土している。土師皿類には糸切り杯が5点、糸切り小皿25点、ヘラ切り小皿5点のはか小破片264点があった。時期決定は困難であるが13世紀後半以降に營まれたものであろうか。

20号土塙 (Fig.31・32) A-2-I区で検出された。長軸2.5m、幅1.2mの不整長円形のプランをもち、深さ0.5mを計る土塙である。西側壁はなだらかで東側は急である。主軸は真北を向き、隣接する22号土塙と同一方位をとり、後述する溝の基本的な方位と一致しているところが興味深い。土塙内は、炭化物を多量に含む黒色砂質土で覆われ、中からは微細な焼骨片が検出されている。火葬墓もしくは火葬施設と考えられる。遺物はそれ程多くない。その数量は付表に示すとおりである。図示した遺物は、1・3が三角玉緑で低い高台をもつ白磁碗Ⅳ類で、2・4は見込の釉を輪状に削る白磁碗Ⅴ類である。釉は2が明灰色の、4が緑灰色の発色を見せる。また、5は龍泉青磁平底皿I-1類に該当する。6は磁胎で緑灰色の青磁釉を施す長頸壺の破片である。土師皿類にヘラ切り底は認められず、糸切り底のみである。銅鏡(7)は天祐通宝である。

21号土塙 (Fig.31・33・34、PL.10-(1)) A-2-I区で検出された。20号土塙に接し、4号土塙を切る。北端を壁によって切られ、全体の規模は不明であるが、長軸現在長2.5m、幅約1.5mの不整長円形を呈しており、深さ1.15mと深い。横断面形はU字形に近い。土塙内には炭化物を多量に含む黒色土や灰が層をなして堆積している上、中からは焼骨片が多量検出されており、更に棺釘と思われる鉄釘や、藏骨器と思われる須恵質の大型壺の出土から、20号土塙と同様に火葬墓もしくは火葬施設であると考えられる。土塙内には人頭大の繊数個が置かれていた。先述したようにこの土塙の長軸も真北の方位をとっており、溝の方位との関係が興味深い。遺物は比較的多量で、火熱によって釉や胎に変化を起こしているものも多い。

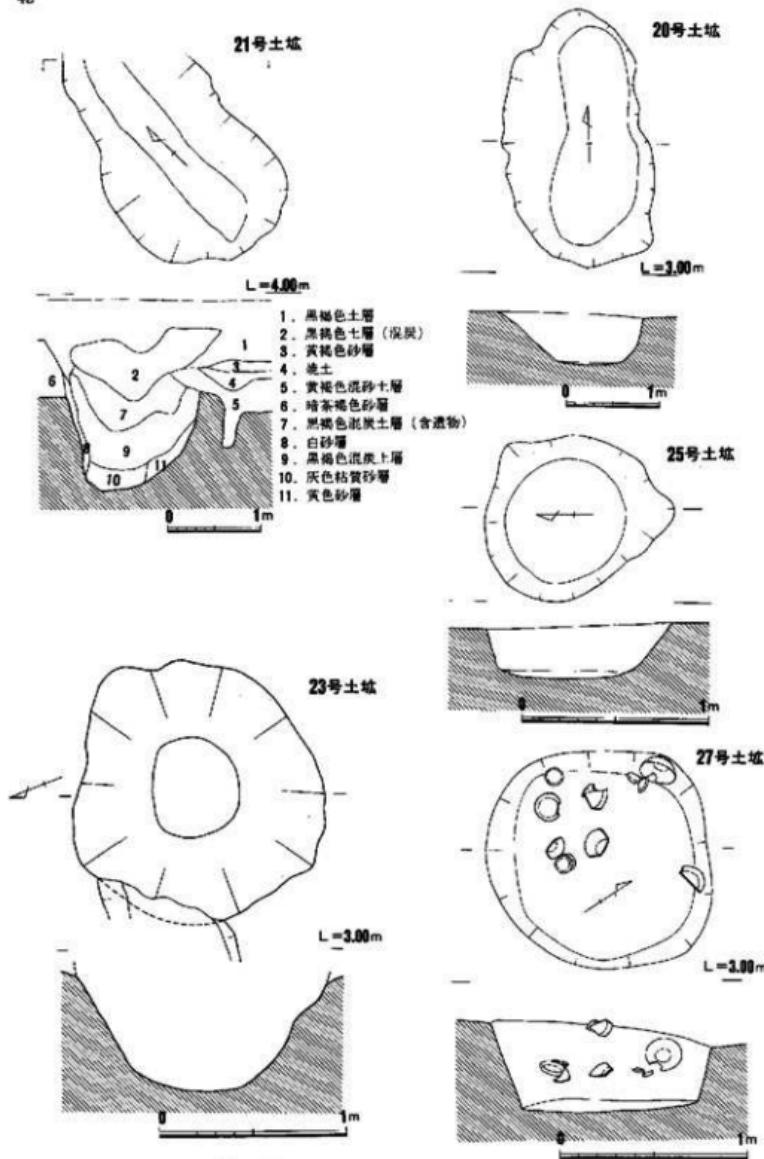


Fig. 31 20・21・23・25・27号土塙実測図

出土遺物の数量は付表に掲げたとおりであり、ここでは図示した遺物について簡単な説明を加えよう。1~12は土師小皿で、土師皿類計測グラフに示したように底径は6~7cm、口径8~9cm、器高1cm前後に集中し、すべて糸切り底である。13~19は土師杯で、底径9~11cm、口径13cm前後、器高2cm前後に集中する。これもすべて糸切り底である。これら土師皿類には、火葬の際の火熱によって焼き縮められたものも認められる。20~22は青白磁である。20は型作りの合子の身で体部外面に菊弁がある。21、22は同形同大の平底皿で青白釉を内外面施釉した後にカンナ状工具で底部脇の器壁を釉とともに削っている。底部は露胎である。この他、口ハゲの底部全面施釉で、内面に魚藻文を施した型作りの平皿もある。23~25・30は白磁碗で、23は見込の釉を輪状に搔きとるⅡ類、24がⅣ類、30がⅤ類、30がⅥ~Ⅲ類に該当する。26~29は白磁平底皿で、26・27は口ハゲ、28、29は口縁を外方につまみ出すⅣ~Ⅱ類にあたる。このうち29には見込にヘラ描きの蓮華文が刻まれている。31・32は高台付の白磁皿で、いずれもⅡ類に属

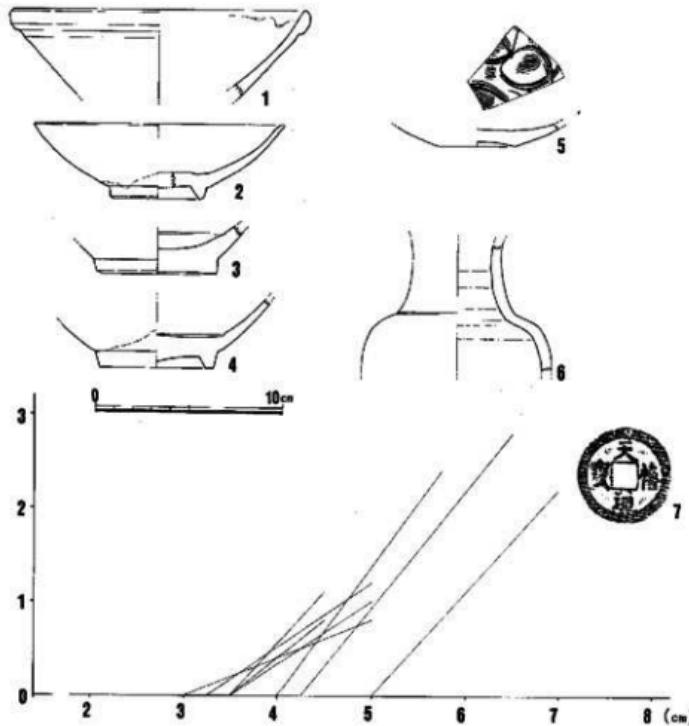


Fig. 32 20号土塚出土遺物

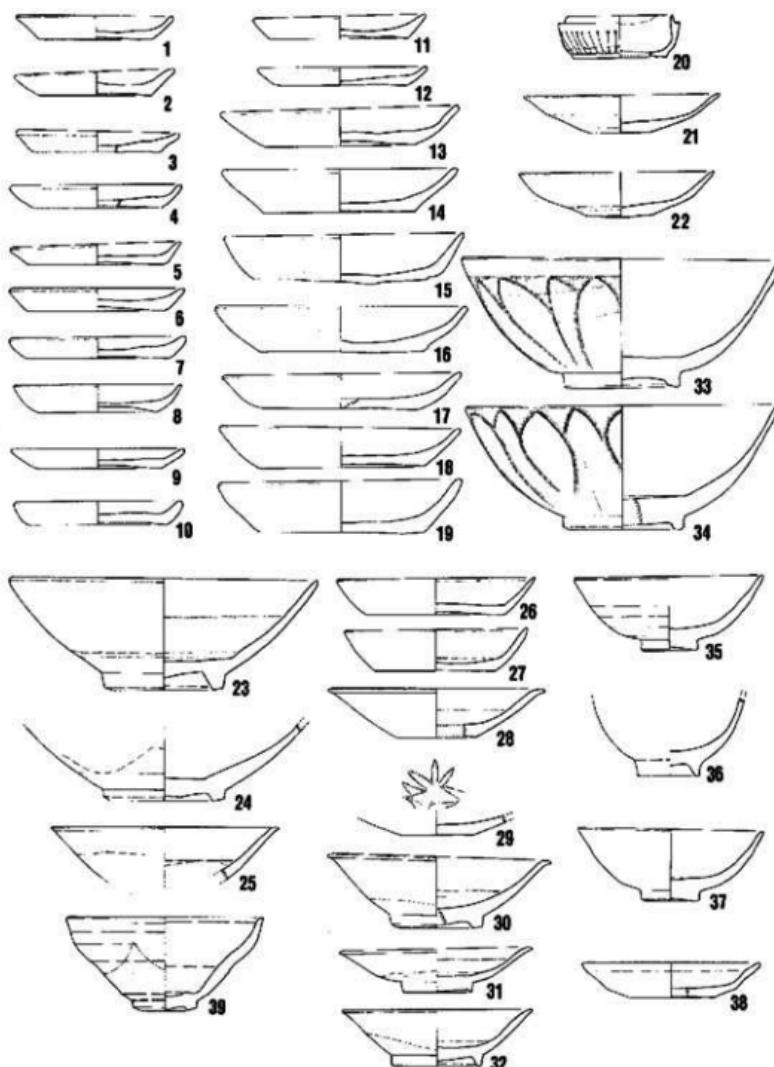


Fig. 33 21号上塙出土遺物(1)

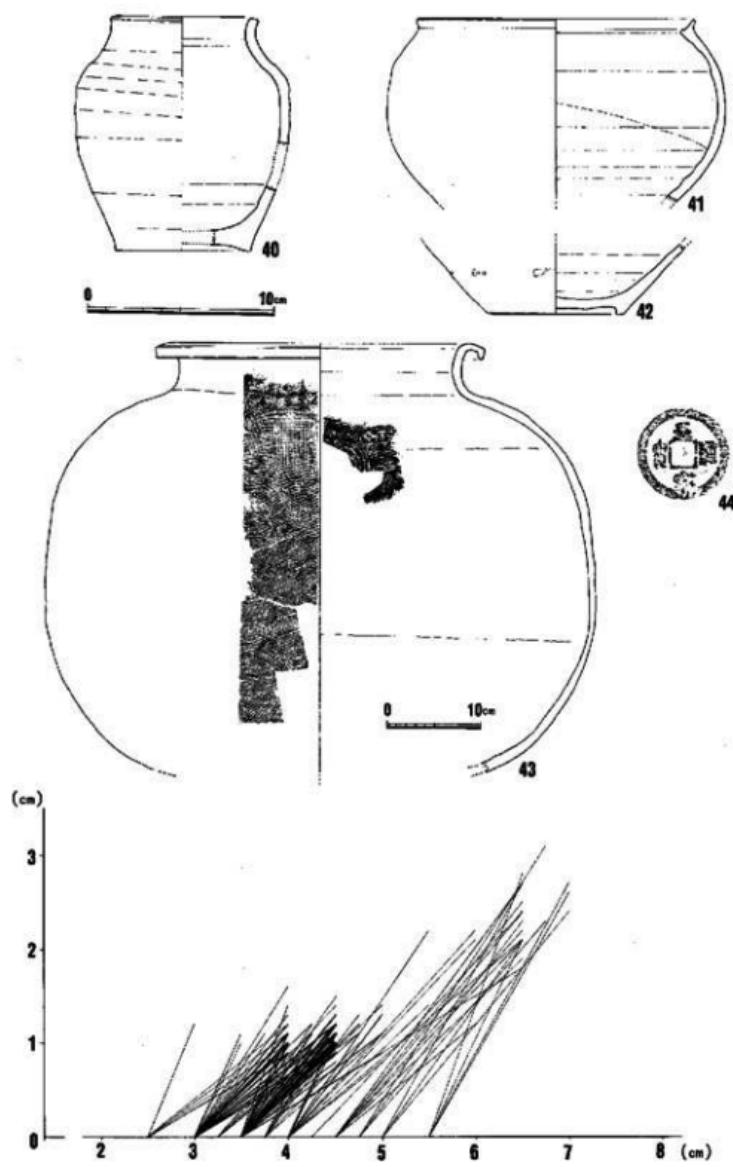


Fig. 34 21号土坑出土遺物(2)

している。この他、白磁には肩部に花卉唐草の浮文を型押しで施し外面に貫入の多い灰青釉をかけた小型の壺があった。これはフィリピン等南方に多く見られる器形であり、元代に位置づけられている。33・34は外面にヘラ切りの蓮弁を持つ龍泉青磁碗でいずれも茶味の強いオリーブ色の釉がかけられている。33の見込には「金玉満堂」の文字がスタンプされているが、辛うじて「玉」の文字のみが鮮明に見える。この33は火熱の影響が著しく、急激な温度変化によって生じるPotlid現象のあばた状の凹みが多く見られる。35~37は青磁小碗である。35、37は茶味強いオリーブ色の釉がかかる。出入口2・3区1号土塙で出土した龍泉窯小碗(Fig.94-15)に器形は類似するが、口径が更に小さく、高台のえぐりが少なくわずかにアーチ状に削るのみであるところに特徴がある。時代的に後出する器形なのである。38は同安系青磁の平底皿である。39は黒釉磁(天目)碗で、火熱の影響によって釉が縮縫状に縮んでいる。この他火熱によって釉が沸騰したもう1点の完形品があった(PL.10-1(2))が、盗難にあった。陶器にはB群にはいる頭のすぼまつた短頸壺40や、鉢(41、42)などがある。また、43は須恵質の大壺で、胴部はほぼ球形をなし、頭部は短く直立し、口縁は外に開き更に端部は下がる。内面は同心円文の叩き目が残り、外面には平行線の叩き目が残る。この大壺は、19号土塙をはさんで西側にある22号土塙出土の破片と接合した。後にも述べるが、このことによって21号土塙と22号土塙は同一時期に営まれたものであると言える。このほか、銅鏡(皇宋通宝)が出土している。これら21号土塙出土遺物は、ほとんどが副葬品であると考えられるが、その数は多く、一体だけの火葬とは考えられない。多数の遺体を荼毗に付すような火葬施設であろう。おそらく13世紀後半から14世紀前半頃に位置づけられよう。

22号土塙 (Fig.35) A-2-Ⅲ区で検出された。A-1・2区の境にあたる。19号土塙(井戸)の掘り方によって大半は切られている。現存長軸0.9m、幅0.5mを計るが、本来は20・21号土塙と同様に長円形をなすものと思われる。主軸の方向は、20・21号土塙と直角、すなわち東西方向にとっている。10cm程の浅い皿状の土塙で、内部には木炭等がぎっしり詰まっている。また焼骨片が出土している。人頭大の石数個も置かれている。藏骨器かと思われる大型の須恵質壺も出土し、これは先に述べたように21号土塙のものに接合した。これらの状況から22号土塙も20・21号土塙と同様の火葬墓もしくは火葬施設であると判断される。出土遺物は多くない。白磁碗はⅥ類2点を含む4点、Ⅲは高台付Ⅱ類1点、青磁は同安系碗1点、瓦器9点、瓦1点、土師質土器1点、須恵器および須恵質土器各2点、旁生・古墳時代の上器5点、陶器類4点である。土師皿類には杯1点と小皿3点があり、いずれも糸切り底の完形で火熱を受け焼き縮まっている。それらの小破片は36点を数える。図示した遺物は1~3が土師小皿、4が土師杯、5が瓦器(内黒土器)碗、6が高台付白磁皿Ⅱ類の完形で見込を輪状に搔きとるものである。7は陶器壺の底部破片でB群に属するものであろう。

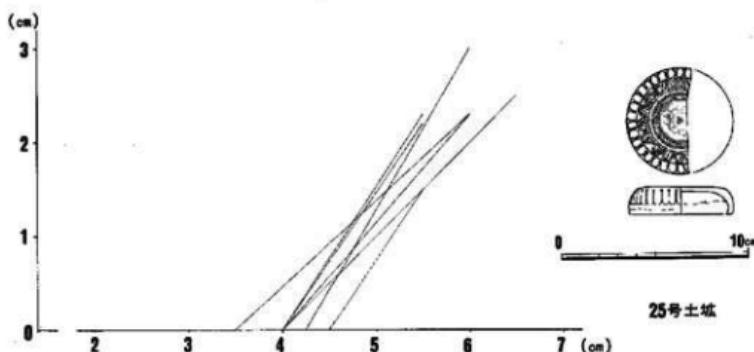
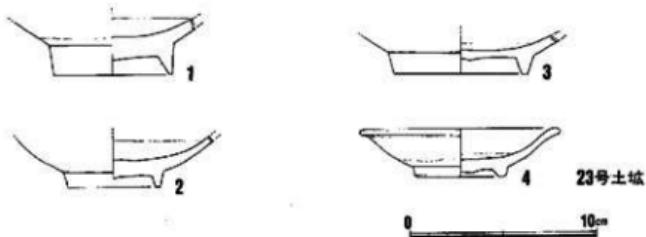
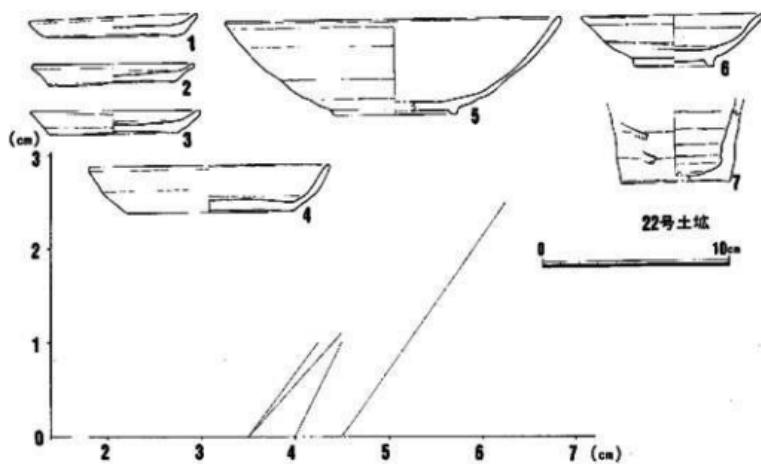


Fig. 35 22・23・25号土坑出土遺物

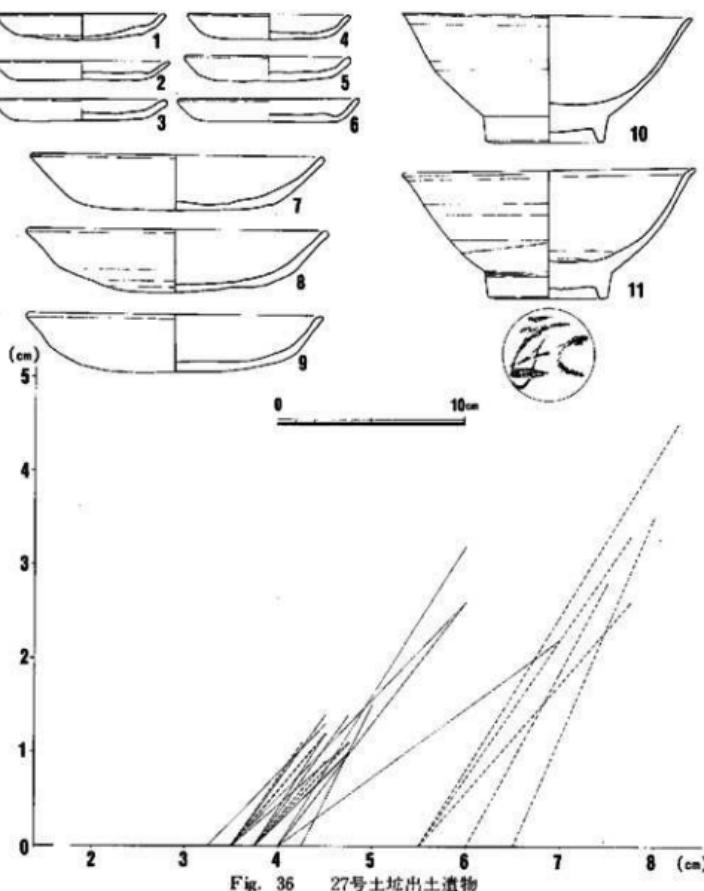


Fig. 36 27号土坑出土遺物

これら火葬墓もしくは火葬施設の性格をもつ20~22号土坑は互いに近接し、それらの基本的な方位、當まれた時期に共通性が認められる。これら火葬施設の集中は、鎌倉時代末頃にこの地で多數の遺体処理が行なわれたことを窺わせ、戦乱などの関係が考えられる。

23号土坑 (Fig.31・35) A-2-II区で検出された。1号溝、24号土坑を切っている。径2.2~2.3mの平面形ほぼ正円をなす井戸掘り方で、深さ1.15mを計る。この掘り方最上面には黒色炭化物層が直状に堆積しており、中に焼けた銅鏡2枚、焼骨片が存在していることから、井戸廃棄後にその凹みが火葬施設として利用されたのであろう。出土遺物は、白磁碗がⅣ類9

点を含む18点、白磁皿8点、龍泉青磁碗5点、同安系青磁碗3点、陶器片7点、青白磁碗2点がある。同產品は土師質土器2点、瓦器碗類3点、瓦質土器2点、瓦6点、鉄釘3点などがあり、土師皿類は小破片8点が見られるのみである。図示した遺物は1～3は白磁碗、4が高台付白磁皿である。

24号土塙 A-2-I区で検出された。23号土塙、1号溝に切られる。茶黄色の砂が皿状に堆積している。白磁碗2点、陶器2点が出土しているが、いずれも小破片である。自然層の落ち込みの可能性が強い。

25号土塙 (Fig.31・35) A-2-II区で検出された。径約0.9mのほぼ正円形をなし、深さ30cmと浅い土塙である。性格は不明である。出土遺物は白磁碗IV・VI・IX類が各1、4、3点、同皿、袋物各1点、龍泉青磁碗4点、陶器13点、青白磁合子1点、土師皿類は糸切り杯7点で小破片が他に46点ある。図示した遺物は青白磁合子の蓋である。

26号土塙 (Fig.21) A-2-II区で検出された。8号土塙に接するが切合の関係はない。径1.0m程のほぼ正円形で、深さ1.5mと深い。覆土は黒褐色土である。遺物量は少なく、白磁碗2点、同袋物1点、青白磁皿1点、瓦1点、土師質土器2点、陶器3点、土師杯小破片6点だけであり、いずれも小破片である。

27号土塙 (Fig.31・36) A-2-III区で検出された。4号、13号土塙に近接する。1.2×1.15m程の平面形隅丸方形をなす土塙である。底面は平坦で壁はほぼ直に立ち上る。遺物は床面からやや浮いた状態で出土しているが、時期の違いはあまり見られず一括遺物として扱うことができよう。出土遺物の数量は付表に掲げたとおりであり、ここでは図示した遺物について若干の説明を加える。1～6は土師小皿である。ヘラ切り底と糸切り底とが相半する。7～9は土師杯でヘラ切り底が多い。10・11は白磁碗V類に属するものであり、ともに口縁端がやや聞く。11は見込み輪状に描き取るもので、高台内露胎部に墨書銘があるが、判読しがたい。これらの出土遺物の年代はほぼ12世紀前半に求められよう。この遺構の性格については、土塙の可能性を考えられるが、遺物が床面からやや浮いた状態であるところに難点が残る。

28号土塙 A-2-I区で検出された。1号溝を切るようにして營まれたものであるが、覆土の黒色土が、1号溝のそれと区別できず、1号溝掘り下げ完了時に確認された遺構である。そのため遺物のかなりの部分が1号溝に含まれている。炭化物、灰等が径約2m程の広がりをもって堆積しているが、土塙の範囲は必ずしも明確にしえなかつた。この炭化物層中には焼骨片や火熱を受けて脆くなかった鉄釘、銅錢などが含まれており、20～22号土塙と一連の火葬墓もしくは火葬施設であろう。この遺構の年代については、出土遺物から押えられないが、1号溝の機能が停止する段階すなわち14世紀前半、鎌倉時代末から室町時代初頭頃が考えられよう。

29号土塙 (Fig.37・38, PL.13-(1)) A-1-I区で検出された。長軸1.0m、幅0.4mの

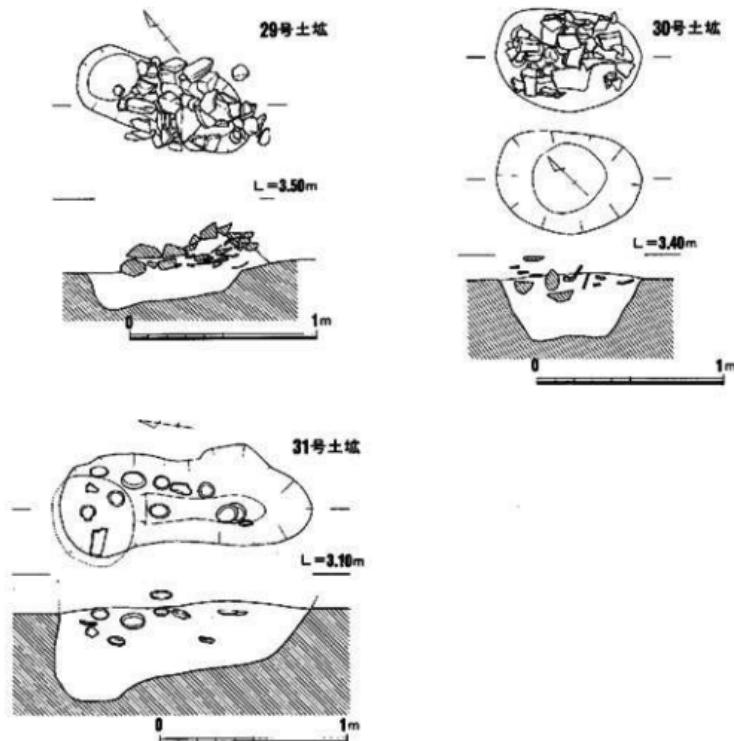


Fig. 37 29・30・31号土塚実測図

長円形をなす土塚で深さ20cm程で浅い。土塚の主軸の方向はN-29°-Wをとる。この土塚内の覆土は炭化物を含む黒色土でその中に須恵器の藏骨器と思われる壺が置かれ、その上面を多量の破碎壺が覆っていた。これらの壺はいずれも火熱による赤化、剝落、脆化が著しい。須恵器壺は二次的な火熱の影響を受けているとは思えないが、上部壺の影響か、大きく削れている。出土遺物はそれ程多くなく、白磁碗1点、皿1点、龍泉青磁碗2点、皿1点、陶器は10点である。いずれも破片の出土である。国産品では上部杯4点、小皿6点があり、それらの小破片は26点である。いずれも糸切り底である。この他図示した須恵器壺は口径17.5cmで、胴部最大径は、26.9cmを計る。頸部は斜めに立上り、口縁部を肥厚させる。口縁の内側には浅いくぼみを設ける。内面は体部がハケ目調整で頸部以上はナデ調整である。外面はハケ目調整を行なったのち

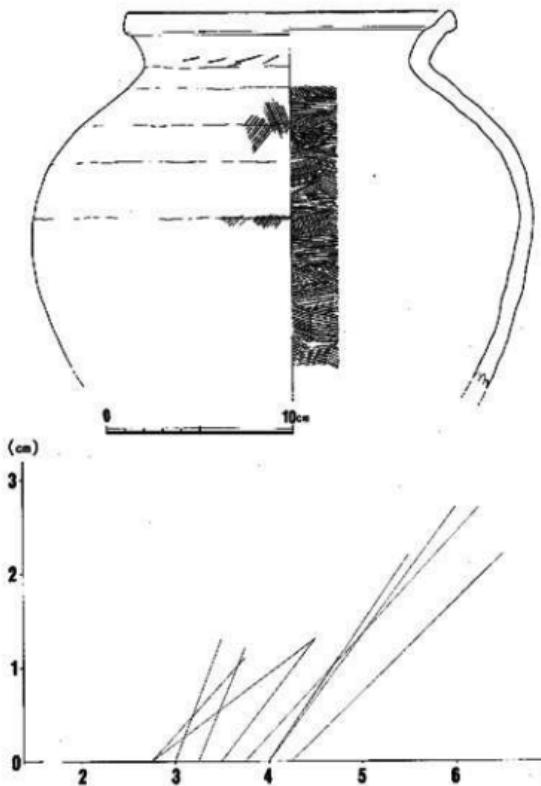


Fig. 38 29号土塚出土遺物

にナゲ調整を行なっている。底部は欠損しているが平底であろう。北九州市椎木山遺跡でも同形の壺が藏骨器として使用されている。おそらく14世紀代に位置づけられるものであろう。

⁽⁴²⁾
「椎木山遺跡」北九州市埋蔵文化財調査報告第24集 1977

30号土塚 (Fig. 37、PL. 13-(2)) A-1-I-III区で検出された。0.8 × 0.55 m の椭円形をなし、深さ 0.35 m を計る。主軸は N-43°-W をとり、29号土塚と近い。この小土塚中には木炭片が多く詰まり、焼磧および火熱の影響を受けた常滑大甕の破片が

その上を覆っている。火葬墓であろう。図示

はしていないが、常滑大甕は口縁帯の幅広いもので、13世紀後半から14世紀中葉に位置づけられる。この他白磁碗2点、同皿3点、青白磁碗1点、陶器1点があったがいずれも小破片で副葬品ではない。土師杯4点、土師小皿5点は副葬品であろう。いずれも糸切り底である。鉄釘2本も見られた。

31号土塚 (Fig. 37・39、PL. 14-(1)) A-1-I-II区で検出された。1.35 × 0.5 m の不整長円形の土塚で深さは 0.3~0.5 m を計る。主軸は N-8°-W の方向をとる。覆土は炭化物、焼土を含む黒褐色土で、焼骨が少しあつていた。この覆土中には床面より浮いた状態であるが土師皿類が完形品ではいっており、副葬品であると思われ、この土塚も火葬墓かと思われる。上

師皿類は計測グラフに示すとおり、すべて糸切り底である。この他白磁碗4点や、白磁口ハゲ皿1点もあるが小破片で副葬したものとは思えない。14世紀前半代か。

32号土塙 (Fig. 40~43, PL. 14·15) A-1-I-Xで検出された。34号土塙に接し、4号溝を切る。径2.1m、深さ0.35mの不整円形をした土塙で、覆土は炭化物層と砂質層が互層になっている。南東端に径0.4mの小ピットがある。この土塙からは多量の遺物が出土しており、その数量は付表に示すとおりである。図示した遺物は、1~31が土師小皿、32~39が土師杯であり、計測表に示すように糸切り底にヘラ切り底がかなり混じるのが特徴的である。40は瓦器碗、41は瓦器皿で糸切り底である。42は青白磁小碗で内面に雷文の型押しが見られ器壁は薄い。43は青白磁合子蓋で上面に草花文の型押しがある。44は白磁四耳壺または水注の頸部破片、45は白磁平底皿Ⅲ類、46は白磁碗Ⅱ類で内面を白色堆線で区画する。47は同安窯系青磁碗で高台露胎部に墨書きがあるが、判読しがたい。49は同皿である。48は龍泉青磁Ⅲ類の、外面に錦菫弁を施す浅碗であるが、他の一連の遺物に比べ時期的に新しすぎ、混入したものであろう。50は陶

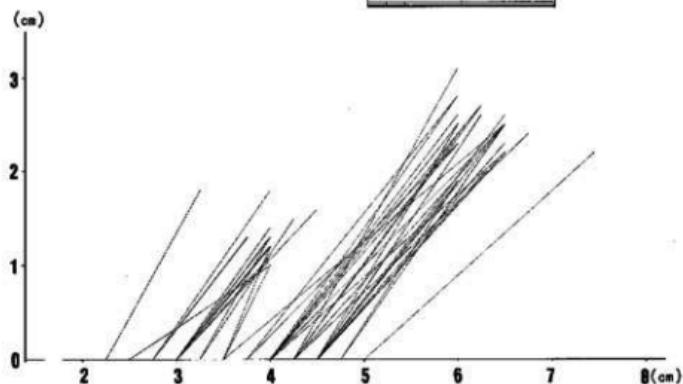
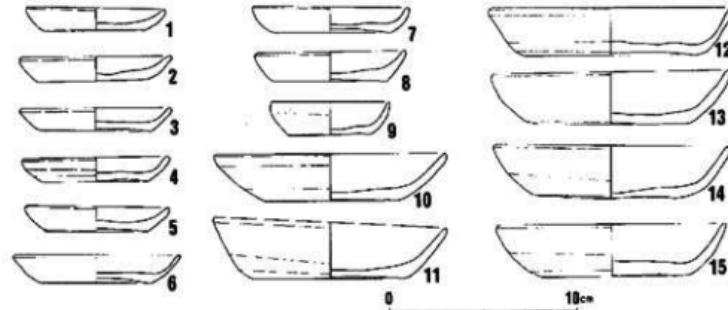


Fig. 39 31号土塙出土遺物

器C群にはいはる水注で口縁を盤口壺形にする。口縁をわずかにつまんで注口となす。胎は粗く多くの砂粒が混じっている。無釉で焼き縮め風になっている。51~53は黄釉鉄絵盤である。51・52は外方に開く幅広の鋸をもつもので、53は口縁端を折り返し丸く收めるものである。從来この口縁端を丸く收めるものは、鋸をもつものより後出し、13世紀代と考えられていたが、近年博多では12世紀代の遺存状態の良好な遺構でも検出されるようになり、32号土塙から出土する一連の遺物と必ずしも矛盾しないと考える。54はライトブルーの発色をもつガラス製品である。一部混入と思われる遺物を除いたところで、この遺構は12世紀半ばから後半にかけての頃に位置づけたい。性格は明確ではないが廃棄物処理に用いられたものか。

33号土塙 A-1-Ⅲ区で検出された。径1.0 m程度のほぼ正円形をなすものであるが、深

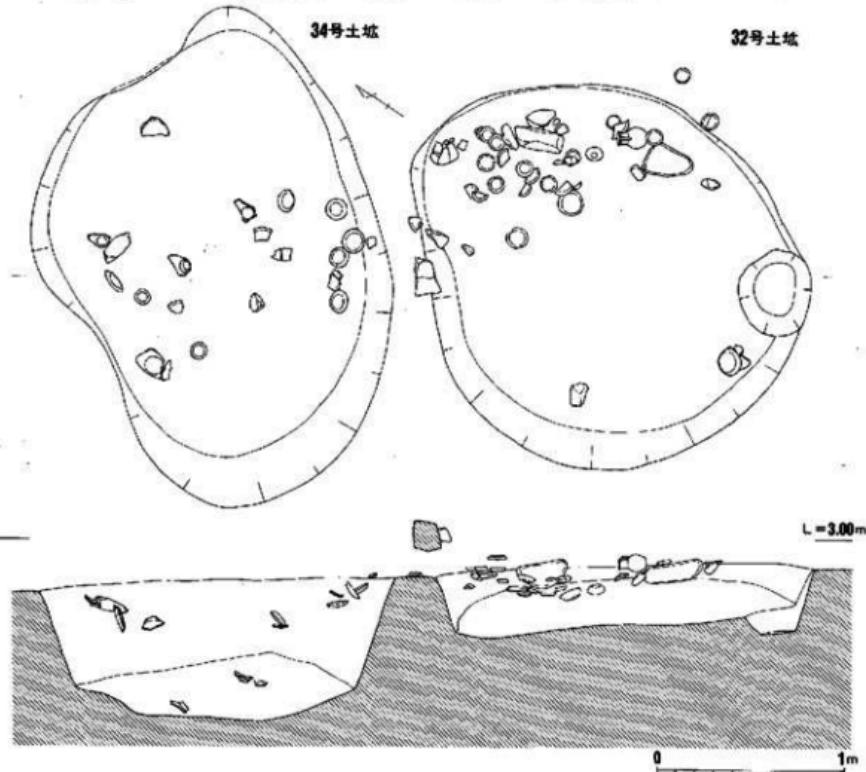


Fig. 40 32・34号土塙実測図

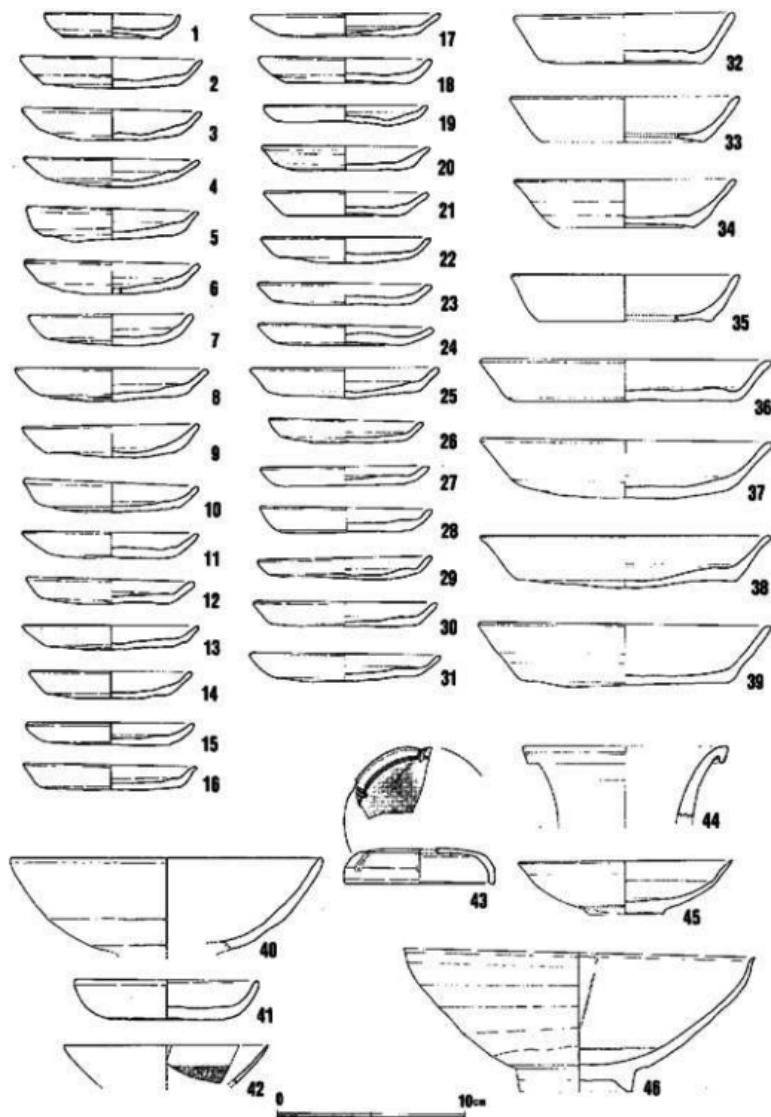


Fig. 41 32号土坑出土物 (1)

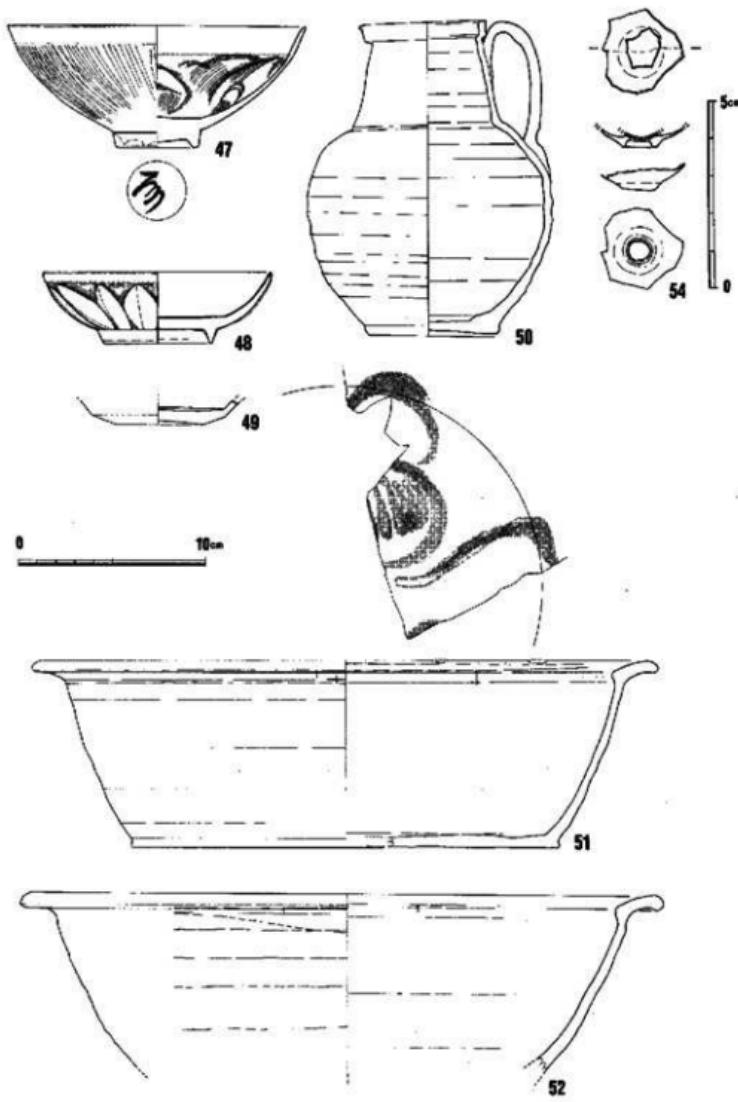


Fig. 42 32号土塁出土遺物(2)

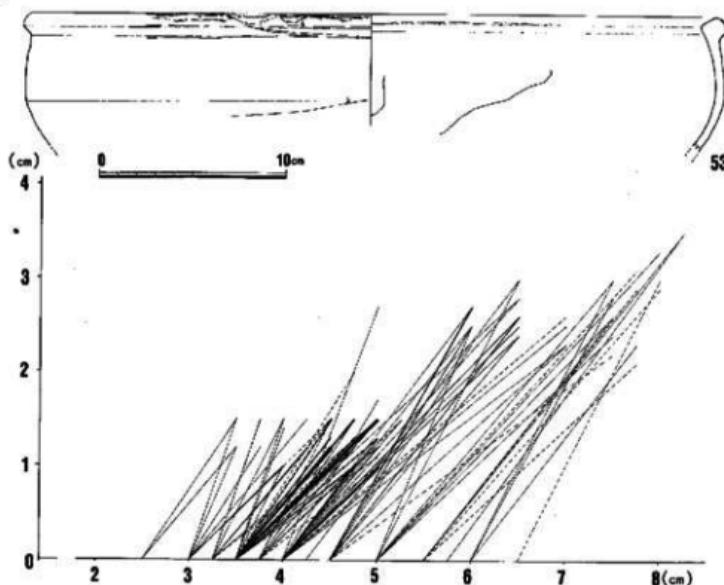


Fig. 43 32号土塙出土遺物 (3)

き20cmと浅く、自然の落ち込みであろう。遺物は出土していない。

34号土塙 (Fig. 40・44, PL. 14・15) A-1-I区で検出された。2.7×1.9mの不整長円形を呈し、深さ0.75mを計る。32号土塙と同様に、炭化物と砂層とが互層をなす。性格は明確でない。多くの遺物が出土しているが、それらの数量は付表に示すとおりである。図示した遺物は、1～8が土師小皿、9～15が土師杯である。これらは計測グラフに示すとおり、糸切り底が大半を占めるが、一部ヘラ切り底も見られる。16～18は白磁碗でいずれもⅡ類に属し、18の内面には櫛描文がある。19は白磁碗Ⅲ類、20は同Ⅱ類で、21・22はⅣ-3類である。23は白磁平底皿Ⅲ類である。24はB群に属する陶器で底部を削って三角の高台を作り出している。四耳壺であろうと思われる。遺物には混在が認められるが土師皿から見ると、この造構の遺物は32号土塙より後出するものである。

35号土塙 (Fig. 45) A-1-I区で検出された。1.15×0.65mの長方形に近い形状をなす。床面は平坦であるが、中央部に小ピットがある。遺物は床面から浮いた状態で出土し、必ずしも共伴遺物とは言えない。青磁皿、鉄製刀子、滑石製石鍋破片各1点が出土している。性格は

明確にしがたいが、形状からすると上塙墓の可能性もある。

36号土塚 (Fig.45) A-1-1区で検出された。1.2×0.9mの楕円形を呈する。深さは35cm程度で深皿状の断面形をなしている。遺物では土師皿類の小破片が数点出土しているが、それ以外には認められない。遺構の性格も不明である。

37号土塚 A-1-1区で検出された。長軸0.8m、最大幅0.4mの双円形をなす。深さ24cmと浅い。柱穴かもしれない。瓦片2点、鉄釘2点が出土している。

38号土塚 A-1-1区最南限にあたり、当初土塚であると思われたが、分割調査のための誤認で、のちに1号溝または28号土塚の末端にあたるものと確認された。ここでは欠番とし、遺物は1号溝に入れた。

39号土塚 A-1-III区で検出された。北側の一端を壁によって切られる。長軸現在長1.6m、幅1.0mで、長円形をなすものと思われる。灰褐色の覆土であるが、遺物は非常に少なく土師皿類小破片が数点出土したのみである。深さ0.34cmを計る。遺構の性格は明確にしがたいが、この長軸は、ほぼ真北を向く。

40号土塚 A-2-III区で検出された17号土塚（井戸）と同一であり、ここでは欠番にしておく。

41号土塚 (Fig.45・46) A-1-II区で検出された。3.5×2.6mの楕円形を呈し、深さ1.2mを計る。断面形はすりばち状をなし、地山黄白色砂層に掘り込まれている。井戸の掘り方であると考えられるが、井戸枠等は検出されなかった。掘り方の東端部に径50cmのビットが掘り込まれている。覆土は少し汚れた黄白色砂である。遺物の出土量は少ない。図示した遺物はVI類の白磁碗1点(1)のみであるが、この他土師杯3点、土師小皿3点があり、それらの小破片14点も出土している。計測表にはこのうち測定値の確実なものを示している。土師杯の口径が17cmと大きいのが注目される。遺物が少なく時期は明確にしえないが、31号土塚より以前に営まれたもので13世紀代の井戸であろう。

42号土塚 (Fig.46) B-III-b区で検出された。上部で検出された遺構である。長軸の端を土留壁によって切られるが、3.6×2.9mの規模をもつほぼ楕円形をなす土塚である。覆土は黒褐色土である。深さ30cm程度である。遺物は小破片ながら比較的多く、その数量は付表に示すとおりである。しかしその半分は混入したものと思われ、所属時期の違いが大きく、遺物も微細なものが多い。図示した遺物について簡単に説明しよう。1は青白磁小皿の頸部から口縁部にかけての破片で、口縁は外方へ水平に開き、頸部と体部の外面の境には段がつく。内面頸部下半は胎殻で以外は青白釉が施される。2は同安窯系青磁皿の底部破片であるが、見込みに環状の細い浮文が認められる。3は龍泉青磁碗で、外面にヘラ描き蓮弁文を施し、その上に櫛状施文具によって縫を刻むI-1類に属す。また内面にもヘラの片切り彫りと櫛描きによる割

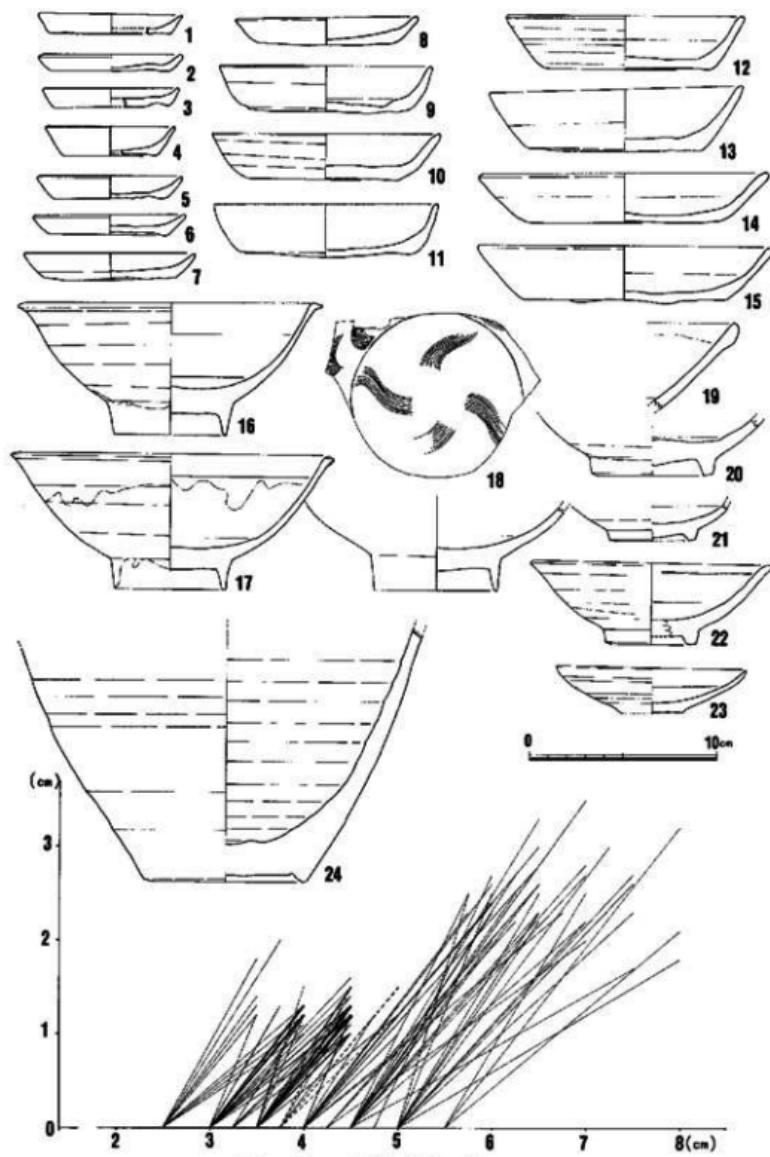


Fig. 44 34号土坑出土遺物

花文を施す。このほか特徴的な遺物として15世紀代に見られる高台をアーチ状に挟った白磁皿がある。高台内も含めて全面施釉される。見込みには重ね焼きによる高台の付着痕が残される。廃棄物の処理用土壙であろう。その営まれた年代は15世紀以降かと思われるが確実ではない。

43号土壙 (Fig.46) B-I-III-c区で検出された。北側の一端を土留壁に切られているが、平面形はほぼ橢円形をなすと思われ、長軸現在長2.7m、幅2.4mを計る。上層確認造構である。遺物はやや多く数量は付表に掲げてある。それぞれ小破片が多く、おそらく廃棄物処理用の土壙と思われる。遺物は混在しており、明代の染付や近世陶磁各1点などもある。鉄釘12点、雲母片1点も出土している。土師皿類はいずれも糸切り底である。図示した遺物はいずれも白磁

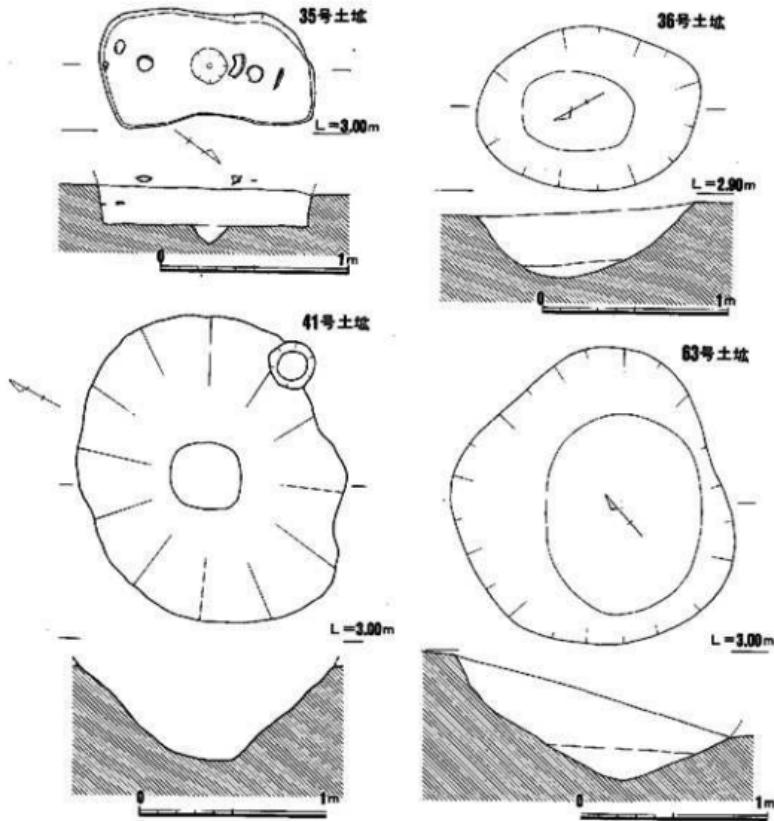


Fig. 45 35・36・41・63号土壙実測図

II. 博多—地下鉄路線内の調査(1)…

60

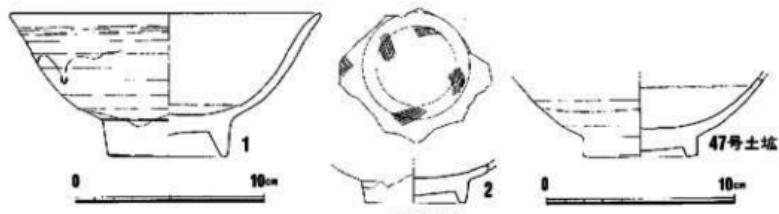
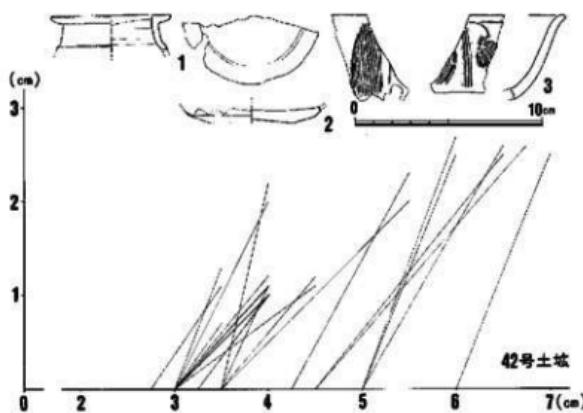
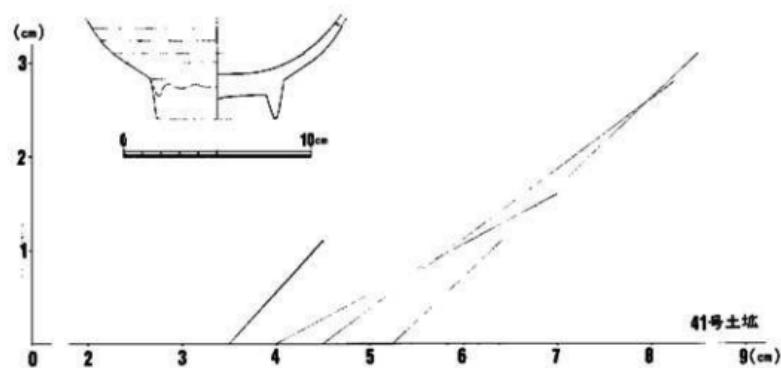


Fig. 46 41・42・43・47号土坑出土遺物

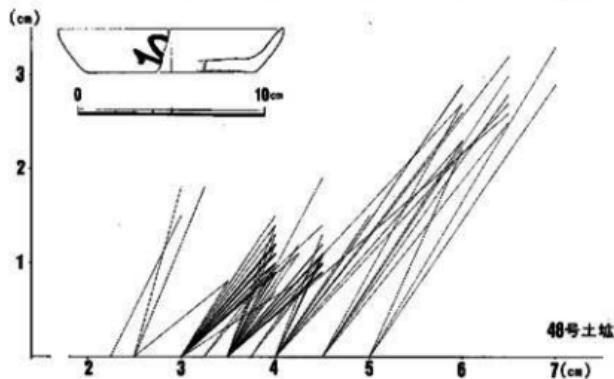
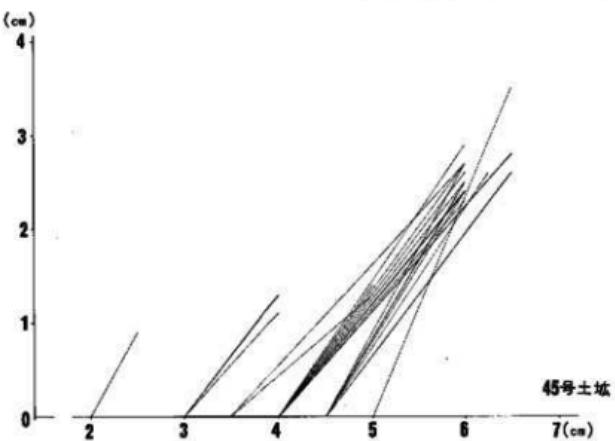
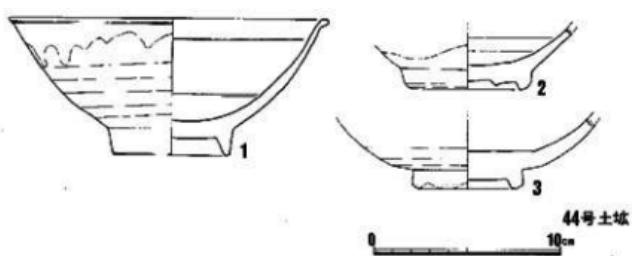


Fig. 47 44・48号土坑出土遺物と45号出土土師皿類計測グラフ

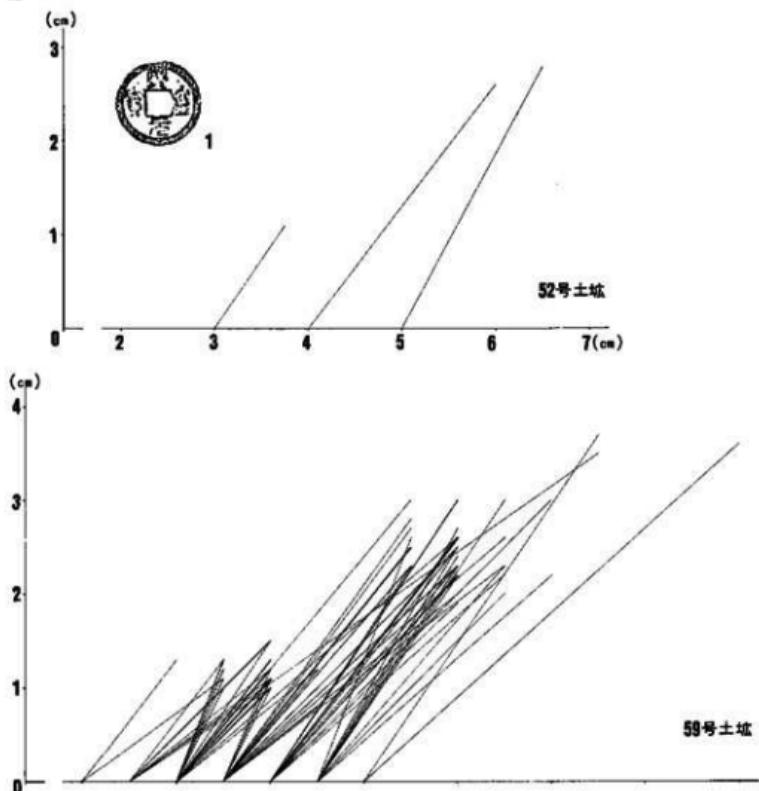


Fig. 48 52号土塙出土遺物と59号土塙出土師皿類計測グラフ

碗で、1がV類に属するもので、2が匁類に属し、見込みの種を輪状に描きとるものであるが内面に櫛描文が施されている。

44号土塙 (Fig. 47) B-III-d区で検出されている。0.6×0.55mのほぼ円形をなす小土塙で深さ0.45mを計る。炭化物を多量に含む黒色土が覆土であり、この中に鉄釘11点や糸切り底の完形上師皿類が出土しており、火葬墓の可能性が考えられる。遺物数量は付表に示した。遺物は、1が白磁碗匁類、2が同匁類で見込みを輪状に削るもの、3が龍泉窯青磁碗である。

45号土塙 (Fig. 47) B-III-d区で検出された。北西端半分を土留壁によって切られるが全体は径2m程の円形をなすものと思われる。深さ10cmで浅皿状の断面形をなす。出土遺物の

数量は付表に示すとおりである。土師皿類はいずれも糸切り底で、杯が多く、底径8~9cm、口径12cm、器高2~2.5cmに集中する。図示はしていないが青白磁口ハゲ皿の完形があった。

46号土塙 B-I-*a*区で検出されている。B調査区の北隅にあたり、半分を土留壁によって切られている。全体形不明であるが、径1.0m程度の円形土塙であろう。深さ0.7mと深い。覆土中には焼土塊が含まれている。出土遺物は白磁碗6点、青磁龍泉碗2点、同安系碗、皿各1点、青白磁碗2点、陶器5点、天目碗1点のほか、瓦器碗、土師質土器各1点、土師皿類小破片199点があり、鉄釘14点もあった。

47号土塙 B-I-*c*区で検出された。径1.4mの円形をなすと思われるが、土留壁によって半分を切られる。上層で確認された土塙である。出土遺物は白磁碗10点、皿1点、同安系青磁碗1点、陶器13点（縁釉1点を含む）のほか、国産品には瓦器碗類1点、土師質土器19点、瓦質上器1点、須恵器2点、古窯系陶器2点、瓦19点などがある。土師皿類には糸切り小皿3点があったが、その小破片は25点を数える。またライトブルーの発色を見せるガラス塊1点もあった。廃棄物処理の土塙であろう。

48号土塙 (Fig.47) B-I-*f*区の上層で検出された。5号(2分)溝を切る。不整三角形で浅い。出土遺物は土師皿類を中心としているが、それは計測グラフに示すとおりである。中には外面部に墨書のあるものもあった。いずれも糸切り底である。銅錢1枚もあったが、銹がひどく種類は不明。廃棄物処理の土塙か。

49号土塙 B-I-*g*区の上層で検出された遺構である。2.1×1.4mの梢円形をなし、深さ40cmと浅い。出土遺物は少なく、白磁碗2点、同袋物1点、龍泉碗1点、陶器16点のほか、瓦10点、古窯系陶器2点が出上している。廃棄物処理の土塙であろうが、土師皿類が小破片のため時期は明確にしえない。

50号土塙 B-I-*a*区の上層で検出された。長辺1.5m程の不整三角形をなすが、浅く、黒褐色土の自然の落ち込みかもしれない。白磁碗6点があるが、うち2点は口ハゲで、同じく皿は口ハゲが2点ある。龍泉青磁碗はI類5点、II類1点があり、同安系碗3点、その他の碗1点がある。陶器類15点である。国産遺物には土師質土器2点、瓦器碗類2点、瓦質上器1点、瓦4点、鉄釘2点がある。土師皿類は糸切り小皿が1点あるが、小破片は132点を数える。

51号土塙 B-I-*a*区の上層で検出された。径2.3mの円形をなすものと思われるが、土留壁によって切られている。53号土塙を切る。深さ22cmと浅い。黒褐色土が覆土であるが、その中に多数の円礫がはいっている。出土遺物は少なく、白磁碗1点、龍泉青磁碗・陶器4点などが見られる程度である。

52号土塙 (Fig.48) B-I-*e*区の上層で検出された。土留壁によって半分程切られているが、径約4mのほぼ正円形をなすものと思われる。深さ0.7mを計る。出土遺物は多い。白

磁には、碗Ⅳ類4点、Ⅵ類9点、Ⅶ類4点、その他6点があり、皿には口ハゲ2点がある。袋物2点も見られた。青磁には龍泉碗Ⅰ類が15点、Ⅱ類7点、その他1点、小碗3点があり、同安系碗4点、皿1点がある。青白磁には碗3点、皿2点のほか、合子1点、香炉2点がある。陶器にはA群8点、B群11点、C群11点、その他6点がある。国産品には古窯系陶器4点、須恵器4点、土師質上器(含土鍋2点)4点、瓦器碗類1点、瓦質土器2点、瓦6点などがあり滑石製右鍋1点、鉄釘3点なども見られた。この遺構の土師皿類は、いずれも縫切りで、細片を含めて937点にのぼるが、口径等計測可能なものはわずかに3点にすぎない。この他、銅錢1枚(熙寧元宝)も出土している。廃棄物処理用の土塙であろう。

53号土塙 B-I-Ⅲ-b区上層で検出された。51号土塙に切られている。不整形の平面形をなし、深さ20cmと浅い。自然の凹みを廃棄物の処理に用いたものであろうか。遺物はやや多く、白磁碗8点、その他2点、青磁龍泉碗9点、同皿、その他各1点、陶器13点などのほか、国産遺物には土師質土器11点(含土鍋4点)、瓦1点、瓦質土器1点、鉄釘16点があり、土師皿類には小皿4点のほかそれらの小破片93点がある。

54号土塙 B-II-a区上層で検出された。1.2×1.0mの梅円形をなす土塙で深さ30cmを計る。内には近世瓦片が多く廃棄されていた。砥石1点もあったが、これも近世のものである。

55号土塙 B-II-d区上層検出の遺構である。6号溝が埋まつた段階に掘り込まれたもので近世の廃棄物処理用の土塙である。比較的多くの遺物が検出されているが、伊万里、唐津系の近世陶磁が多い。2.0×1.6mの長方形で20cmと浅い。

56号土塙 B-II-d区上層で検出された。一部e区にかかる。2.5×0.9mの長方形をなし、深さ0.15~0.2mと浅い。55号土塙に近接し、同様の近世廃棄物処理土塙であろう。遺物は多く、数量は付表に記すとおりである。

57号土塙 B-II-d区で検出されたものであるが、近代の擾乱である。

58号土塙 B-II-c区上層で検出された。1.5×1.4mの方形に近く、深さ25cmを計る。土塙内からは寛永通宝、皇宋通宝各1点のほか、銘不明の銅錢3点が出土している。江戸時代の墓の可能性もあるが、東長寺古絵図(Fig.11)には墓地らしい描寫ではなく廃棄物処理用かもしけれない。

59号土塙 (Fig.48) B-II-d区で検出された。一辺1.2mの方形に近い土塙であるが、浅く、一端の掘り方線は明確でない。土器溜り的な様相を示しており、近世土師皿類が多い。出土遺物の数量は付表に示す。計測グラフに示すとおり、土師皿類は全て縫切り底で、底径が小さく、口径が大きく、器高が高い形態のものが多い。近世土師皿類の特徴であろう。

60号土塙 B-III-d区で検出された。44号土塙の下層で検出されたものである。遺物は少なく土師皿類の縫切り小皿3点、杯2点が出土した程度である。

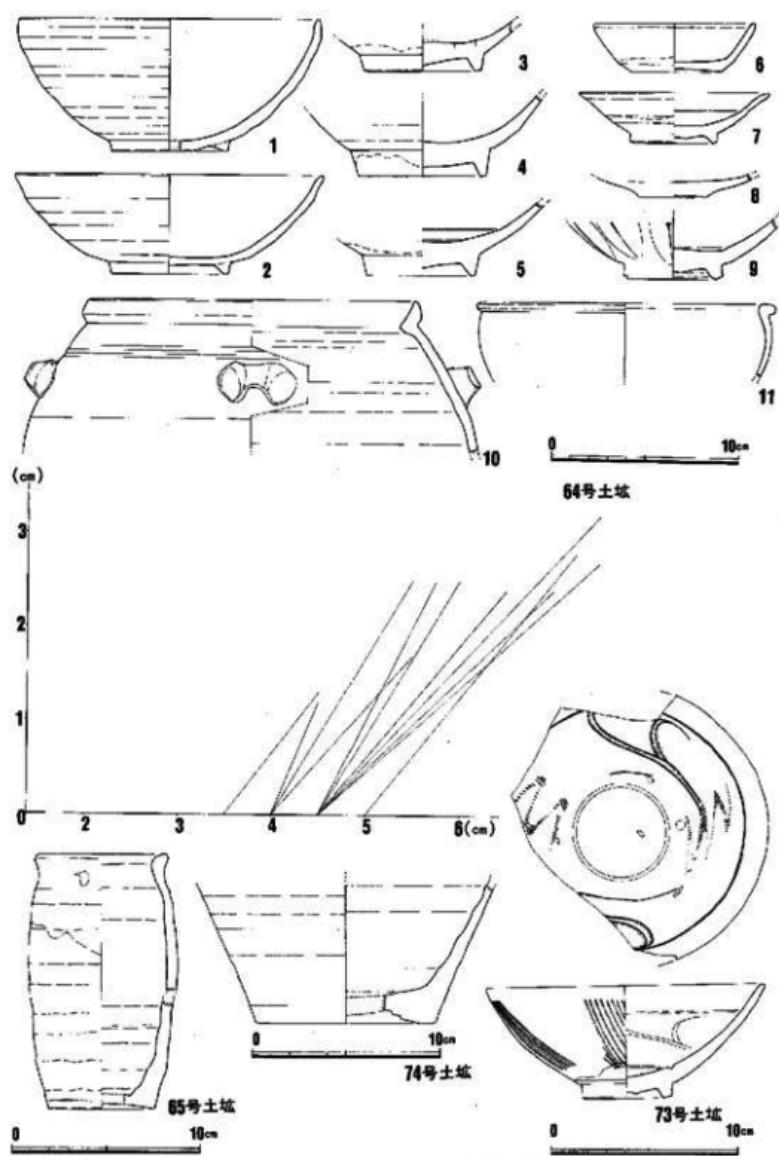


Fig. 49 64・65・73・74号土坑出土遺物

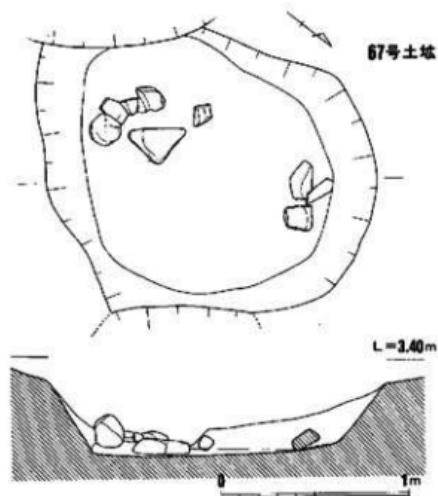
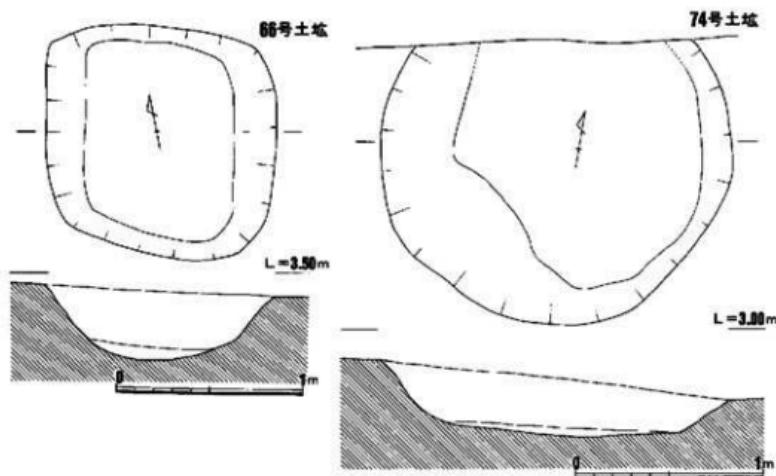


Fig. 50 66・67・74号土壠実測図

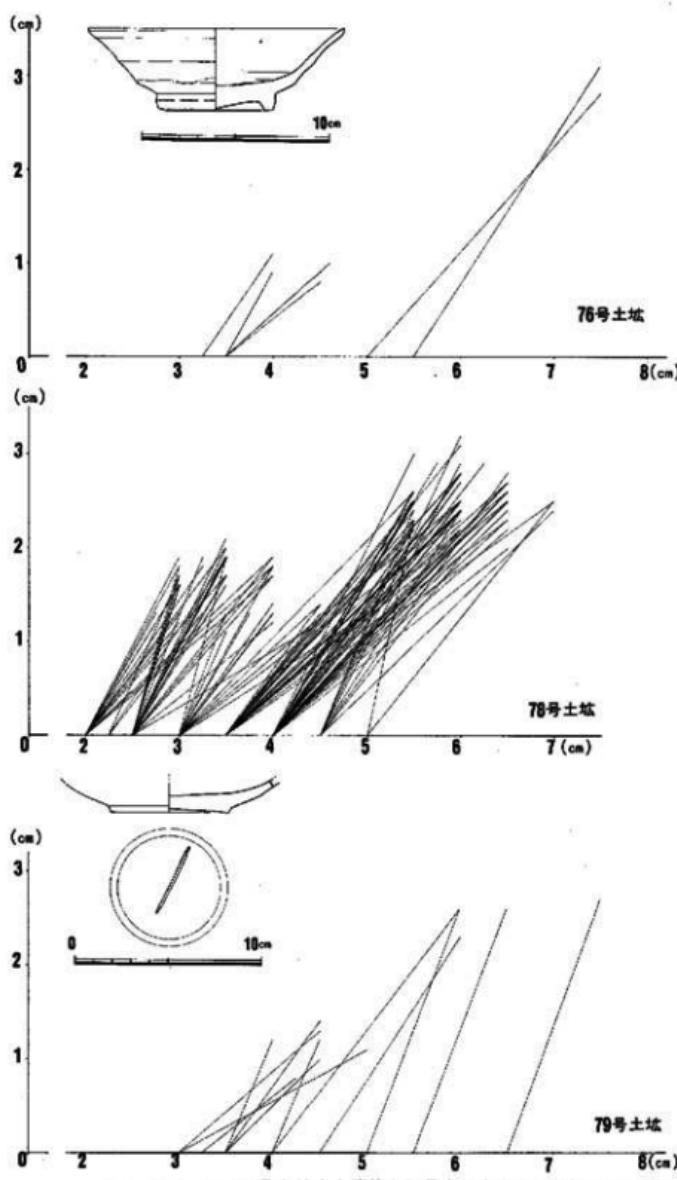


Fig. 51 76・79号土坑出土遺物と78号土坑出土土師皿類計測グラフ

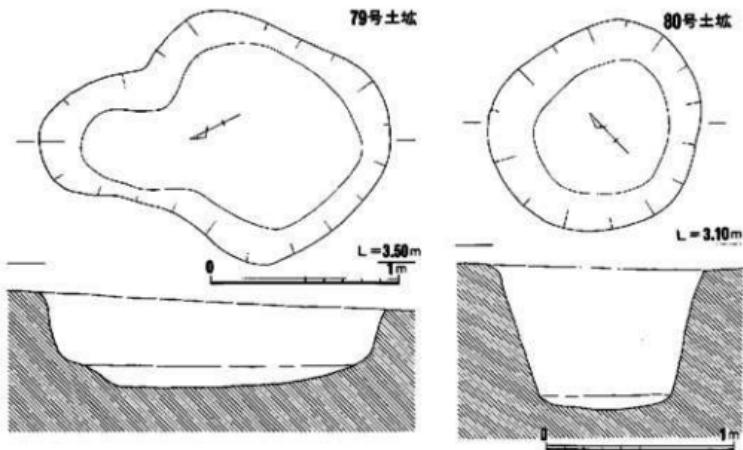
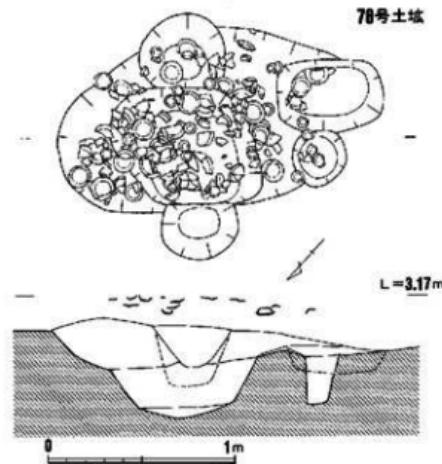
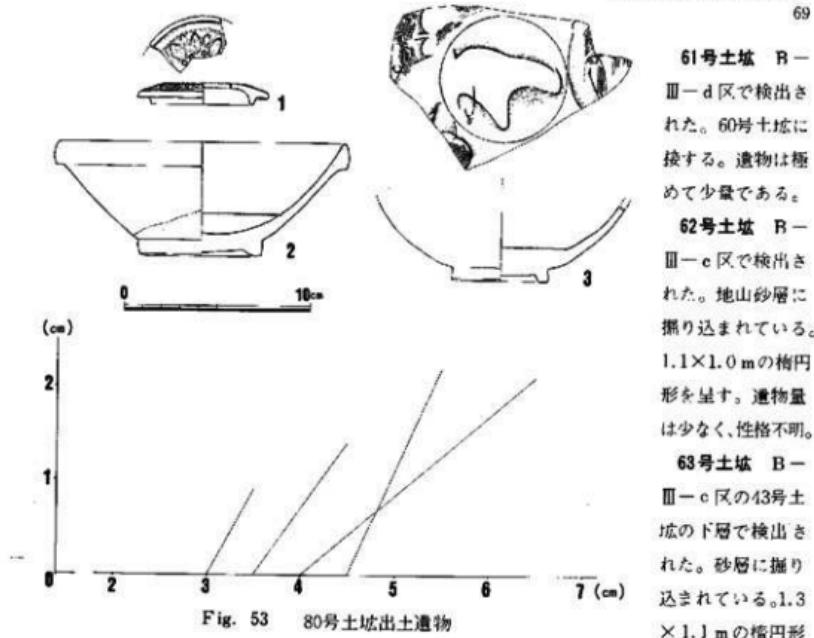


Fig. 52 78・79・80号土塁実測図



を呈するが、遺物量は少なく性格は不明。

64号土塙 (Fig.49) B-I-III-b区の42号土塙直下で検出された。遺物の出土量は付表に示す通りであるが、図示した遺物は1・2が瓦器碗で、3～5が白磁碗、6～8が白磁皿、9が外面に錦運弁をもつ龍泉青磁碗、10、11が陶器である。計測グラフに示すように土師皿類は系切り底で杯が目立つ。遺物の時期差が大きく、混在したものであろう。

65号土塙 (Fig.49) B-I-III-b区で検出され、地山砂層に掘り込まれた下層の遺構である。0.7×0.6mの長方形を呈す。出土遺物は白磁では袋物1点のほか小破片3点があり、青磁では、龍泉碗I類1点、同安系碗1点がある。陶器ではA群5点、B群6点、C群12点があり、図示したものはB群に属する短頸壺で、体部上半と下半の破片であり、同一個体と思われる。このほか瓦4点、須恵器2点、古窯系陶器20点などがあり、系切り底の杯2点もあった。

66号土塙 (Fig.50) B-I-III-b区の下層検出遺構である。一辺0.9mの隅丸正方形をなし、深さ35cmを計る。断面形は深皿状をなす。遺物の出土量は少なく、性格、所属時期は不明である。

67号土塙 (Fig.50) B-I-III-a区の下層検出遺構で、地山砂層に掘り込んでいる。一辺1.5mの不整形をなし、深さ40cmを計る。床面に入頭大の礫9個を置く。遺物は少なく、性格、

61号土塙 B-I-III-d区で検出された。60号土塙に接する。遺物は極めて少量である。

62号土塙 B-I-III-c区で検出された。地山砂層に掘り込まれている。1.1×1.0mの楕円形を呈す。遺物量は少なく、性格不明。

63号土塙 B-I-III-c区の43号土塙の下層で検出された。砂層に掘り込まれている。1.3×1.1mの楕円形

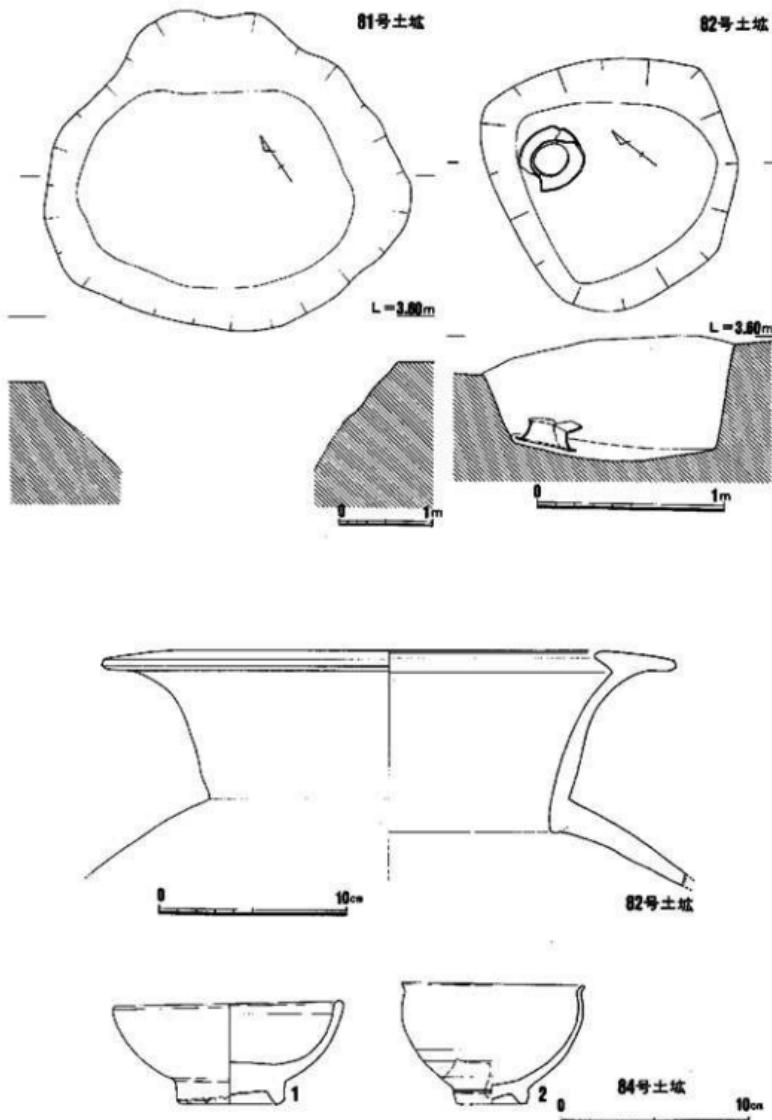


Fig. 54 81・82号土坑実測図と82・84号土坑出土遺物

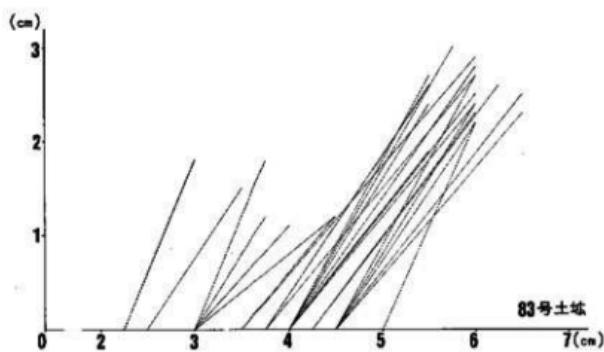
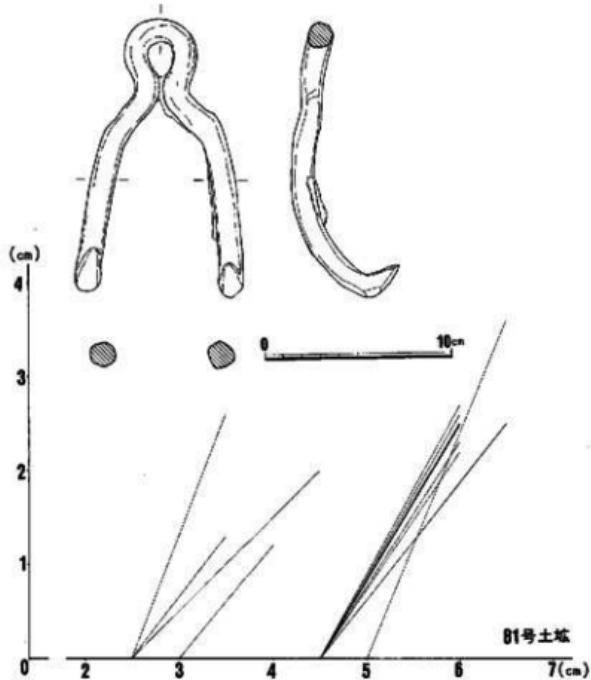


Fig. 55 81号土塙出土遺物と83号土塙出土土師皿類計測表

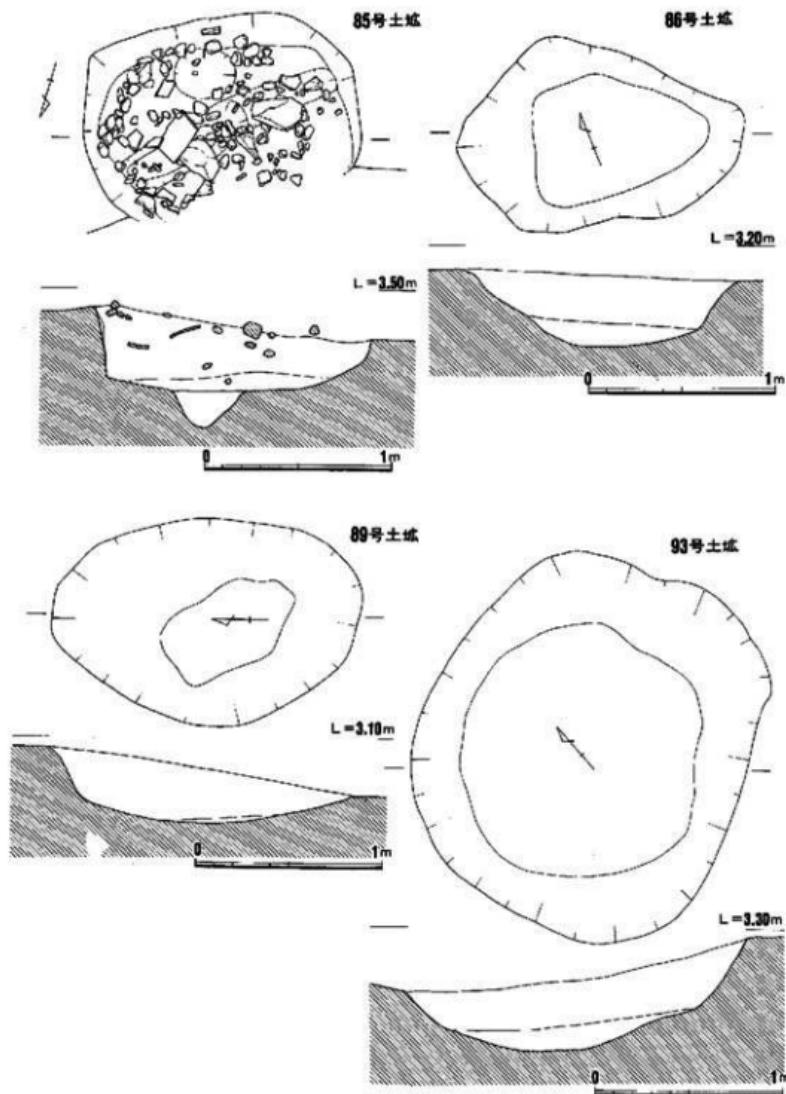


Fig. 56 85・86・89・93号土塚実測図

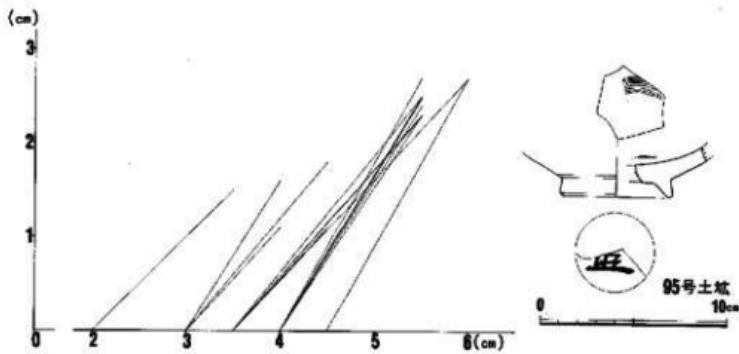
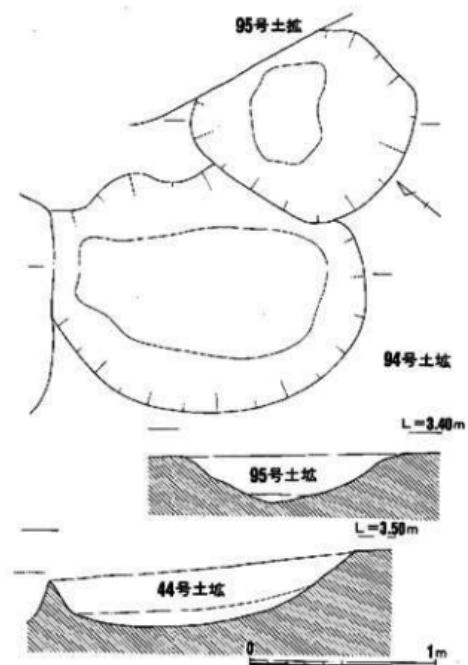


Fig. 57 94・95号土坑実測図と95号土坑出土物

所屬時期等明確でない。

68号土塙 B-III-d 区下層検出遺構で地山砂層に掘り込む。1.3×0.9mの不整形をなす。出土遺物は瓦器碗1点、瓦3点、土師質土器10点、須恵器3点のほか陶器1点が出土している。土師皿類には糸切り杯2点、同小皿4点とヘラ切り杯1点があり、それらの小破片47点がある。

69号土塙 B-III-e 区の下層検出遺構である。1.9×0.9mの長円形をなす。上部に土師皿類上器溜があった。その他に白磁碗6点、陶器2点等がある。上師皿は細片で年代不明である。

70号土塙 B-III-a 区で検出された。1.1×0.9mの横円形をなし、深さ0.3mの浅い皿状の断面をなす。遺物には鉄釘1点があるにすぎない。

71号土塙 B-III-a 区で検出されている。大半は土留壁に切られている。地山白色砂に汚れた砂がはいり込んでいる。遺物は出土していない。性格、年代ともに不明である。

72号土塙 B-III-e 区で検出され、71号土塙同様の汚れた砂が地山砂層中に入る。遺物は出土していない。

73号土塙 (Fig.49) B-III-e 区で検出された。上留壁によって切られる。径1.5mのはば正円をなすと思われ、深さ40cmを計る。同安窯系青磁碗II類が1点出土している。

74号土塙 (Fig.49・50) B-III-g 区で検出された。3号斐棺墓を切り、2号(5号)溝によって切られる。遺物は少なく、陶器B群に属する壺の底部破片が出土しているのみである。

75号土塙 B-II-b 区で検出されている。2号(5号)溝によって切られる。地山砂層に汚れた砂がはいっており、出土遺物はなかった。

76号土塙 (Fig.51, PL.16) B-II-a 区の2号(5号)溝最下面で検出されており、径約1mのはば正円形をなしている。土地内に最大径0.5mの大礫が置かれていた。湧水がひどく、下位を掘ることはできなかった。井戸跡等は検出されていないが、上位から掘り込まれた井戸の最下面にあたるものと思われる。出土遺物は比較的多く、その数量は付表に示すとおりである。土師皿類はすべて糸切り底である。図示した遺物は白磁高台付皿で見込の釉を輪状に搔きとるII類である。

77号土塙 (PL. 16-(1)・17) B-II-a 区で検出され、76号土塙に接続する。2.0×1.0mの長方形をなす。湧水がひどく床面は明確でない。出土遺物は白磁碗VI類6点、青磁では龍泉碗I類1点、同安窯系II類1点、陶器にはA群1点、C群1点があった。土師杯で2点、小皿1点もあり、糸切り底である。

78号土塙 (Fig.51・52, PL.17-(2)) B-I-e 区で検出された。数個の遺構の切り合いで、上面に多量の土師皿を廃棄する。出土遺物は付表に示すとおりで、土師皿類はすべて糸切り底で、小皿は器高の高いものが多い。

79号土塙 (Fig.51・52) B-I-e 区の検出でB区西隅にあたる。1.86×1.36mの洋梨形を呈す。出土遺物は白磁碗6点、陶器C群鉢1点、青白磁皿1点で、土師皿類はすべて糸切り、大

型の杯がある。図示したものは青白磁皿で底部に浮文がある。

80号土塙 (Fig.52・53) B-I-e区で検出された径1mの正方形をなす土塙で、井戸掘方であろう。上部覆土から熙寧元宝1点が出土している。出土遺物は白磁碗27点皿1点、青磁龍泉碗2点、皿1点、同安系碗8点、皿2点、その他の青磁4点がある。青白磁皿3点、合子蓋1点もある。陶器はA群6点、B群7点、C群13点、その他2点である。国産遺物は須恵器4点、瓦器碗2点、瓦質土器2点、瓦24点があり、土師皿類は糸切りで杯2点、小皿5点、小破片67点がある。図示した遺物は1が青白磁合子蓋、2が白磁碗IV類、3が龍泉碗I-4類である。

81号土塙 (Fig.54・55) B-I-b区で検出された。3.5×3.1mの円形をなす。近世井戸である。出土遺物には図示した鉤手状の鉄製品があり、伊万里など近世の陶磁も20点と多い。

82号土塙 (Fig.54, PL.19-(1)) B-I-g区で検出された。1.25×1.35mの不整円形の土塙である。床面に弥生中期後半頃の鋤先形口縁をなす壺形土器口頭部が倒立してあった。本来は甕棺に用いられていたものであるが、覆土中に白磁、土師質土器、瓦などが混っており、廐棄物処理の際同時に埋められたものであり、甕棺墓の頂では扱わなかった。

83号土塙 (Fig.55) B-I-e区で検出された2.1×1.2mの不整円形土塙である。遺物はやや多く白磁碗3点、皿1点、青磁龍泉碗1点、同安系碗1点、天目1点に、瓦器3点などがあり、計測グラフに示すように糸切り土師杯、小皿が19点、8点あり、それらの小破片は253点に及ぶ。

84号土塙 (Fig.54, PL.18) B-I-a区で検出された近世初頭の瓦(磚)積み井戸である。造構は土留壁で半蔵されている。井戸枠内から図示した青磁碗(1)と白磁碗(2)をはじめ土師小皿が出土し、掘り方からはB群陶器破片が出土している。

85号土塙 (Fig.56) B-I-g区で検出された。1.5×1.1mの長方形をなす。覆土中には近世瓦、礫が多数投棄されている。近世の廐棄物処理土塙である。

86号土塙 (Fig.56, PL.19) B-I-g区で検出された。1.5×1.1mの卵形をなす。深さ0.4mの深皿状の断面形をなし、遺物は少ない。性格不明である。

87号土塙 B-I-f区で検出されている。1.5×1.05mの長方形に近く、深さ0.4mを計る。遺物はそれ程多くなく、白磁碗3点、皿1点、龍泉碗、同安系碗各1点、陶器B群鉢1点のほか、若干の土師皿類が見られる。

88号土塙 B-I-f区で検出された2.1×1.2m程度の不整長円形をなす土塙である。地山白砂層中に汚れた砂がはいり込む。深さ0.3mを計り浅い。出土遺物はほとんどない。

89号土塙 (Fig.56) B-I-b区で検出された造構である。1.8×0.9mの長円形をなす。地山白色砂に汚れた砂がはいり込んでおり、浅い皿状の凹みをなす。遺物はほとんど見られない。

90号土塙 B-I-C区で検出された。1.1×0.65mのはば長円形をなすが、やはり汚れた砂がしみ状に地山白色砂にあるもので明確な造構とは認め難い。遺物は殆んどみられない。

91号土塙 B-I-c区の検出遺構である。2.5×1.9mの不規則形で、深さ1mを計る。井戸の掘り方であると思われるが、井戸枠等は検出されていない。須恵器杯、土師質壺、白磁碗各1点が出土している。

92号土塙 B-I-g区で検出されたもので、幅2.3m、長さ約5mの溝状遺構で、深さ35cmと浅い。地山砂層にうすく汚れた砂がはいり込んでおり、性格も明確ではない。遺物も少ない。

93号土塙 (Fig. 56) B-I-g区で検出され、1.95×1.25mの隅丸長方形をなす。深さ45cm程で皿状をなす。遺物は少なく、須恵器杯破片1点が出土しているにすぎない。

94号土塙 (Fig. 57) B-I-c区で検出され、95号土塙と接するが切りあいは明確でない。1.68×1.25mの長円形をなし、深さ35cmの皿状をなす。遺物はほとんど認められない。

95号土塙 (Fig. 57) B-I-c区で検出され、径1.1mの不規則形をなす。深さ28cmの浅い皿状をなす。出土遺物はやや多く、その数量は付表に示すとおりである。滑石製石鍋、磁石各1点も出土している。土師皿類はいずれも糸切り底である。図示した遺物は白磁碗Ⅱ類に属するもので見込に備文をもち、底部に墨書きが残されているが、半欠であるため判読できない。

96号土塙 B-I-c区検出の土塙である。一部中世遺物の混入も見られるが、11号甕棺墓であろうと思われる。

建物礎石列 (Fig. 58, PL. 27-1) A-1-I-III区で検出されたもので、主軸方位をN-82°-Wにとり、一部壁中に述べている可能性もあるが、現存する桁行4間(3.8m)で、径20~30cmの平石を用いたそれら礎石間の寸法は1.95mで等間隔である。礎石は一列のみ検出されており、樋または礎状の建物の可能性が高い。この礎石列の方位は1、2号溝の方針と近似し、それらと同時期、すなわち14世紀半以前に営まれたものであろう。

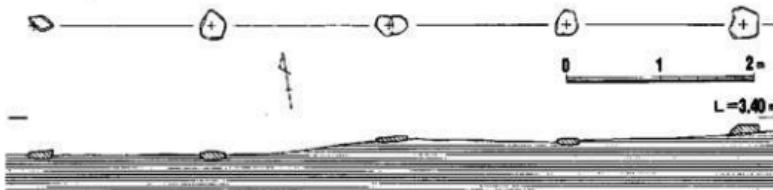


Fig. 58 A-1-I-III区検出の礎石列実測図

ピット群 A-1-I-II区とA-2-I-II区の下層を中心に1群、B-II区上層とI-II区下層を中心に一群がある。A区のピット群は、重複しているものも含めて18穴が数えられる。径40cm程度のものから20cmの小形のものまで様々である。掘立柱建物の柱穴と思われるが、周辺遺構などによって寸断され、組織的に把握はできない。1・2号溝と同様の時期であろう。B区上層ピット群は22穴を数える。組織的把握は困難である。室町~江戸期の建物柱穴であろう。下層ピット群は砂層に掘り込まれており、掘り方は不明確である。溝と同様の時期であろう。

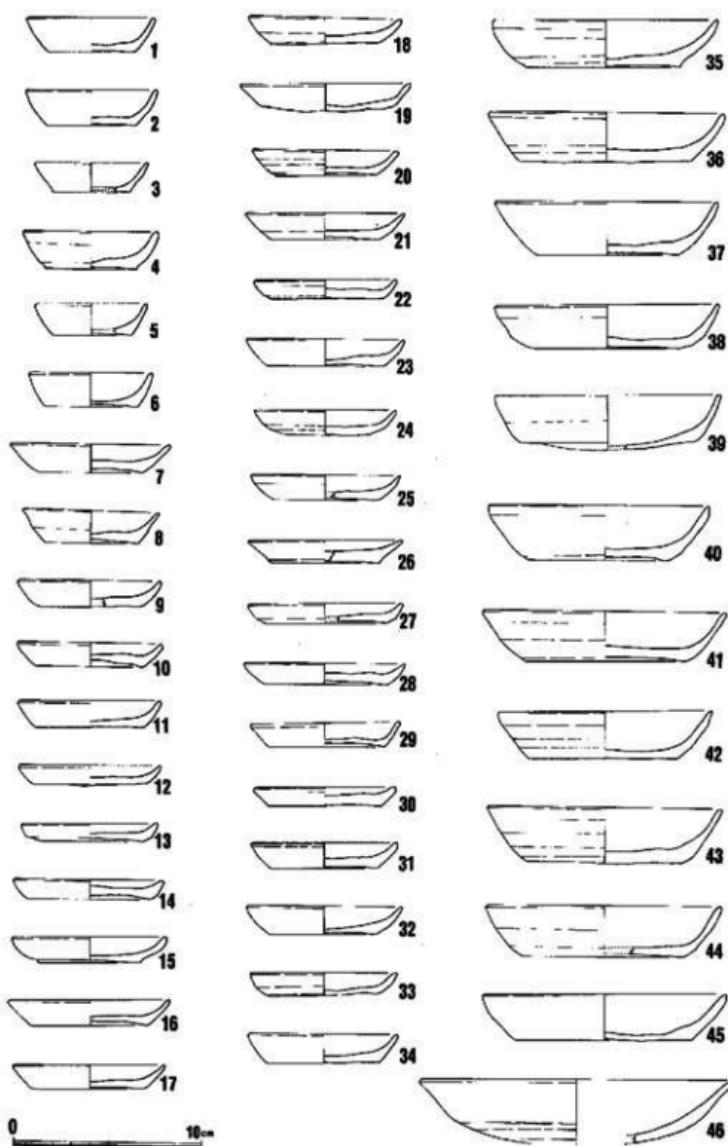


Fig. 59 1号溝出土遺物(1)

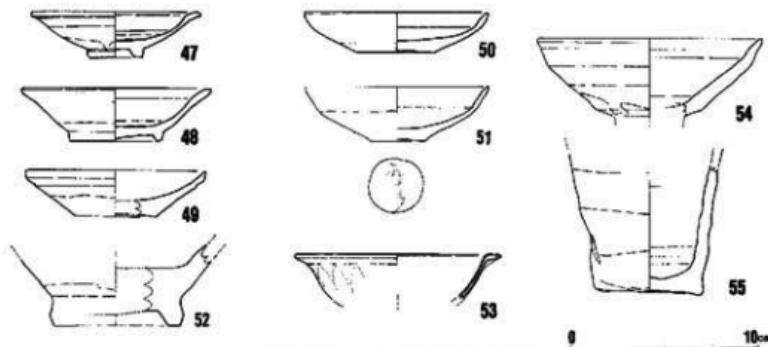


Fig. 60 1号溝出土遺物(2)

1号溝(Fig. 59-60, PL20-(2)) A-2-I・II区で検出されている。幅1.8mで、溝床面と上端との比高は80cmを計り断面形はU字形をなす。一部23号、28号土塁に切られる。主軸方向はN-86°-Wのはば東西を向き、2号溝と平行する。1号溝は14号上塙壁に接するところで収束している。この溝の上面には、この溝が埋没溝としての機能を失う寸までその痕跡をとどめる段階に多量の土師皿類が廃棄されている。これらの土師皿類は完形品が多く、また数枚重ねで置かれたものもあって、単なる投棄ではないことが窺われ、祭祀に伴うものではないかと推察される。出土遺物は多量で、その数量は付表に示すとおりである。図示した遺物は1~6・8が器高3.0~3.4cmの高い土師小皿、7.9~34が器高1.0~1.8cmの低い小皿で、19のみがヘラ切り底である。35~45は土師杯でいずれも糸切り底をなす。糸切り小皿の口径別点数を見ると、7.0cm=65点、7.5cm=25点、8cm=193点、8.5cm=13点、9cm=87点、9.5cm=3点、10cm=22点で、8cmに集中している。ヘラ切り小皿は2点で、いずれも口径9cmである。杯はいずれも糸切り底で、11cm=59点、12cm=138点、12.5cm=15点、13cm=151点、14cm=31点、15cm以上=13点と、12~13cmにピークが見られる。これらは14世紀前半代を中心としたものである。46は土師丸底杯で体部下半が肥厚し、瓦器碗に共通した器形をもつ。47、48は高台付白磁皿、50、51は平底白磁皿で、51の底部には仮名書きの墨書がある。同名の文字は類例は多いがまだ判読されていない。52は白磁で四耳壺の底部破片で高台脇にくびれを作る形式のものである。53は外面に蓮弁文を施し口縁を水平に聞く龍泉青磁皿類の杯である。54は天目碗で口縁直下にくびれをつける。55は陶器B群の臺体部下半である。白磁碗はⅡ類、Ⅲ類が多く口ハゲのものもあり、皿にも口ハゲ平底4点がある。青磁龍泉碗はI-5・6・9類とII-2類、III類が多い点が特徴的である。この造構の溝としての機能を失う時期はほぼ14世紀前半段階求められよう。

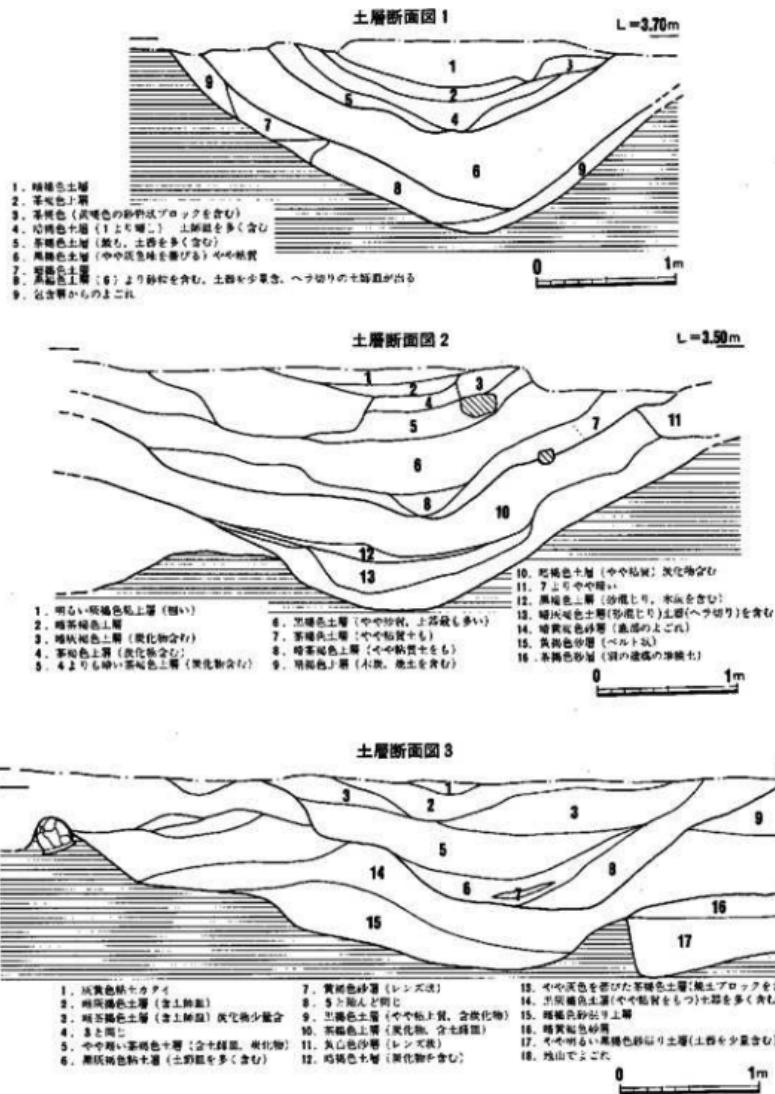


Fig. 61 2号溝(5号溝)上層断面図

Ⅱ. 博多 一地下鉄路線内の調査(1)

80

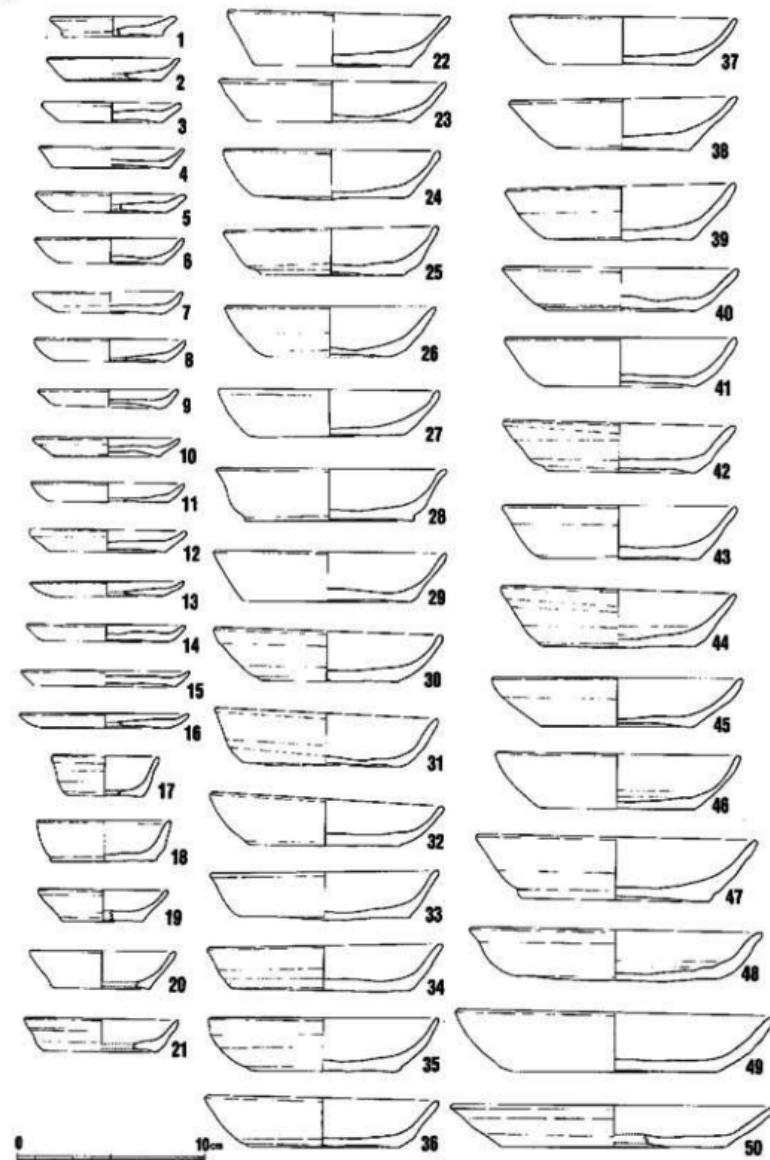


Fig. 62 2号溝 (5号溝) 出土遺物 (1)

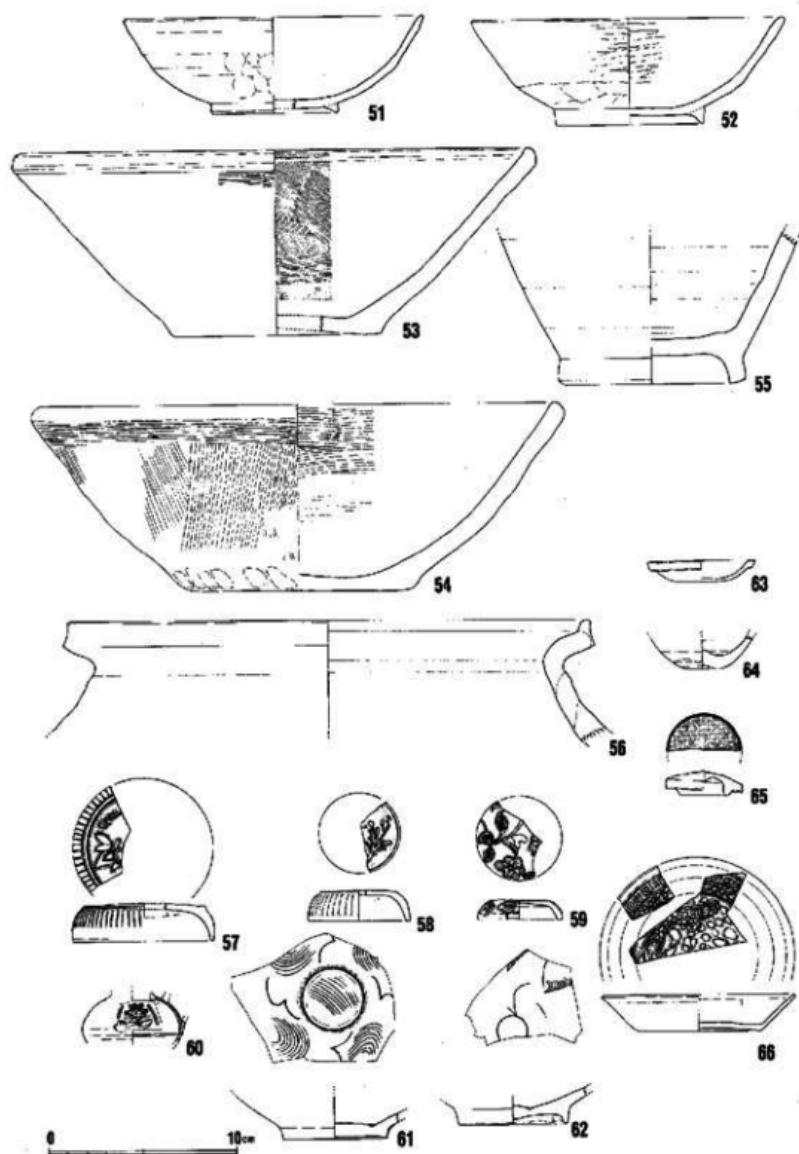


Fig. 63 2号溝（5号溝）出土遺物（2）

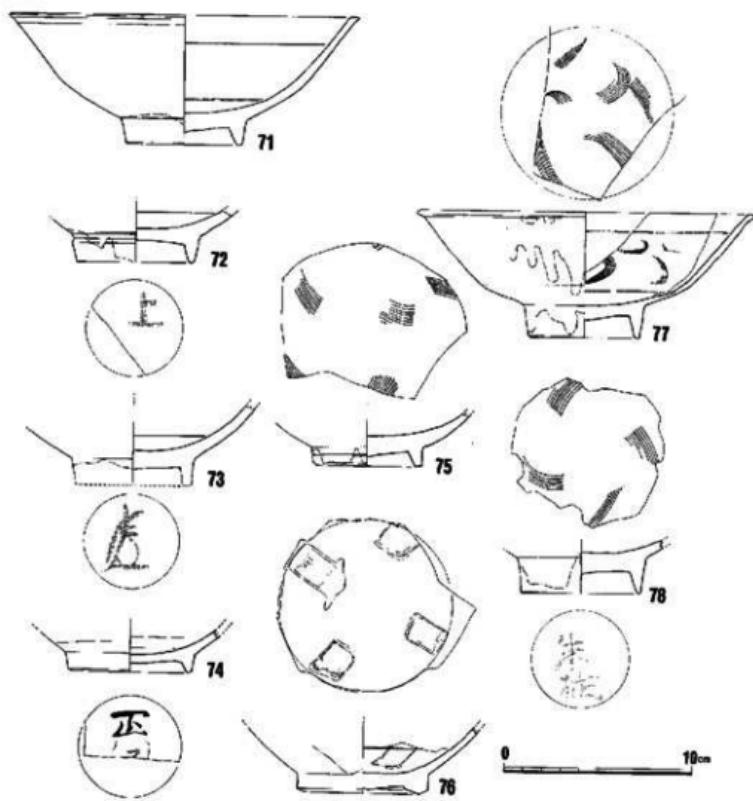
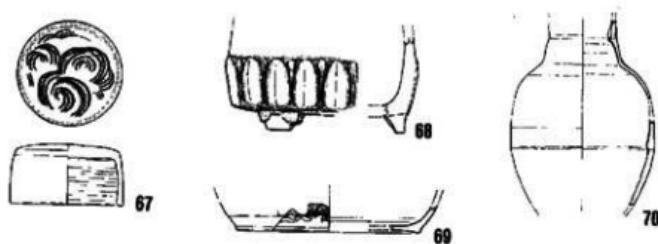


Fig. 64 2号溝(5号溝)出土遺物(3)

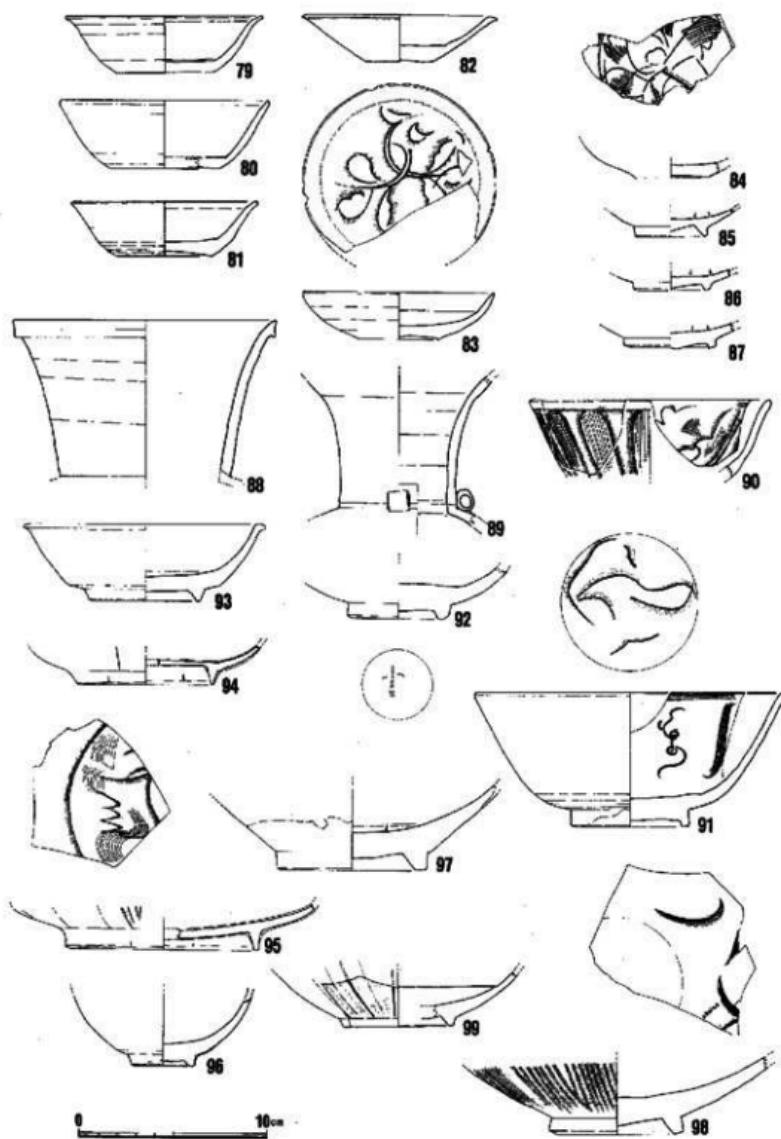


Fig. 65 2号溝（5号溝）出土遺物（4）

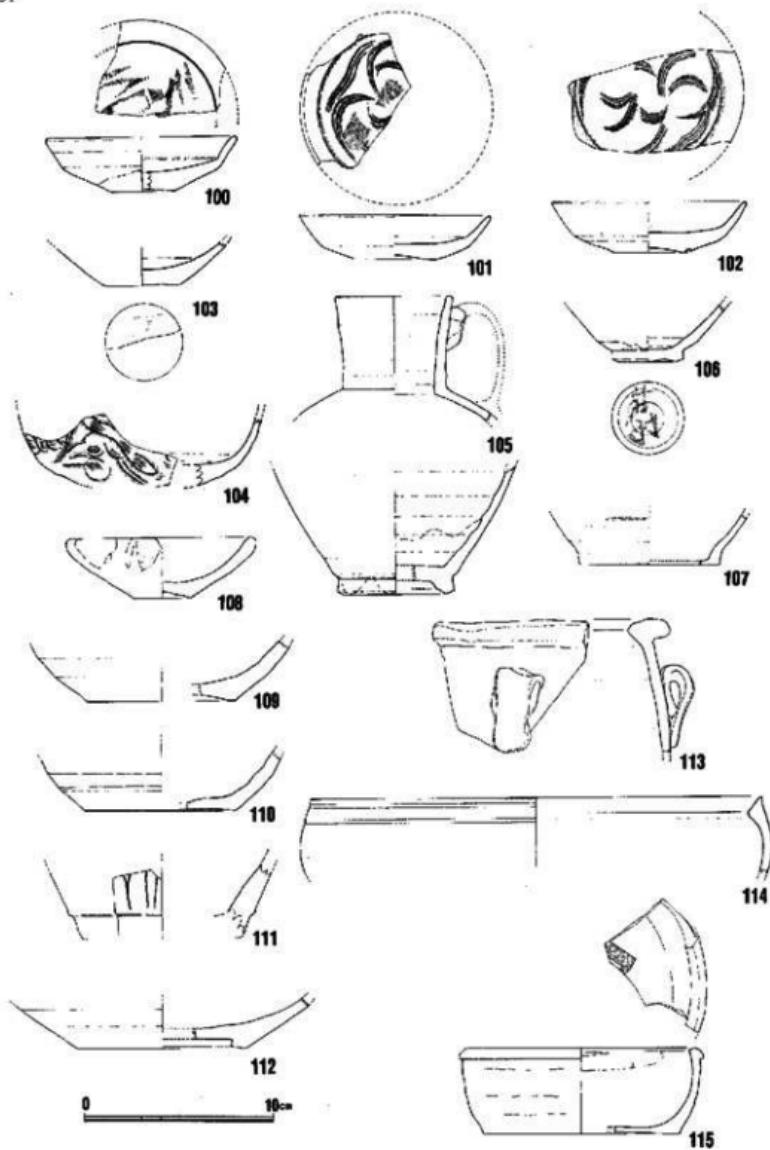


Fig. 66 2号溝（5号溝）出土遺物（5）

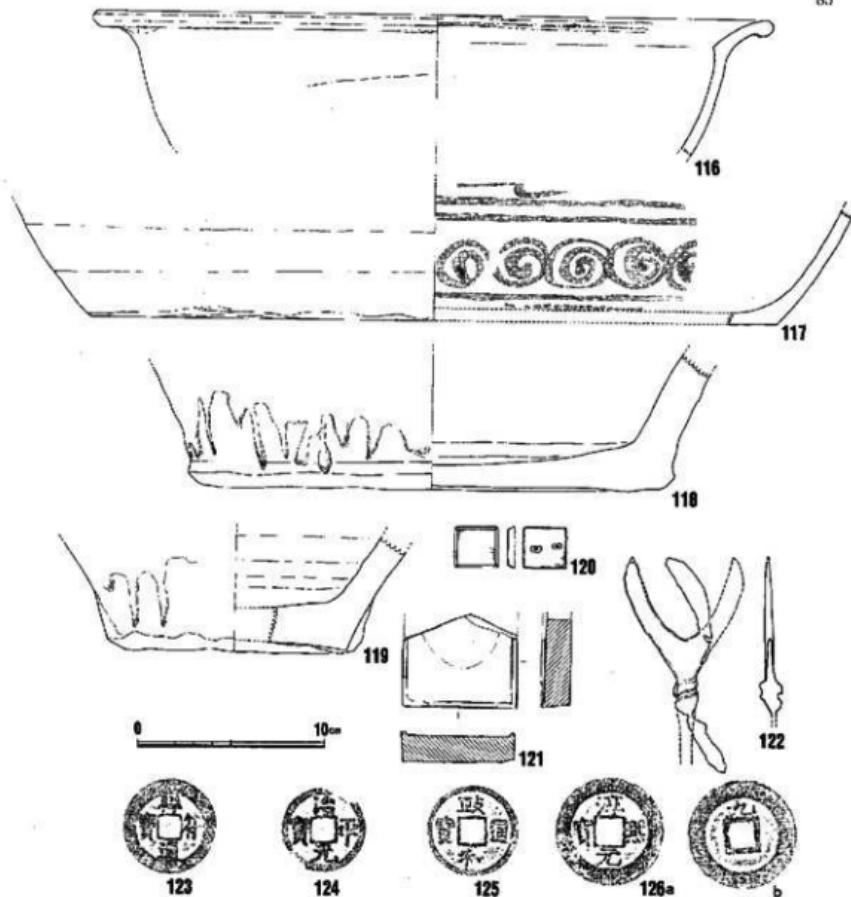


Fig. 67 2号溝(5号溝)出土遺物(6)

2号(5号)溝 (Fig. 61~67, P.L. 20~26) A-2区とB-II・IIIにかかる溝である。A-2区調査時には2号溝と呼んだが、B区調査での溝検出時には2号溝と若干ずれる感じだったので5号溝と呼称した。その後、両者同一の溝であることが確認された。ここでは2号(5号)溝と呼ぶ。この溝は主軸をN-88°Eのほぼ東西方向にとり1号溝と平行している。A・B区を斜断する恰好になり、西側は調査区外に延びているが、東側はB区東隅で収束している。土層断面図1~3(Fig. 61)で観察できるように、上層と下層に大きく区分され、このうち上層部分では、膨大な量に達する土師皿類が出土しており注目される。上層溝は土師皿類の

大量出土する面をもって、その規模が推察され、幅2.5~3.7m、深さ0.65~0.95mを計り、断面立上りはなだらかで深皿状をなしている。壁の土留等の痕跡は観察されず、素掘であったものと思われる。最下位に粘質土や砂層が見られ、排水などの機能はあったものと思われるが、日常的に水が浸んでいたとは思われない。土師皿類のほとんどが完形品で投棄されており、しかも数枚重ねで出土する例も多く、単なる廃棄物の処理とは考えられない。この面から出土する土師皿類は、後でも述べることになるが、いずれも糸切り底で、器高の高い小皿が多く、14世紀前半に所属時期を求めるものである。A区では当該期の大墓墓もしくは火葬施設が多く、それらの祭祀に関わるものではないかと推察される。また、極めて短期間のうちに投棄されたものであろう。下層の溝は地山白色砂層中に掘り込まれたもので、弥生時代甕棺墓地等を切って當まれており、幅3.5~4.5mで深さ1.3~1.8mを計る。壁はなだらかで土留等の痕跡は見出せない。皿状の断面形を見せるが、地山が砂であるため徐々に崩壊し、このような状況を示すのである。本来の壁の立上りはもっと急であったと思われる。この下層溝最下面は既に湧水帯に達している。下層溝での遺物出土量は上層溝には及ばないが、最下面から出土する上師皿類は糸切り底を全く含まず、すべてヘラ切りであることは重要で、この溝の造営年代はほぼ11世紀後半に求められる。下層溝の主軸もほぼ東西を向いており、上層溝はこれを踏襲したものである。出土遺物は、付表に示すように、また写真に示すように夥しい量である。ここでは図示した遺物を中心に若干の説明を加えることにしておきたい。なお、特に断わらない限り上層溝の遺物である。1~16は器高の低い土師小皿、17~21は器高の高い上師小皿である。22~50は土師杯でいずれも糸切り底である。これらのうち法量を確実に把握しうるものから口径別点数を見てみると、小皿では7cm=925点、7.5cm=142点、8cm=1,657点、8.5cm=83点、9cm=357点、9.5cm=5点、10cm=31点となり、杯では11cm=1,266点、12cm=2,970点、12.5cm=122点、13cm=808点、13.5cm=13点、14cm=148点、15cm以上=59点となる。小皿では7cmと8cmにピークが見られるが、7cmには器高の高い小皿が多い。杯では11、12、13cmが多く、特に12cmにピークがある。この傾向は1号溝の場合と同じで、ほぼ同時期、すなわち14世紀前半に營まれたものであろう。51、52は瓦器碗で、ともに指ナデの後ヘラ研磨を行なう。53、54は瓦質のこね鉢で内外面ハケ目調整を行なうが、内面体部下半は使用による磨耗が著しい。55は瀬戸系の壺で灰黄色の緻密な胎をなし、灰青色の釉がうすく施されているが器壁になじまない。56は須恵質の大壺である。57~70は青白磁である。57~59は印籠形合子の蓋、65は壺形合子の蓋で、いずれも上面に花文を型押しする。60は水滴の割部で上半に花文をもつ。63は上面のみに施釉した蓋と思われるもので、おそらく小型壺とセットになるものであろう。下層溝出土。64は小壺で底部にへそ状のくぼみをもつ。61、62は碗で高台内を浅く削り、見込に大小の沈没線をめぐらし、体部にはヘラと櫛による文様を施す。62は下層溝出土。66は口ハゲの印

花皿で、見込には魚藻文の浮文をもつ。67は上面に梅描き満巻文をもつ梅瓶の蓋で、博多での出土例は少ないが、この遺構では同文様の梅瓶胴部破片が2点出土している。68は体部下間に複弁の錦蓮弁文をもつ香炉で、厚く青白釉がかかる。脚は露胎である。69は体部に唐草文の浮文をもつ型作りの壺で、徳化窯タイプのものである。70は胎の薄い壺で、頸部と体部に縫目が見える。71~78は白磁碗で、74、76以外は下層溝の出土である。これらには墨書を底部に残すものが少なからずあり、「上」(72)、「正綱」(74)、「朱旋」(78)と読める。76は三角玉縁をもつⅣ類であるが、見込に4ヶ所長方形に釉を削りとっているものである。79~84は平底皿である。79~81は口ハゲ、82は口縁端部を外方に引き出すもの、83は見込に片切彫りの花文を施すもの、84はヘラの細線と横による花文をもつものである。85~87は高台付皿でいずれも見込の釉を輪状に搔きとる。88、89は白磁水注の頸部で、89には管状の耳がつく。90~99は青磁碗、鉢である。90~92は龍泉Ⅰ類に属し、92は下層溝出土でこの類は珍しく墨書が見られ「十」と読める。93~95は疊付のみを露胎とする龍泉Ⅲ類で、この遺構ではこの種がやや多い。97、98は茶色にくすんだ釉をかける鉢で高台が厚い。99は外面に平坦な陽刻蓮弁文を施し灰青色不透明釉をかける高麗青磁で、疊付のみを露胎となす。96は綠青色透明釉をかける小碗である。100~103は青磁皿である。100、103は同安系、101、102は龍泉窯である。103は下層溝出土で「土」の墨書がある。105は白磁水注で底部と頸部は接合しないが同一個体と思われる。104は外面にヘラと横による草花文を施す青磁壺で、外面のみ青緑色の釉を施す。106は天目碗で底部に墨書が残されているが、判読しえない。107~119は陶器である。107、108、116が下層溝から出土している。108が皿である。107はA群の壺で胎が薄い。109、110、112、114はいずれもB群に属し、114の鉢以外はいずれも壺の底部である。113はC群の四耳壺で縫耳がつく。111は外面に細沈線による蓮弁文を刻した綠釉陶器で、釉が一部銀化している。胎は緻密で磁質に近い。115~117はA群に属する泉州磁社窯の黄釉鐵絵盤である。115は小型で、口縁端部をわずかに折り返し肥厚させるもので、内面底にのみ褐彩が見られる。116は下層溝の出土で広い縫耳がつく。外面体部上半から内面にかけてベージュ色の化粧土をかけ、内面に茶味の強い透明釉をかけている。口縁端の下に目跡がつく。117は大型の盤で内面体部下半に渦巻文をめぐらしている。118~119は胎の粗い大型容器である。これら図示したもの以外に、広東なまこ風の釉をかけた高台付鉢や大型容器、鐵斑文の釉下影にオリーブ色の透明をかけた青磁質の壺などがあつてバリエイションに富む。120は2.3×2.1cmの長方形をなし、厚さ4.2mmで断面白形をなす石帶巡方である。裏面に2個の小孔からなる穴を2ヶ所穿っている。白色を呈するが石材は不明。121は枯板岩を用いた長方形の硯である。122は雁股式の鐵鏡で、14世紀前半代の戦乱を示す好資料である。このほか21枚の銅鏡が出土しているが拓本可能なものは少なく、123の祥符通宝、124の治平元宝、125の政和通宝、126の淳熙元宝の4枚だけである。

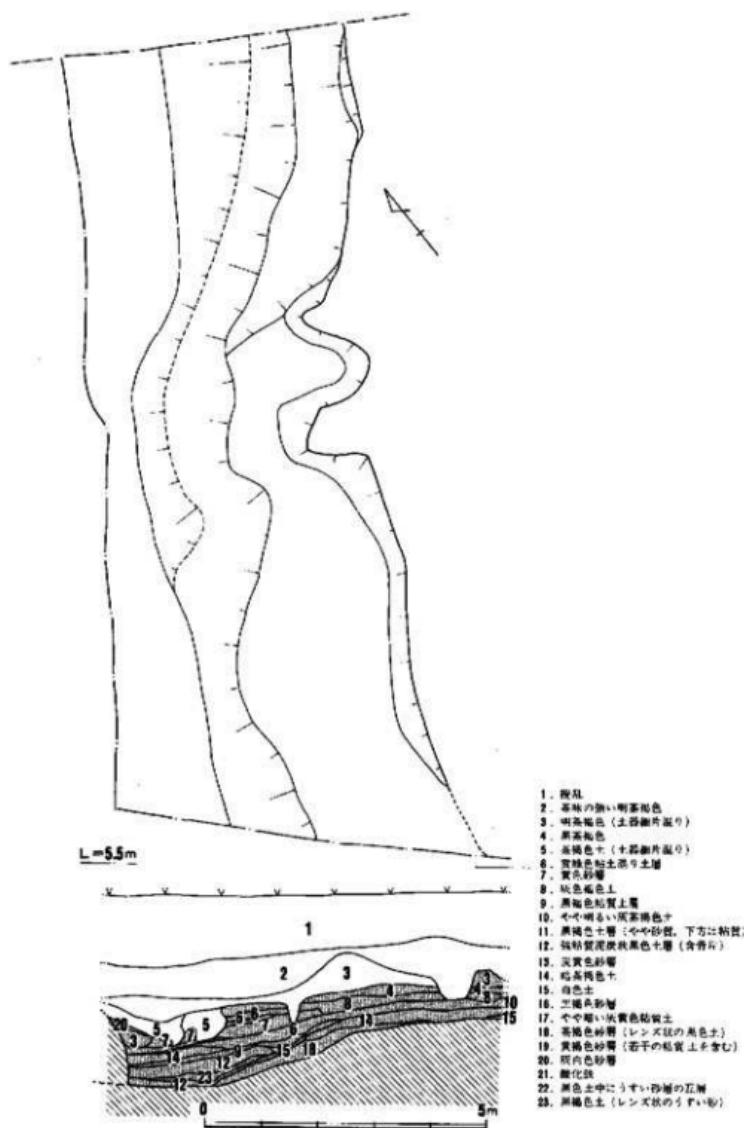


Fig. 68 3号溝(谷状落ち込み)実測図

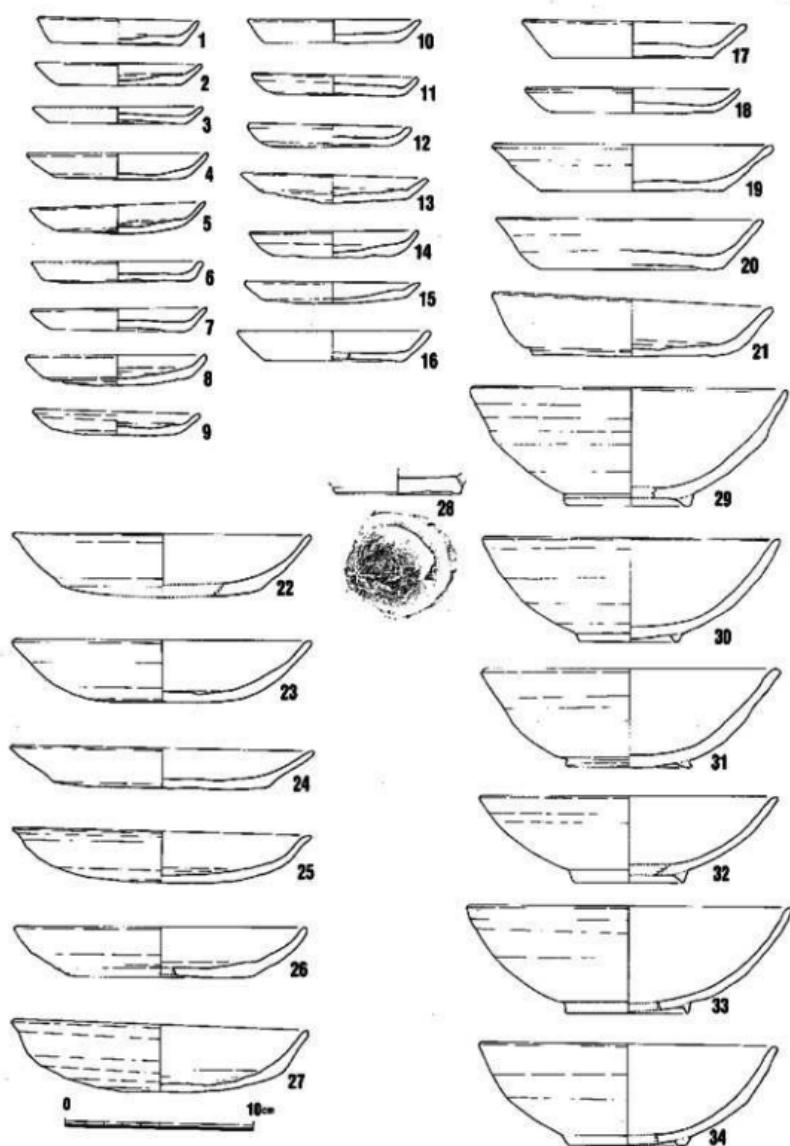


Fig. 69 3号溝出土遺物(1)

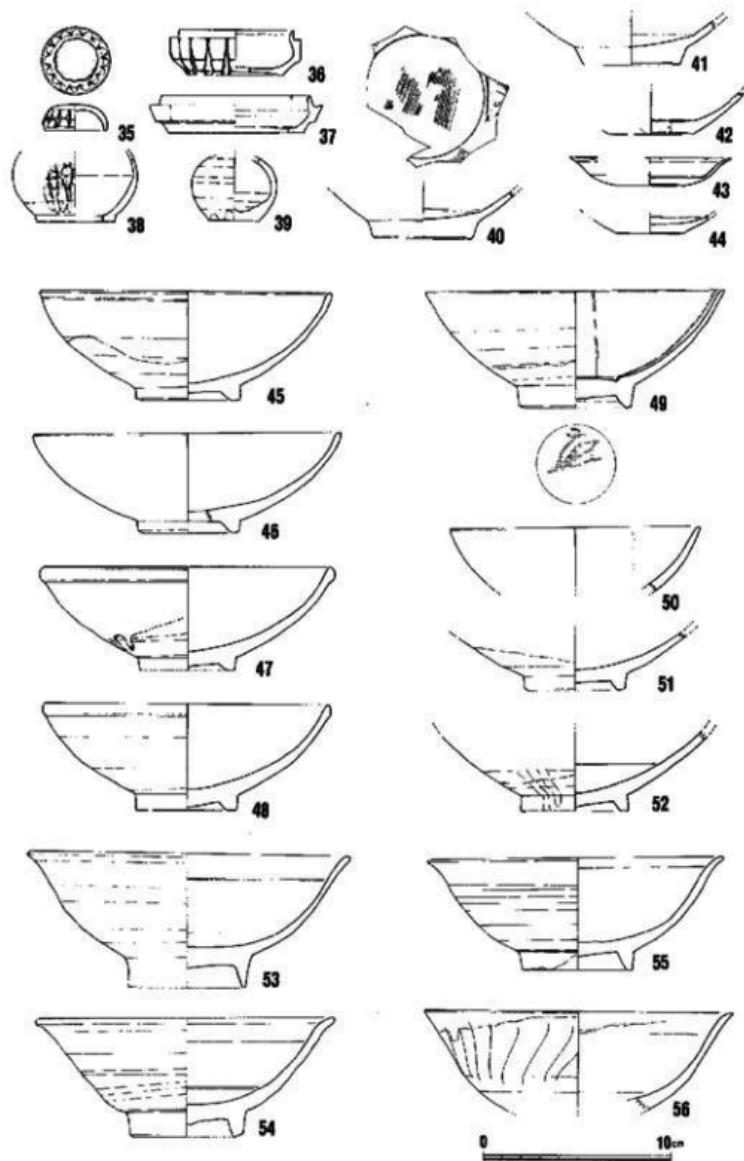


Fig. 70 3号溝出土遺物 (2)

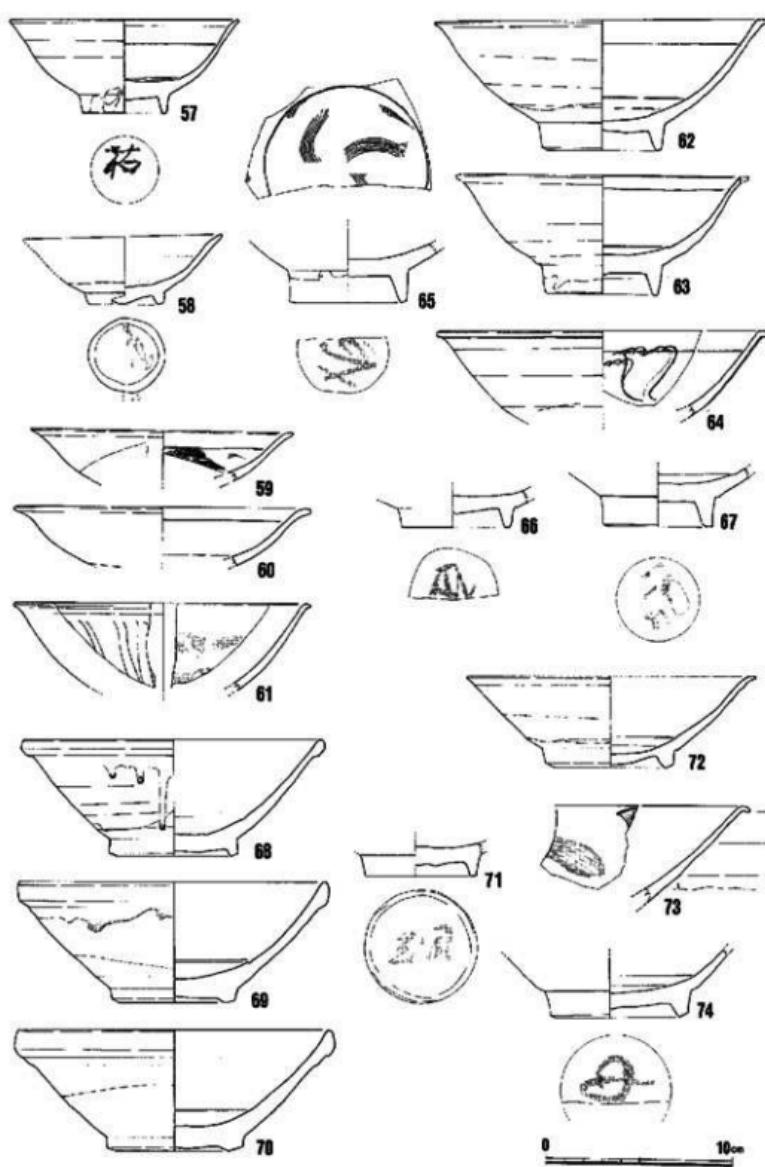


Fig. 71 3号溝出土遺物(3)

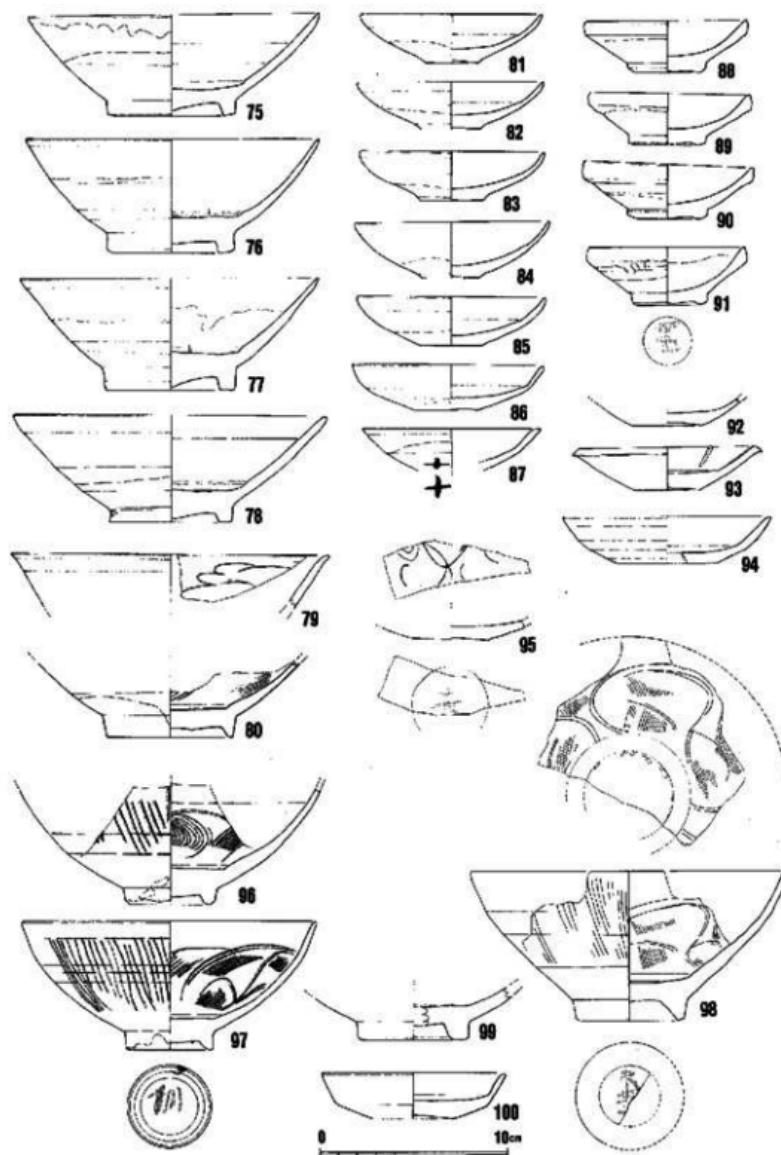


Fig. 72 3号清出土遺物(4)

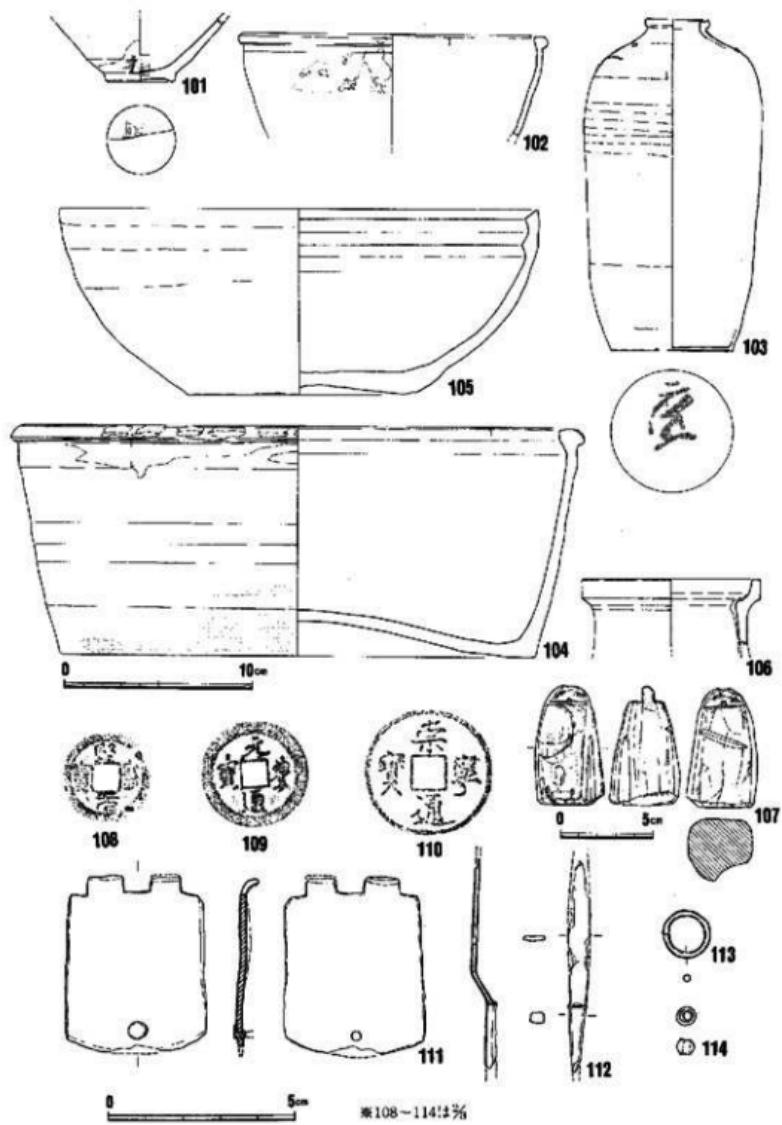


Fig. 73 3号溝出土遺物(5)

3号溝 (Fig. 68~73, PL. 5・6・26) A区北端で検出された。その大半が調査区外に延びているため、A区では片側の立上りが検出されたにすぎない。地山白色砂層の大きな落ち込みであるが、厳密には溝とはいはず、この付近から柳山神社方面へ開析している自然谷の一部である。ここでは便宜上3号溝と呼ぶ。A区東に隣接する東長寺の本堂建設にともなう発掘調査(博多第8次調査)でも、その谷頭部落ち込みが確認されている。このことは博多の旧地形復元の上に重要な知見である。落ち込み最下面と現地表面との比高差は3.4mと深く、落ち込み上端との差は1.1mを計る。きわめてなだらかな落ち込みとなっている。落ち込みにそって流れ込むような土層断面を示し徐々に堆積したものである。下層には砂層と泥炭状の土との互層が見られ、水分を多く含んでいる。遺物は大きく上層と下層とに分けられるが、遺物取り上げ段階で混乱が生じ、ここでは一括して扱うことにしておきたい。出土遺物は極めて多量で、その数量は付表に示すとおりである。図示した遺物に若干の説明を加えておく。1~16は土師小皿で、5、8、9、13~15はヘラ切り底で、以外は糸切り底である。17~21は糸切り底、22~27はヘラ切り底である。下層でヘラ切りが多く、上層で糸切りが多いのは当然のことであるが、ここではヘラ切り底が他の遺構に比較して多いことを指摘することにとどめたい。28~34は瓦器類碗であり、出土量も多い。28の外底には刻線がある。35~44は青白磁である。35は合子蓋36・37は身である。38・39は小壺。40・41は碗で、底部をわずかに抉り高台を作り出している。42~44は平底皿で、43は口縁を輪花となす。45~80は白磁碗、鉢の類である。45~52はⅡ類のもので、口縁端を丸く收めるもの、小さな玉縁を作るもの、白堆線を施すものなどがある。49には、103と同じ文字が記されているが判読できない。53、55~60はV類に含まれるもので、口縁部を外反させ丸く收める。57には「祐」の墨書がある。58にも墨書があるが判読できない。54はV類と同様の器形をもつが、胎が粗く、器壁の調整も雑で、高麗風の青灰色不透明釉がかけられるものである。61~67、71~73はVI類に含まれるもので、口縁端を外方に水平につまみ出す。73は鉄絵を施す鉢で、66~67、71には墨書が見られるが、71が「綱」と読めるだけで他は判読できない。68~70は三角玉縁をもつVI類である。74~78は見込輪状搔き取りで、体部が直に開くV類のもので、75には花押様の墨書が見られる。79、80は罐類で、内面にヘラおよび櫛による文様を施している。81~95は白磁皿である。81~86は平底皿のⅢ類にあたる。87は高台付皿Ⅱ類で体部下半露胎部に「十」の墨書が見られる。88~91は口縁三角玉縁の高台付皿Ⅰ~2類で、91には「王」銘の墨書がある。93は口縁端を外に突き出し、内面体部に白色堆線をつける平底皿Ⅳ~2類である。94は白色釉をかけたものであるが、青磁風の器形をもつ。96~99は青磁碗である。96は幅広の櫛描文を外面にもち、内面にヘラと櫛による文様を施す同安系青磁碗通有の文様構成をもつが、器形、施釉法等は龍泉碗に近い。不透明の濃いモスグリーン釉がかかる。97は同安系碗で、外底のくりは平坦である。ここには「綱」の略字が墨書きされている。

98も同安系碗で見込の釉を輪状に搔き取るものである。底部に墨書がある。99は分厚い高台を持ち縁の強い釉を施すもので、見込の釉を輪状に搔き取る。白磁に多い器形である。100は無文の龍泉青磁皿である。101は天目碗で高台脇の削りが斜めになっている。体部下半と底部に墨書があるが、いずれも判読できない。102~106は陶器で、102~104はA群磁社窯系のもので、102が口縁折返しの玉縁をもつ鉢。104が同様の口縁をもつ深い盤。103が器壁の薄い小口瓶で肩部にのみチョコレート色の釉がかかり、内面はロクロ巻上痕が顕著である。肩部に目跡がつく。これは、3号溝の上層から倒立した状態で完形品として出土した。底部に墨書が残るが判読できない。105は胎が粗く石英粒を多く含むこね鉢で、口縁内面直下に二条の突帯状の隆起をもつ。106は灰色で石英粒を多く含む粗胎の埴燒で、内面に明青色のガラス津が付着している。石製品には滑石製石鍋破片およびその再加工品16点などがあるが、いずれも小破片で固化しがたい。石鍋には縦耳のつくものと、鉢をもつものとがある。107は粘板岩を用いた分銅形石製品である。頂部両側を削り、つまみを作り出し、小孔を穿っている。重量調整のためであろうか、側片に数条の縦状の削りがある。現重量110gを計る。銅鏡5枚も出土しているが銘の確認できるのは、108の熙寧元宝、109の元豐通宝、110の崇寧通宝のみである。111~113は銅製品である。111は鎔帶の鉄具にあたる部分で、片面は欠損している。下端に革帶を留める釘が打たれている。博多における鎔帶の存在意義は2号溝で検出された巡方とともに、極めて重要で、平安時代の大宰府官入らの莊園私貿易との密接な関係を示しているものといえよう。112はバターナイフ形を呈し、一端は平坦で他端は長方形の厚い断面をなすヘラ状の製品である。113は環状の銅製品で径1.25cmと小さい。鍍金具であろうか。114はガラス小玉で、美しい明青色を呈している。106のガラス埴燒とともにガラス工房の存在を示すものである。

4号溝 (Pl. 27) A-1-I区の上面で検出された遺構である。主軸をN-9°-Eにとり、A区を斜断する恰好となる。32号、34号土塙を切り、34号土塙に換したところで収束しており南は壁によって寸断されている。幅0.5m、深さ0.3mで規模が小さい。雨落溝であろうか。ここでは遺物量は少なく、糸切り底の土師杯、小皿とともに白磁碗9点、同安系碗2点、龍泉碗2点、皿2点などの破片が出土しているにすぎない。

6号溝 (Fig. 74) B区の南端付近で検出された。現街筋に直交し、N-41°-Eをはかる。溝幅は1.9m、下端0.7mのU形をなし、深さ90cmを計る。出土遺物には混じりが大きく、図示した古唐津類に混って中国陶磁類も多く見られる。土師皿類は全て糸切り底である。古唐津類の出土から、溝の造営年代は16世紀終末以降に比定され、太閤町割

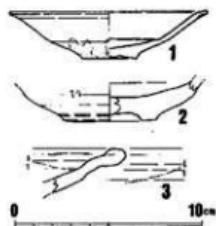


Fig. 74 6号溝出土遺物

に相当する溝であると考えることができる。

2) A・B区遺構外出土の遺物

A区遺構外出土の遺物 (Fig. 75~79)

1、2は墨書のある土師小皿である。3、素焼の不動明王頭部、1号溝の上面より14世紀代の遺物と出土した。4は未使用の瓦質の擂鉢で、5は小形の土鍋。以上は国産品である。6~11は青白磁。8は厚手の粗造品、10は青みのない透明釉のかかる11ハゲの皿だが、作行は粗い。11はオリーブがかった透明釉である。12~27、29~35、39、46は白磁に分類されるが、12は青白色の釉、29は黄白色の釉のかかるものである。36は破面灰色で露胎部は赤茶を呈する胎にオリーブ色を帯びたガラス質の釉がかかっている。37~38、40~44は龍泉窯系の青磁、28、45は同安窯系の青磁である。47~49、51、52は天目釉である。52は禾目が出ており、11線は削って覆輪をした跡が見られる。付表に記された天目碗は40点であるが、うち35点が福建省の建窑付近で生産されたもので、そのほとんどは图例のようなすっぽん口であるが、外反口縁のものも2点見られた。又、漆黒の釉の上に明らかに施文をした跡のみえるものが2点、B区での1点を加えて、今回報告分では3点が得られた。あるいは金彩でもなされていたかと思われる。この他に、江西省の吉州窯製品である玳瑁巣が2片ある。1点は龍甲色の斑文があるが、1点は火加減が不良で灰白色のガサついた斑文を見せている。残りの3点(同一個体の可能性あり)は薄手で高台がつき、口縁の直口する小型の碗で胎土は灰色、釉は黒褐色であるが天目釉ではなく、別系統のものであるが一応ここに数えている。また、参考までに美濃の天目も1片あることを記したい。55は灰色の粗い土にこれも灰味の強い不透明釉のかかる蓋で、草花文と思われる鉄絵が見られる。この他に瓶の破片と思われる2片があるが、釉色はかなりオリーブ色が強く、鉄絵は無難作にくるくると曲線を描き散している。この破片は内面にも釉がかかっている。53は墨書のある陶器壺の底で、準A群1とした長胴の四耳壺の底である。54は磁灶系の茶褐色釉のかかる鉢、56、57はいわゆる黄釉盤で56には磁灶窯で山窯に見られる特徴的な鉄絵文が見られる。59、61は陶器B群に属するが、59は良質でほとんど青磁といえるほどである。58、60は陶器C群である。62~67は滑石製品で、小さな石鍋(外に煤付着)と小容器類、紡錘車である。68は鉄製刀子、69は分銅形青銅製品、70は青銅製飾金具。他に數は少ないが中國や日本の銅錢が出土している。

以上の他に小片ではあるが、空色釉のかかった碗の小片1点がある。灰色の土に白化粧を施し、トルコブルーの釉をかけるが、光沢はなく、一部剥落している。口縁は直口し、器内に陽刻の印花文がある。又、黄褐色釉の花文印花の合子蓋1点も見られた。珍らしいものとして、透かし彫のある彩色陶器1片がある。灰色の土は堅く焼けており、七宝織ぎ透かし文で、中に切れ目のある四弁花を配して紅く塗り、七宝織ぎ文はページュに彩色される。内面のろくろ目

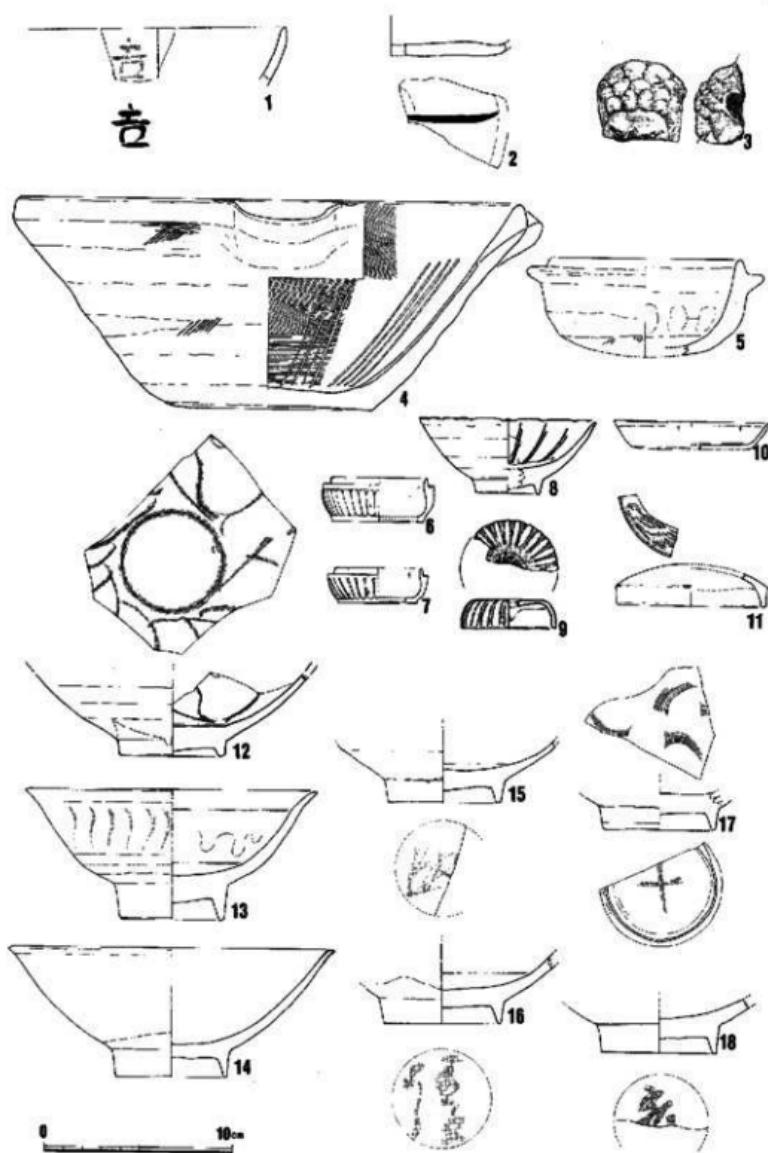


Fig. 75 A区遺構外出土遺物(1)

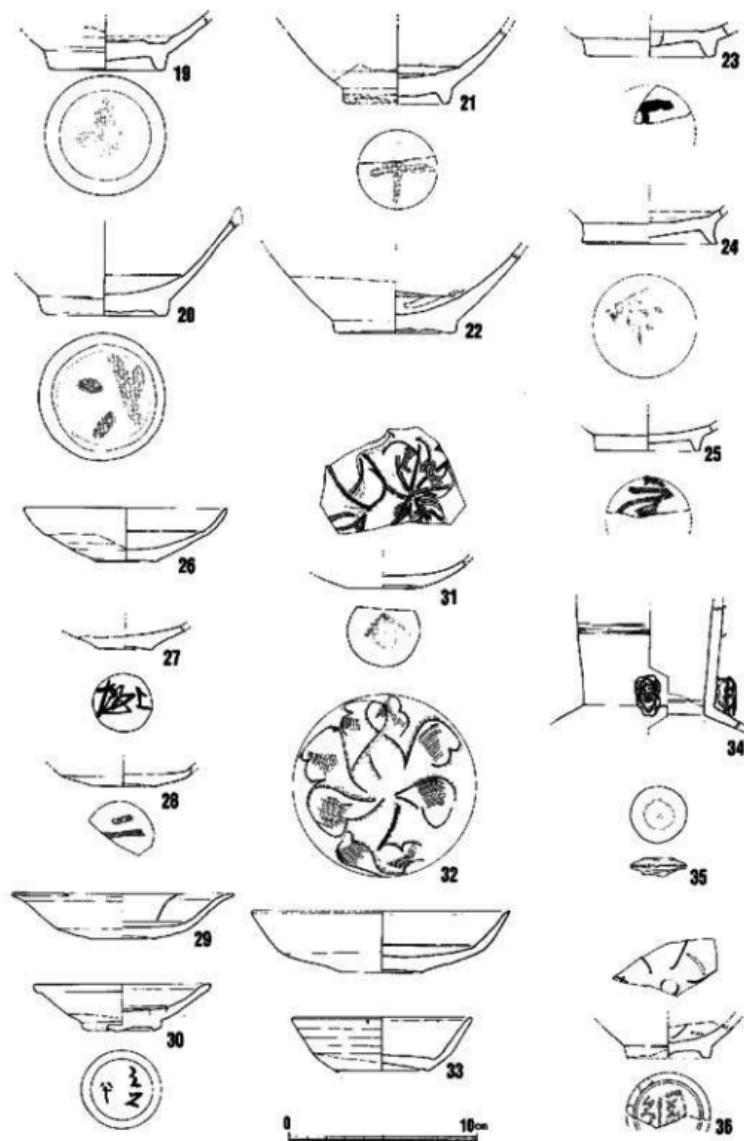


Fig. 76 A区遺構外出土遺物(2)

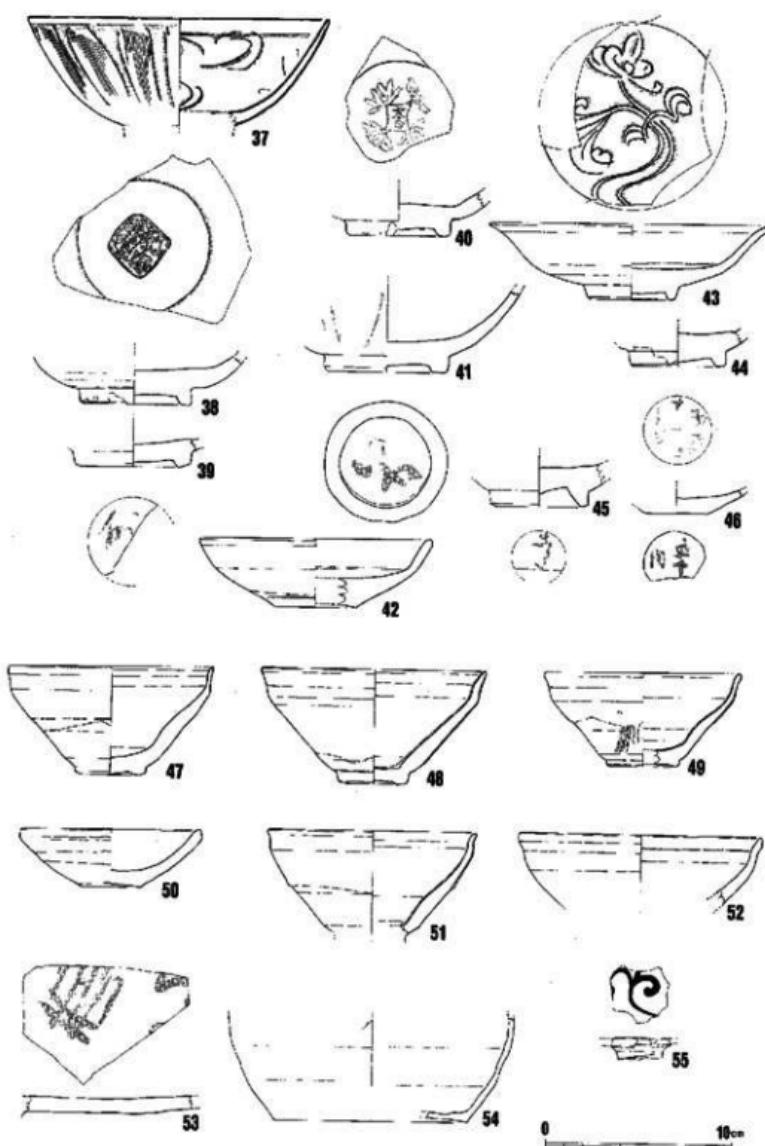
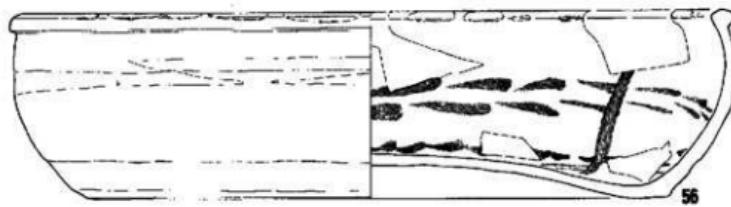


Fig. 77 A区遺構外出土遺物（3）



56

10cm

Fig. 78 A区面遺構外出土遺物(4)

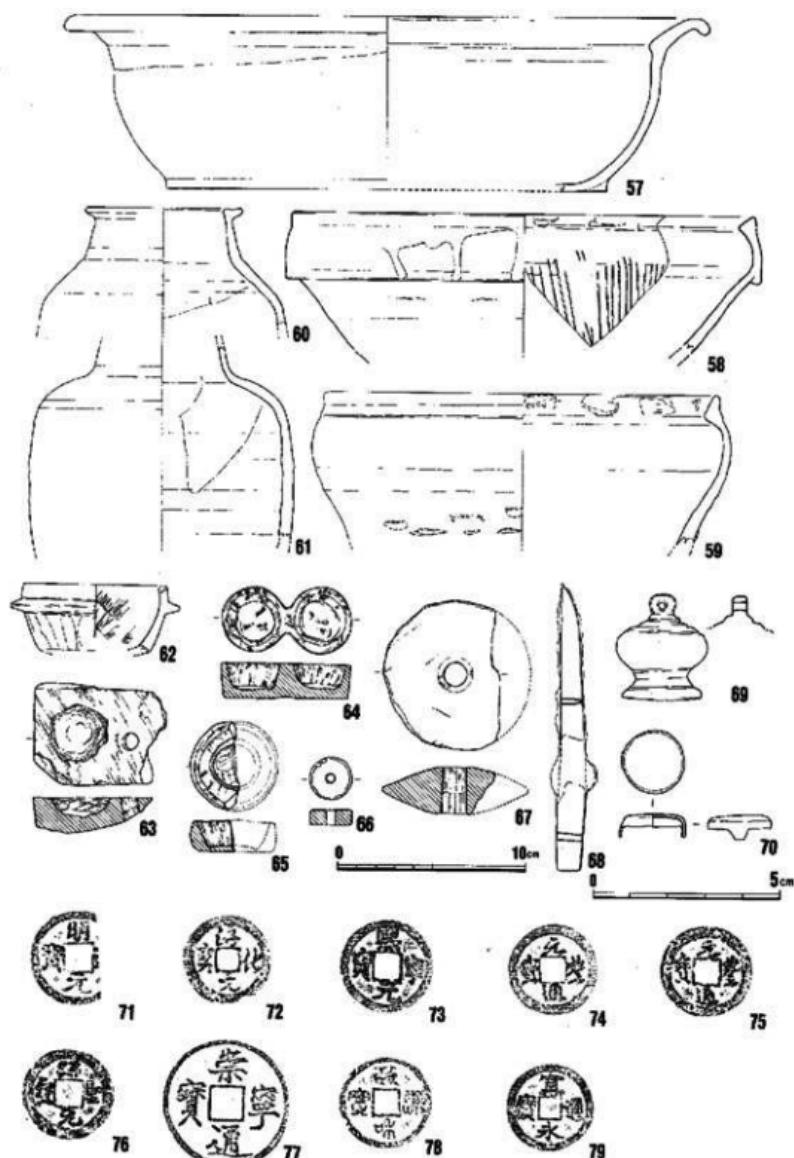


Fig. 79 A区造構外出土遺物（5）

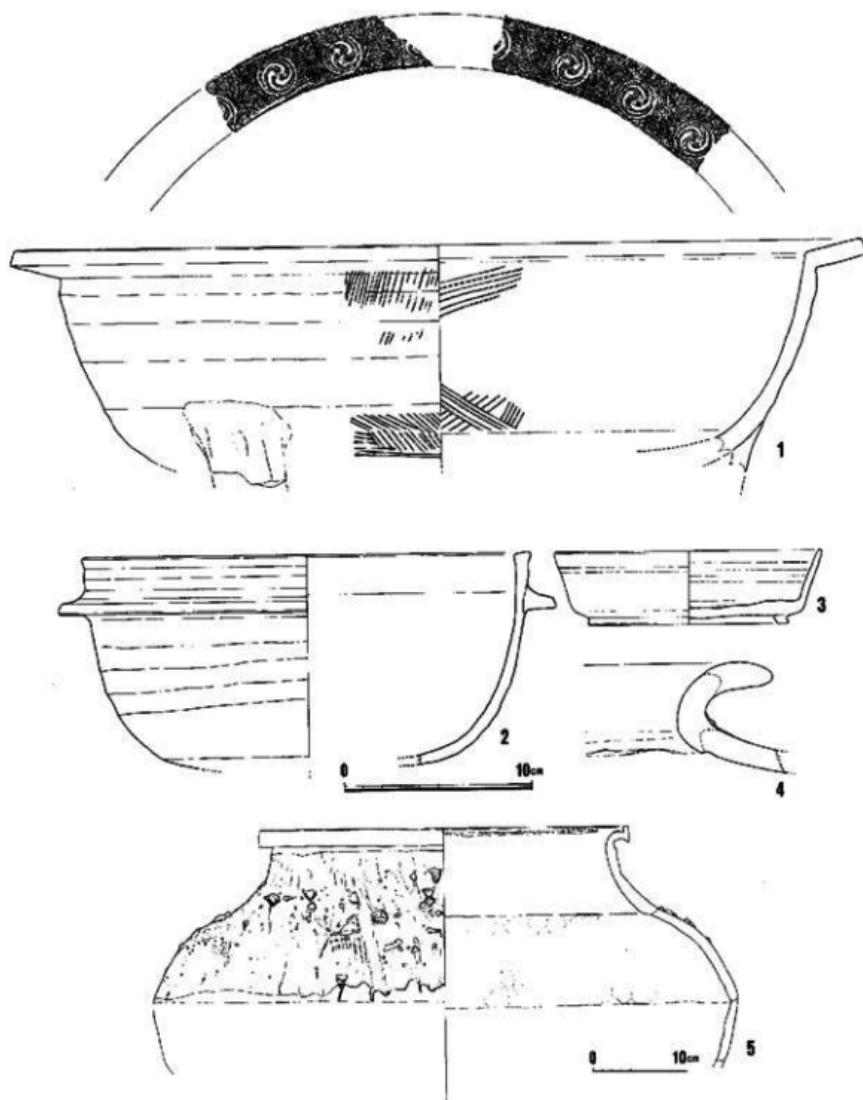


Fig. 80 B区遺構外出出土遺物

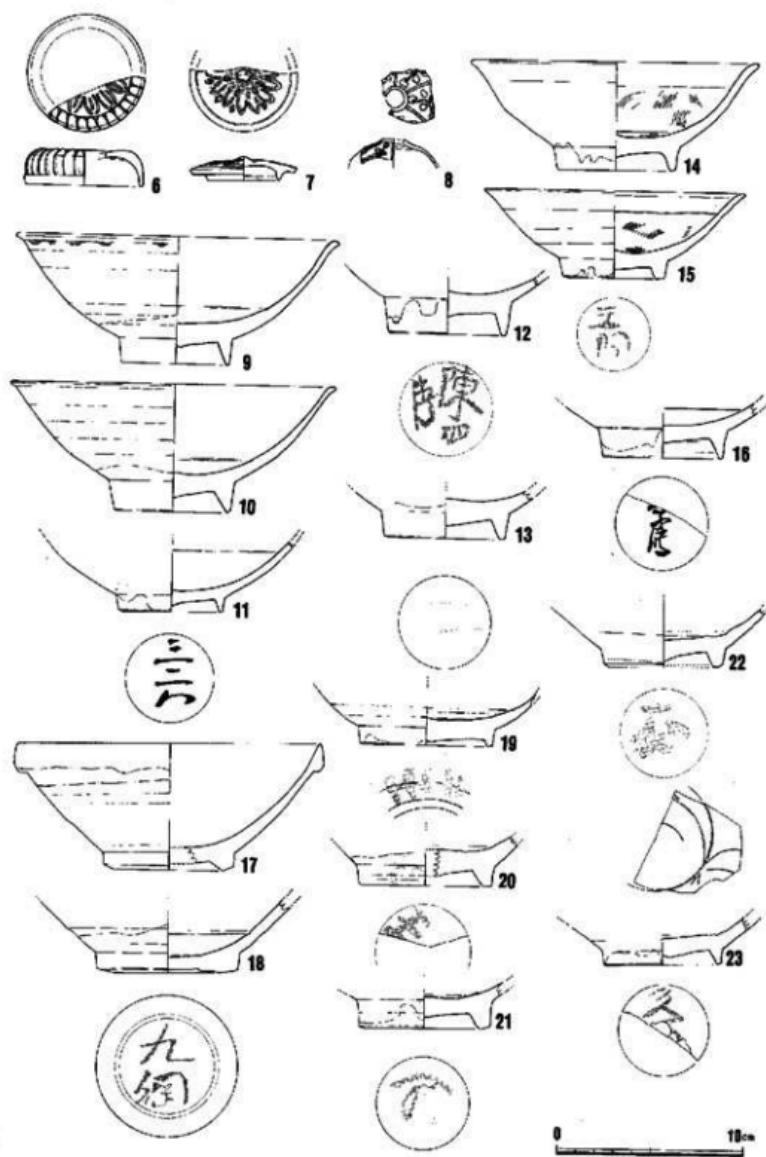


Fig. 81 B区遺構外出土遺物(2)

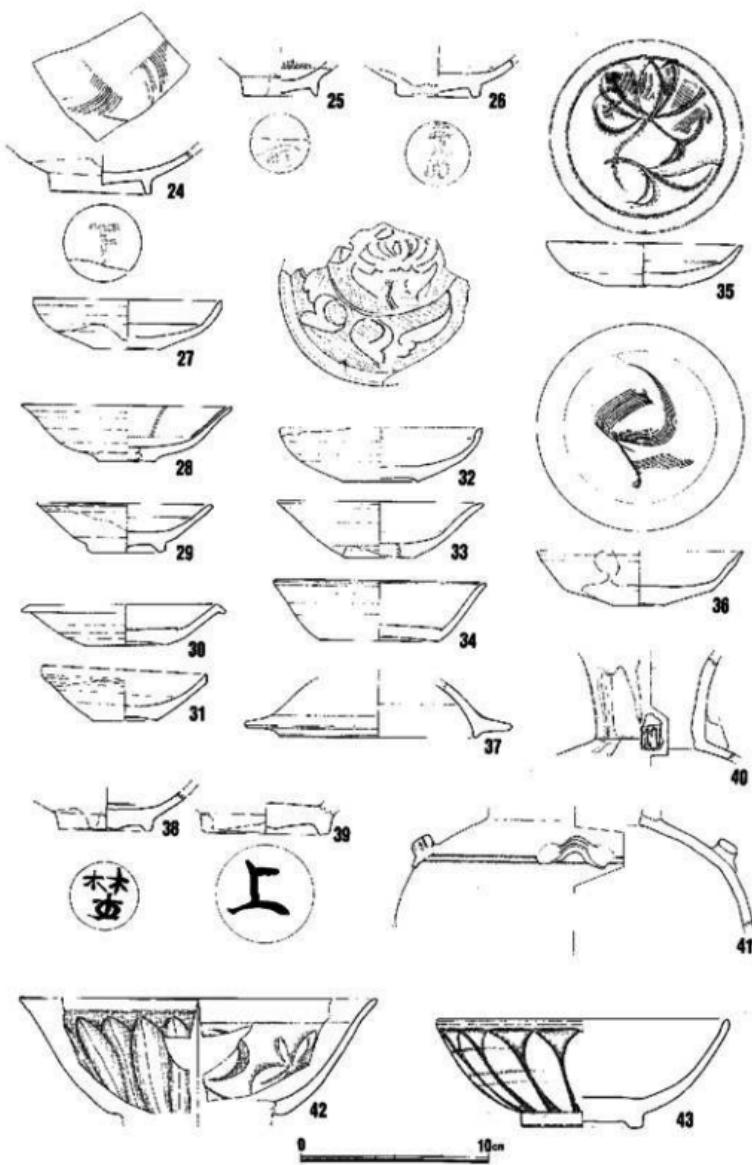


Fig. 82 B区遺構外出出土遺物(3)

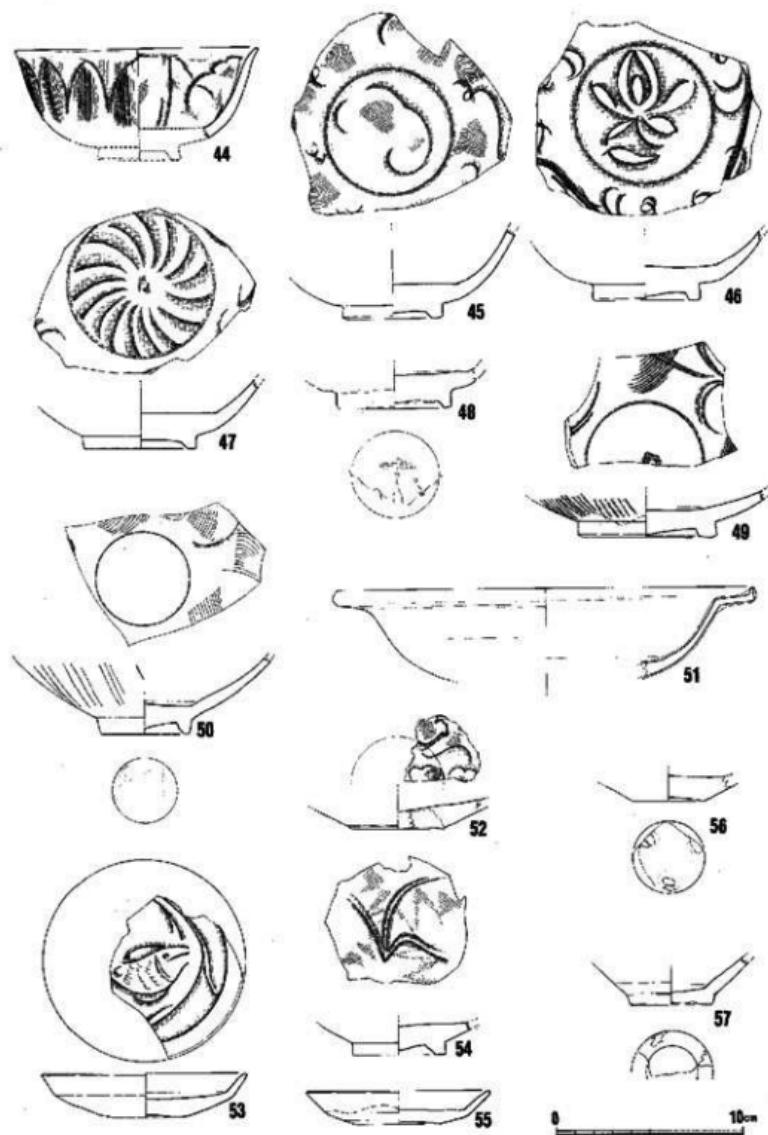


Fig. 83 B区造様外出土遺物(4)

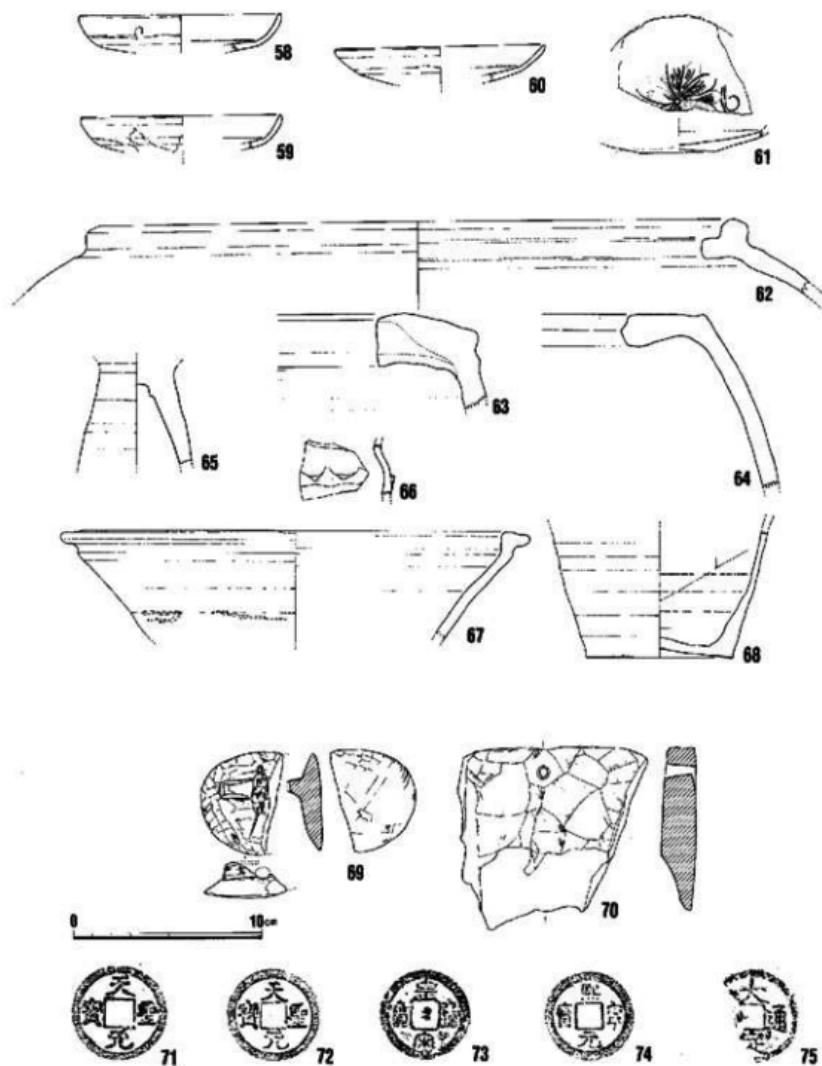


Fig. 84 B区遺構外出上遺物(5)

を見ると、かなり大型の器の垂直部分である。出土は3の不動明王と同じく1号溝上面、14世紀代の遺物に混っていた。

B区遺構外出土の遺物 (Fig. 80~84)

1、土師質の火舍、2は上師質の土鍋である。4は渥美の壹口縫部で平安末から鎌倉にかけての時代のもの。5は常滑の大甕上部。肩にかかったオリーブ色の灰釉に、上から落ちた土が盛大に付着している。格子文と縞文を組み合わせた印文が見られる。14世紀。6~8は青白磁、9~37、39~41は白磁である。28は黄白色の釉、32は一面に刺突文を施しているが釉が熔けずピンホールとなって残っている。36は灰白色の光沢ある釉で、淡色の同安窯系青磁によく似た印象がある。42~56は青磁である。49、50、54、55は同安窯系の青磁で、他は龍泉窯系の青磁である。57は高麗の蛇目高台の青磁碗。他に高麗青磁2点、李朝の灰色、灰白色釉の碗各1が得られた。58~61の皿は今回初めて見るもので、陶器A群に似た土に黄白色ないし黄オリーブ色の釉がかかる。見込には花文印花が見られる。底近くから露胎で赤茶色を帯び、外底の削りはあいまいである。62~64に示したように大形の容器もよく破片が残っている。おおむねC群に属するが、分類で群を構成するに至らない陶器Iとした頗無し大壺の良好な上部もみられた。数量については付表を参照されたい。65~67はB群の陶器で、ことに67は良質である。69、70は滑石製品。69は焼けており、石鍋の鉢付近を再利用したものと思われるが、確かな用途は不明である。

以上に図示したものの他に、目についたものを補足したい。まず黒釉の磁灶窯系の軍持の破片がある。軍持は一般に東南アジアで多く出土し、日本では見られない器形と言わわれているが「博多II」でも報告したように、日本にも入っていることがわかった。すでにこれまでに同器形、同釉の数個体を見ているので確認しておきたい。又、小片ながら店物茶入と思われる3個体もある。うち1個は丸壺である。土はきわめて細かくねっとりして薄い。次に、古窯系として教えた破片に、備前の播鉢が見られる。室町時代のものである。他の大部分は常滑と思われる破片であり、中には瀬戸かと思われるものもあるが、はっきり分類することは難しい。明代の染付には15世紀から16世紀末までのものが見られるが、近・現代でまとめた国産の陶磁器の中には16世紀末ごろの美濃天目3片、又慶長以後の唐津の碗・皿・播鉢片等、1610~30年の伊万里焼など、これまでの博多の発掘調査で捉えられなかったものが含まれていることを明らかにしておきたい。

3) 壱棺墓

A～C調査区、特にB区を中心に16基の壹棺墓を検出した。そのほとんどが後世の削平、遺構によって破壊されており、遺存状況が極めて悪い。壹棺墓はB区全域、A区東南隅、C区北西部にベルト状に分布し、後述する出入り口調査区の北半部に連なる。この両調査区の間は、一見、墓群の空白地帯をなすが、近・現代の擾乱を受けており、発掘区の北東部にあたる東長寺の境内から壹棺墓が発見されていることを考え合わせると、本来の墓域はこの欠落部を含めて、より北東及び南西への帯状の拡張性をもっていたと考えられる。壹棺を埋置する墓塚はすべてこの地域一帯の基盤層である白砂層を切り込んで設営されており、この壹棺墓群が、東長寺付近から発掘地点の南西に位置する萬行寺附近にかけて延びる古砂丘上に営まれたことがわかる。これは、同じ高速鉄道建設に伴う調査で明らかにされた藤崎遺跡、西新町遺跡などの博多湾沿岸の弥生時代墓地と立地上の共通性を示している。また、これらの調査区と浅い谷を隔てた天福寺(博多22次調査)からも壹棺墓が発見されており、付近一帯が弥生時代の墓地としてかなりの広がりをもつことが推定される。

以下、各々の壹棺墓と壹棺について詳述する。遺存状況が悪いため、出土状況、壹棺本体の図化に極力努めたが、そのすべてを掲載することはできなかった。今回報告するA・B区には13基の壹棺墓が存在し、うち出土状況が明確なもの7基、不明6基で成人用壹棺5基、小児用壹棺8基である。なお、その配置は、付図:A・B区遺構全体図に記してある。

1号壹棺墓 (Fig. 85・86) A区南東隅に位置し、方位を略北東一南西にとる。接口式の成人用壹棺である。削平のため上半部を欠いており、墓塚の形状も不明である。壹棺はほぼ水平に埋置されている。上壹はやや外傾するL字形の口縁部から胴部上半部で最大径をとりながらすばり気味に底部へ移行する器形をもつ。胴部中位に一条の三角凸帯を貼付する。外面は刷毛目を残したままで、口縁部、凸帯周辺、内面は丁寧なまで調整を施している。下壹は僅かに内傾したT字形の口縁部をもつが、内側の張り出し部分を打ち欠いている。胴部中位にM字形の凸帯を貼付する。最大径は凸帯上位にある。内外面ともなで調整を施している。

2号壹棺墓 (Fig. 85・86) B区東隅、14号壹棺墓に近接して位置する。方位はほぼ南北とする。接口式の成人用壹棺であるが、ほぼ半分を欠損し、墓塚の形状も不明である。壹棺はほぼ水平に据えられている。上壹・下壹ともにT字形の口縁部を有する大型壹棺であるが、下壹がやや外傾する。最大径は両方とも口縁下部にある。上壹は胴部中位に、下壹は胴部中位よりやや下ったところに、それぞれ三角・M字形の凸帯を貼付している。器面は丁寧なまで調整を施している。

3号壹棺墓 (Fig. 88) B区の中央部、北東よりのところに位置するが2(5)号溝による破壊を受け、墓塚の形状、壹棺の埋置状況とともに不明である。僅かに變形土器の口縁部と底部を発

見した。變形土器は屈曲のきつい逆L字形の口縁部をもち、その下位に一条の三角凸帯を貼付する。口縁部、凸帯、内面ともに丁寧な仕事による調整であるが、凸帯下3cm以下は刷毛目調整のままである。推定器高46cm。

4号變棺墓 B区北隅に位置する。遺存状態が極めて悪く、2個体分の變形土器片を検出している。器形は両方とも8号變棺墓下巣と同形のもので、やや外傾する逆L字形の口縁部とその下に一条の三角凸帯を貼付する小児用變棺である。口縁～凸帯周辺部以外は刷毛目を残したままである。

5号變棺墓 B区のはば中央部に位置するが、後世の攪乱により旧状を留めていない。墓壇中より變棺片を探取したのみである。

6号變棺墓 (Fig. 88) B区東側中位に位置するが、2号溝に切られて遺存状態が悪い。舟口式の小児變棺である。上巣は鋸先状II縁をもつ變形土器のII縁～頸部を打ち欠いたもので、胴部中位に一条の三角凸帯を貼付している。底部は少しあげ底気味である。全体を丁寧な仕事で仕上げている。下巣は僅かに内傾する逆L字形の口縁をもつ變形土器で、胴部中位に一条の三角凸帯を貼付している。II唇部端に貝殻腹縁による刻み目を施している。最大径は凸帯上にある。底部は僅かにあげ底気味である。外面の凸帯より上部と口唇部上面には丹塗りの痕跡を留めるが、他の部分は定かでない。内面には刷毛目調整の痕跡が認められる。

7号變棺墓 10・11号變棺墓に隣接して成人用變棺の崩壊部片が出土している。M字形の凸帯を一条貼付したもので、1・2・11・12号變棺下巣と同タイプと思われる。

8号變棺墓 (Fig. 85・89) B区北隅に位置する小児變棺墓である。主軸はほぼ東西方向である。墓壇は平面形長楕円で、變棺はほぼ水平に埋置している。上巣はやや内傾する逆L字形の口縁をもつ變形土器で、口縁下に一条の三角凸帯を貼付している。凸帯下10cmの幅で丹塗の痕跡を留める。底部は平底である。下巣は僅かに内傾する逆L字形の口縁をもつ變形土器で、II縁下に一条の三角凸帯を貼付する。底部はややあげ底気味である。外面に刷毛目を残す。

9号變棺墓 (Fig. 85・88) B区北隅に位置する小児變棺墓である。墓壇は方位をほぼ南北にとり、斜めに掘り込んで變棺を埋置している。上巣は外傾する逆L字形の口縁をもつ鉢形土器で、口縁下に一条の三角凸帯を貼付する。器面はなでによる調整である。下巣は僅かに内傾する逆L字形のII縁をもつ變形土器で、口縁下に一条の三角凸帯を貼付する。外面凸帯下は刷毛目、他は丁寧な仕事で調整を施している。

10号變棺墓 (Fig. 89) 11号變棺墓に隣接して検出した小児用變棺墓であるが、11号との前後関係は不明。上巣は内傾する逆L字形の口縁部をもつ變形土器で、II唇部端に刻み目を施す。口縁下に二条の三角凸帯を貼付する。外面は刷毛目調整の後、口縁及び凸帯周辺を丁寧な仕事で仕上げている。下巣はほぼ水平な逆L字形の口縁をもち、その下に一条の三角凸帯を貼付し

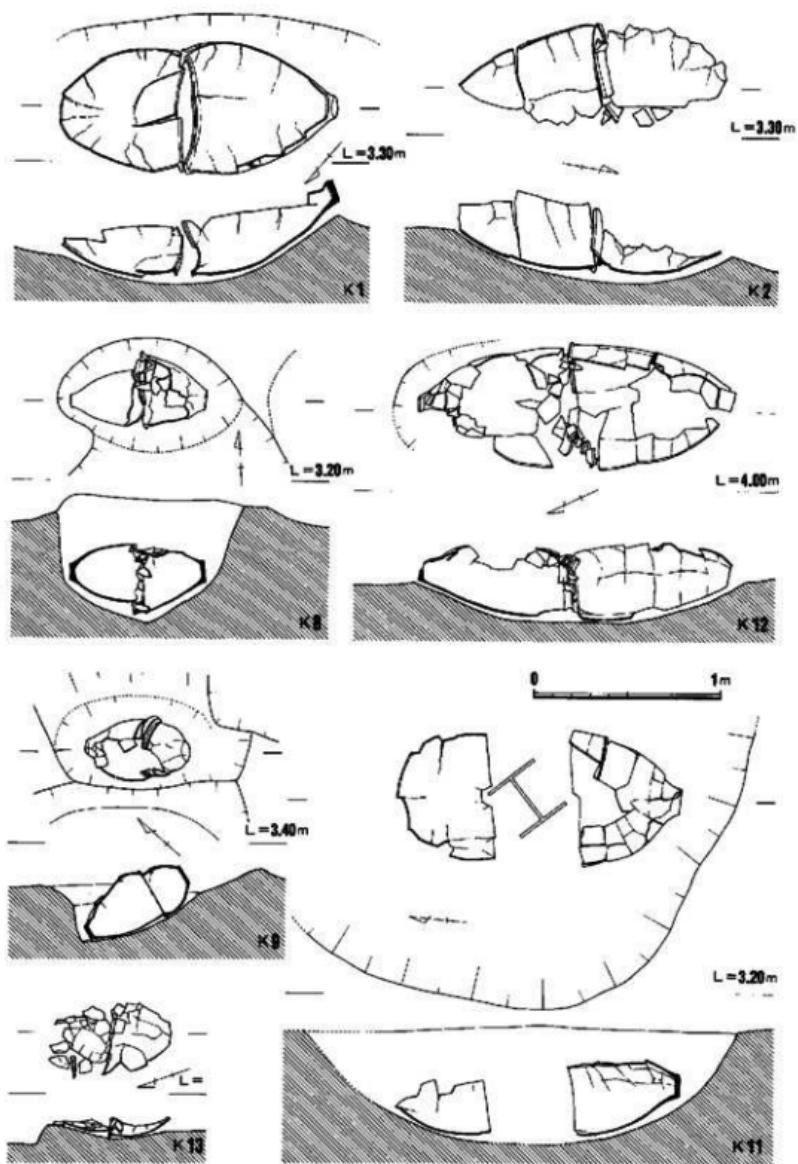


Fig. 85 葬棺墓出土状況実測図 (1/30)

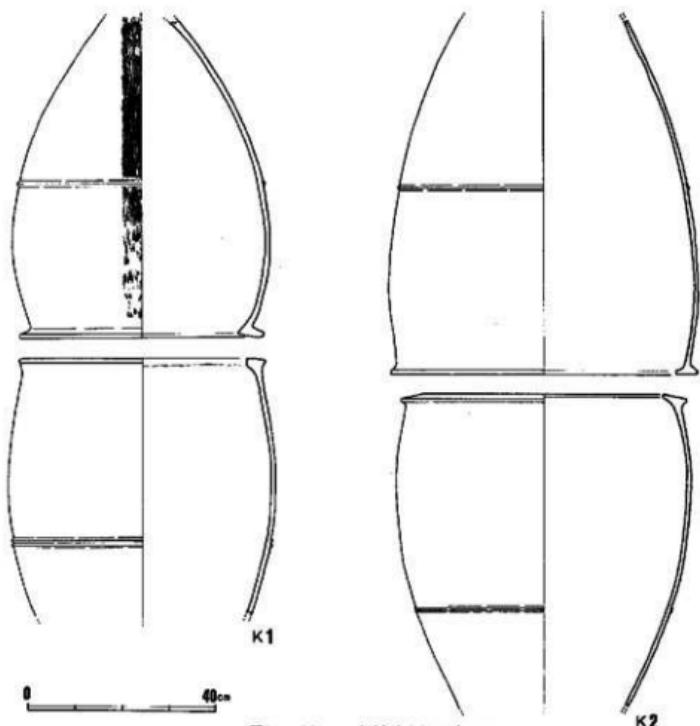


Fig. 86 裔棺実測図(1)

た壺形上器である。底部はあげ底。外面に刷毛目調整の痕を留めている。推定器高47.5cm。

11号甕棺墓 (Fig. 85・87) B区南側に位置する成人用甕棺墓である。工事用のH鋼によつて破壊され、遺存状態は良くない。甕棺はほぼ水平に据えられている。上甕はやや外傾するT字形の口縁部をもつ大型甕棺で、胴部中位に一条の三角凸帯を貼付する。口縁部は内側に肥厚している。下甕は口縁部・底部とも欠失するが、胴部中位にM字形の凸帯をもつことから、1・2号甕棺墓の下甕と同タイプと思われる。両甕とも器面全体に丁寧なまで調整を施している。

12号甕棺墓 (Fig. 85・87) B区南隅で13号甕棺墓と隣接して検出した成人用甕棺墓である。墓塙の方位はほぼ北東一南西である。甕棺はほぼ水平に埋置されている。上甕はやや外傾するT字形の口縁部をもち、胴部中位に一条の三角凸帯を貼付する。最大径は口縁部下にあるが、張り出しが弱い。下甕も同タイプの大型甕であるが、口縁部の内側が肥厚し、凸帯はM字形で

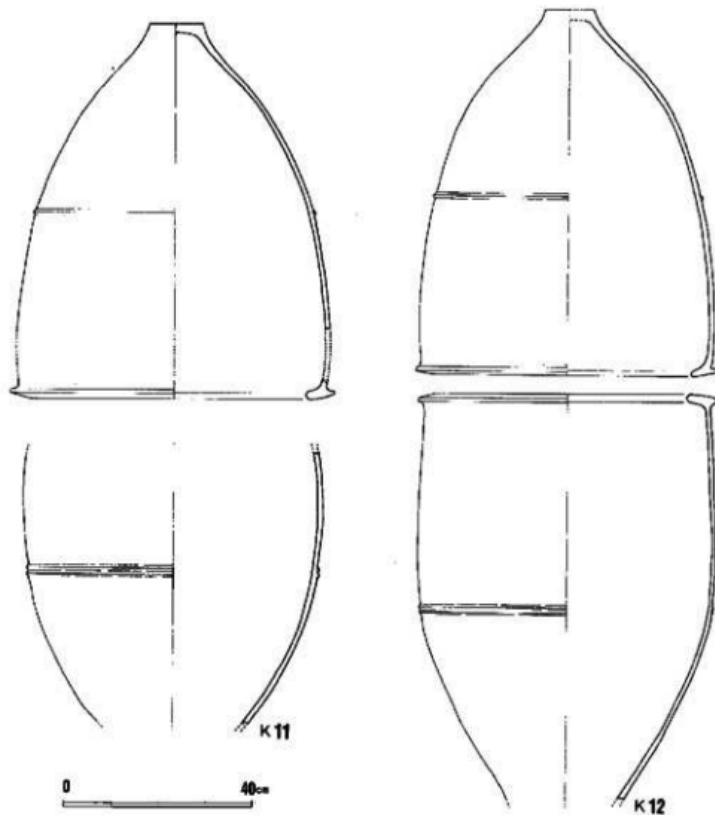


Fig. 87 窯棺実測図(2)

ある。やや長軸である。

13号窯棺墓 (Fig. 85・89) 12号窯棺墓と切り合うが、その先後関係は不明。墓址に水平に埋置された接口式の小児用窯棺墓である。上下棺とも内傾する逆L字形の口縁部をもつ窯形土器であるが、下窯には口縁部下の三角凸帯が認められない。両方とも外面に刷毛目を残す。

以上、各窯棺墓について説明したが、大型窯棺は形態上の特徴よりみて、汲出式の範疇に入り、弥生中期前半代の時期に相当する。小児用窯棺に用いられた土器もおおよそこの時期に比定できよう。

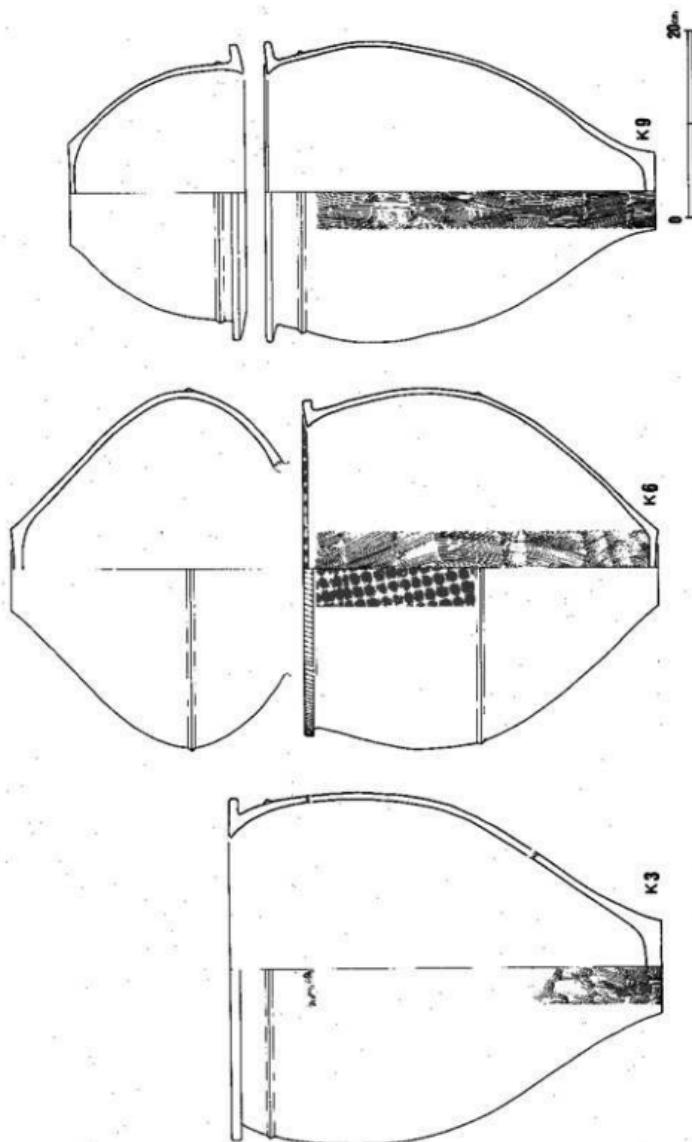


Fig. 88 要船実測図(3)

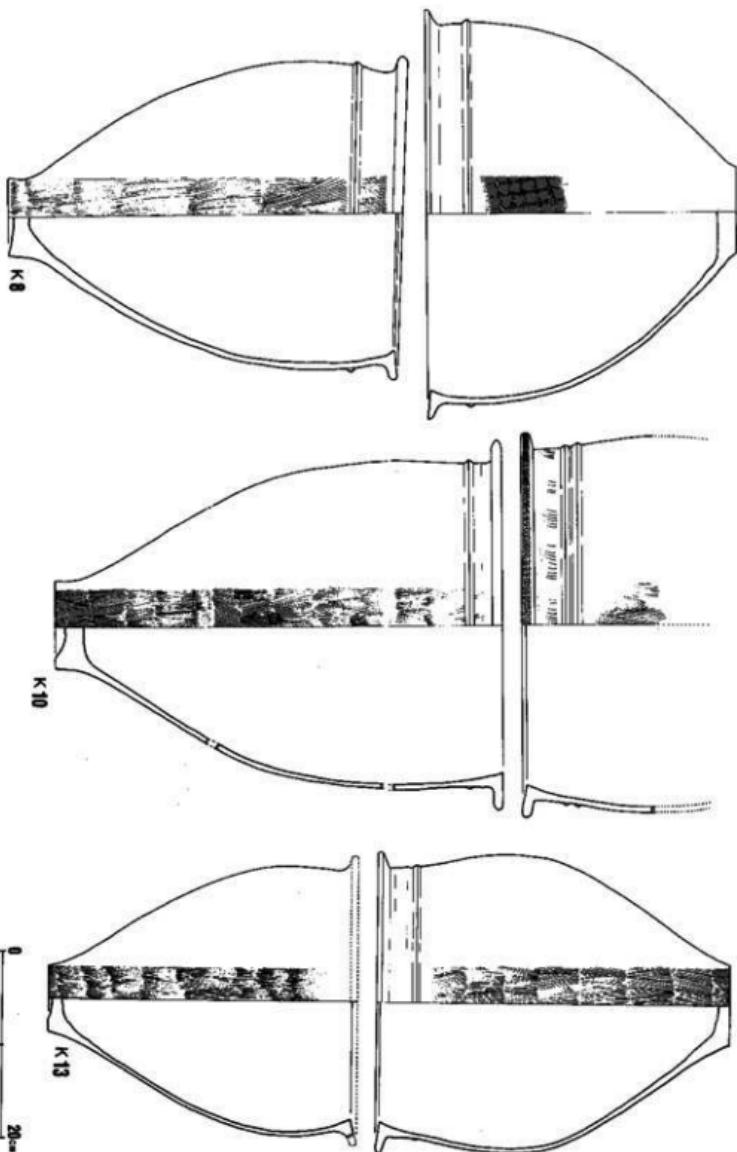


Fig. 89

逐種実測図(4)

2. 小 結

以上、地下鉄1号線関係の博多遺跡群調査区のA・B区について調査の概略を述べてきた。調査報告としては不充分な内容で、誠に心もとないが、ここでA・B区の調査に関する問題点と成果をいくつかまとめておくことにしたい。

A・B区の調査は博多における初めての本格的な調査で、調査員自体博多のもつ諸問題に疎く、当初の段階では問題意識の欠如したまま調査を行なったのは否めないことで、深く反省しているところである。しかし、この調査で得られた数々の資料が、現在の博多遺跡群の調査を導き出したものであって、市街地再開発チェックの引き金となったのは評価されなければならない。

本調査での成果の一つに、東西および南北方向を向く溝(1・2号溝)が発見されたことがあげられる。この溝は雨落溝のように小規模な側溝的性格のものではなく、極めて大規模なもので土地の区画にともなう溝であると推定される。この溝の造営年代は、最下層出土のヘラ切り底をなす土師皿・杯から、12世紀前半以前に求められる。博多の街割については、戦国時代末の豊臣秀吉による太閤街割以前には、永禄6(1563)年以前に描かれたとされる聖福寺古絵図から、太閤街割に類似する街割があったことが知られている。ところがこの東西方向をもつ溝は聖福寺古絵図以前に全く違った方向の街割があったことを初めて我々に示してくれたのである。のちの周辺調査においても、これと同一方向、又はこれと直交し南北を向く溝が検出されるようになり(Fig.9)、この古い街割が博多遺跡群を広く覆っていたことが明らかになった。この方位の区画線は古代における都城と共に通しており、その起源は中国にある。また、この溝の造営年代である11世紀後半から12世紀前半には、博多の地に「宋人百堂」があったとされ、これら東西南北を向く溝の起源は「宋人百堂」の形成と緊密な関係にあるものと思われる。この溝の上層では大量の土師皿類が出土し、A区で検出された多くの火葬墓・火葬施設と時期的にも一致をみることから、この土師皿類がそれらに対する祭祀的な意味をもっていたものと考えられ、その大量投棄によって溝は廃棄されたものと考えられる。この土師皿類の年代は14世紀前半に求められる。のちに調査したD区では東西方向を向く溝が埋まりかけた段階で、その上に火葬頭蓋骨110体分以上を置く特殊な遺構が検出され、これも14世紀前半に比定されている。14世紀前半段階は、鎌倉時代から南北朝にかけての争乱間にあたり、多く戦死者が出たと思われA区およびD区の火葬墓・火葬施設はそれと関係あるものであろう。2号溝上層で出土した雁股式の鐵鎌はこれらのことと象徴している。この時期をもって東西南北を向く街割は廃止され、博多駅堺線道路拡張部や東長寺境内で検出された数石道路のように、聖福寺古絵図に見られるような方向へと土地区画は変換していくのである。これは戦災からの復興と、北条氏以後の新たな博多支配権力の台頭によるものであろう。

出土遺物の総数について付表に記載したとおりである。これは破片数によるもので個体数を表したものではないが、全体的な傾向を知る上では無益ではないと考える。ここでは遺物の大まかな様相を見るために、それらの数量比を試みてみたい。古墳時代以前、近世以降を除いた古代中世、すなわち博多の貿易都市としての特殊性をもつ時期の容器類の構成比は、それを端的に表現するものであろう。総数187,133点のうち、国産陶器類は157,935点で、84.4%を占めるが、これは土師皿類が152,863点の大多数を占め、1、2号溝のように土師皿類大量投棄造構の小破片までを含めた結果である。貿易陶磁総数29,198点のうち、朝鮮陶磁はわずか10点で、圧倒的多数を中国陶磁が占めている。中国陶磁では白磁11,294点で38%、青磁6,799点で23%、青白磁1,078点で3.7%、黒釉磁(天目)111点で0.4%、明染付25点で0.1%、陶器9,881点で33.8%の割合となる。この数値はこれまでに整理の完了した博多第4次調査地点や、本文第3章で述べる祇園駅出入り12・3のものと驚く程の一一致を見る。白磁では碗9,365点、皿1,747点、その他の器種182点で、それぞれ82.9%、15.5%、1.6%を占める。碗ではIV、V、VI類が多い。青磁は龍泉4,741点、同安系1,791点、越州系7点、その他253点で、それぞれ69.9%、26.3%、0.1%、3.7%となる。龍泉では碗:皿:は8:1、同安系では2.7:1となる。陶器ではA群の盤、四耳壺の類1,599点、B群四耳壺、水注類1,352点、C群四耳壺2,765点などが極立って多い。これら陶器類には多くの大型容器があるが、国内の古窯系陶器はほとんど姿を見せず、わずかに14世紀以降になって、常滑や備前系の大型容器が出現するようになる。

これら中国陶磁には多くの墨書きが残されていた。墨書きは底部の露胎部に残されるのが通例で、まれに高台脇にも書かれている。書体は楷書から草書、連筆なものから雑なものまで多様である。墨書きの内容は、1) 中国人姓と考えられるもの 2) 「綱」など職名と思われるもの 3) 数字 4) 花押状文字 5) 假名文字 6) その他に大別される。これらは組合わきって記される例も多い。墨書きのあるものには白磁碗、皿が圧倒的に多いが、器種の絶対量によるものであろうか。中国人姓や「綱」の文字が記されるものに関しては、宋人百堂との深い繋がりがあると思われ興味深い。今後の内容の解明に期待せねばならない。

豪棺墓群の存在も重要な問題の一つである。博多湾をめぐる古砂丘上には弥生中期を中心とした豪棺墓の営まれている例が多い。それらの遺跡と同様に博多での弥生時代集落は発見されていない。また、その経済的基盤としても、後背湿地を利用した水田耕作は可能であるとはいえる、その発展性には乏しいものがある。半農半漁的なものであったのであろうか。同様の問題点をもつ周辺砂丘地域の豪棺墓群とともに、それらの解明が待たれるところである。

第3章 祇園駅出入口2・3の調査

1. 調査の経過

地下鉄1号線の建設工事にともなう博多造跡群での発掘調査は、昭和52(1977)年11月に開始し、昭和54(1979)年12月に終了した祇園駅舎および地下鉄一般部の調査(調査区A~S区)と、本体部完了後発注された駅舎出入口、連絡通路等の調査とがある。出入口の調査は各出入り毎に断続的に行なわれ、昭和59(1984)年4月に予定されているP2出入口1カ所を残すのみとなっている。地下鉄換気塔本体部については、昭和53(1978)年の博多第4次調査と併行して調査が行なわれ、すでに「博多II」福岡市埋蔵文化財調査報告第86集 1982で報告されている。本章で報告する出入口2・3区は、同体道路、大博通りの交差点にあたる部分である。調査対象面積は614.5m²であったが、理設管等が集中するなど調査不能の地区があった関係上、実際の調査面積は434.5m²にとどまった。発掘調査地点が主要幹線道路内で、とりわけ交差点に位置するという想条件から、昼間の道路占用は許可されず、夜10時から朝6時までという夜間調査になった。そのため、路面覆鋼を先行し、発掘調査は覆鋼板をめくって行なうという方法をとった(P.L.31)。一度に占用できる面積が限られているため、A~Gのブロックに分けて調査を行なった。また上部搅乱層部分については機械を用いて除去し、以下を人力で精査する方法をとったが夜間で、光源は投光器などの人工光に頼らざるを得ないため、土層の識別が困難であり、作業員にしても調査経験の長い女性作業員は使えず、土木工事関係の方々に頼らざるを得ないというきわめて悪条件下での調査となった。そのため調査の精度が低下することになったのは、止むを得ないとはいへ極めて遺憾なことである。また全体造構図の作成には測量作業の迅速化をはかるため、ステレオカメラによる航空写真測量を行なった。換気塔に通じる連絡通路にあたるAブロックは店屋町工区で他の出入口と工区が違うため、昭和55年10月に先行調査し、祇園町工区の分は同年11月末からG・F・E・D・C・Bの順に調査し、12月25日に完了した。なお、AブロックとB~Gブロックと造構番号が重なったため、Aブロックの分を変更している。

夜間調査が長期にわたることから、職員の勤務時間の変更を労使協議の上で行ない、それぞれ週39時間の勤務時間を超えないものとし、4名の職員のローテーションで行なうことになった。

発掘調査は、折尾学、飛高憲雄、力武卓治、池崎謙二が担当し、福岡市教育委員会文化課職員諸氏の協力があった。また、調査補助として白石公高、日野孝司、日野光嗣、久保田守、島恭一の援助をうけた。工事を担当された、熊谷組、三井建設、高木建設の方々には全面的な協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

2. 調査の概要

1) 造構と造構出土の遺物

調査した個々の造構、遺物について紙数の都合上、詳述することはできないため、ここでは主要な造構、遺物を説明するにとどめたい。造構別の出土遺物については付表を参照されたい。

1号土塙 (Fig. 90・92~106, PL. 39~44) G区で検出された井戸の本体部で、径90cmの円形をなす。井筒の木質部が痕跡程度に残されている。掘り方は3号土塙(井戸)と区別できなかつたが、本体部は多量の遺物が廃棄されており明確に識別された。出土遺物は、巻頭写真、付表、挿図等に示したように龍泉窯青磁碗や皿、陶器など多量出土しており、それらは一括資料として極めて重要である。これらの遺物は、いずれも釉の変化、破碎などの火熱による影響をうけているが、ほぼ完形に復元しうるものばかりである。おそらく消費者の手に渡る以前の段階で火災にあい、商品価値を失ったため井戸中に廃棄されたものであろうと考えられる。12世紀の半ばから後半に位置づけられる。

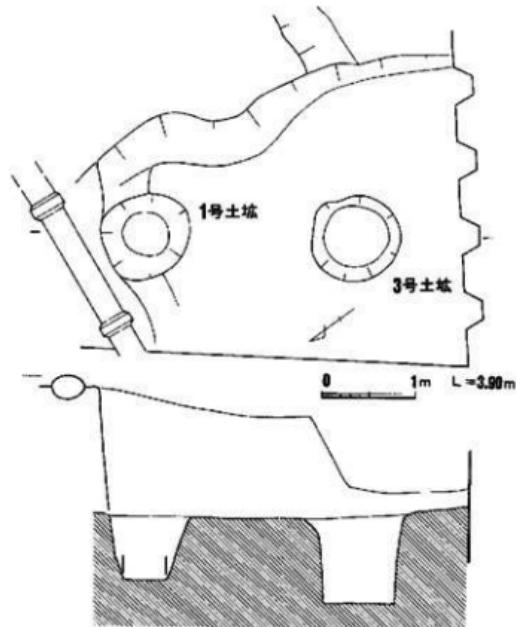
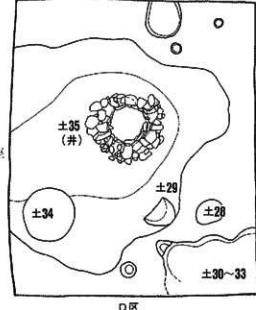


Fig. 90 1・3号土塙断面図

凡て例
図中には次の略号を用いる。
土丸=土
井戸=井
接続線=堀
測量区外に記した数字は、座標値である。



D区

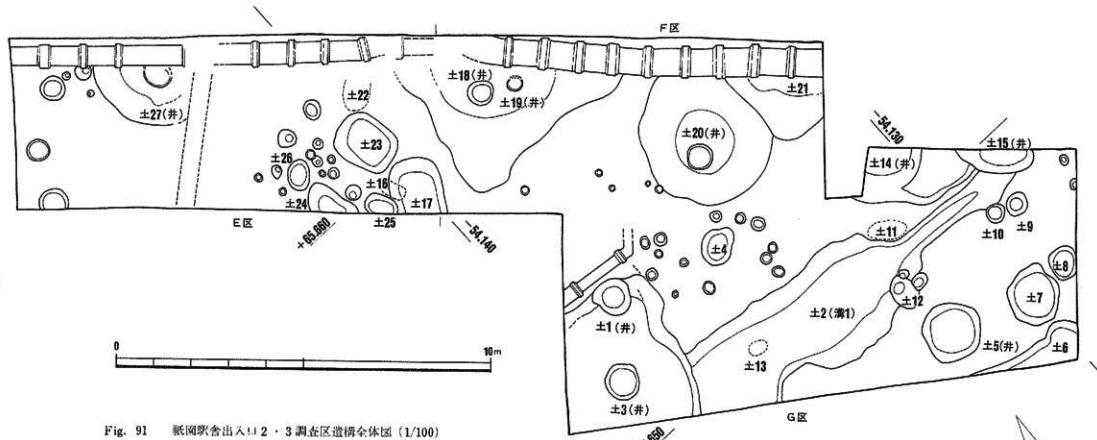
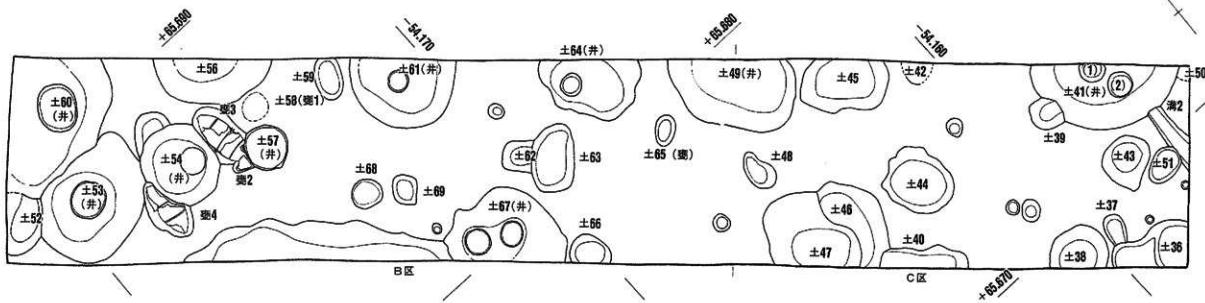
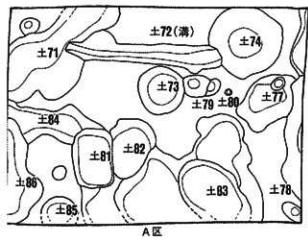


Fig. 91 紙面駁合出入口2・3測量区遺構全図 (1/100)



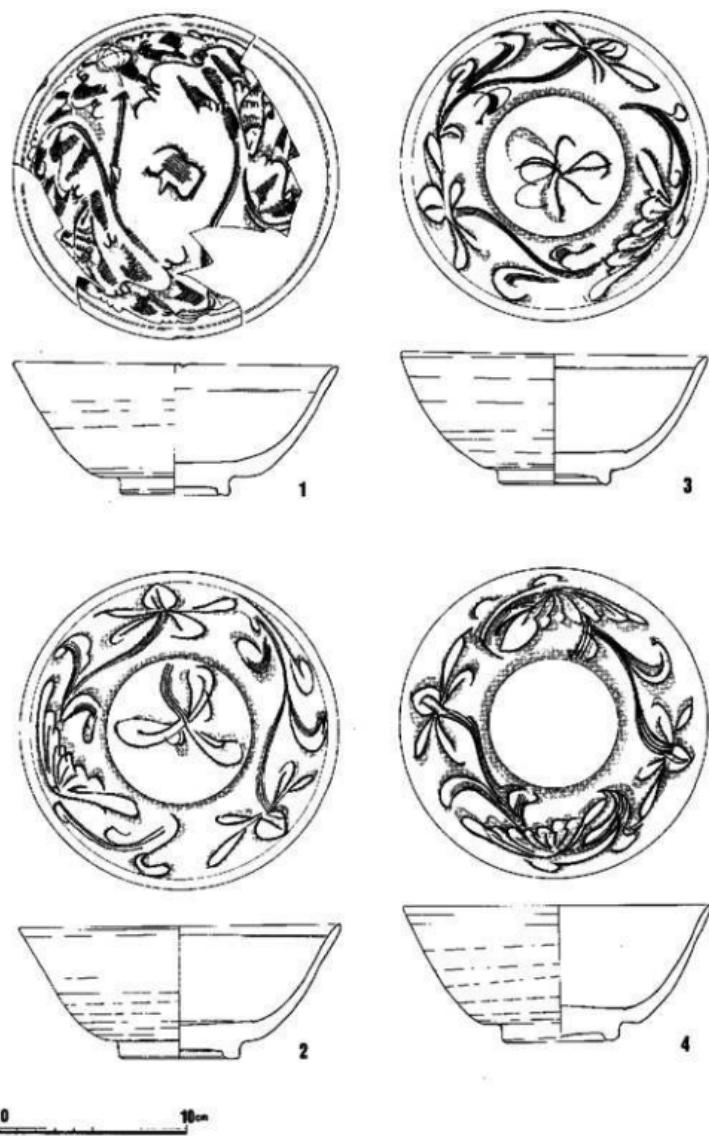


Fig. 92 1号土塗（井戸）出土遺物（1）

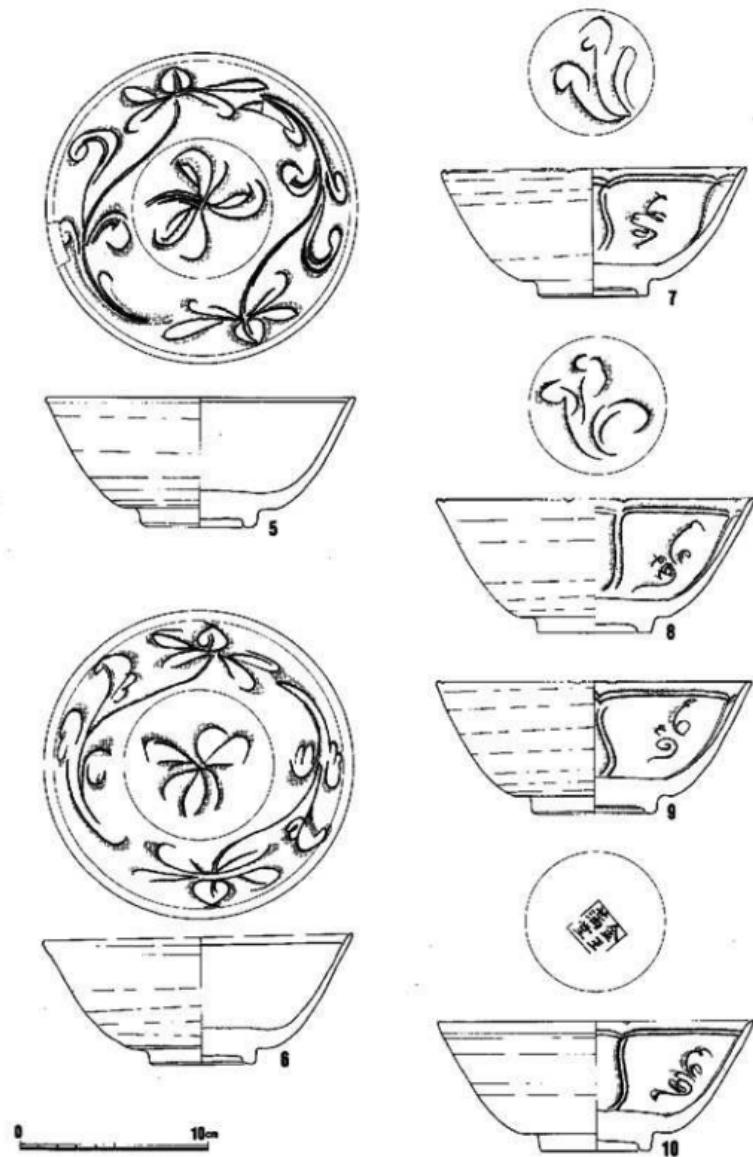


Fig. 93 1号上塗 (井戸) 出土遺物 (2)

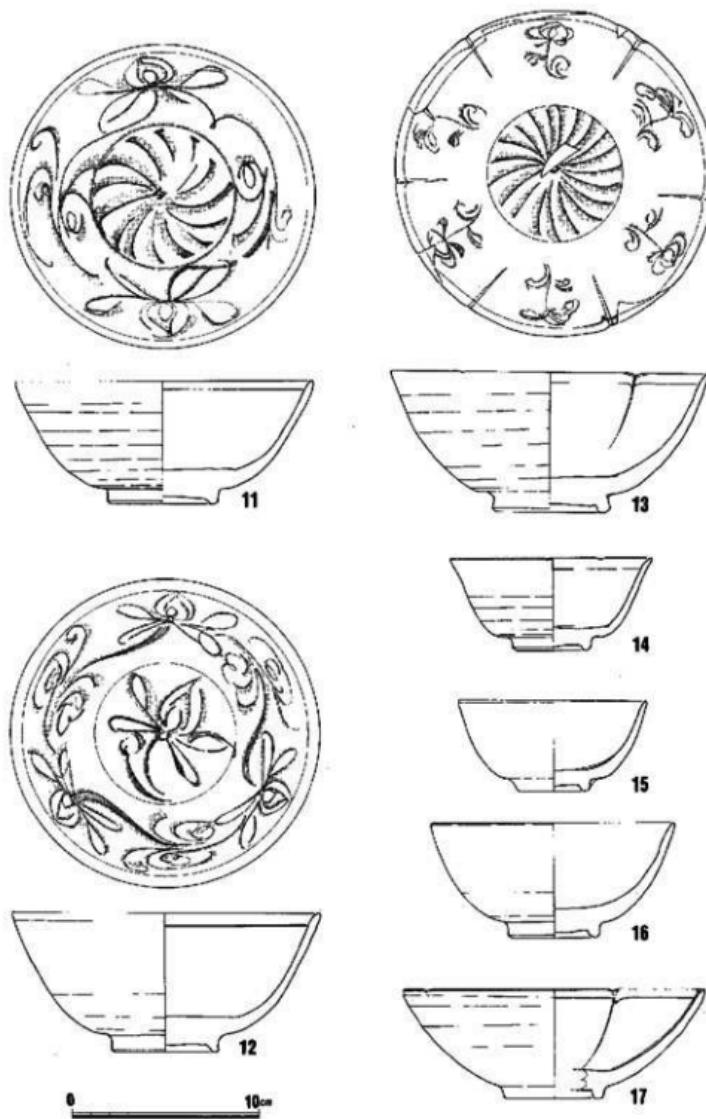
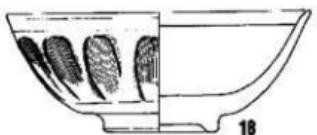
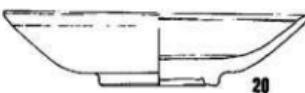


Fig. 94 1号土塙（井戸）出土遺物（3）



18



20



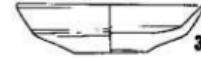
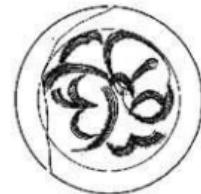
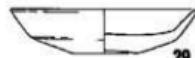
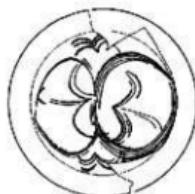
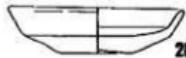
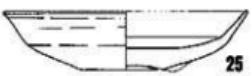
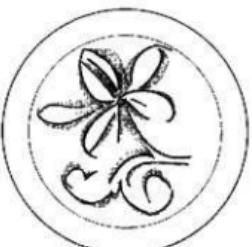
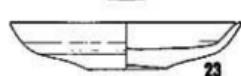
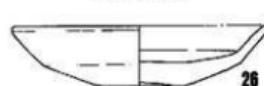
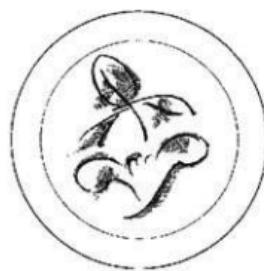
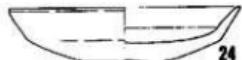
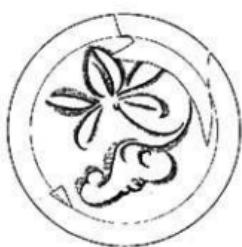
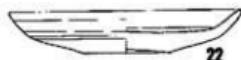
19



21



Fig. 95 1号土塁(井戸)出土遺物(4)



0 10cm

Fig. 96 1号土塚（井戸）出土遺物（5）

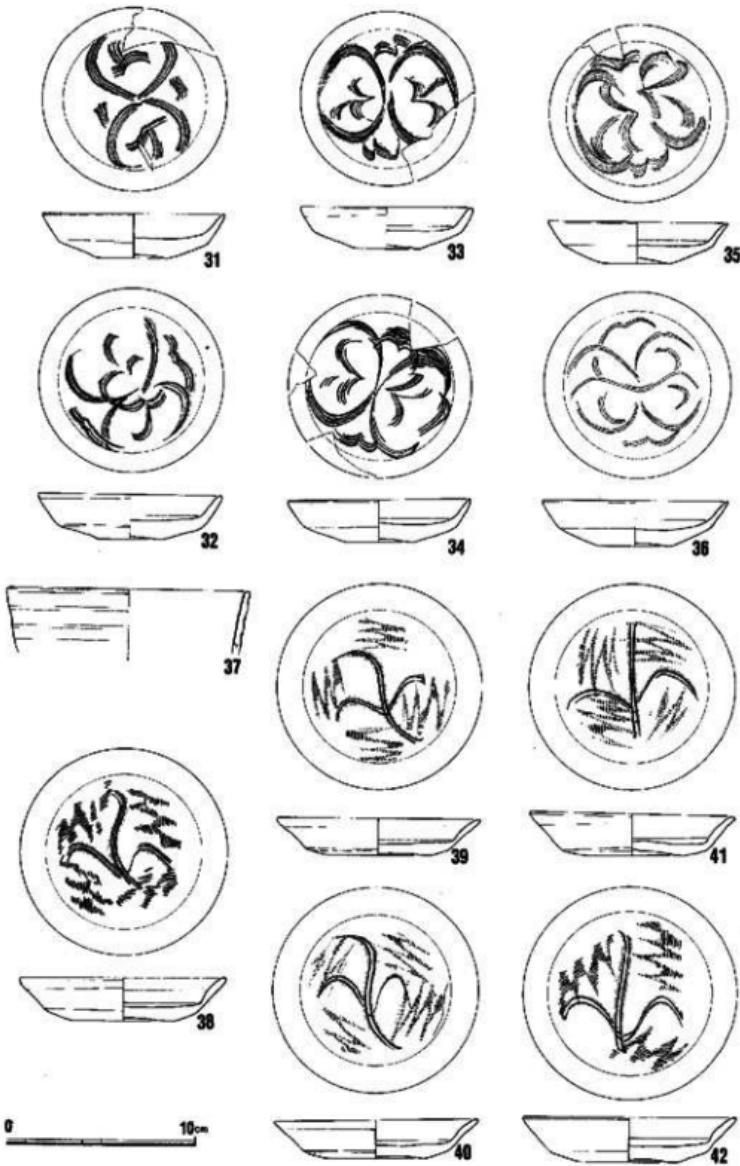


Fig. 97 1号土坑(井戸)出土遺物(6)

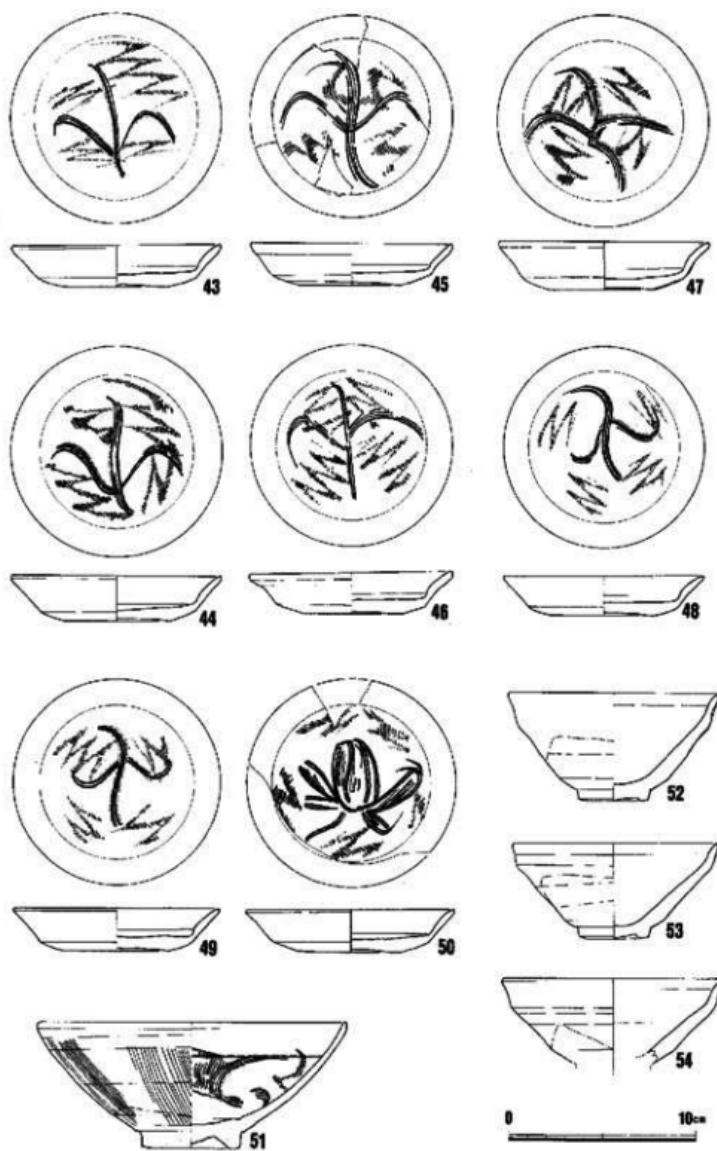


Fig. 98 1号土塁（井戸）出土遺物（7）

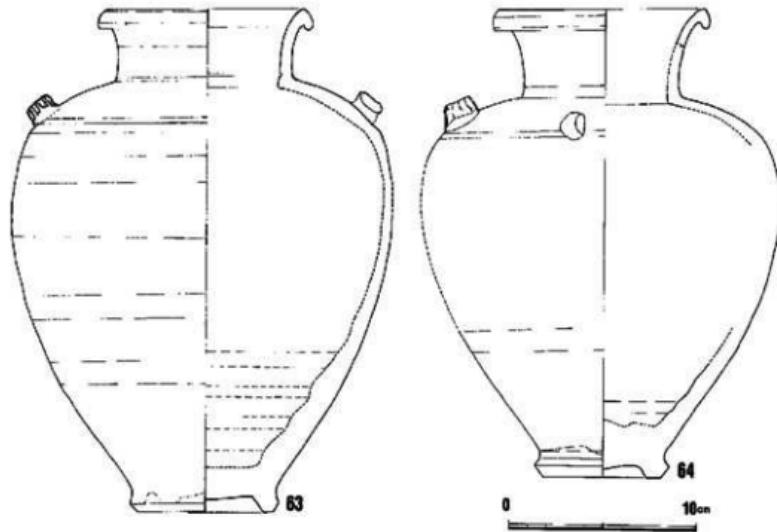
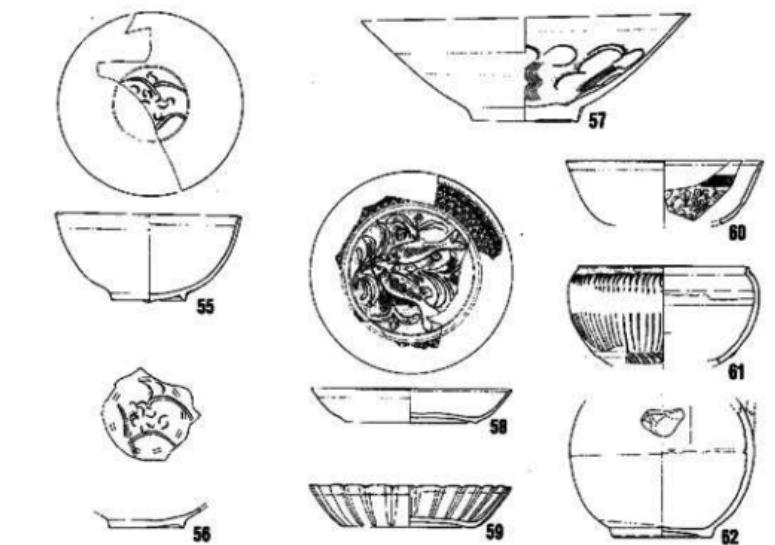


Fig. 99 1号土坑(井戸)出土遺物(8)

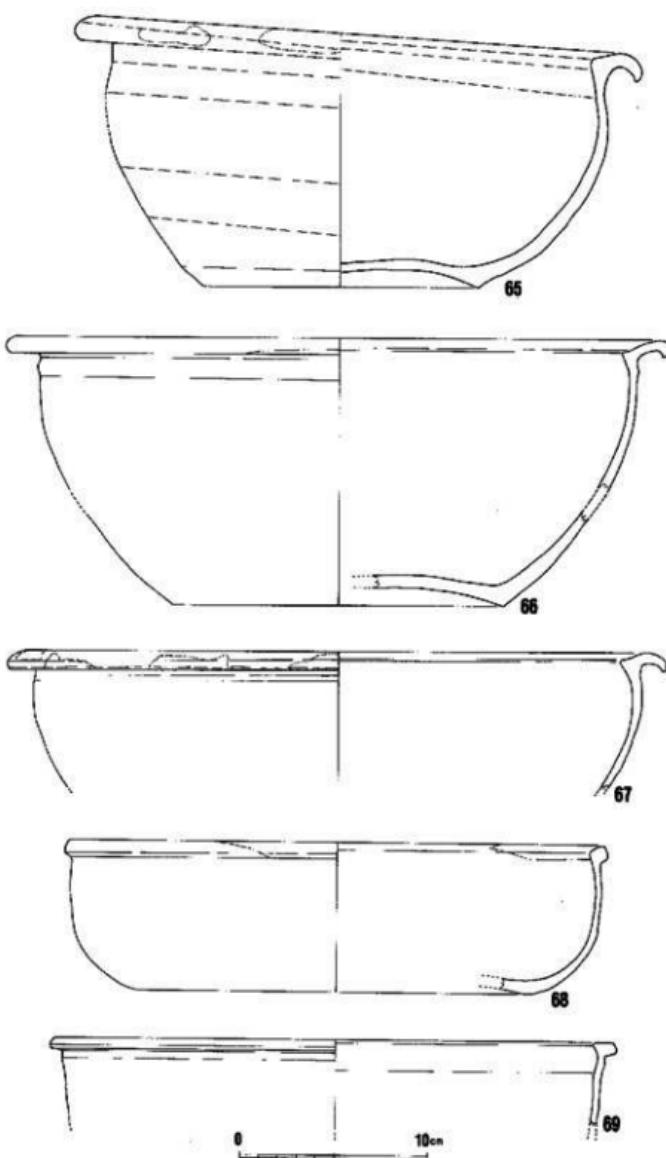


Fig. 100 1号土壙(井戸)出土遺物(9)

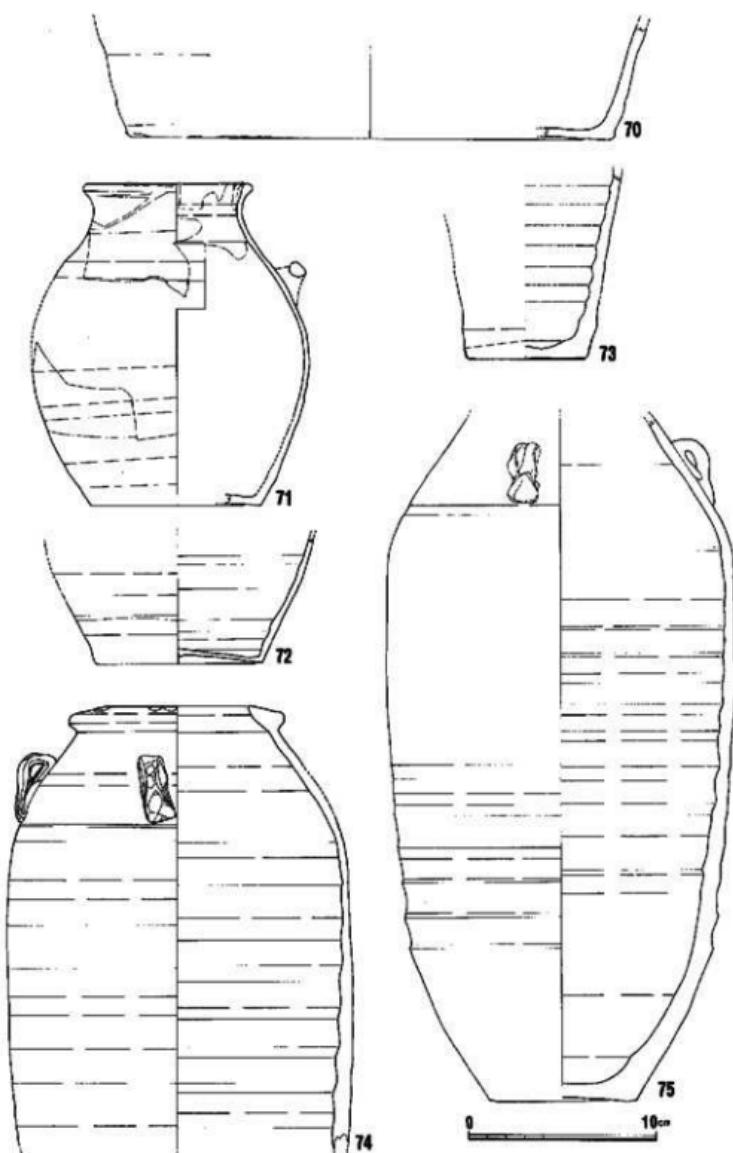


Fig. 101 1号土坑(井戸)出土遺物(10)

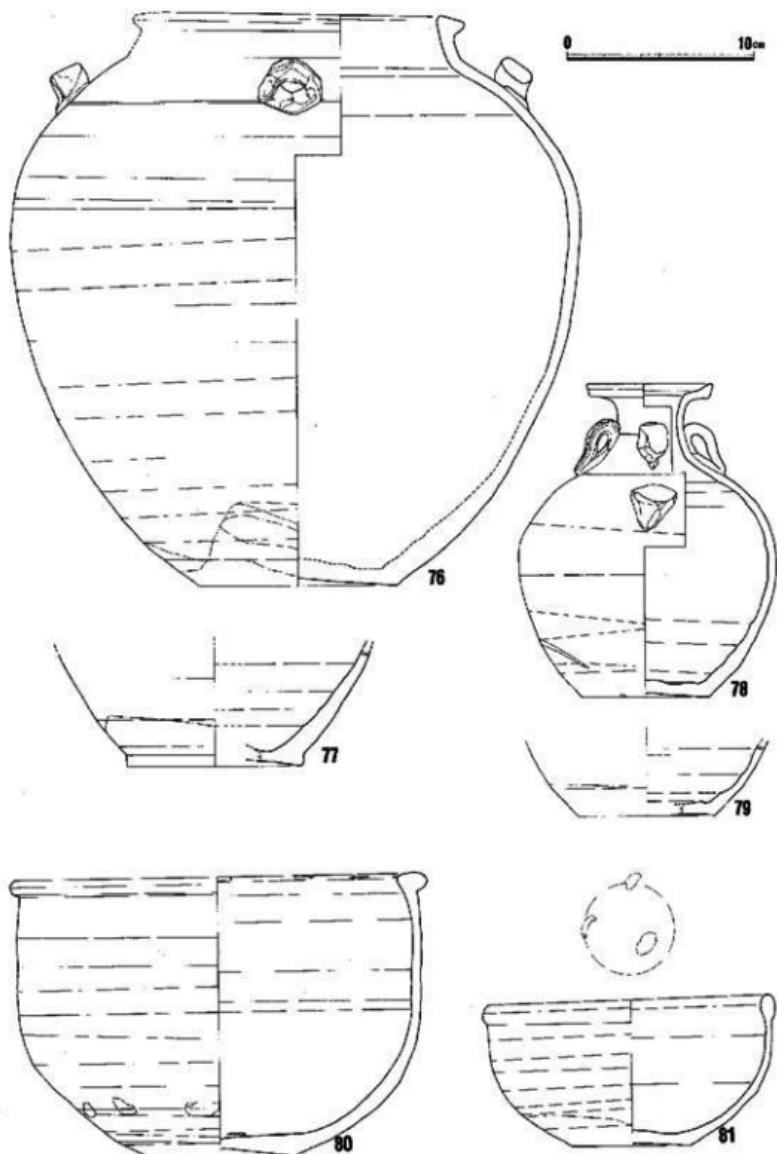


Fig. 102 1号土塚（井戸）出土遺物（11）

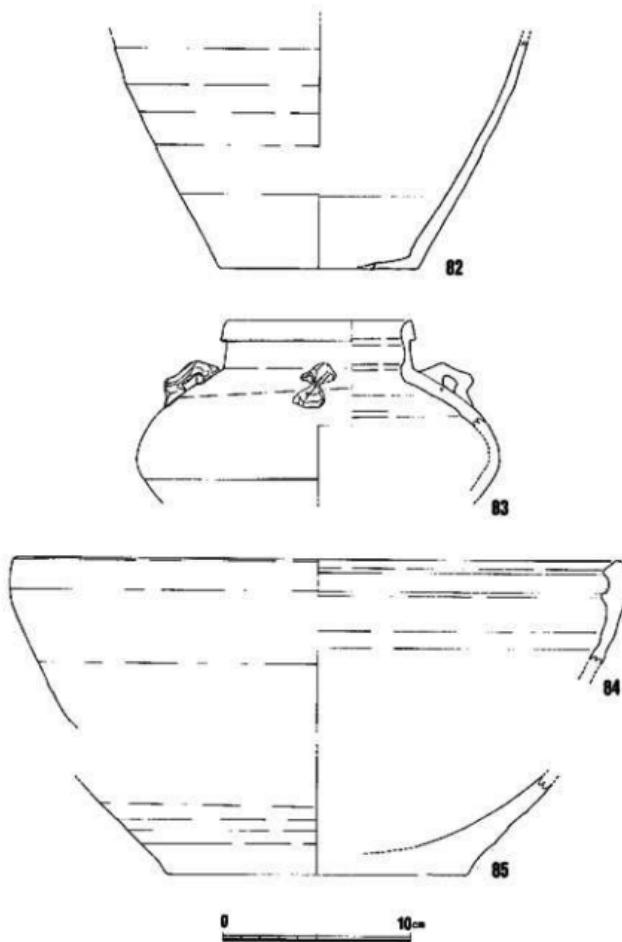


Fig. 103 1号土塁（井戸）出土遺物（12）

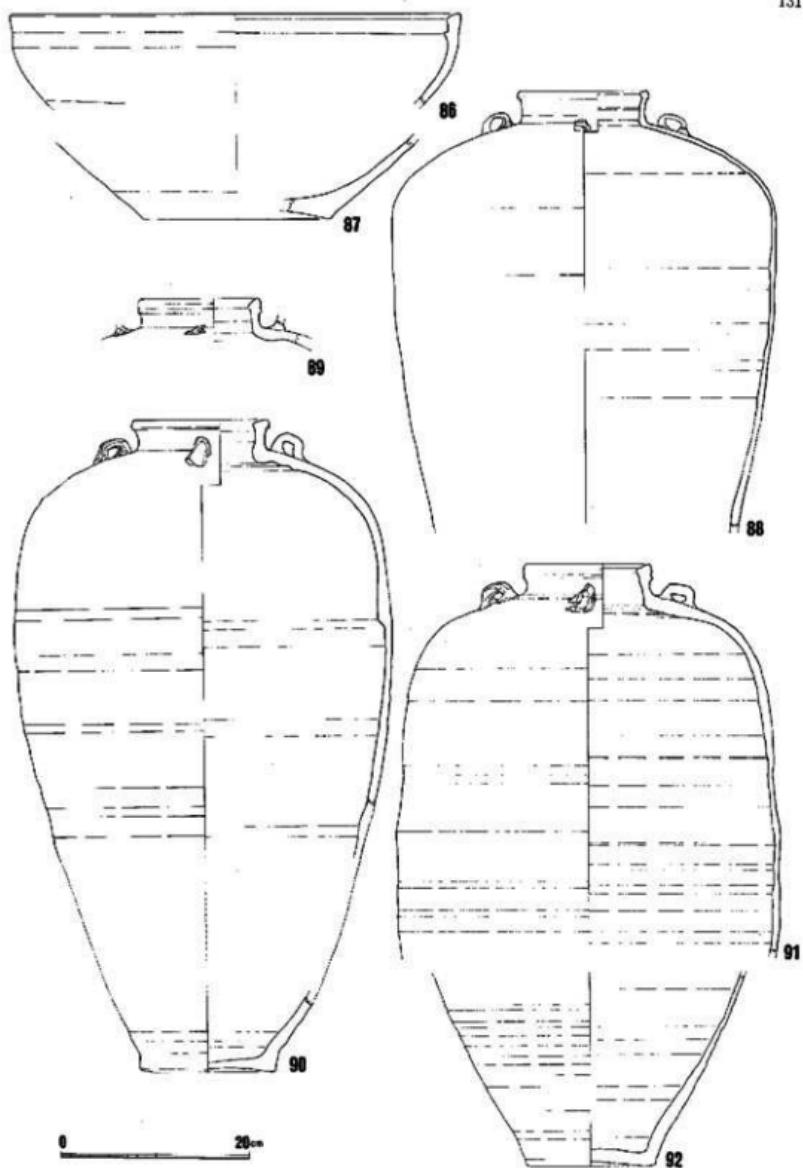


Fig. 104 1号土塁（井戸）出土遺物（13）

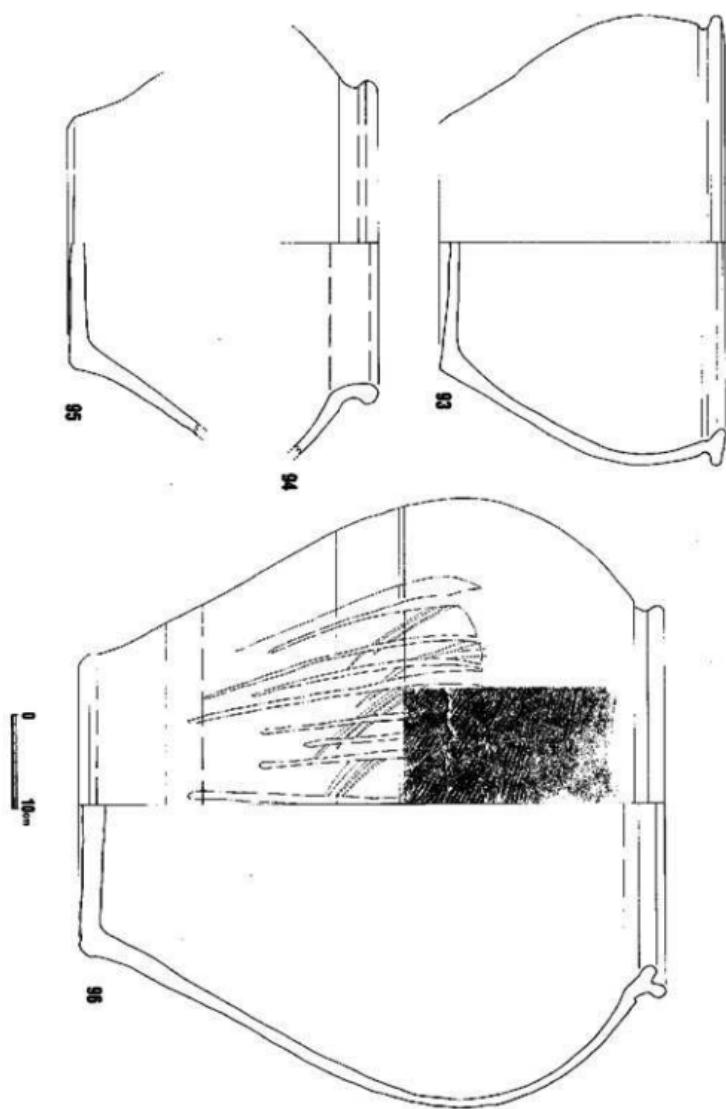


Fig. 105 1号土塁(井戸)出土遺物(14)

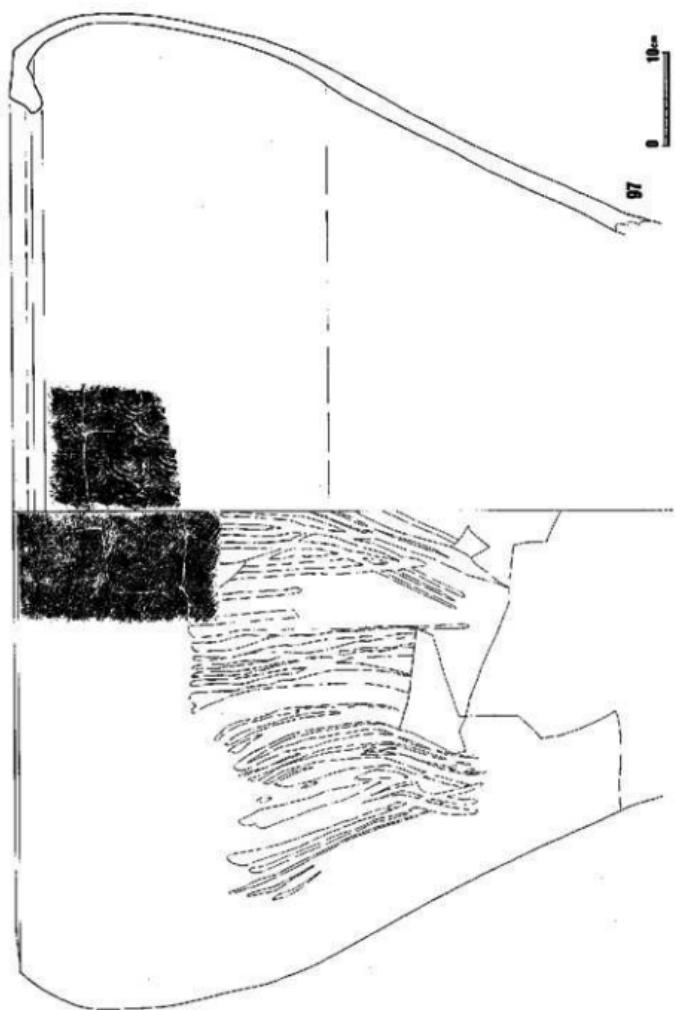


Fig. 106 1号土塚（井戸）出土遺物（15）

II. 博多—地下鉄路線内の調査(1)

134

Table. 3 福岡駅出入り口2・3区土塁1(井戸)出土の遺物

区	種類	文様もしくは成形法	施	土	種	破壊以外の火事の影響	個数
1		六輪花・蓮池双頭割花文	模様やや粗	青灰色透明、水溶性なし、空泡を含む。	変化なし	2	
2		双蓮花双頭割花文、見送文に柳葉	模様	青みある淡オーブ色、質地を含む。	部分的に水溶性が生じている。	7	
3		同上で、見送に柳葉なし	模様、小孔多	ガラス質滑オーブ色、質地を含む。	変化なし	16	
4		双蓮花双頭割花文	+	ガラス質滑オーブ色、質地を含む。	変化なし	6	
5		双蓮花双頭割花文、見送に荷物在	模様、小孔あり	清潔感色透明種、よく気泡を含む。	変化なし	23	
6		同上で、見送に柳葉なし	模様	ホワイト色透明種、細孔に気泡なし。	変化なし	4	
7	瓶	六輪花芸文割花文、見送横小、文有	模様	オーブ色、光沢あり水溶性なし。	部分的に焼成。特に水溶性がある。	33	
8		同上で、見送膨大、文有	模様	青緑色、水溶性なし。	変化なし	17	
9		+	見送に文縫なし	模様	青緑色、水溶性なし。	10	
10		+	見送に「金玉連葉」	模様	青灰色の釉	酸化。手製	1
11	鹿児島	双蓮花双頭割花文、見送花	模様やや粗	オリーブ色の釉は薄いが透明性に富む。	変化なし	1	
12	青磁	双蓮花双頭割花文、見送に蓮花	模様、墨色少	模がかった模オーブ色、透明。	粉々に水溶性に入る。	1	
13		八輪花白摩利文	模様	質地ある模滑色、マット、質地多く不透明。	変化なし	1	
14	中 磁	六輪花白摩利文	模白色	オリーブ色がかった模淡色で美しい。	変化なし	1	
15		「須佐大御命名、風流摩利	模白色	模オーブ色、質地が多く不透明。	変化なし	13	
16		双蓮花白摩利文、模外模入蓮文	模白色	オリーブ色、透明で水溶性はない。	変化なし	1	
17		六輪花白摩利文	中や濃い模色	オリーブ色、ガラス質や透明色。	水溶性一時的でその後は水溶性	10	
18	小 磁	無文	模白色	青緑色、ガラス質で美しい。光沢強。	失光沢、大きめ入出	1	
19		無文	模色やや粗	模緑色、不透明でない。長石質。	酸化、多量入出	1	
20	高台付	双蓮花双頭割花文	模色	青みある青緑色ガラス質、透明種。	酸化と模入出	5	
21	の 国	單蓮花半摩利文、模外模入蓮文	模白色	質地ある灰褐色、なく水溶性なし。	変化なし	4	
22		蓮花に上向の葉、折枝文	模白色	厚肉の用い易い模底。	大きめ入し、なまこ少々	2	
23	平底皿	*	折枝文	厚肉の模底。	変化なし	1	
24		蓮花に上向の葉、折枝文	模白色	青みある藍緑の底 motifs いた様、厚い。	所を残すことをになる。	6	
25		蓮花に上向の葉、折枝文	模白色	オリーブがかったガラス質、厚い。	酸化した水溶性の水溶性。	5	
26		蓮花に上向の葉 motifs 入り、折枝文	模白色	模を帯びた暗い模底。	貢入少々	2	
27		蓮花に上向の葉 motifs 帯び、折枝文	模白色	オリーブを帯びた透明種、厚い。	大きな水溶性に入る。	1	
		無文	模色	化粧の質、厚い。	母所に細かい水溶	1	
		上側部のみで発現不規のもの	模白色	模を帯びた暗い模、やや透明。	2		
28		模文の芯引きあり、つなぎの山二つ	模白色	裏っぽい模グリーン透明ガラス質	周辺的に水溶少々	4	
29		*	模白色	模青色、ピンホールあり。	変化なし	1	
30		*	模色	青っぽい模透明ガラス質	周辺的に水溶少々	3	
31		*	模白色	模オリーブ透明ガラス質	貢入少々	2	
32	平底皿	*	つなぎの山二つ	模オリーブ透明ガラス質	一極に細かい水溶	4	
33	(中や小)	草木の芯引きあり	模色	オリーブがかる透明種	周辺に水溶少々	2	
34		*	模色	青緑色の底底。	変化なし	2	
35		草木の芯引き、草木文	模白色	模オリーブ透明ガラス質、厚い。	大きめ入出。	1	
36		*	模白色	模オリーブ透明ガラス質、厚い。	酸化、模に水溶。	1	
37	西 磁	斜用引で水平に模文を重ねる	模色	青緑色不透明底風。	変化なし	1	
38			模白色	青オーブの質、厚質	変化なし	3	
39			模白色	空気を含む質や小孔め。	水溶少々	15	
40	同窓窓	打文の草文	模白色	明青緑透明種	失光沢	9	
41	同窓窓	内模底刷毛	模白色	主として模オーブ透明種	変化なし	2	
42		古文文が3種	模色	青い模色透明種	一層酸化、水溶入。	4	
43			模ベージュ色	模オーブ透明種	水溶入	5	
44			模白色	模オーブ透明種	変化なし	7	

回	種類	跡地	文様もしくは成形技法	地	土	被	破損は外の六者の影響	標数
45			七文の草文	灰白色	青緑がかった軸	水雲少々		1
46			の模様M形	灰色	灰色を帯びた透明釉、生やけか。	酸化か、崩れい水雲。		2
47			螺旋折れ	灰色	青灰色の暗い色	木雲少々		5
48			模様W形	灰白色	青緑が透明釉、光沢あり。	大きく買入少々		3
49	同安室 系青磁	平塗皿	主文は蓮花	ベージュ色	青緑が透明釉、光沢あり。	水雲少々		2
50			無文、施釉不均質、武昌残	灰白色、粗	透明釉、一面に水雲	酸化、水雲は大事ですか?		1
・			欠けていて分別不能の底部					2
・			・ 口縁部					13
51	灰		体外の文は無い帶模	灰色	透かしてある二個、薄墨。	火に当たっているか?		40
・			同型式でいれも小片					
57	灰		極く浅い外底のみ露呈。水波文	灰白色、やや粗	青みある透明釉	壊れていらるが軸には変化なし		1
58,59	小 瓶	口ハガ、見邊に花枝刺繍文	白色	空色を帯びた透明釉		局所的に水雲		2
60	小 瓶	口ハガ、花文印文字文、型造り	白色	クリーム色を呈する透明釉		失光沢、大きな買入		2
58	青白磁	直	口ハガ、从無脚足文。型造り	白色	薄いリーブを帯びた透明釉	火に当たっているか?		1
59	直	口ハガ、凸舟菊花文、型造り	白色	空色を帯びた透明釉		水雲		3
61	小 瓶	型造り、肩に難ぐ。	白色	空色を帯びた透明釉		局所的に焼ける。		3
62	*	肩で難ぐ。	灰白色	透かしてある二個、薄墨。		水雲		1
63,64	白 瓶	四耳瓶	唇に口唇の特徴は同じ。大きさ	灰白色	光沢ある透明釉	壊れていらるが軸には変化なし		1
64,65	天 目	碗	1個は赤目天目である。	黒褐色、やや粗い。	透かしてある透明釉	局所的に買入あり。		3
73	小山瓶		水びき、筋無しの小山瓶	底ペイジの跡=灰土。	青より上に青釉			2
71,72	可付蓋 休		休	*	休界上部黒開窓	失光沢、大きな買入		2
65			広い口縁	休ペイジの上は白土の跡	鉛素色、深く光沢あり、開窓あり。			1
66,67	青 白		広い口縁	*	鉛素色、深く光沢あり、開窓あり。			2
68	I 瓶		細い口縁、腹部に丸みあり。	*	原色不明、青釉なし。	青はなく焼けた。		1
69	II 瓶		*	*	リリーブ形、つやなし、青釉なし。	青はかせているが、大事のせいか不明。		2003
70	II 瓶		*	*	*			
71	蓋or休		中広口縁の二片あり。	*	鉛素色の釉、光沢あり。			1
74,75	青 白	四耳瓶	口部に縦を巻き上げたような跡あり。	暗褐色の織出な土に石	暗褐色、純光あり。			3
・			灰縫の小粒子入る。	灰褐色		黒色に青色を含む焼け		1
80	休		口で重ね焼き、内底に日落手標	赤褐色	茶褐色光沢釉			2
81	陶 器	小 休	内底に日落2個あり。	*	*	かせている。		1
78,79	青 白	休	盤口。	*	*			2
76	四耳瓶		柄状の内耳がつく。	青褐色、右底標小字少々。	*	一部に青斑剥離。		1
77			振台を作れる	赤褐色	*			1
88	青 白	四耳瓶	V型と型張。外底に一部叩き目。	赤茶色、混じりなし。	茶色の、生地に吸収されたような釉。			1
82	青 白	平底	内底に日落2個あり。	赤茶色、混じりなし。	下半落胎。上半は不明			1
・	四耳瓶		米ぬがりの縁をもつ中型の四耳瓶	赤茶色、混じりなし。				1
89	青 白	四耳瓶	内部に絞込みの跡が残る。	淡ベージュの上に白や	ベンキのようにべたっとした			4
90			致陥所で難いでいる。	褐色の跡が混じる。	茶色の釉が遠くまでかかる。			
91			上と相似	青褐色の土に白、黒跡				
92			同じよどみは、小跡がある。	混じりなし。	肩まで茶色をかける。	悪くカスカスに焼ける。		
83	四耳瓶							1
93	壺		やや外傾する丁字口縁	黒褐色、灰の跡が残り。	黒褐色不透明釉	内外一面に表面剥離。		2
94,95	大 壺		内部・底部は同一焼成	青褐色、白・茶・黒の跡が残る。	褐斑	*		1
96	青 白		外底に下に御の印字目。Y字口縁	青褐色、白の跡が残り。	黒褐色、溶けないところでは上色。	表面に剥離多し。		1
97	青 白		外底に御の印字目。Y字口縁	青褐色の土に白釉の跡が残り。	青色リーブ一層色、不透明釉。	表面に剥離多し。		1
98,99	青 白		内底に御の印字目。Y字口縁	青褐色の土に白釉の跡が残り。	青褐色の土に白釉の跡が残り。	「焼物」に近い表面の不透明釉をかけた。		1
98,99	青 白		外底に御の印字目。Y字口縁	青褐色の土に白釉の跡が残り。	青褐色の土に白釉の跡が残り。	物がこぼれていたとして		1
98,99	青 白		内底に御の印字目。Y字口縁	青褐色の土に白釉の跡が残り。	青褐色の土に白釉の跡が残り。	物がこぼれていたとして		1
98,99	青 白		内底に御の印字目。Y字口縁	青褐色の土に白釉の跡が残り。	青褐色の土に白釉の跡が残り。	内底に青斑剥離。		2

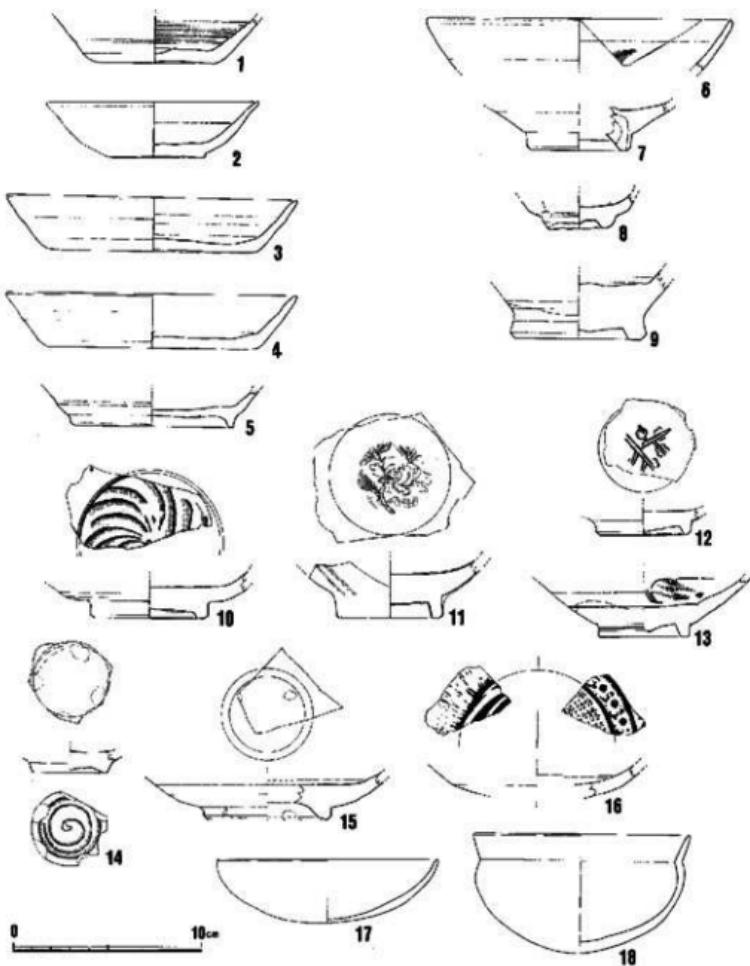


Fig. 107 2号土坑出土遺物

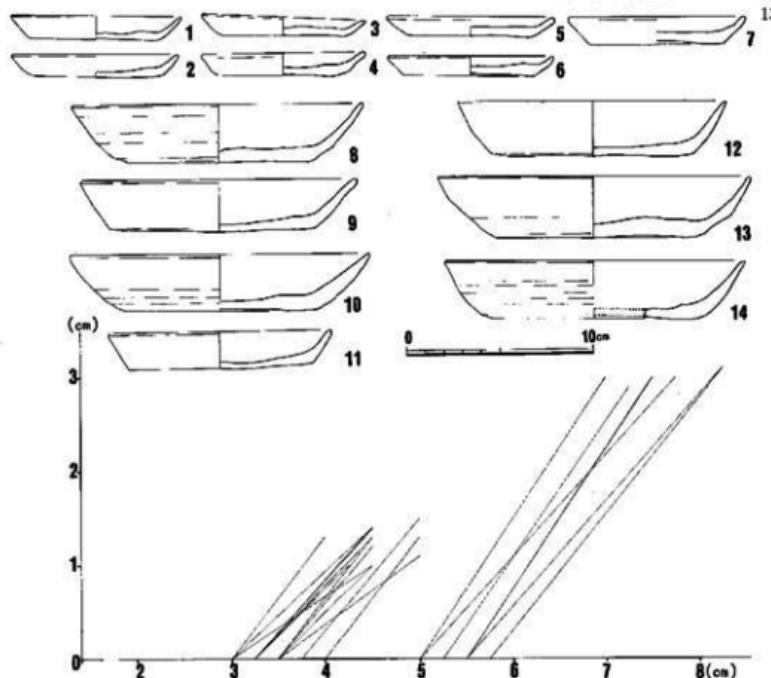


Fig. 108 3号土塁出土遺物

2号土塁 (Fig. 107) G区で検出されている。長軸の方向はほぼ東西を向き、本体部で検出された占期の溝の方向に一致し、溝と考えられるが、両端を他の土塁、壁に切られ明確にしがたい。幅2.6m、深さ0.7mの断面U字形をなす。遺物は混在しており、17、18などの古式土師の一群から、明代の白磁八角形杯(8)、見込みに印花文をもつ青磁碗(11、12)、李朝の陶磁(14、15、16)などが見られる。

3号土塁 (Fig. 108) 1号土塁に隣接する井戸本体部である。径0.85mの正円形で、深さ1mを計る。木質の遺存は認められなかったが、おそらく木桶組であったろう。出土遺物は図示した土師皿類以外は少なく、白磁碗や陶器などの破片が10点程出土しているのみである。土師皿類は計測グラフに見るとおり、いずれも糸切り底で、小皿は底径7cm、口径9cm、器高1cm強に集中し、杯は底径11cm、口径14cm強、器高3cmに集中する。13世紀代に位置づけられようか。

4号土塁 1.1×0.85mの不整円形をなす土塁で性格は不明。II・IV・VI類の白磁碗が多く12世紀前半代に位置づけられよう。

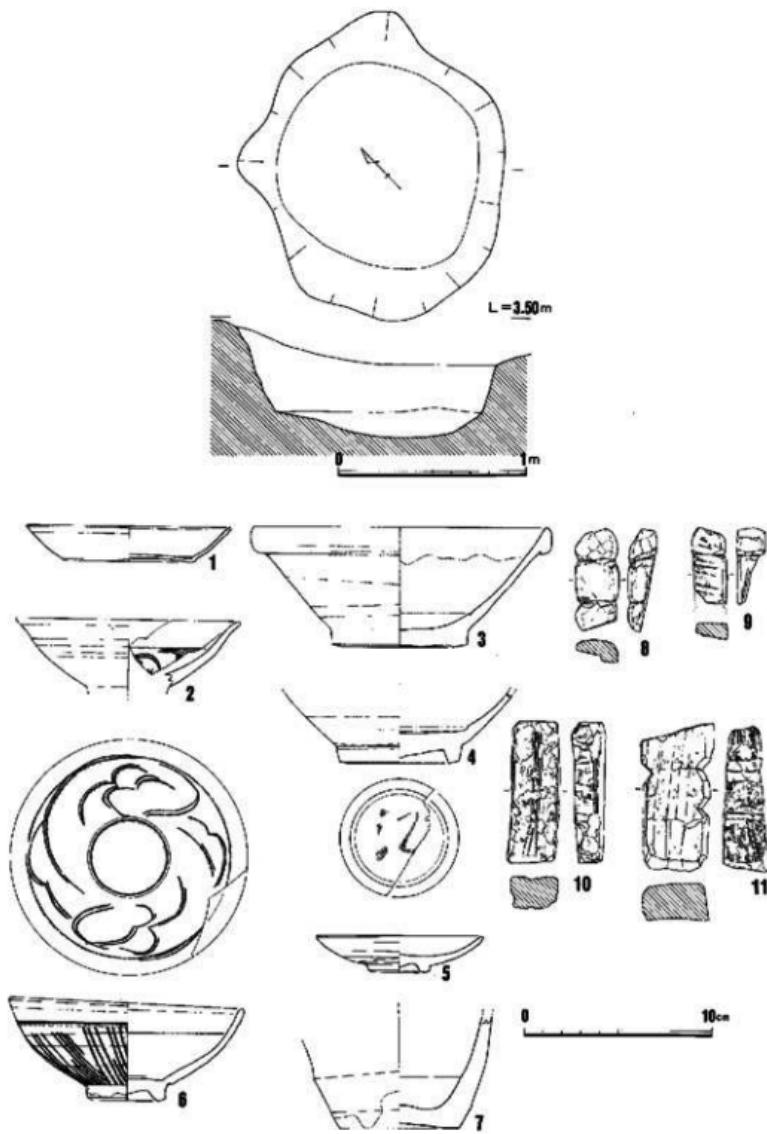


Fig. 109 7号土塚実測図と出土遺物

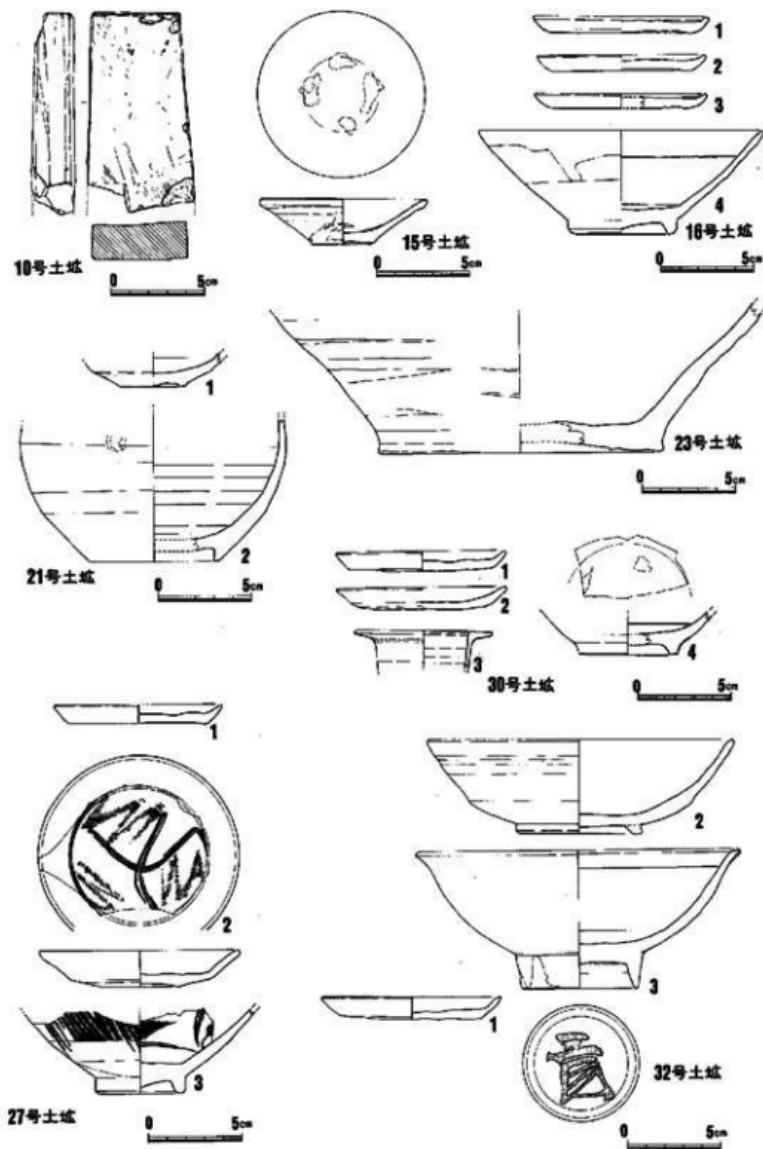


Fig. 110 10・15・16・21・23・27・30・32号土坑出土遺物

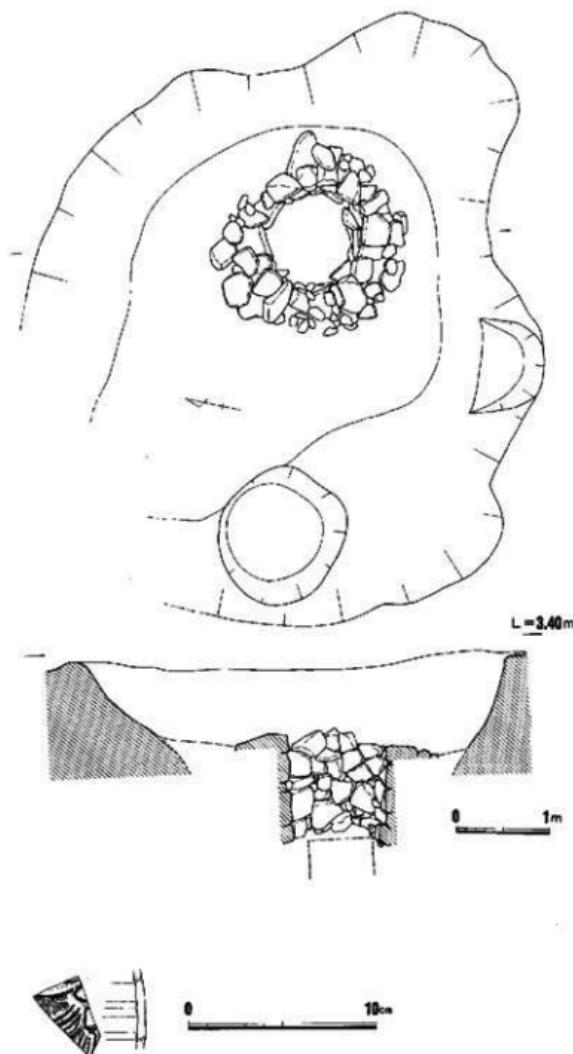


Fig. 111 35号土塙（井戸）実測図と出土遺物

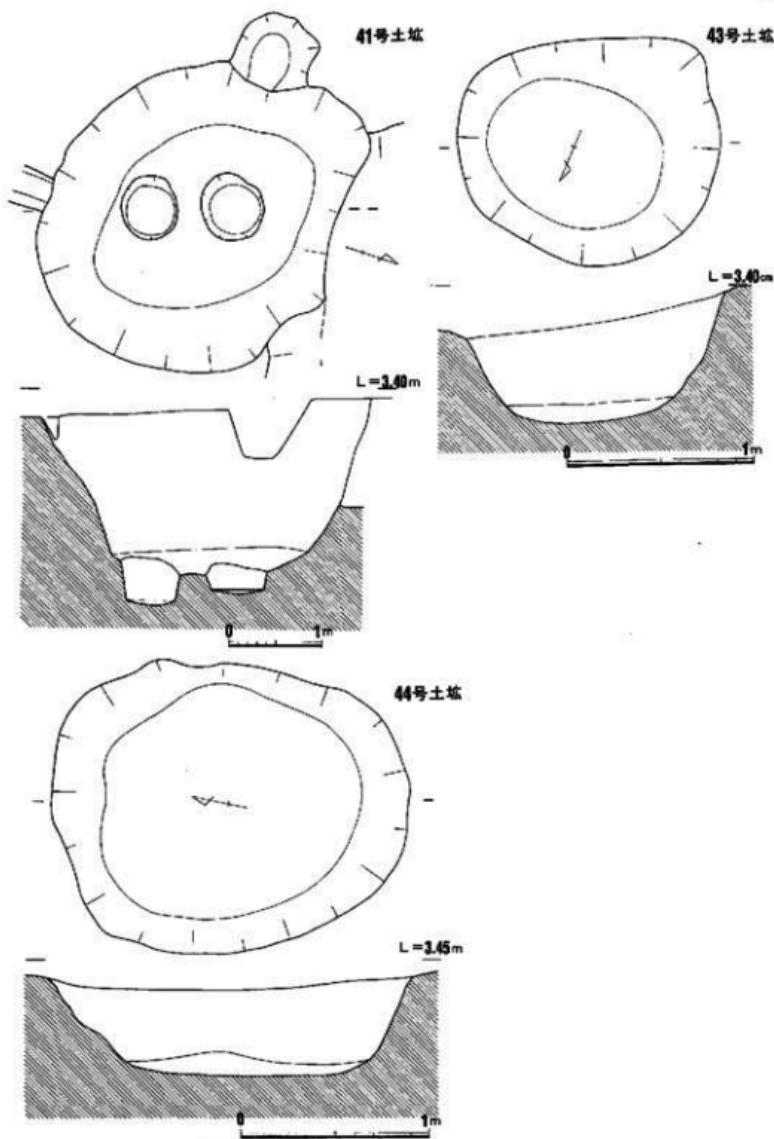


Fig. 112 41・43・44号土塁実測図

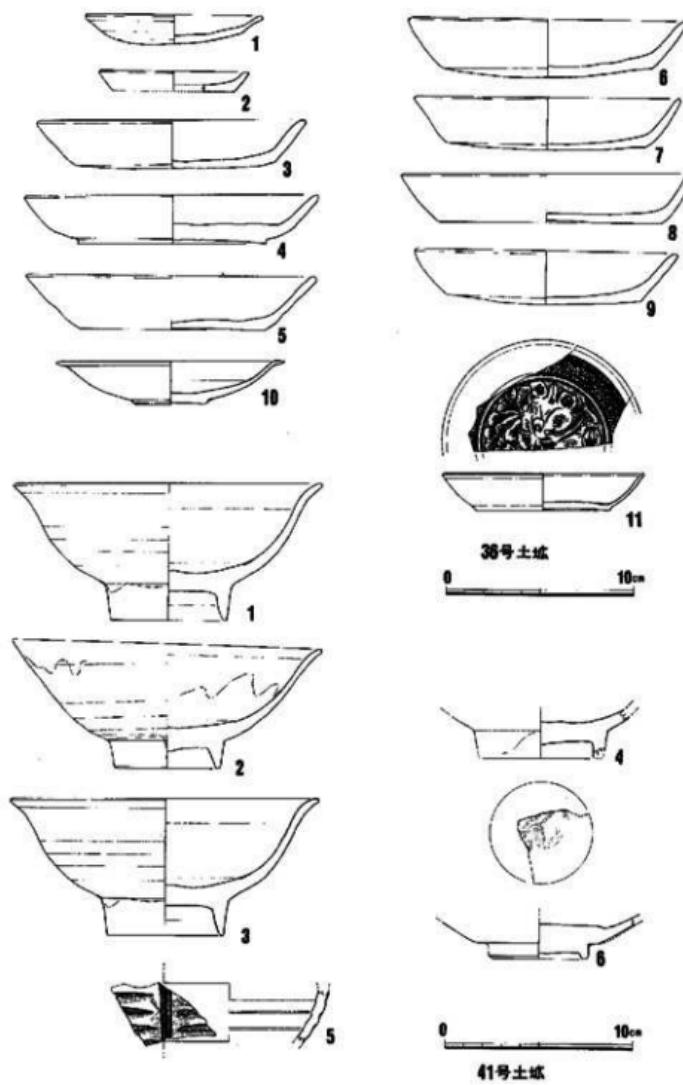


Fig. 113 36・41号土塚出土遺物

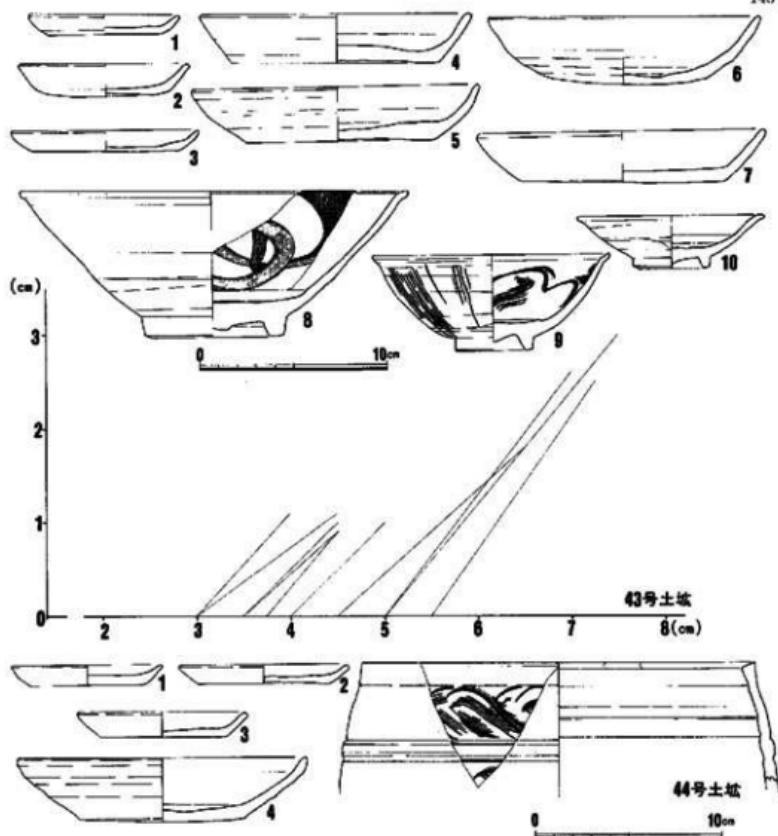


Fig. 114 43・44号土塙出土遺物

7号土塙 (Fig. 109) G区で検出されている。 1.65×1.3 mの長円形をなし、深さ0.5mを計る。廃棄物処理の土塙であろうか。図示した遺物は、1が無文の口ハゲ青白磁皿、2～4が白磁碗で、4の底部には「江」の墨書がある。5は白磁高付皿、6はほぼ完形の同安系青磁碗である。7は陶器C群の壺である。8～11は石鍋破片を再利用した清石製品で、くびれを作る点に共通の特徴がある。石錘であろうか。

10号土塙 (Fig. 110) G区検出の近世の廃棄物処理用土塙である。図示した遺物はきめの細かい土上底である。多くの近世遺物が混じる。

15号土塙 (Fig. 110) G区検出の上塙である。遺物量は多くない。図示した遺物は掲載陶器小皿で半磁質のきめ細かな胎土をもち、見込み目跡がつく。口縁に煤が付着し、灯明皿に使用したものであろう。

16号土塙 (Fig. 110) E区検出の土塙で、 $1.2 \times 0.4\text{m}$ の長方形をなす。土塙墓かと思われる。口径9.5cmで器高の低い糸切り土師皿(1~3)や、白磁碗(4)が副葬品としてあり、越州窯系青磁破片1点が覆土中に混入していた。遺構は13世紀代かと思われる。

17号土塙 16号遺構の直下に営まれていた上塙で、一端は鋼矢板によって切られる。幅1.4mの長方形をなすものであろうが、遺物量は少なく、性格・年代ともに不詳である。

18号土塙 F区で検出された井戸で、内からは白磁・陶器破片が6点と、土師皿類破片若干が出土しているにすぎない。掘り方は広く、19号土塙と区別できない。

19号土塙 18号土塙に隣接する。井戸である。内部からは白磁碗1点と土師皿類少量が出土しているが、いずれも小破片である。

20号土塙 F区で検出された井戸で、掘り方は径3.5mの円形をなし、本体は径0.7mの円形をなす。木桶組井戸と思われるが木質部は残っていない。出土遺物には白磁碗Ⅱ、Ⅳ、Ⅵ類がそれぞれ、1、1、5点のほか、白磁皿2点、龍泉碗皿各1点、同安碗皿それぞれ1、2点あり、青白磁皿も2点ある。このほか陶器6点がある。いずれも小破片で図化しえない。土師皿類も少量で、計測可能なものは1点だけで、口径8cm、器高1.2cmの糸切り小皿である。

21号土塙 (Fig. 110) 20号土塙掘り方を切る。近世の井戸の掘り方であろうと思われるが、大半が土留壁、下水管に切られて明瞭でない。出土遺物には近世の遺物が多く、図示した遺物は1が唐津の皿、2が基盤をなす陶器である。

23号土塙 (Fig. 110) E区で検出されている。 $1.7 \times 1.3\text{m}$ の隅丸長方形をなし、深さ0.7mを計る。出土遺物は多くなく、白磁碗Ⅳ類、Ⅶ類各1点、同平底皿1点、陶器C群の蓋と思われる底部破片1点が見られる程度で、土師皿類も少量あるが、いずれも小破片である。

27号土塙 (Fig. 110) E区で検出された径3m程の掘り方をもつ井戸である。半分ほどは鋼矢板、下水管によって切られている。出土遺物は必ずしも多くはないが、その数量は付表に示すとおりであり、青白磁のIIハゲ印花皿、天目碗、綠釉陶器なども出土している。図示した遺物は、1が上師小皿で、口径9cm、底径7.3cm、器高1cmを計り、糸切り底をなす。2は同安系青磁皿で、見込みに櫛状施文具による十字文と、雷文を描くものである。底部に黒褐色の焦げ跡が残される。3は同安系青磁碗で、外面体部を粗くヘラ削りし、上に太い猫撫きを入れる。釉は高台脇まで施され、オリーブ色の発色をする。内面はヘラと櫛状施文具による文様を入れる。底部胎は分厚い。

30号土塙 (Fig. 110) D区南隅での検出である。30号から33号までの土塙が切りあっており、

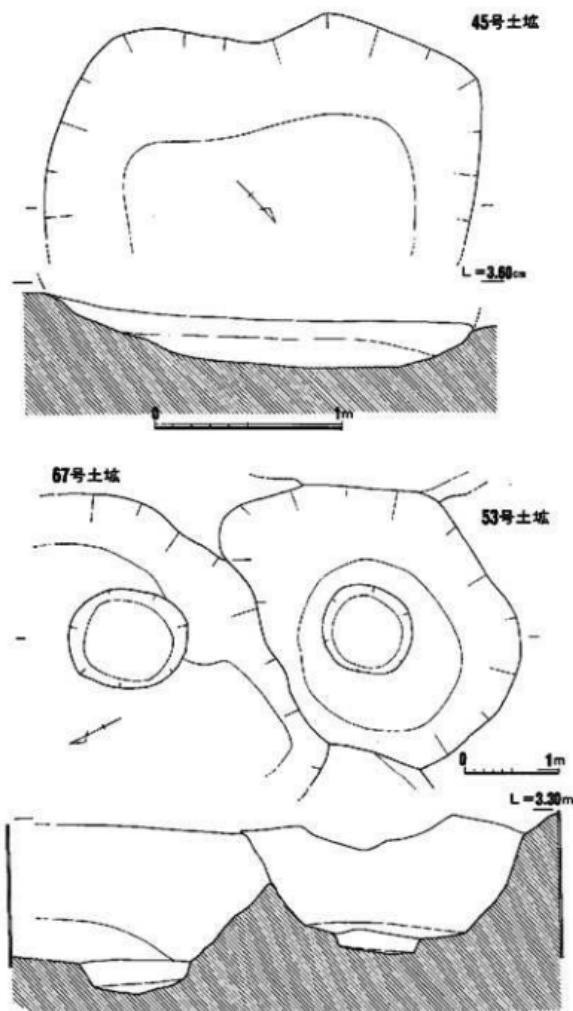


Fig. 115 45・53・67号土堆実測図

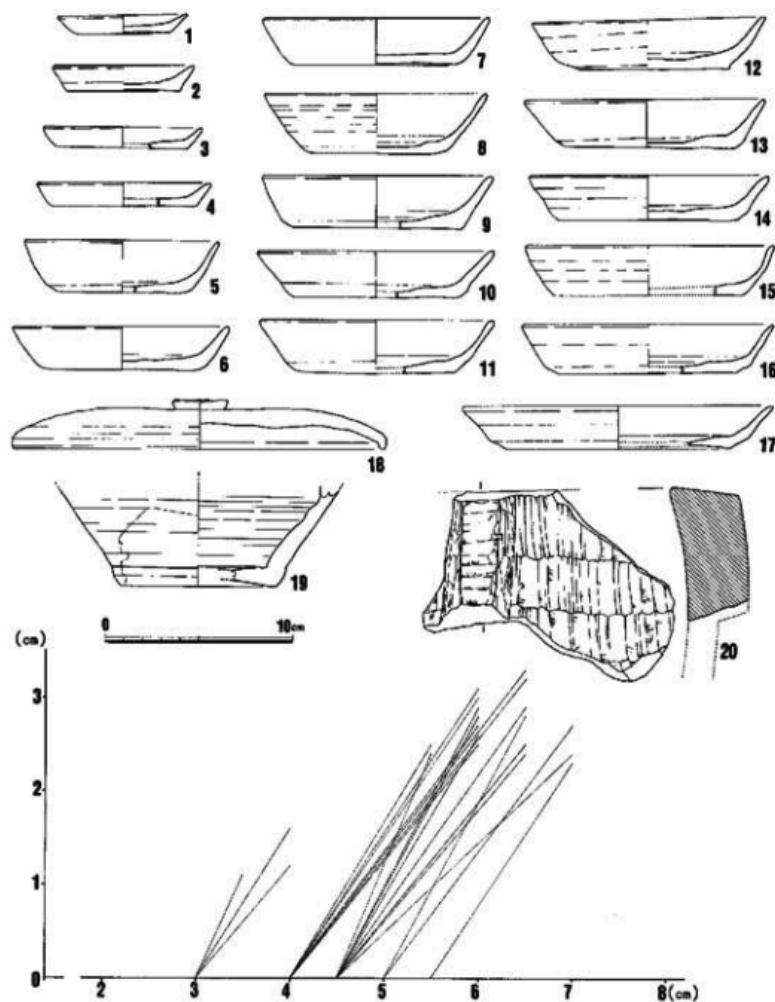


Fig. 116 45号土坑出土遺物

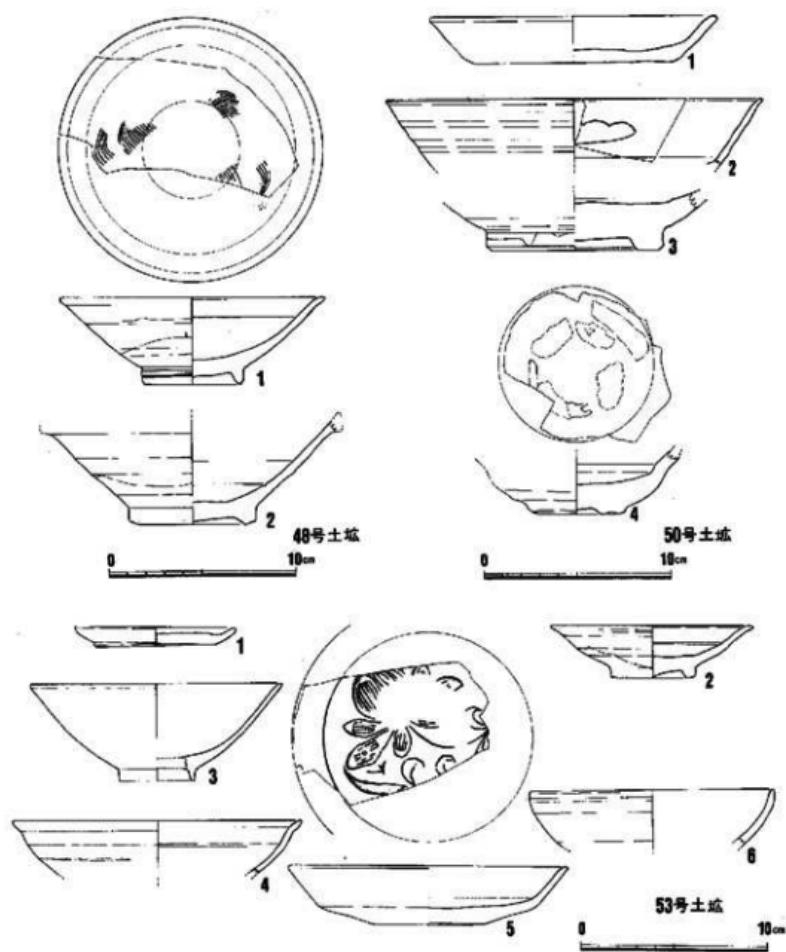


Fig. 117 48・50・53号土塚出土遺物

順に古くなる。出土遺物は多くない。図示したものは1・2が土師小皿で、いずれも系切り底をなし、口径9cm強、底部7~8cm、器高1~1.2cmを計る。この他に同形同大の土師皿1点が加わる。3は青白磁の長頸壺もしくは香かの水平に開く口縁部破片である。胎は白色で内面にろくろ目を残し、内外に空色の透明釉をかける。4は高麗と思われる青磁破片で、暗灰色の土に暗緑色の釉をかける。内底と高台に砂を置き、重ね焼の痕跡が残っている。白磁碗13点もある。

31号土塙 30号土塙に切られ、32号土塙を切る。遺構形態は明確にできない。白磁碗Ⅱ類が6点もあり、目立つ。その他の白磁碗5点がある。いずれも小破片である。

32号土塙 (Fig. 110) 31号土塙に切られ、33号土塙を切る。遺構形態は明確でない。出土遺物は少ない。土師皿類で計測可能なものは1の小皿で、系切底、口径9.5cm、底径7cm、器高1.2mを計る。2は瓦器碗で内外面をヘラ研磨する。底部はヘラ切り後研磨し、台形の高台を貼りつける。3はⅥ類の白磁碗で口縁端が水平に開く。外底露胎部に墨書があるが判読できない。

34号土塙 D区検出遺構で、35号土塙を切っている。近代の井戸もしくは廃棄物処理用の土塙かと思われるが、井戸枠等の施設は明確にしえなかった。

35号土塙 (Fig. 111, PL.32) D区で検出された井戸である。6.2×5.5mの大きな掘り方をもち、一部は鋼矢板によって切られている。一辺30~50cmの大縁を円形に組んだ石組の井側をもち、径1.0m、残存高1.15mを計る。底面には径0.7mの木桶組の井筒があるが、木質部が痕跡として確認されるにすぎない。出土遺物はやや多く、その数量は付表に示しているとおりであるが、越州窯青磁の小壺破片や、青白磁梅瓶の破片などがあり、混在が甚しい。このような円形石組井戸の類例は博多では少なく、わずかに2・3例がみられるのみである。木桶組だけの井戸より後出するもので、13世紀後半以降の所産であろう。図示した遺物は青白磁梅瓶の胴部破片で、外面にヘラの片切形と櫛目で文様を施し、内面にはろくろ目が残される。空色を帯びた透明釉が外面に厚く、内面に薄くかけられ、釉の厚いところでは少し氷裂が見られる。胎は白色で精良である。この他、白磁碗Ⅱ類の底部に墨書の記されたものもあるが、破片であるために判読はできない。

36号土塙 (Fig. 113) C区検出の遺構である。出土遺物の数量については付表に示すとおりである。図示した遺物は1がヘラ切りの土師小皿で、やや丸底をなし口径9.5cmを計るものでこれと同形同大のものが他に2点ある。2は系切り小皿で、口径8cm、器高1.0cmの法量をもち、このほかほぼ同形同大のものが4点ある。3~9はいずれも系切り底の土師杯で、口径15cm前後、器高2.5cm程に集中している。10は青白磁の皿で口縁を水平に引き出すものである。外面底を除いて、全面に淡オリーブ色の透明釉が施され、底部脇は施釉後面取りされている。11は11ハゲで、型作りの青白磁皿で、内面に草花文が施されている。わずかにオリーブを帯びた透明釉が施される。

41号土塙 (Fig.112, 113) C区で検出された井戸である。3.85×3.2mの長円形をなす広い掘り方をもっている。深さも井戸底まで2mもあり深い。径0.7mの井戸本体2基が検出されているが、調査時には掘り方の区別が出来なかったので、合わせて41号土塙と称している。木桶組井戸と思われるが、明瞭な痕跡は見られなかった。出土遺物の数量は、付表に示したようでは、白磁碗が多く、IV類7点、VI類6点、その他7点となっている。図示した遺物は1～3が白磁碗V類で、口縁をやや外に引き出し丸く収め、高台は高く、見込に細い沈窓線がめぐる。1には黄灰色不透明釉が、2には灰青色をおびる厚い釉がかけられている。4は青磁類かと思われる白磁碗底部破片で高台内に墨書きが残されているが判読できない。5は青磁壺の胴部破片で、釉は酸化し茶色の発色をする。内面は無釉でろくろ目が残る。6は龍泉青磁碗の底部破片である。

43号土塙 (Fig.112・114) C区検出の遺構で、1.4×1.2mの楕円形をなし、深さ70cmを計る。廃棄物処理のための土塙か。出土遺物は次のようにある。白磁碗II類2点、IV類3点、VI類6点(VI-4類の鉄絵鉢1点を含む)、匁類7点、その他5点。皿は高台付II類3点、平底III類各1点。青磁は少なく龍泉碗小破片2点と同安系碗1点が見られるのみで、他に青白磁碗1点、陶器3点などがある。図示した遺物を簡単に説明しよう。2がヘラ切り土師小皿、1・3が糸切り土師小皿である。この他4枚の糸切り土師皿もあるが、口径8～10cmにまとまる。4～7は土師杯で6のみヘラ切りである。8は白磁鉄絵鉢で、体部内面に鉄絵の釉下彩を施し、見込の釉を輪状に搔きとる。体部は外方に直にのび端部を外に引き出す。高台は台形をなし厚い。9は同安系碗でやや小ぶり。口縁端を外に引き出す。10は白磁高台付皿で見込の釉を輪状に搔きとるものである。

44号土塙 (Fig.112・114) C区で検出された1.9×1.6mの楕円形をなす土塙で、深さ0.5mを計り深皿状の断面をなす。床面は平坦である。遺物はやや多く、数量は付表に示したとおりである。図示した遺物は、1～3が糸切り土師小皿で口径8～9cmで、器高1cm程度である。4は土師杯で、糸切り底、口径15.6cmであるが底径は9cmで小さく、器高3.4cmを計る。5は越州窯系と思われる青磁で、鉢形をなすものであろうか。胎はミルクコーヒー色で緻密であり、内外面にオーリーブがかった透明釉が施されているが均等ではない。口縁端を搔きとり、珪砂が付着している。外面にヘラと櫛による波状文様が施されている。

45号土塙 (Fig.115・116) C区で検出された遺構で長辺2.3mの長方形を示すものかと思われるが、一部鋼矢板に切られ明確でない。深さ20cm強で浅く、皿状の断面形をなしている。出土遺物の数量は付表に掲げているとおりである。龍泉青磁碗II-2類が6点あることに目をひかれる。この他越州窯青磁1点や青白磁碗2点も含まれている。ここでは上部皿類が比較的まとまって出土している。1～4は土師小皿でいずれも糸切り、5～17は土師杯でいずれも糸切り、法量にバリエイションがある。18は須恵器蓋、19は陶器壺、20は古いタイプの縦耳がつく

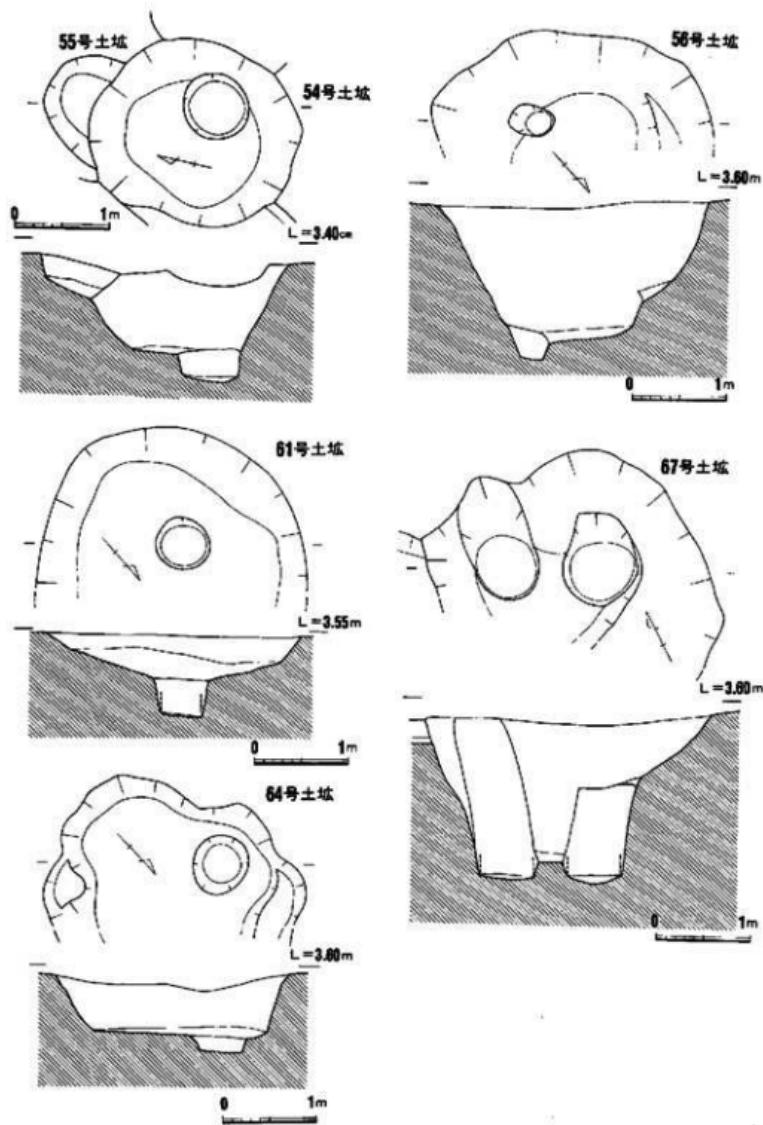


Fig. 118 54・55・56・61・64・67号土坑（井戸）実測図

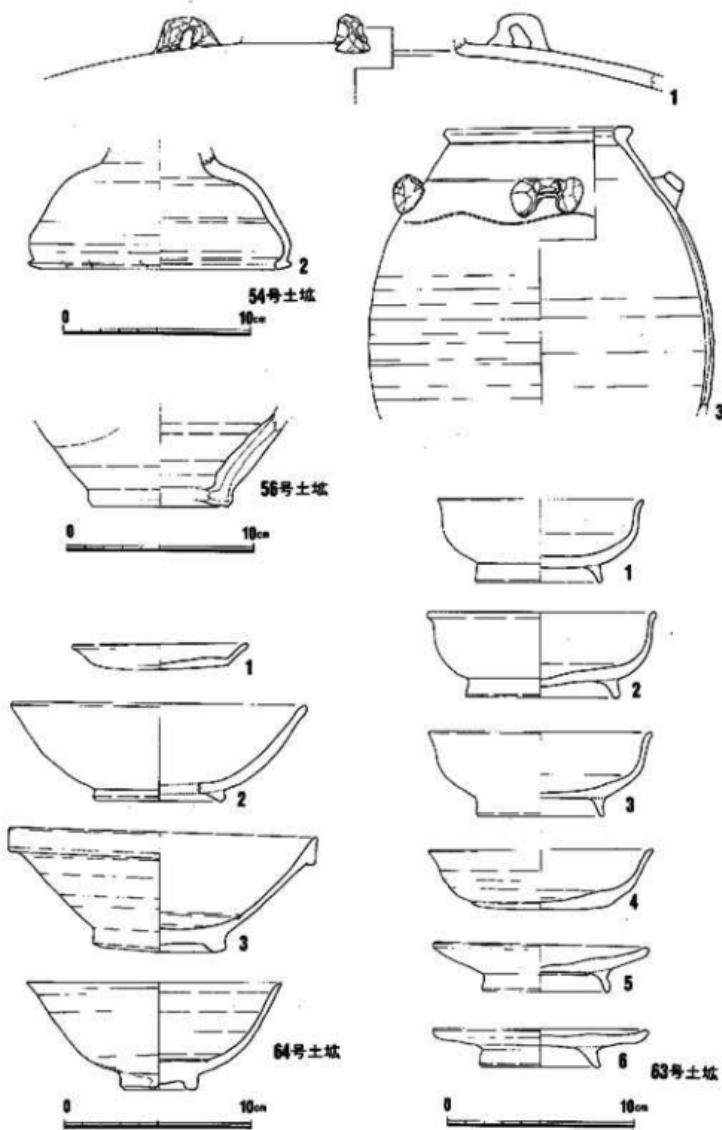


Fig. 119 54・56・63・64号土塗出土遺物

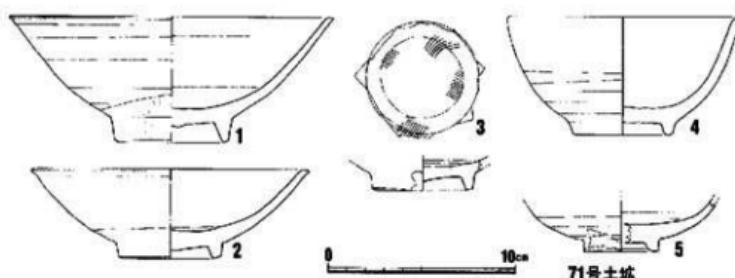
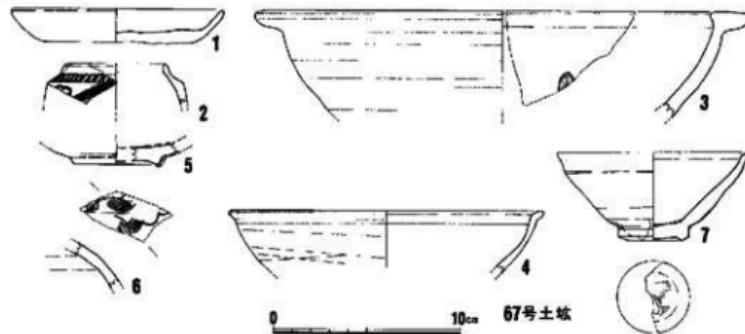


Fig. 120 67・71号土坡出土遺物

滑石製石鍋破片である。

48号土坡 (Fig. 117) C区で検出された。性格不明の土坡である。遺物量は少ない。図示した遺物は1が白磁の浅碗で2が三角玉縁の碗である。

50号土坡 (Fig. 117) C区検出遺構で性格は明確でない。遺物の出土数量は付表に示しているが、白磁碗VI類が6点を数えやや多い。このほか白磁壺、青白磁合子、綠釉陶器の破片各1点がある。図示した遺物は、1が糸切り土師杯で、2が内面底部にヘラ描き文花をもつ緑釉陶器で皿状の器形か。3は分厚い底部の白磁鉢である。4は唐津皿で見込に目跡がつく。

51号土坡 C区検出遺構である。性格は明確でない。出土遺物の数量は付表に示すとおりである。白磁碗VI類が9点と多く、そのほか青白磁碗2点、小碗1点などの破片がある。

53号土坡 (Fig. 115・117) B区で検出された井戸である。67号土坡(井戸)を切る。長軸3.5mの大きな掘り方をもち、本体部は径1mの正円形をなす。木桶組と思われるが、遺存していない。出土遺物の総数量は付表に示す。図示した遺物は1が糸切り土師小皿、2・5が白磁皿

で5の見込には印花文を刻している。3は青磁の碗であるが、骨付部だけ露胎で以外はオリーブ色を帯びた半透明釉がかかる。類例が少なく产地、所属時期等は不明である。4は同安窯系青磁碗。6は越州窯系青磁碗でオリーブ色の釉を施した良質のものである。

54号土壙 (Fig.118・119) B区検出の井戸で、4号・5号甕棺墓を切っている。2.3×1.95mの椭円形の掘り方をもち、井戸本体部は径0.75mの正円形をなす。木桶組と思われる。遺物は少なく、図示したように、B群の四耳壺(3)や蓋(2)、帶A群の四耳壺(1)などの陶器が出土している。

55号土壙 (Fig.118・119) B区検出土塚である。長軸3mの大きな掘り方をもつが、半分が鋼矢板に切られて全体形は明確でない。一側に小ピットがある。遺物は少なく、口径12cm、器高2cmの糸切り土師杯、陶器準A群に属するものと思われる壺破片が出土している。

61号土壙 (Fig.118・119) B区検出の井戸である。径2.75mのほぼ円形をなし、浅い掘り方をもつ。一部鋼矢板に切られている。本体部は径0.6mの小さな円形で、木桶組の痕跡が認められる。遺物は少ない。

63号土壙 (Fig. 119) B区で検出された長軸1.8m、幅1.1mの長方形土塚である。深さ20cmと浅い。ここでは土師高台付碗(1～3)、ヘラ切り杯(4)、高台杯小皿(5・6)が完形で出土し、1は甕墓であろうと思われる。10世紀代に位置づけられる。博多ではこの頃の遺物は僅少である。

64号土壙 (Fig.118・119) B区検出の井戸である。最大径2.8mの不整円形をなすが、一端は鋼矢板に切られている。本体は径0.7mの円形をなす。遺物は少ないが白磁IV類が6点で目立つ。図示した遺物は1が七脚小皿で糸切り、2が瓦器碗、3が白磁IV類、4が内外無文の同安系青磁碗である。

67号土壙 (Fig.118・120) B区検出の井戸である。同一掘り方内に2基の本体部があるが、測定段階では判別できず、一括している。いずれも木桶組の痕跡をとどめている。遺物の数量は付表に示すとおりで、図示した遺物は、1が糸切り土師小皿、2が青白磁小壺、3が口縁を水平に引き出す白釉鉄絵の鉢、4が高麗的な青灰色釉をかけた青磁碗、5が龍泉系青磁皿、6が淡オリーブ色の釉をかけた青磁瓶、7が天目碗で底部に墨書をもつが判読できない。

71号土壙 (Fig. 120) A区検出の遺構である。溝状をなし、主軸を東西にとる。遺物は混在し多様の白磁碗が見られる(1～5)。

73号土壙 A区検出の径1.25mの円形プランをもつ土塚で廃棄物処理用と思われ、小破片が付表に示すとおり多数出土している。深さ70cmを計る。

83号土壙 A区検出の長円形をなす土塚である。一部を鋼矢板に切られる。幅1.4m、深さ0.9mの規模をもつ。付表に示すように多くの遺物が見られるが破片であり、廃棄物処理用か。

85号土壙 A区検出の径1.0mの円形土塚で、深さ0.3mと浅い。付表に示すとおり様々な遺物があるが混在しており、廃棄物処理用土塚であろう。

遺構外出土の遺物

1、ヘラ切底の土師皿、墨書きがある。2、土師器の高台付皿。3、瓦器碗である。4は須恵質の皿もしくは蓋と思われるが、類例のない形で、あるいは近世のものであろうか。5は須恵器杯で底に墨書きがある。6も須恵質の大壺の口縁である。7~11は青白磁であるが、11はいくぶん軟質な感じである。壺の11頸部であろうか。12は白磁香炉で、13~15に示した白磁碗Ⅱ類と胎土も釉もよく似ている。16~28は白磁碗であるが、28は半球形の体部で口縁外反、高い高台がつくもので今後類例が増す見込のもの。29~41は白磁皿であるが、34はⅣ類のスタンプ文様の皿の破片で、「光」かと読みとれる文字が見えている。42~47、74は白磁の壺であるが、比較的にしっかりした造作のものが大きな破片で残っていた点印象的である。48~53は龍泉窯系の青磁である。53は器外に片切形の線条文が施され、器内壁にも輪による刺突文があるが、あるいは龍泉窯系の少し古いタイプのものかも知れない。釉層は薄く、茶オリーブがかった釉である。48、49はⅠ類で、49の文字は通常あまりない逆版である。50はⅢ類、51、52は高台を釉で包み外底面を露胎にするものでⅤ類に近いものである。59も龍泉窯青磁で、双唇碗もしくは孔明碗の上面である。この下に高台がなく底面に穴のあいた腰深の鉢が貼合せられるもので、鉢の外面には通常櫛目文入りの蓮弁文がめぐらされる。Ⅴ類の碗と同時期のものである。54~57は同安窯系の碗である。54は灰白色のやや粗い胎にオリーブを帯びた透明ガラス質の釉がかかる明るい色調の碗。57はかなり大形の鉢もしくは皿で、胎土は肌色を呈し、濃い蜂蜜色の水裂のある釉がかかる。釉はやや厚い。58は焼けすぎで釉質は定かでないが、外面下半露胎の青磁で、上記龍泉、同安以外の窯系のものであろう。60は越州窯系青磁の小壺、灰味の強い釉色で、10、11世紀のものと思われる。同じ窯系に属すると思われる粗青磁碗1個もあるが、器全体に施釉し、壹付に珪砂を付けて重ね焼きしていく、内底に円く目上がり付着している。釉色は灰オリーブ色で、見込みを彫って茶溜りを作る。61は李朝の碗底部。灰褐色に乳濁をかけたような釉色。他に白色陶器碗と灰色磁碗の底部各1がある。又、良質の高麗青磁で器内面に印花文を施した碗片1もある。62、63は天目碗で同一個体と見られるもの。64は唐代湖南省長沙窯の黄磁貼花文褐斑水注の破片で、棕褐色の貼花文の一部を付けて出土した。65は明代の赤絵。器形は不明だが、海老茶色で花文を描き、所々に褐色で輪郭をとる青緑もしくは黄緑色を帶びた小円を置いている。66~68は陶器A群に属する。67は黒褐釉の鉢、68は黄釉系の壺底部片である。A群では他に黄釉盤の数々と行平などがある。69は暗灰褐色の泥のように細密な土に、大小の黒ゴマが混じる胎土で、黄褐色の不透明な釉がかかるが、大部分は剥落している。70~73、75は陶器B群に属するものであるが、72の器形は珍らしい。76もB群かと思われるが、酸化焼成のせいか胎土は橙色、釉は茶褐色に発色している。又、74は白磁としておかしくない胎土、釉で、一応白磁に分類したが、作行はこのB群に類似している。77、78は黒褐釉のかかる陶器C群。他に

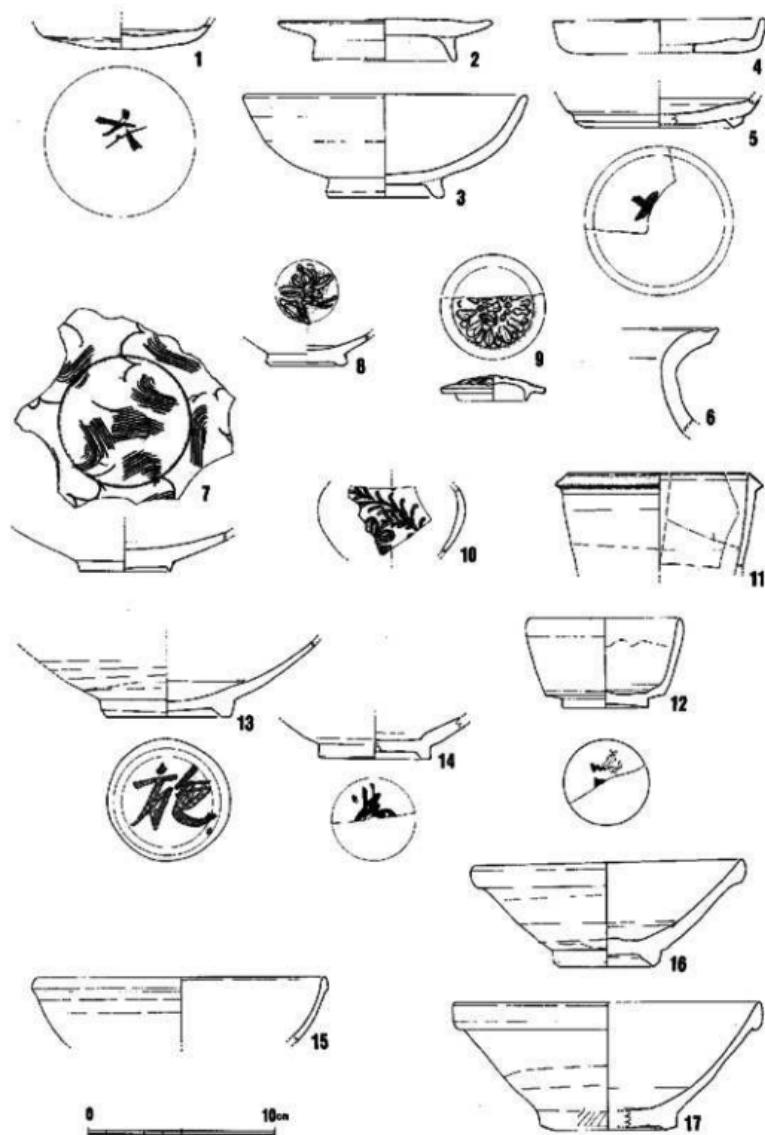


Fig. 121 造構外出土遺物（1）

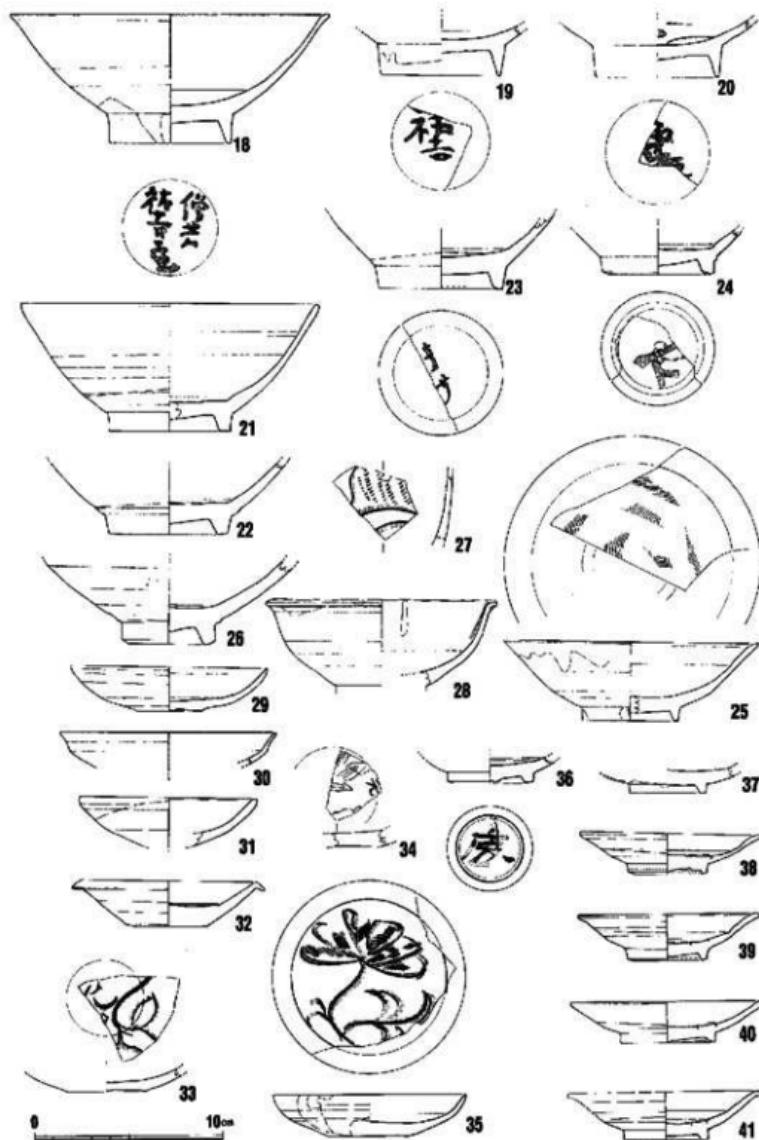


Fig. 122 遺構外出上遺物(2)

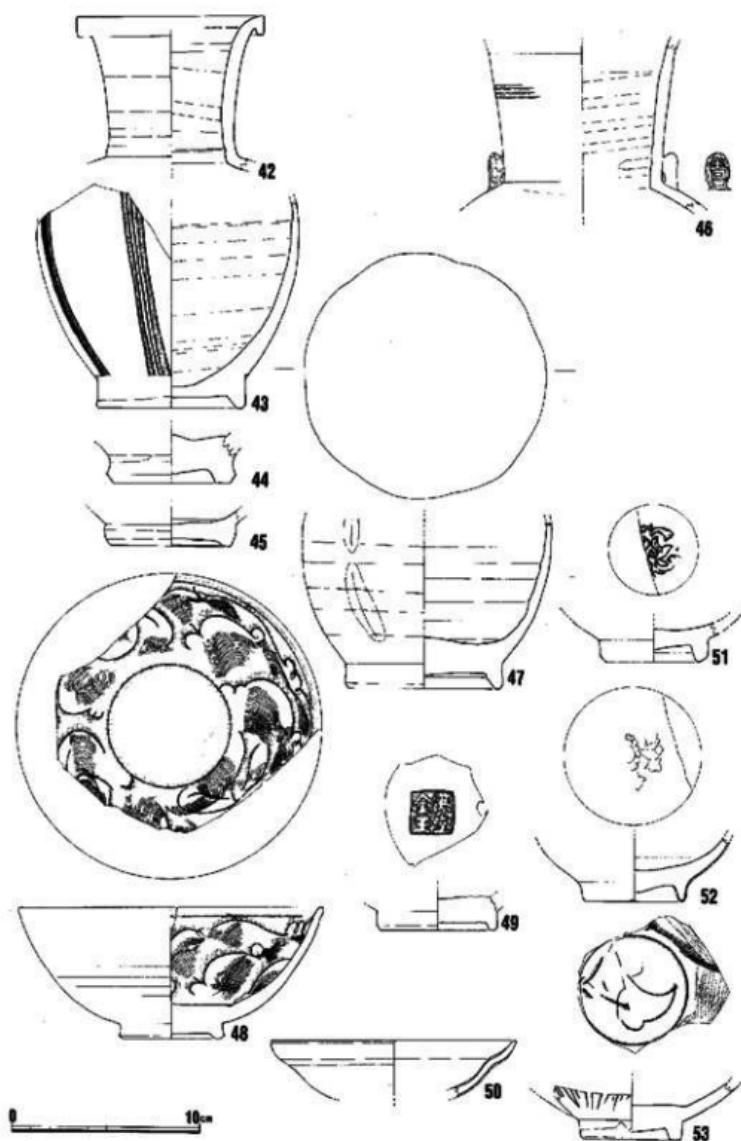


Fig. 123 遺構外出土遺物（3）

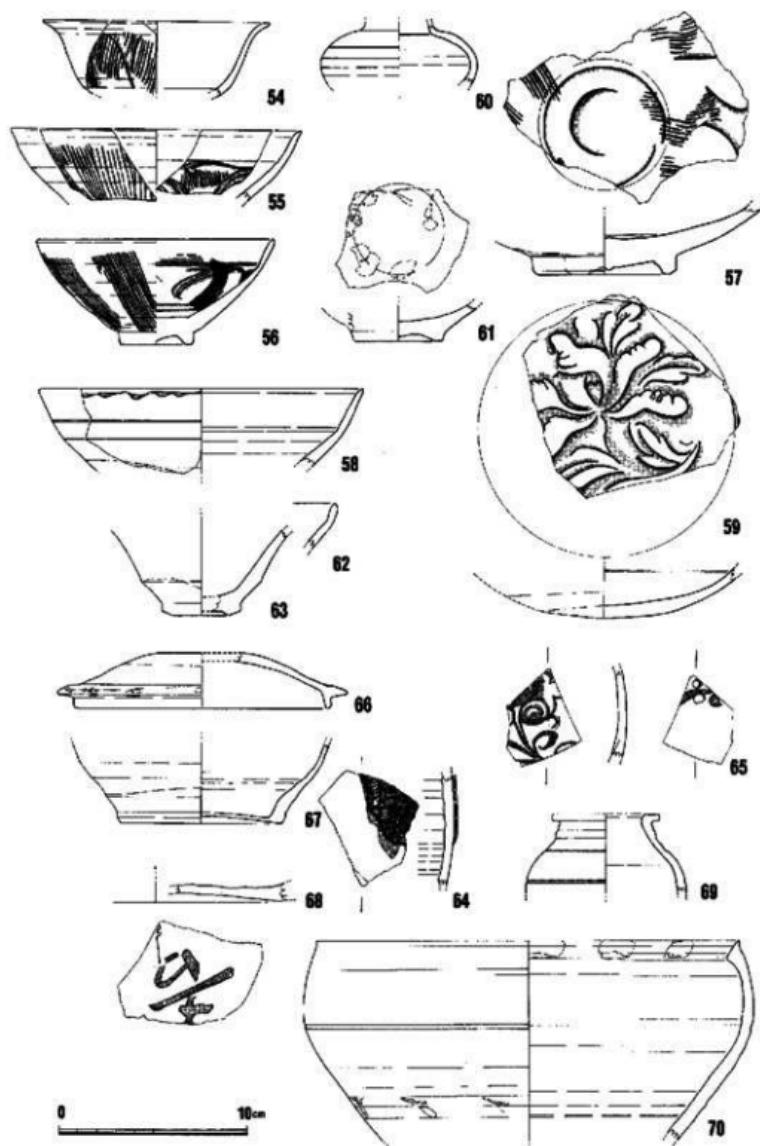


Fig. 124 遺構外出土遺物 (4)

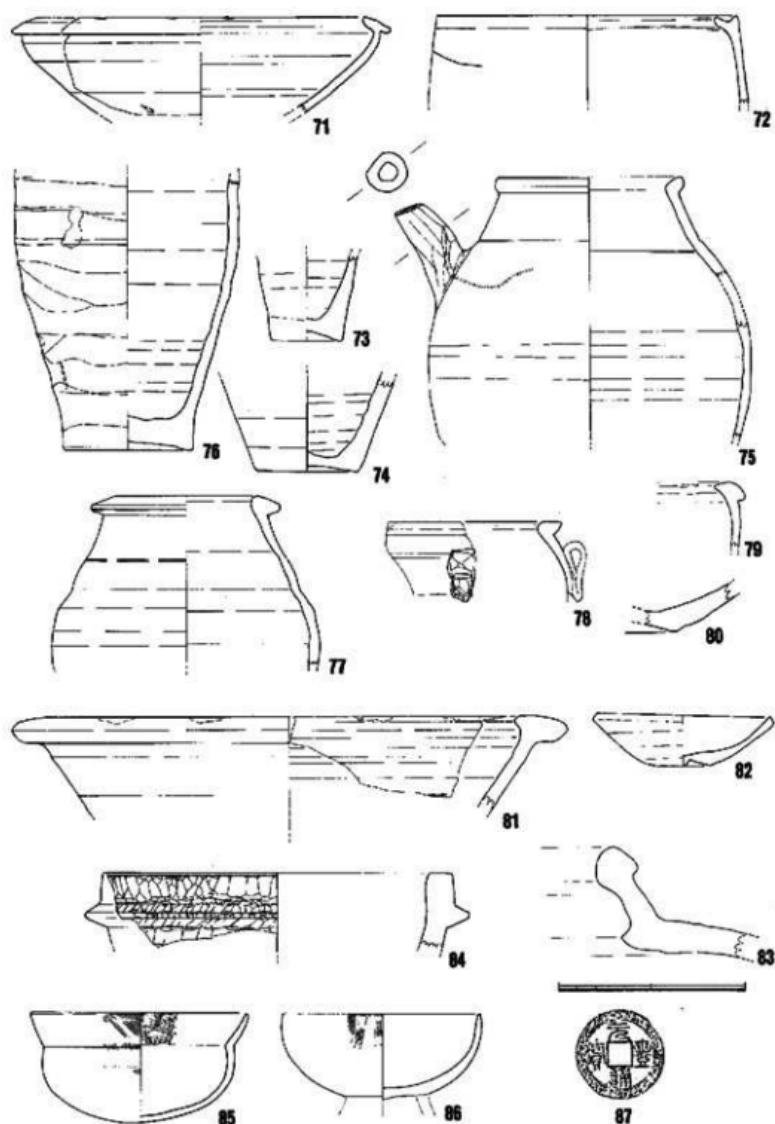


Fig. 125 遺構外出出土物(5)

1号土塙(井戸)出土の四耳壺と相似の口縁部などがある。79、80は無軸のC群で3個体分がある。81は白釉鉄絵鉢。灰褐色のまじりの少ない土で、かなり小孔がみられるがよく焼きしまっていいる胎の上に、オリーブを帯びた灰色不透明の釉がかかる。表面に浅い氷裂があり、釉下に鉄絵が施される。口縁に硅砂が付着している。67号土塙の3と同類の陶器である。82は陶器の皿。83は大甕で胎土や釉色は群を構成するに至らない陶器のI類とした無頬壺とよく似ている。84は滑石製石鍋、85、86は古式土師器、いうまでもなく国産品である。

以上図示したものを中心に述べたが、出土遺物の全体的な様相はあくまでも付表によって把握していくかなければならない。何故ならば、國化できたものは、たまたま大きな破片として残ったものか、墨書のあったものというだけで、他に特別な意味を持っているわけではないからである。なお、古窯系として括した遺物の大部分は常滑の大甕破片、焼き締めの椎鉢（窯不明）であるが、中に宝町時代の備前大甕の破片が1個あった。又、近世以降の陶磁の中には、1630～40年代の伊万里染付、17世紀後半18世紀の佐世保周辺で焼かれた粗悪な染付が見られる。又、絵唐津の皿小片1もあった。中國産のものでは清朝の染付湯呑茶碗1個があることも報告しておきたい。

今回の整理にあたって、國産の陶磁器については、特に佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に御教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

3) 妻棺墓

発掘区の北半部で計6基の妻棺墓を検出した。前章で述べたように、この妻棺墓群は吉屋町工作A・B・C調査区の妻棺墓群と一連のものである。6基の妻棺墓のうち比較的残存状態の良いものは、2・3・4号妻棺墓のみで、他は墓塚の形状、妻棺の埋置状況とも不明である。以下各妻棺墓について詳述する。

1号妻棺墓 (Fig. 128) B区の東部で他の2～4号妻棺墓に隣接して検出した小児用妻棺墓である。墓塚の形状は不明。上妻は妻形土器を使用したもので、ほぼ水平な逆L字形の口縁部をもつ。体部外側に刷毛目を残したままである。下半部を欠失する。下妻は逆L字形の口縁部をもつ妻形土器を使用したもので、胴部中位に最大径をとり、その部分に2条の三角凸帯を4cmの間隔をもって貼付している。器面は丁寧なままである。

2号妻棺墓 (Fig. 126・128) 発掘区東部に3号妻棺を切るように設置された小児用妻棺墓である。下妻部分と上妻上部は57号土塙によって破壊されている。墓塚の方位はほぼ東西をとる。上妻は上げ底の底部をもつ妻形土器で、体部全面に刷毛目を残している。口縁部の形状および凸帯の有無は不明である。

3号妻棺墓 (Fig. 126・127) B区東部に位置し、墓塚の方位を南北にとる成人用妻棺墓である。54号土塙によって切られている。妻棺は長楕円形の墓塚にほぼ水平に埋置されている。上妻はT字形の口縁をもつ大型妻棺で、胴部中位よりやや下よりに一条の三角凸帯を貼付する。最大径は口縁部にある。全面丁寧なままで調整を施すが、口縁部下に僅かに刷毛目を残した部分が観察される。下妻はやや内傾するT字形の口縁をもつ大型妻棺である。胴部中位より下よりに一条の三角凸帯を貼付する。最大径は口縁部にある。全面丁寧なままで調整を施す。

4号妻棺墓 (Fig. 126・127) B区東部の54号土塙を挟んで3号妻棺と併列するような位置にある成人用妻棺墓である。上妻は底部を欠失するが、水平なT字形の口縁をもつ大型妻棺で、胴部中位に一条の三角凸帯を貼付する。胴部は口縁下約10cmのところで張りをもつが、最大径は口縁部にある。器面はすべてなままである。下妻はやや外傾するT字形の口縁をもつ大型妻棺で、胴部中位よりやや下よりに一条のM字形の凸帯を貼付する。器面の調整はすべてなままである。最大径は口縁部にある。底部は平底である。

5号妻棺墓 (Fig. 128) B区の北隅に位置するが、後世の擾乱により破壊が著しい。墓塚の形状、妻棺の埋置状況とともに不明である。小児用妻棺として使用された妻形土器一個体を検出した。土器は僅かに内傾する逆L字形の口縁をもち、口縁下4cmのところに一条の三角凸帯を貼付している。口縁部から凸帯周辺にかけては丁寧な横方向のなで調整が施されているが、それより下位の胴部外側には刷毛目を残したままである。底部を欠失する。

6号妻棺墓 B区の西隅中央部に位置するが、破壊が著しく、旧状を窺い知ることはできな

い。小児用壺棺に使用された變形土器の胴部小片を採取したにすぎない。

出入口2出土壺棺墓

(Fig. 128) 神園駅出入口2の調査に伴って出土した呑口式の小児用壺棺墓であるが、出土地点、発掘状況についても、整理不全のため不明であるので、壺棺に使用された上器の特徴についてのみ記述する。

上蓋は鋸先状の口縁部をもつ変形土器の頸部から口縁部にかけての部分を打ち欠いて使用したものである。胴部の最大径部分に一条、肩部に一条の三角凸帯を貼付している。底部は僅かに上げ底氣味である。下蓋には上蓋と同タイプの変形土器を使用している。上蓋に比べやや小型である。頸部には8本単位のヘラによる暗文を8箇所に描いている。器面の調整は両者ともヘラによるものであるが、横方向を基本とし、底部、凸帯間は縱方向である。口縁部、凸帯部分は横方向の丁寧なまでを施している。器面の風化が激しく観察できないが、おそらく器表面には丹塗が行なわれていたものと考えられる。

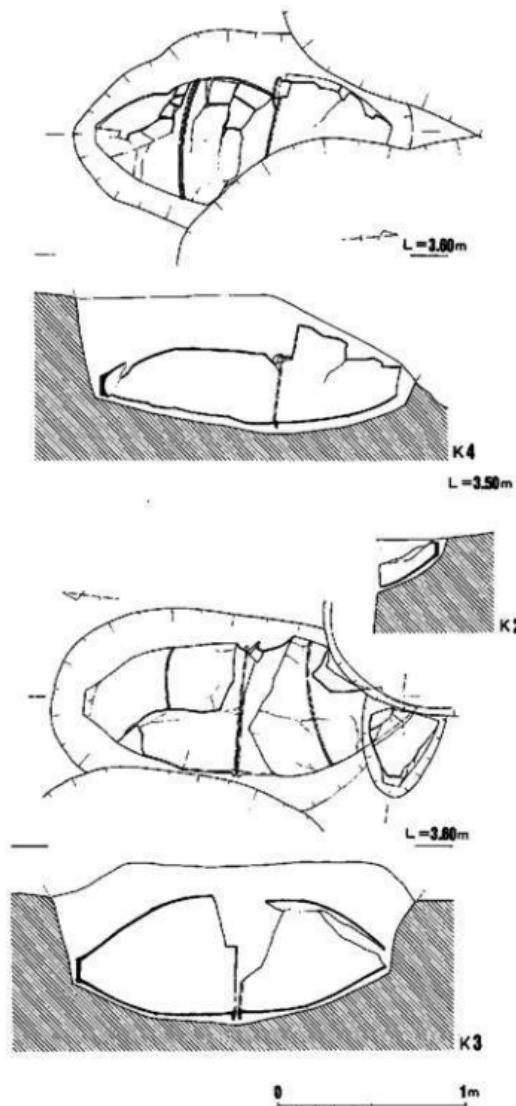


Fig. 126 壺棺墓出土状況実測図

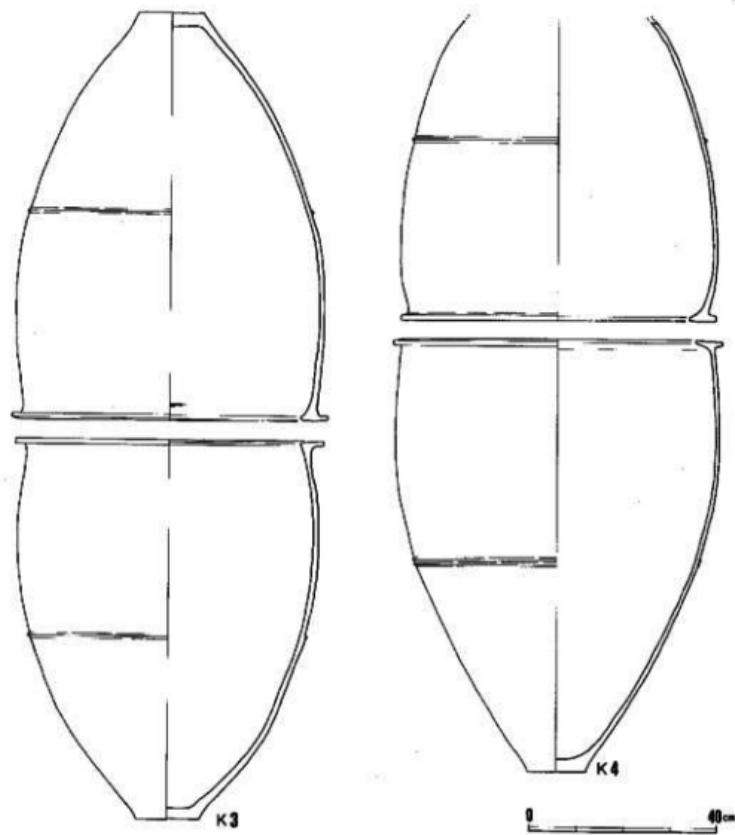


Fig. 127 豊棺実測図(1)

出入口13および2出土の豊棺は、その細めの逆L字形に近いT字形口縁と細い三角凸帯、張りの少ない胴部などの特徴から汲田タイプに比定される。これに伴なう小児用豊棺墓に使用される上器も中期前半期を中心としたもので、店屋町工区A～C区も含めて、一帯の豊棺墓地は弥生中期前半に営まれたものと考えられる。ただし、紙園町B区11・12号豊棺は、口縁が内側に肥厚し、やや外傾する等の点から、時期的に新しい様相をもっており、時間的な幅を考える必要があろう。

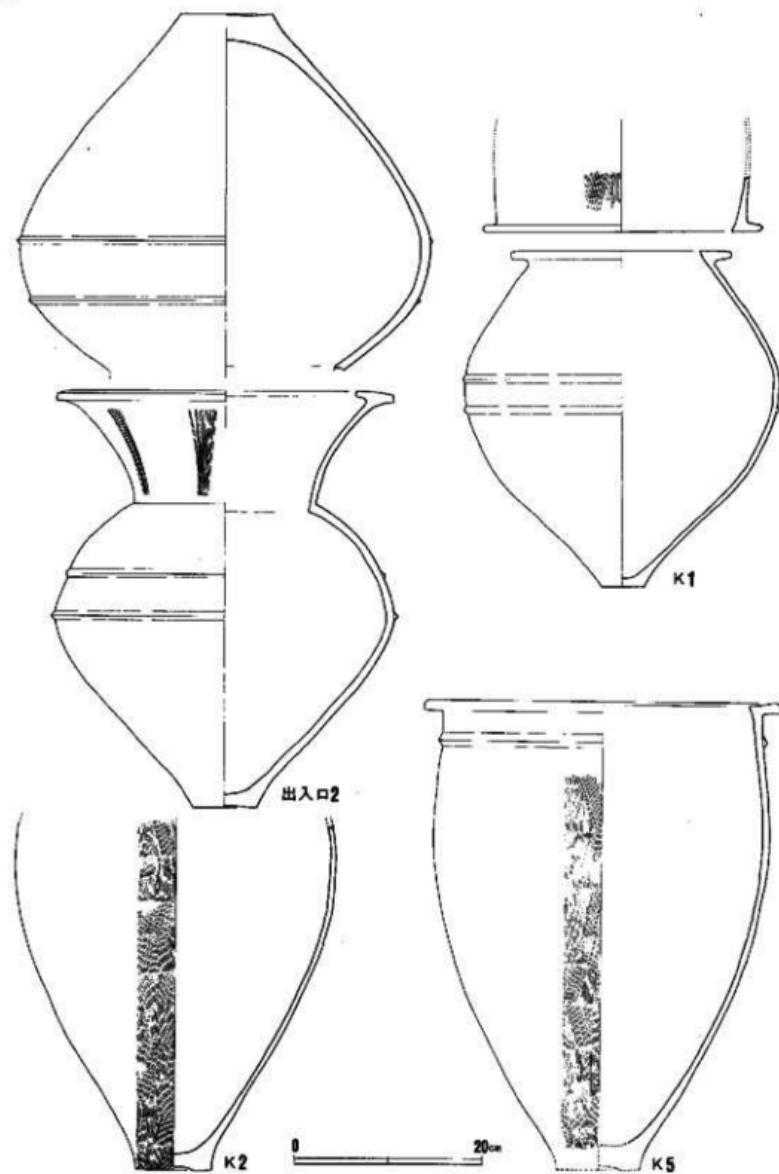


Fig. 128 墓構造図(2)

2. 小 結

地下鉄1号線祇園駅出入口2・3区の調査については前項で概要を述べた。幅約4mといふいわば、やや規模の大きなトレンチ調査という体で、溝、井戸等の遺構の広がりについて把握するのは困難なことであった。なお、調査区が主要幹線道路の交差点にあたり、交通の問題から夜間に調査せざるを得ないという悪条件から、土層識別、作業員、調査員の引継ぎ、遺構図の作成などに様々な問題を生み出し、必ずしも満足のできる調査とはい難かった。しかしそれなりの成果は得られており、二・三まとめておくことにしたい。

投光器などの人工光下での調査であって、遺構の上層での切り合い関係は明確にできず、ある一定レベルまで掘り下げてから遺構を検出する方法をとったため、上層遺構部はほとんど包含層として一括に扱っている。遺構自体も井戸の掘り方が多く、下層から上層までの遺物が混在して出土しているのが多いが、しかしこれらの井戸の中で特筆しておかねばならないのは、1号土塙の出土遺物である。井戸本体の中に大量投棄されていたもので一括資料として重要であり、あとで詳述する。出土遺物の総数量については付表に記載したとおりであるが、ここではそれらの比率について触れておこう。近世以降と古墳時代以前の遺物を除いた古代から中世にかけての容器類の総数は5,124点を数え、国産品は1,296点で25.3%と示される。夜間調査であり、土師皿類小破片の取り上げが不充分であったため、この数字については疑問が残される。国産品の80%強は土師皿類である。貿易陶磁の総量は3,828点であるが、朝鮮陶磁は15点で0.4%と少なく他は中国陶磁である。その内訳は白磁1,567点で41%、青磁756点で19.8%、青白磁93点で2.4%、天目15点で0.4%、染付6点で0.2%、陶器1,391点で36.5%となる。この中国陶磁におけるそれぞれの比率は、第2章で述べたA・B区や博多第4次調査における比率に極めて似しており注目される。白磁では碗が1,280点、皿が190点、その他の器種97点で、それぞれ81%、12%、7%を占める。碗ではV、VI、II類が多い。青磁では龍泉系476点、同安系231点、越州系13点、その他29点で、それぞれ62.3%、30.8%、0.2%、3.7%を占める。龍泉碗、皿の比率は5.5:1である。碗ではI-5、I-6類が多い。これらの数値については今後経なければならない手続きが多く、現在のところ大きな目安であると考えている。

この地区で最も重要な遺物を出した1号土塙についてまとめておきたい。この土塙は、火事場整理のために埋めもどされた井戸であるが、この火事の被災家屋が単なる住居ではなく中国からの輸入陶磁器を扱う関係の店、もしくは倉庫だったという点で特殊である。

遺物の大部分は青磁で、ほとんどが販売される前の商品だったと思われるが、共伴した陶器の多くは、それ自体が商品であったというよりは、他の薬品、香料、茶といった商品の容器だったと思われる。しかし中には使用痕の頗著な捏鉢もあり、一家の日常の備品も一緒に廃棄されているようである。

主体をなすのは龍泉窯の碗と皿で、大部分同一時期とみて問題なく、いわゆる陽刻蓮弁碗に直接先行する形式のものである。年代は十二世紀の第三四半紀を中心に考えられるだろう。

この一括遺物は、圧倒的な数量によって大きな説得力をもっており、今後重要な標式的遺構となると思われるので、一応問題を整理しておきたい。

第一に共伴遺物という点からは次の諸点を指摘できる。

1. 龍泉窯の碗が主でありながら、皿では同安窯系が大きな割合を占め、しかも同安窯系の碗はほとんどない。
2. 白磁の碗、皿はなく、わずかに白磁四耳盃が見られる。
3. 口ハゲで印花の青白磁がある。
4. すっぽん口の天目碗がある。これは上の青白磁とともに、出土はもっと遅いと思われていた。
5. 広幅口縁の黄釉褐彩の鉢と細縁の盤が共存している。
6. 陶器B群、いわゆる越州窯系の陶器は入っていない。

次に、集荷や流通の面から、幾つかの点が明らかとなった。

1. 同じ龍泉窯の碗もしくは同安窯系の皿といつても、同一の窯で焼かれたものでなく、方々から寄せ集めている様子がある。
2. 青白磁や天目の全体に占める比率は、輸入陶磁全体に占めるその比率と似ており、限られた、しかし確かな需要の存在を表わす。
3. 陶器は大きく二種類の土、したがって二つの地方のもので占められている。
4. かなり大きな容器がたくさんあり、陶磁器以外の輸入品について考察をする手掛となる。
5. 磁器、陶器共に福建省泉州を中心とするものと、浙江省江蘇省方面に出自を求めなければならぬものが共存している。

この祇園駅出入口2・3区の1号土塹以外の出土遺物では、同形式の遺物は決して目立つものではない。何事もなければ、この1号土塹の青磁も各地に売り捌かれて平均以上の痕跡をこの地に残すこととなかったと考える時、いかに膨大な数量のものが、この博多の上を通り過ぎていったものかとの想い新たなものがある。

第4章 結 語

これまで博多遺跡群における地下鉄1号線関係調査のうち、A・B区、および祇園駅出入口2・3区の調査結果についてその概要を述べて来た。ここではそれらを含めた博多遺跡群の調査に関する問題を提示することにして、結語としたい。

博多における遺物の量は付表でも示しているとおり膨大なもので、その種類も極めて多岐にわたる。それは博多の貿易都市としての性格に起因する。これらの整理報告にはそれなりの時間と予算が要求とされるが、限られた枠内では、遺物を分類し数量的に処理することも必要になる。今回は「博多出土貿易陶磁分類表」を作成し、それに基いて数量の算出にあたった。しかし破片数を示したものであるから、個体の大小等によって破片数はバラつきを見せるものであろうし、全体の構成比を正確に反映しているものとは思わない。今後の有効な手段を期待して、現状では大まかな目安として用いざるを得ない。また、数百年にも及ぶ遺物を一括して扱うやり方に批判もあるが、博多では遺物量の多いことから、遺存状態の良好な遺構であってもかなりの遺物の混在することは常で、一時期の一括資料を得られることは少ない。それ故に現在のところ一時期に限っての遺物構成比を示すことは困難である。しかし一方、上呂田町周辺の包含層の3mにも及ぶ地域では遺物の混在はそれほど極端でなく、今後の整理の進展によっては時期別の構成比を示すことも可能になろう。また、博多での中世後期の遺物の少なさに奇異の念を抱く人が多いかもしれない。確かにそのような傾向は見えるが、上層部分を機械によって剝ぎとるという調査上の問題も一面にはある。限られた時間、予算では、近現代建物の基礎、擾乱層は、機械で剝ぎ取らざるを得ないのが現状なのである。文化財保護行政の今後の指導の充実が待たれるところである。

また、博多遺跡群と周辺遺跡との関係も今後究明されねばならない問題の一つである。福岡平野一帯では、中国陶磁をはじめとする中世遺物が、出土量の多寡はあるにせよ、殆んどの遺跡から検出されるといつても過言ではない。これら福岡平野に広く散在する中世遺跡の総合的な研究は、今までのところない。これら中世遺跡相互の関係、生産遺跡と消費遺跡の関係、莊園、集落、寺社等の関係、都市遺跡博多・大宰府と周辺村落との関係等、今後に残されている問題が多い。

最後に調査後の整理期間については、現在のところ充分でなく、報告書の作成には大部分が並間の調査終業後、夜間をあてているというのが現状である。止むを得ずの緊急調査とはいえ記録保存のための整理報告期間を確保することも、調査の充実とともに重要なことの一つであろう。

Summary

This book, consisting of two volumes, is the first comprehensive work on the Hakata Sites having been excavated by Fukuoka City Board of Education; and this project for the excavations has been asked by Fukuoka City Transit Authority. The contents of the first volume are divided into two major parts: the first part, I) outline of the study on the archaeological sites in the subway line; II) outline of the excavations so far done at Hakata, the second part, I) naturalistic and historical environments of Hakata; II) result of the excavations at the so-called A and B areas of the subway line; III) result of the excavations at the so-called Entrances, nos. 2 and 3 of Gion subway station. The second volume deals with classification for the trade ceramics so far discovered at the Hakata Sites.

Hakata was the nearest harbor for Dazaifu and developed in cultural and commercial activities as an opened gate for foreigners from overseas; moreover, "Korokan" as a guest house was built for them. After the political system of the central government got ineffective, the trade itself was mainly done by private merchants rather than the government. As the result, the trading center moved from "Korokan" to today's Hakata district. Thus under the strong commercial activities in East China Sea, Hakata as an important harbor town became richer than ever before. In the Late Heian period, the Chinese merchants' community known as "米人百堂" was founded in Hakata district: it indicates that Hakata at that time was so prosperous because we have found a huge amount of Chinese ceramics here. As we have already learned in the fourth and tenth campaigns of the excavations, the rates of the trade ceramics out of all vases so far found show 23.9 percent and 38.7 percent respectively, and this time shows 15.6 percent. These figures are much higher than figures so far reported at any other sites in Japan. These Chinese ceramics belong to the second half of the eleventh century through the end of the sixteenth century, and most of them are dated to the twelfth century. The amount of Chinese ceramics through the centuries changed due to how Hakata as a harbor played in her long history. These Chinese ceramics were fired in Zhejiang, Fujian, and Jiangxi Provinces, and they were shipped out of Ningbo and Quanzhou; furthermore, we see ceramics at a small percent from North or South

China, such as Shannxi, Hebei, and Gwangdong Provinces: ceramics from North China mainly belong to the second half of the eleventh century through the early twelfth century. We have evidences to be suggested the existence of "宋人百堂": Chinease ceramics with calligraphy, "王", "朱", "陳", and so forth may well indicate names which Chinease bore. We have furthermore forty-one specimens written "丁綱"; and these were found at the sites excavated during the fourth campaign, where are located near the latest excavation sites. "丁綱" represents "綱首" (captain or ship owner) of the family name "丁"; and this evidence most likely indicates that Mr. "丁" once lived here. We have another example later than the time of "宋人百堂": all vases appearing on four color pictures at the front page and figs. 92-106 were simultaneously dumped into a well. These are quite important specimens. These finds seem to have met fire: heat of the fire changed their glaze, caused the vases to have been broken, and made their cracks on the surface. We were however able to restore these broken pieces as complete shapes of vases. The diversity of the vases is small. These facts more likely imply that these vases which lost their value for merchandise due to fire of a Chinease house or storage house were thrown into the well. These evidences represent the character of Hakata in those days.

It is only the beginning for the archaeological study on Hakata; and this time the work contains only part of the result of the excavations so far done at Hakata. Since further studies and analyses on the excavations are on progress, other important evidences will come to light soon. We hope that this book will help further studies on the Middle Age harbor town "Hakata."

简 介

这本是福岡市教育委员会为福岡市交通局所委托进行发掘调查的「博多遗址群」之发掘调查报告书之一集。现将概要简述如次。I—地下铁路线内遗址调查的概要 II—有关博多的发掘调查概要。在II中又细分为、I一章 博多的自然环境与历史环境、II一章 地下铁本体部A・B区的调查结果、III章 福岡站山入口2・3的调查结果。另外，在附编中又对博多出土之贸易陶磁试加以分类。

在博多湾自从大宰府之外港鸿胪馆被设置以来，因而成为日本对外交流之门户而发达起来了。律令体制衰落以后贸易主体转移至民间，贸易中心地也随之由鸿胪馆迁移至现在的「博多郡」。于是博多以环绕在东中国海一大经济圈中的重要港湾城市而繁荣昌盛起来了。到了平安时代末期，产生了被称为「宋人百堂」的中国商人居住区。这个时期贸易繁荣是由中国陶磁器的大量出土可见一般。

如前所报告、在博多才4次调查及才10次调查中出土陶磁器占着所有出土陶磁器比率的百分之二十三・九及三十八・七。其比率相当高。这次的发掘报告也占了百分之十五・六。这个数值比日本的其它进口陶磁出土遗址之比率都要高。这些中国陶磁大概是以公元12世纪为中心从11世纪后半到16世纪末。由其出土量也可反映出涉湾贸易的盛衰。产地是以浙江省、福建省、江西省等地为中心、可能是由宁波、泉州装运过来的。也有陕西省、河北省、广东省等等的北方产及南方产的制品、但是其比率相当低。至于北方的陶磁器大部分是从11世纪后半到12世纪初叶的。

器物上还有一些留着墨书的。由此可見「宋人百堂」的存在。其中也可发现「王」「朱」「陳」等不少中国姓。与这次调查地点邻近的博多才4次调查地点出土了41件写着「丁綱」的陶磁器、这意味着「丁」姓的綱首（船長、船主）、因此可見曾有「丁」氏住在这里。

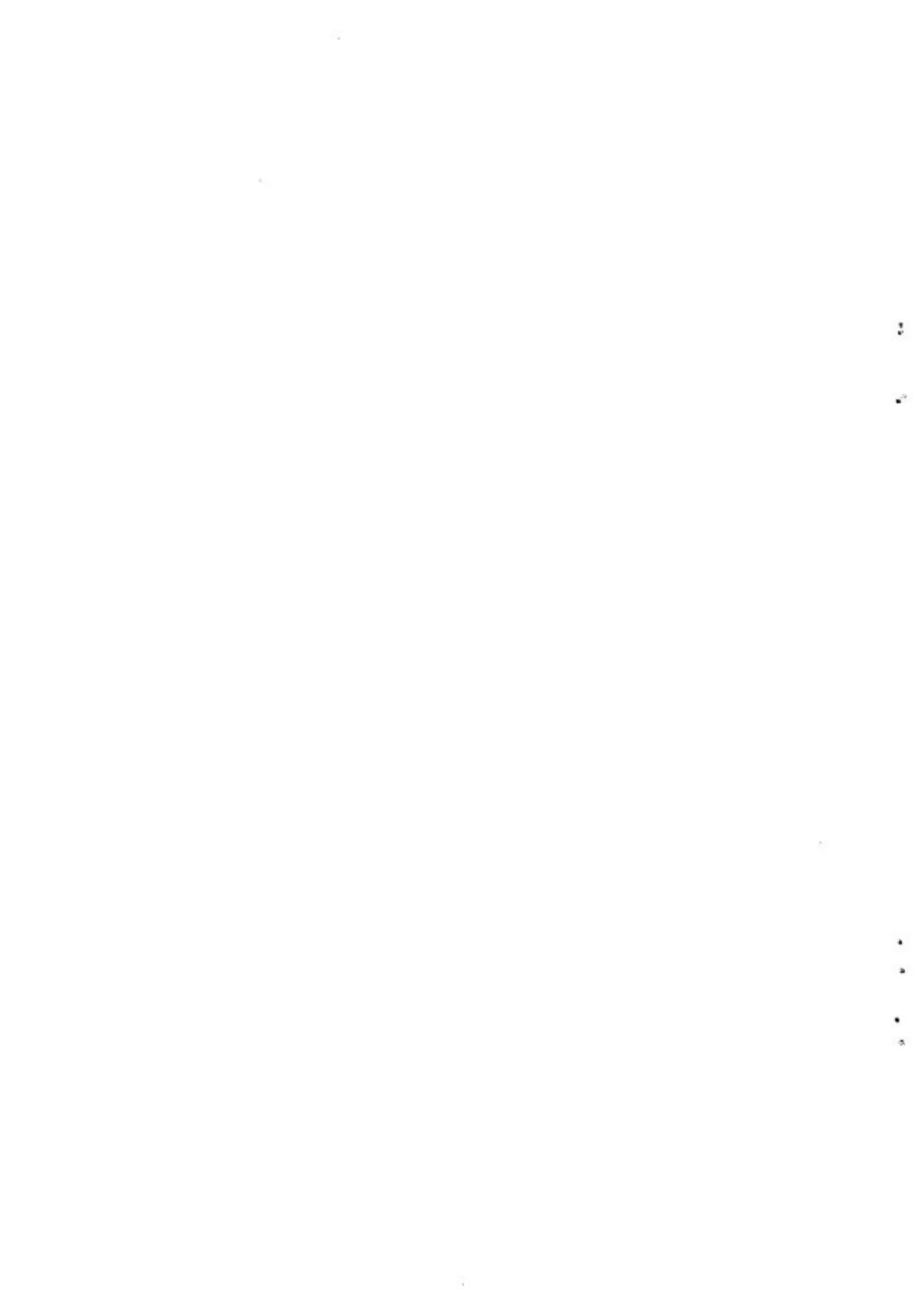
另外也有比「宋人百堂」时代较新之例子。如卷首彩色照片图版与载在Fig. 92～106的文物都被丢弃在井里、这些也是相当宝贵的资料。它们很可能遭遇火灾之类、由于火烈受到釉彩变化破坏的影响。然而大都修复成原来的样子。陶磁的种类很简单、大概是把中国商人的家中或仓库里因火灾失去了商品价值的陶磁一起埋在井里的。这种情况充分说明了当时博多的特性。

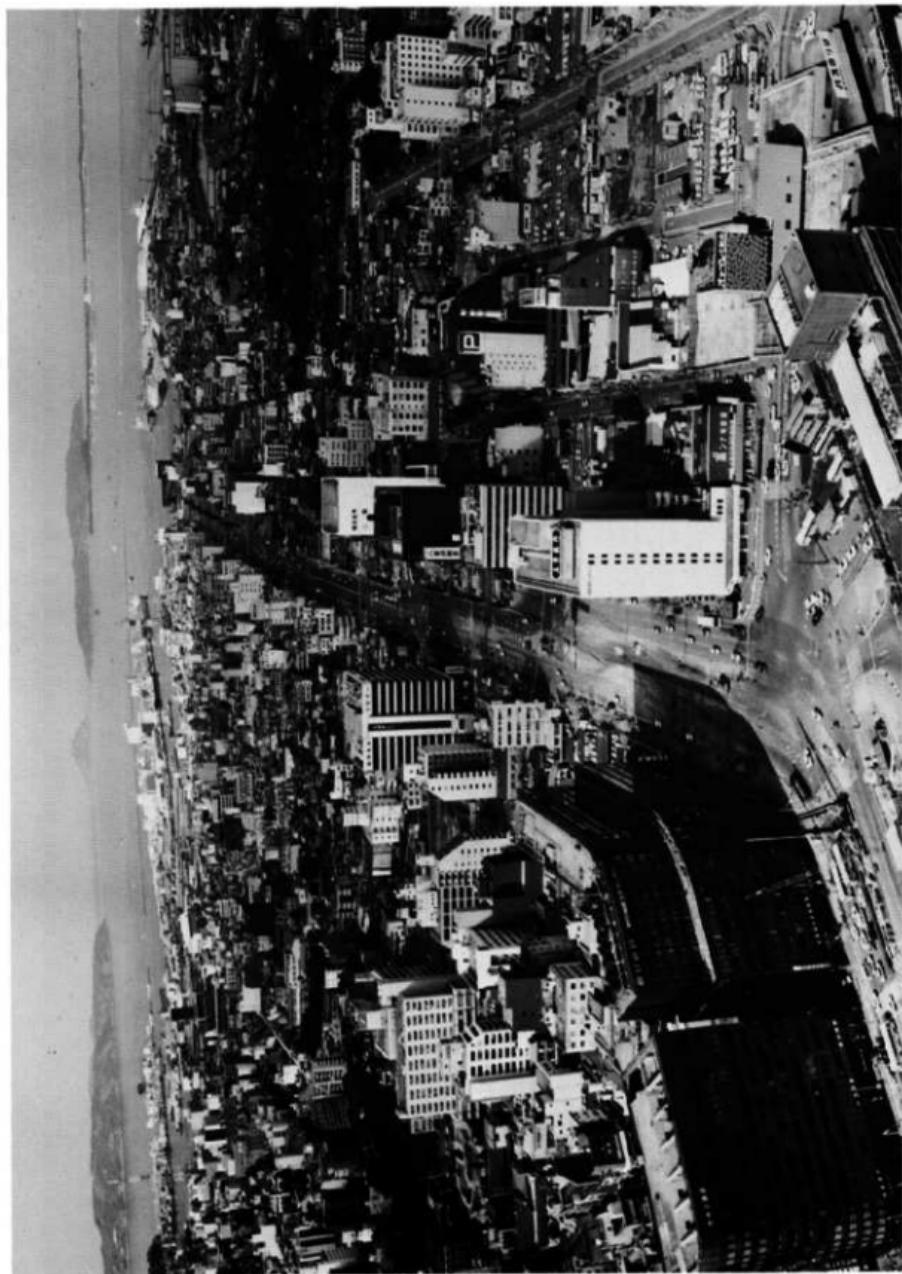
博多的考古学研究刚就绪、这次调查报告只不过是至今调查成果之一部分而已。随着今后的整理和研究之展开、很多新事情也很可能明确起来。这本书给想研究和了解中世港湾城市「博多」者提供了一些参考资料、这就是本书的目的。

写 真 図 版

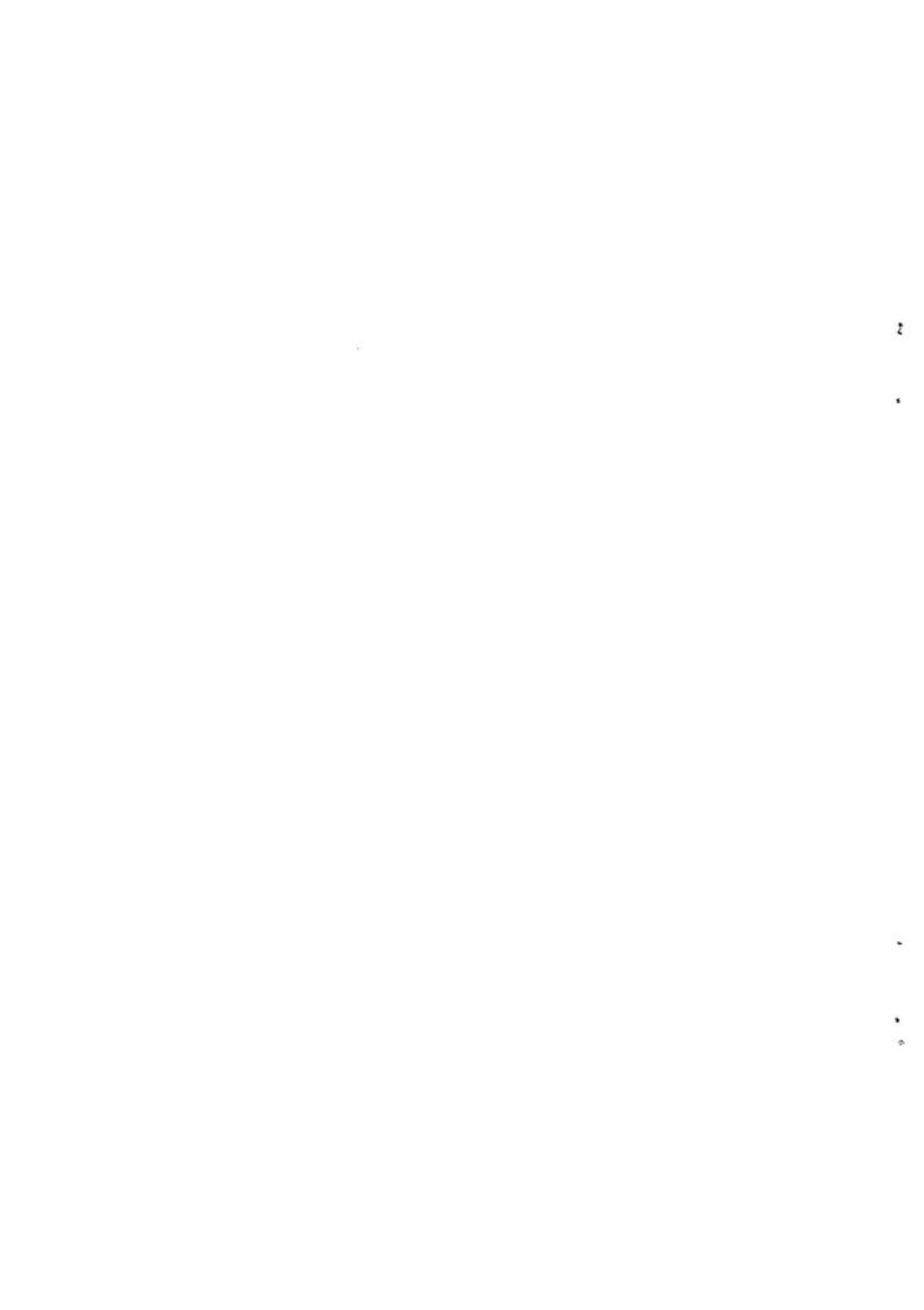
PLATES

*遺物写真に付した番号は挿図番号と一致する。
縮尺は不同である。





博多 航空写真 博多駅上空





1. 調査区遠景（正面は博多駅）



2. 路線内試掘調査風景（1976年12月 東長寺前）

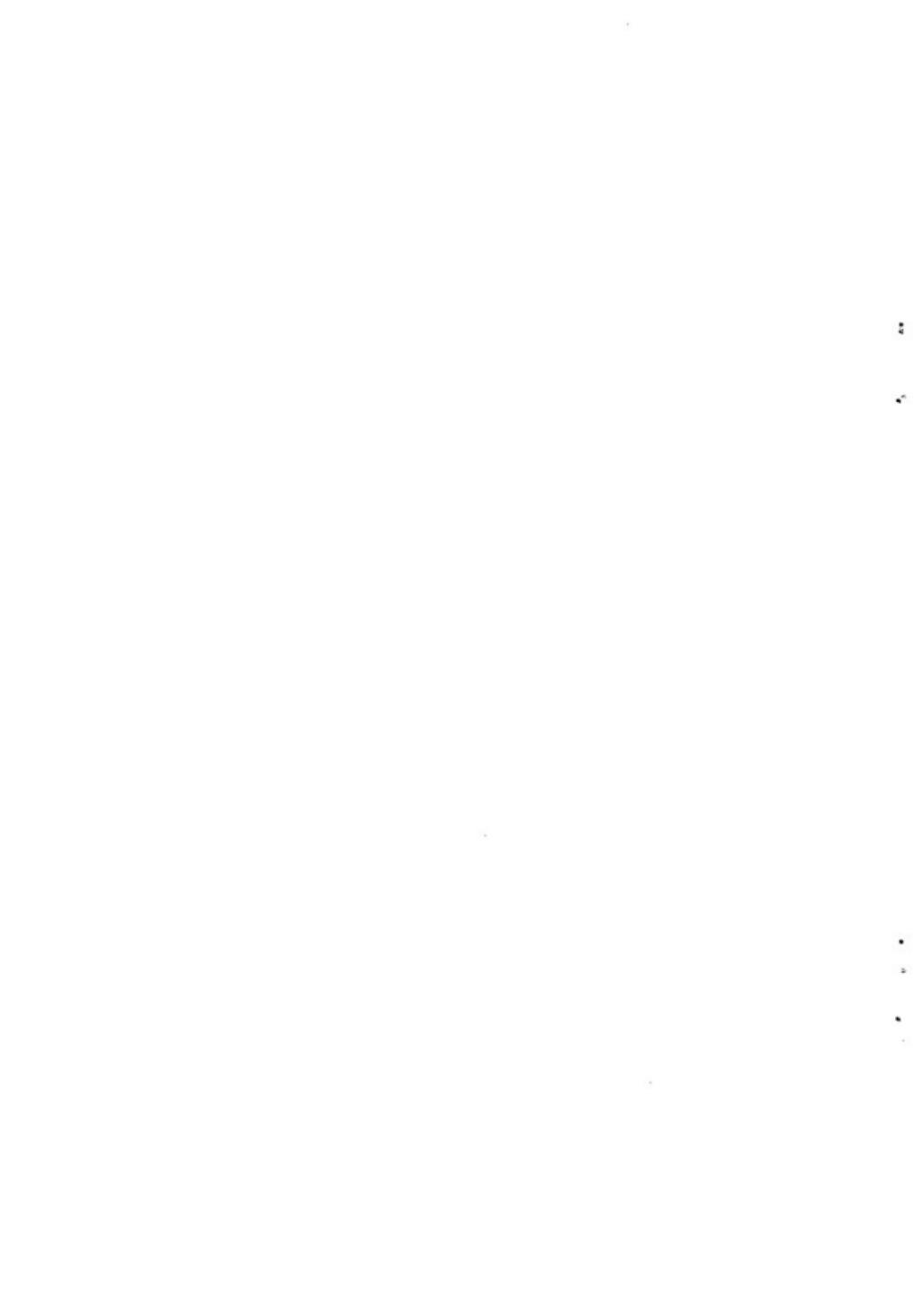




1. 中間杭試掘調査風景（店屋町工区）



2. A-2区調査風景









1. A-1区北側土堀断面(3号溝落込み部)



2. A-1区東側土堀断面(3号溝落込み部)



1. A-1区遺構全景（東より）



2. A-2区遺構全景（東より）

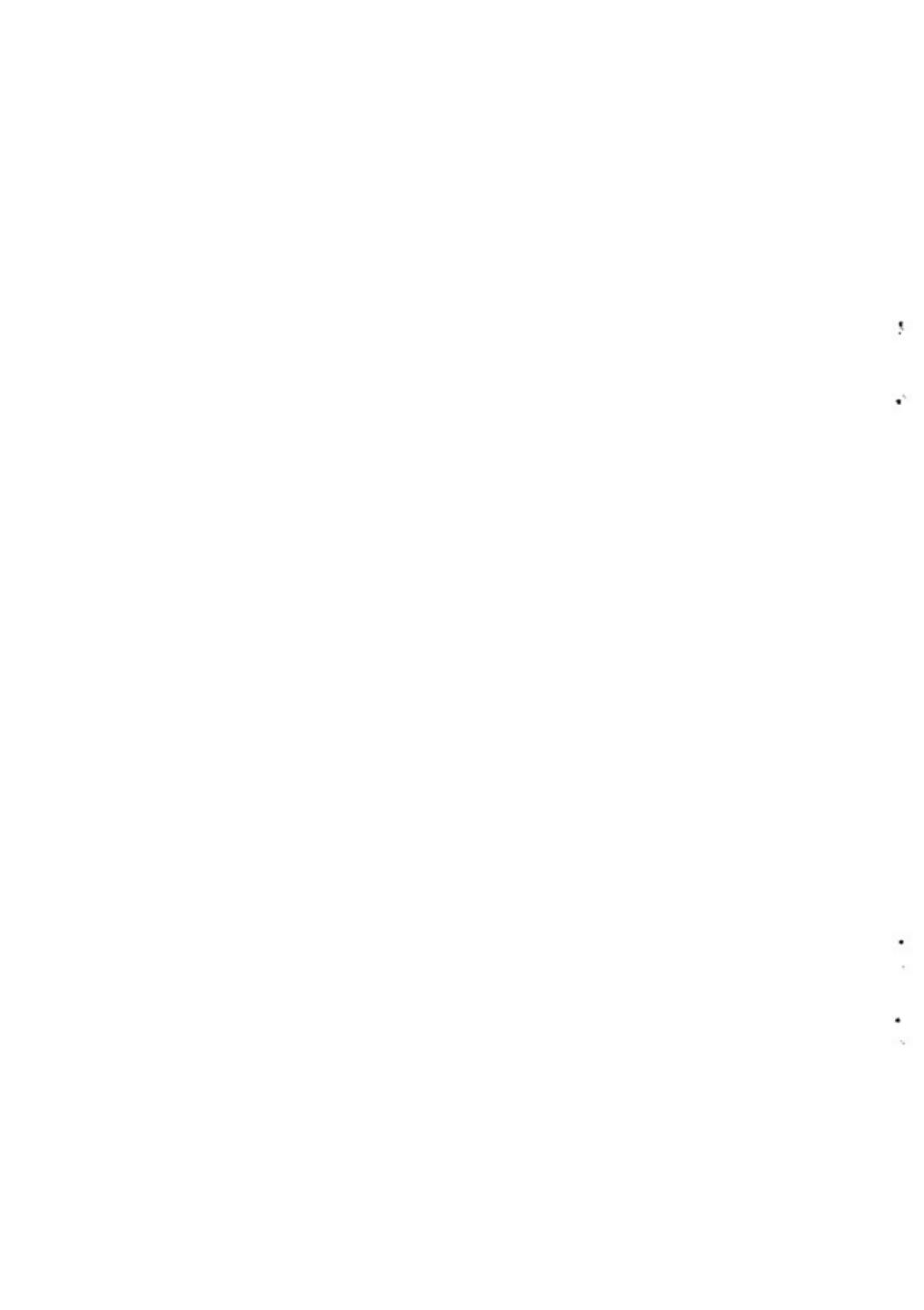




1. B-II・III区土層断面（東より）



2. B-II区上部遺構全景（南より）

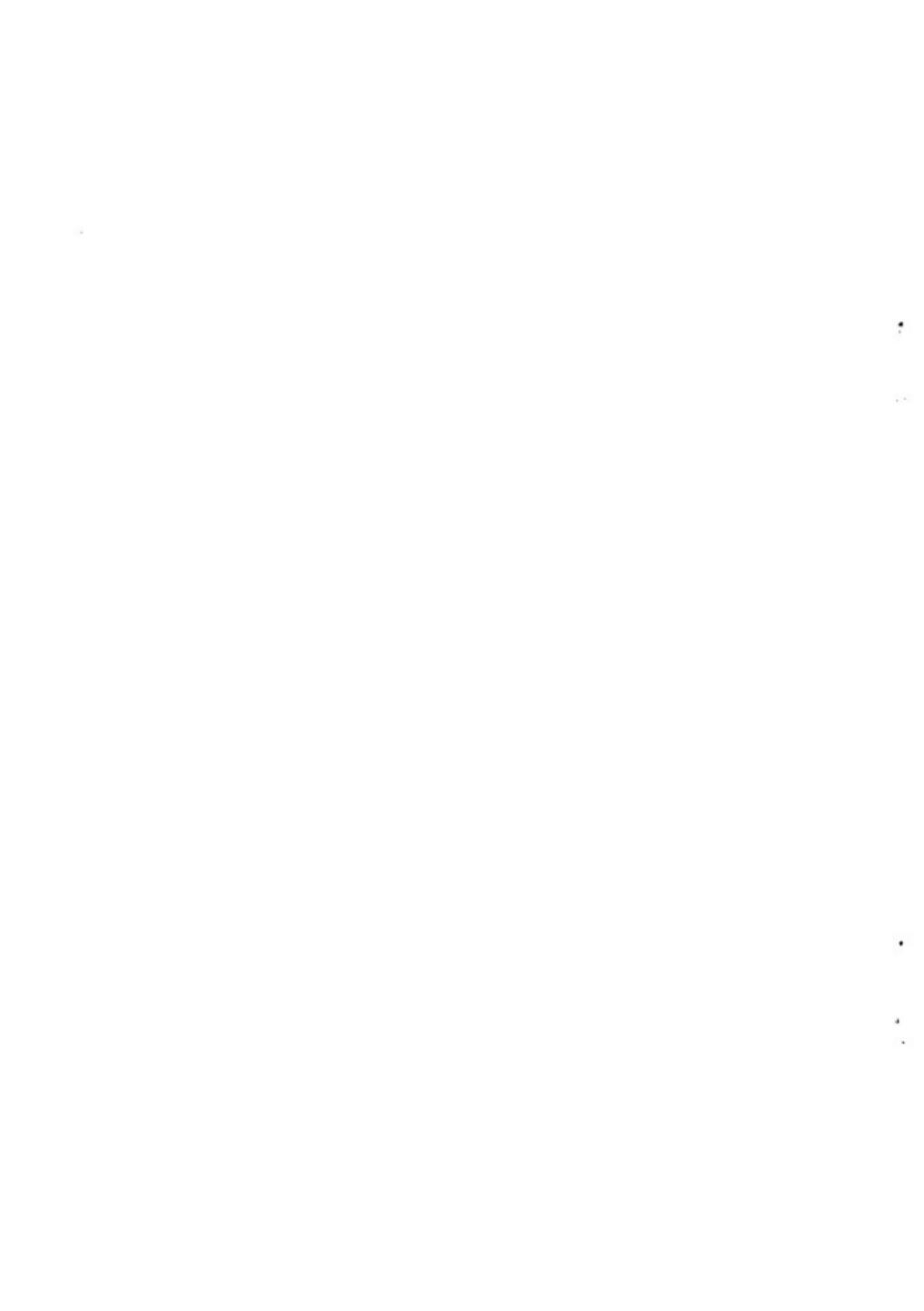


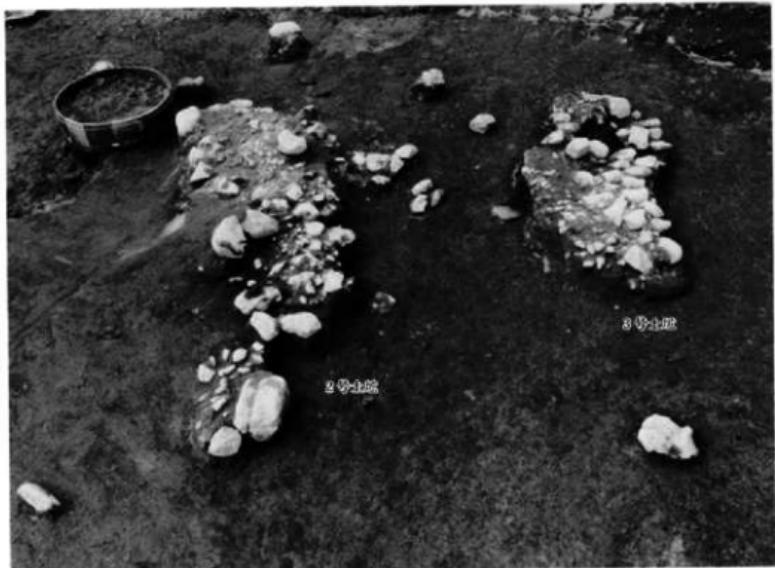


1. B-II・III区下部造構全景（南より）



2. B-III区下部造構（東より）





1. 2・3号土塙上部石組（東より）



2. 2・3号土塙下部遺構（北東より）

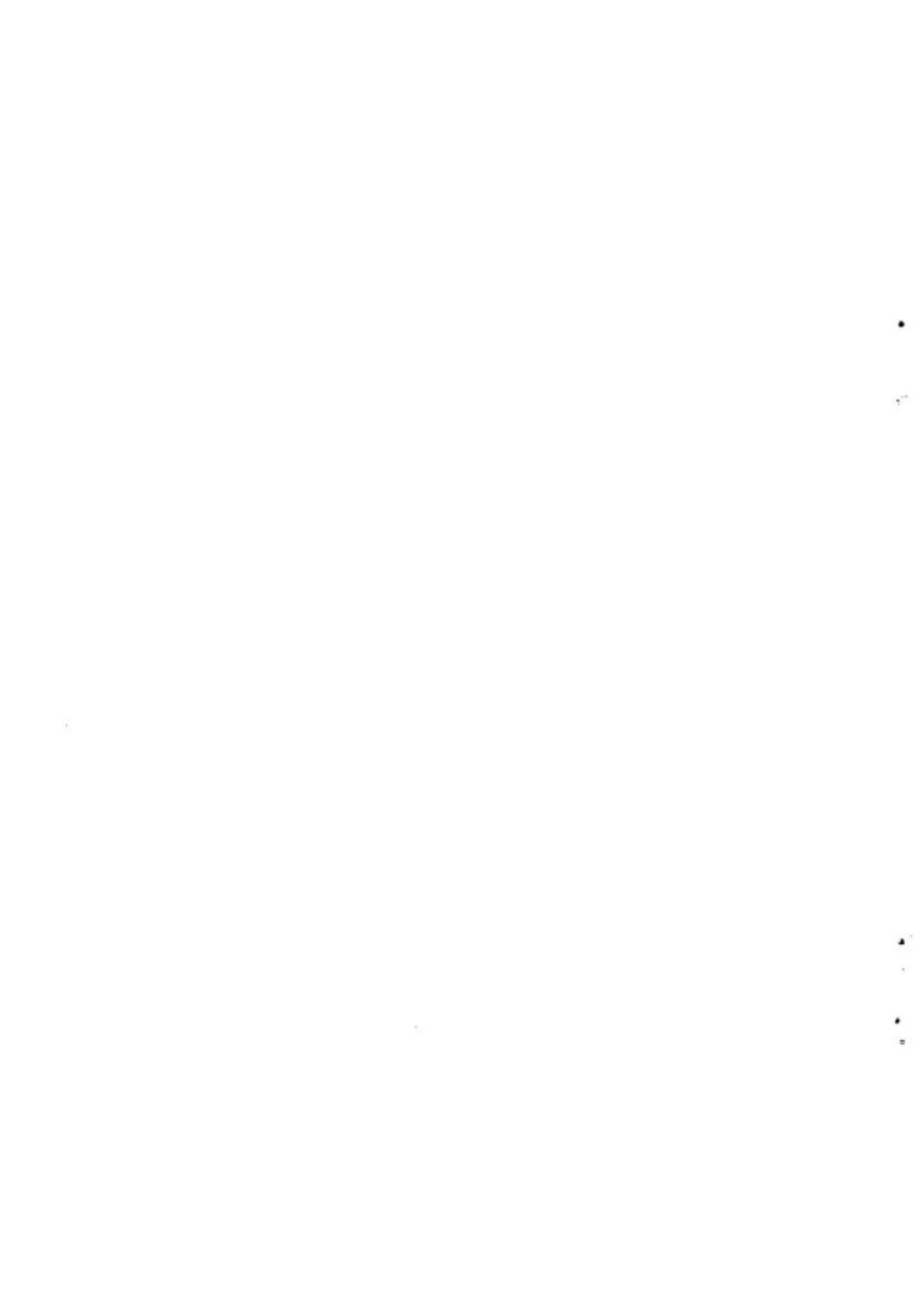




1. 2号土坑遺物出土状態



2. 21号土坑（水井系）遺物出土状態（西側）



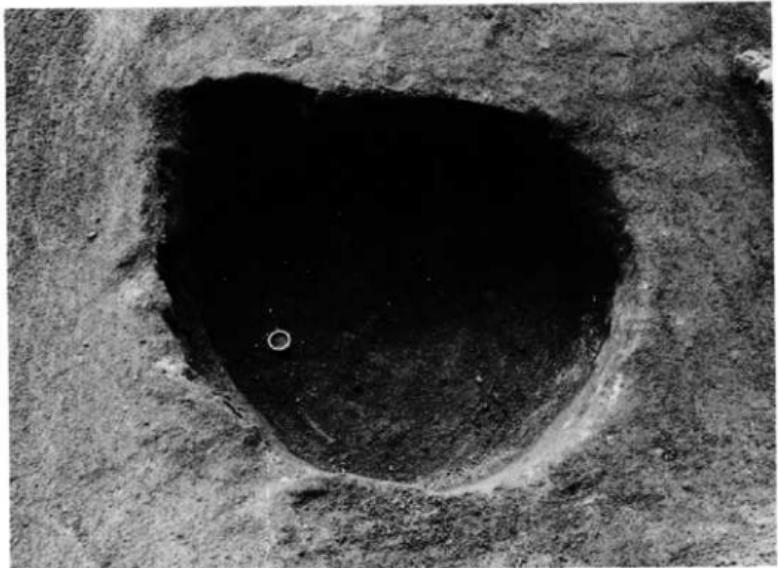


1. 22号土塚（火葬墓）土層断面

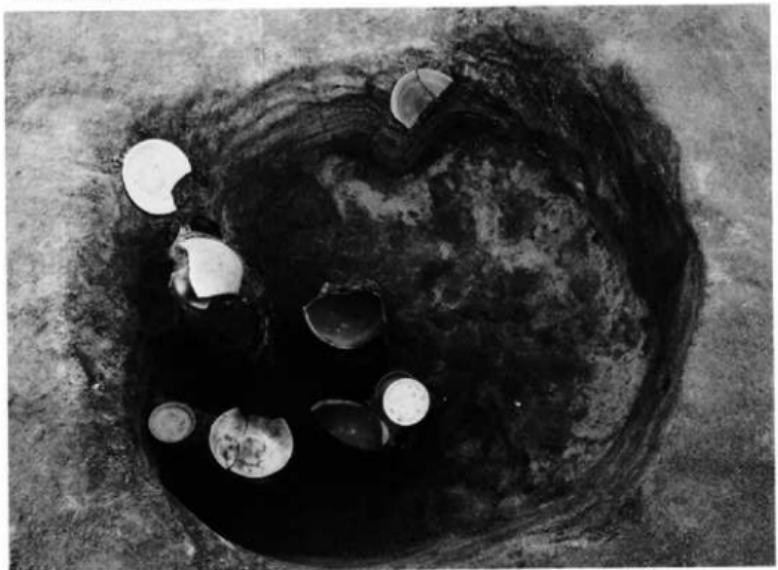


2. 23号土塚（井戸掘方, 北より）





1. 25号土塚遺物出土状態



2. 27号土塚遺物出土状態



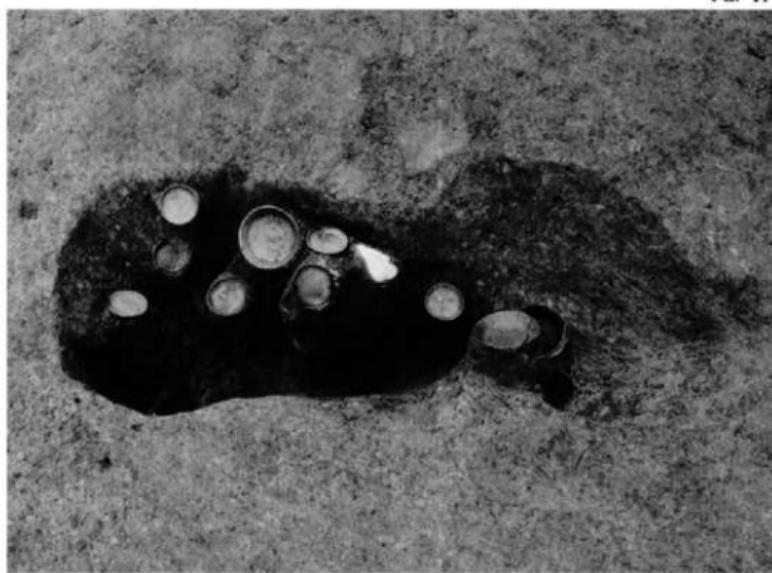


1. 29号土坡上部石组

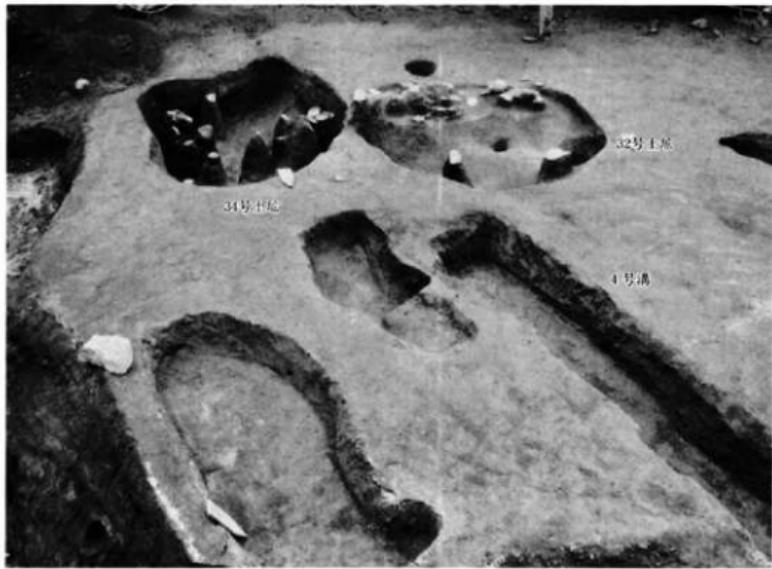


2. 30号土坡遗物出土状态

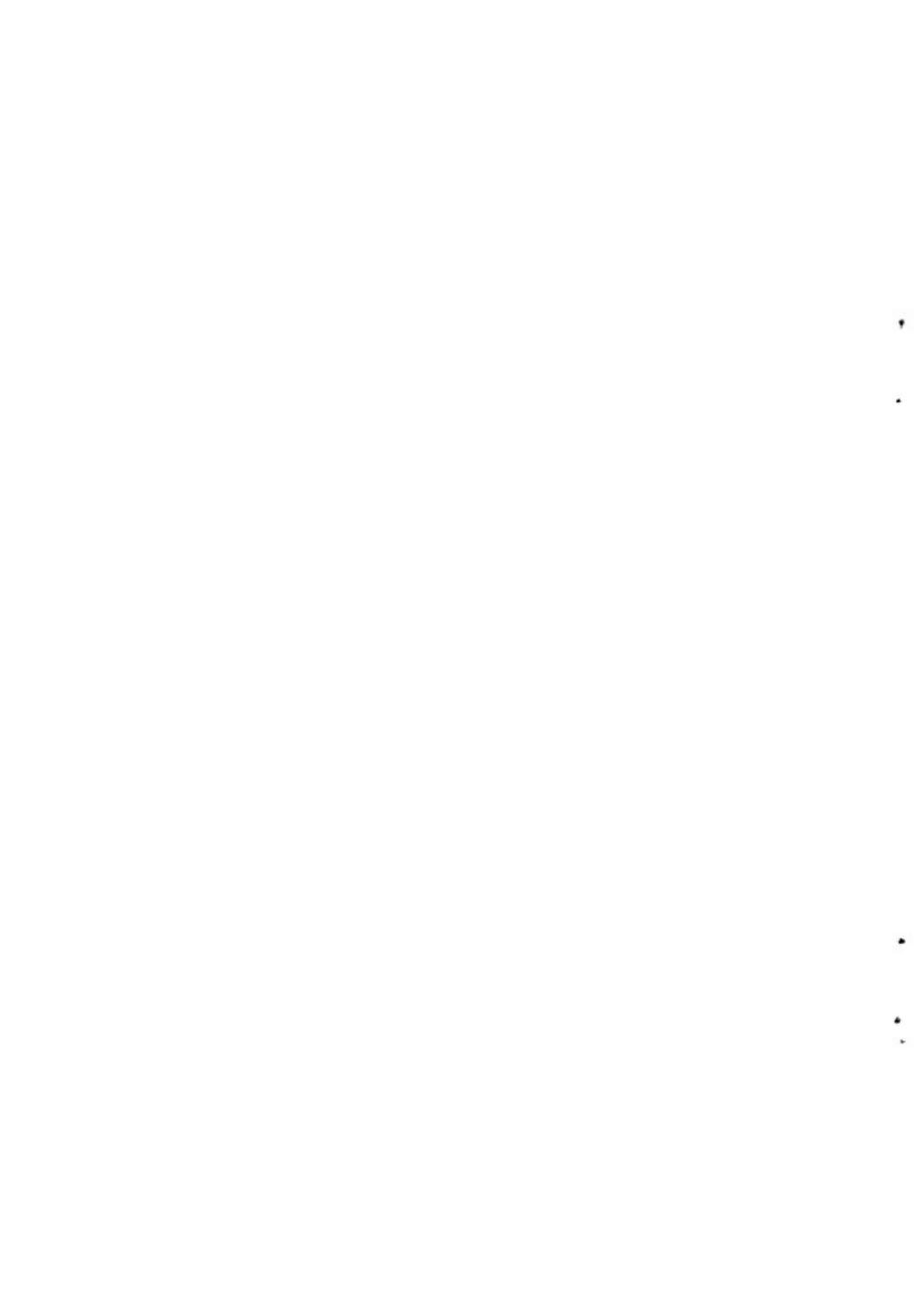




1. 31号土坑遺物出土状態



2. 32・34号土坑、4号溝（西より）





1. 32-34号土塚（北西より）



2. 32号土塚遺物出土状態





1. 76・77号土坑（南東より）



2. 76号土坑

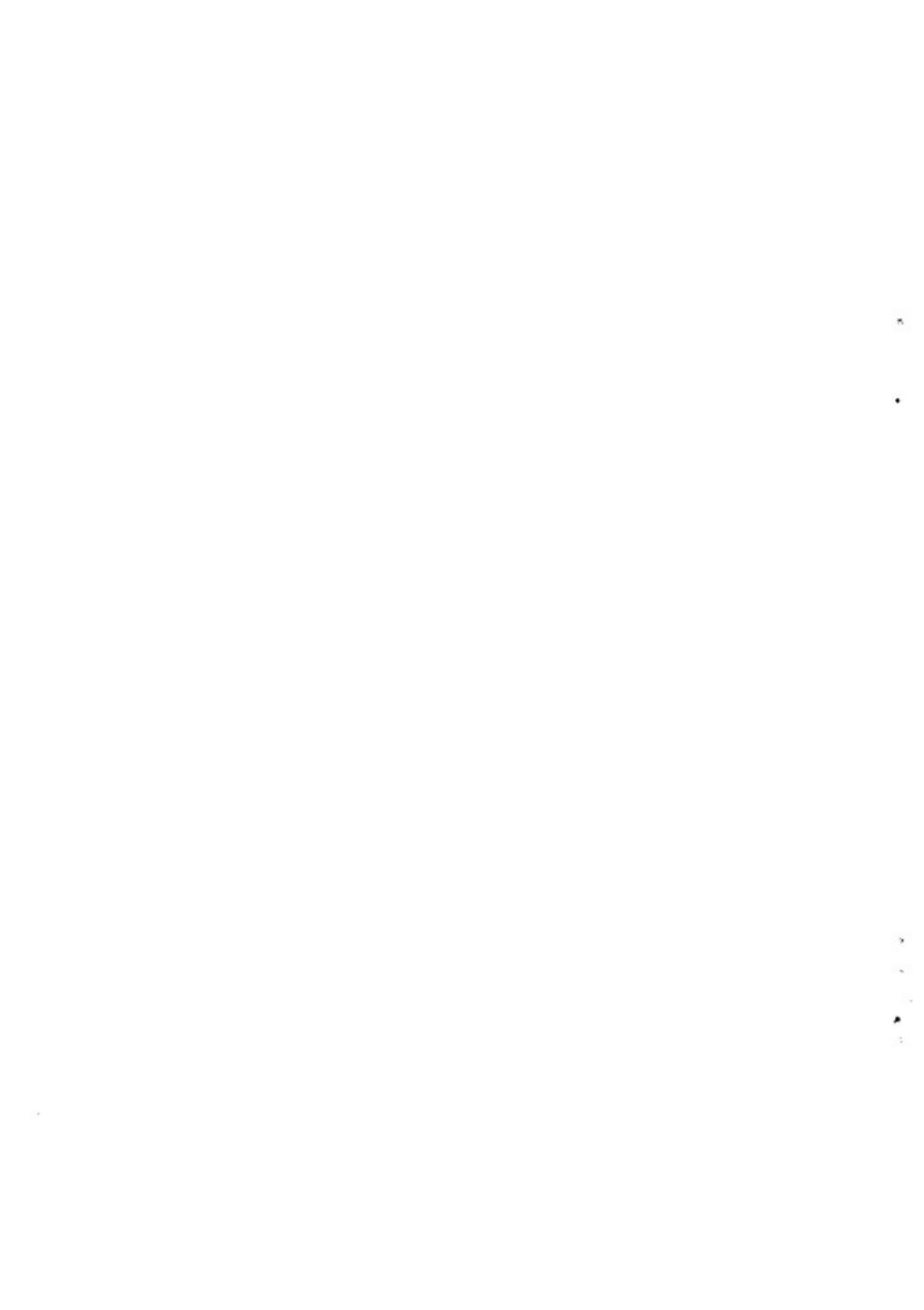




1. 77号土坑



2. 78号土坑遺物出土狀態





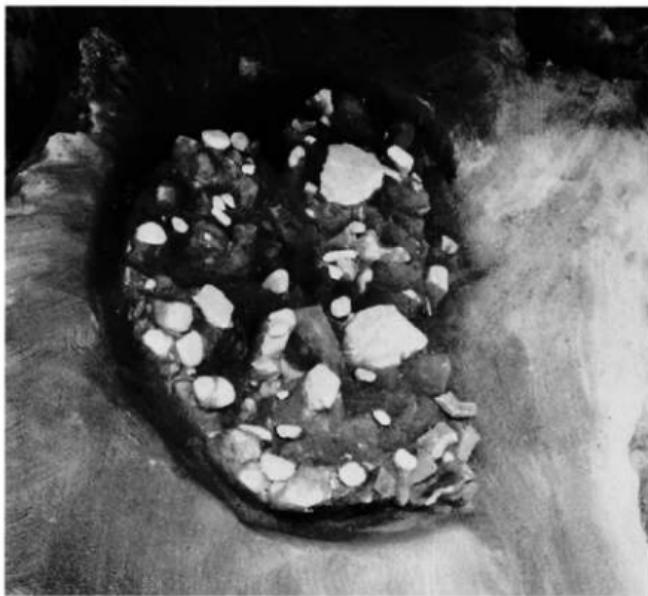
1. 84号土塚（井戸）遺物出土状態



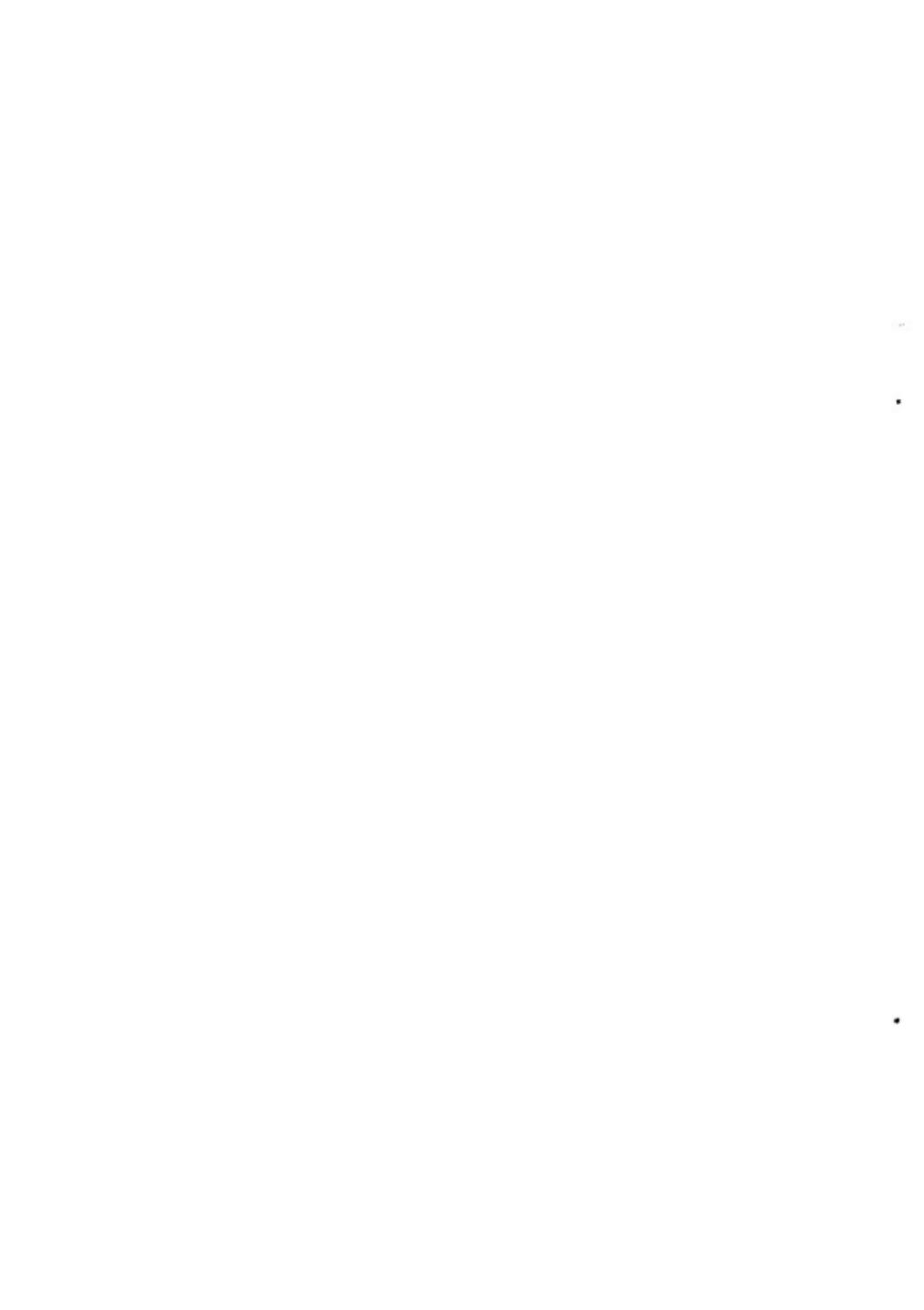
2. 84号土塚（井戸）主体部



1. 82号土坑



2. 86号土坑





1. A—2区2号溝遺物出土状態（東上り）



2. A—2区1・2号溝（発掘後、東上り）

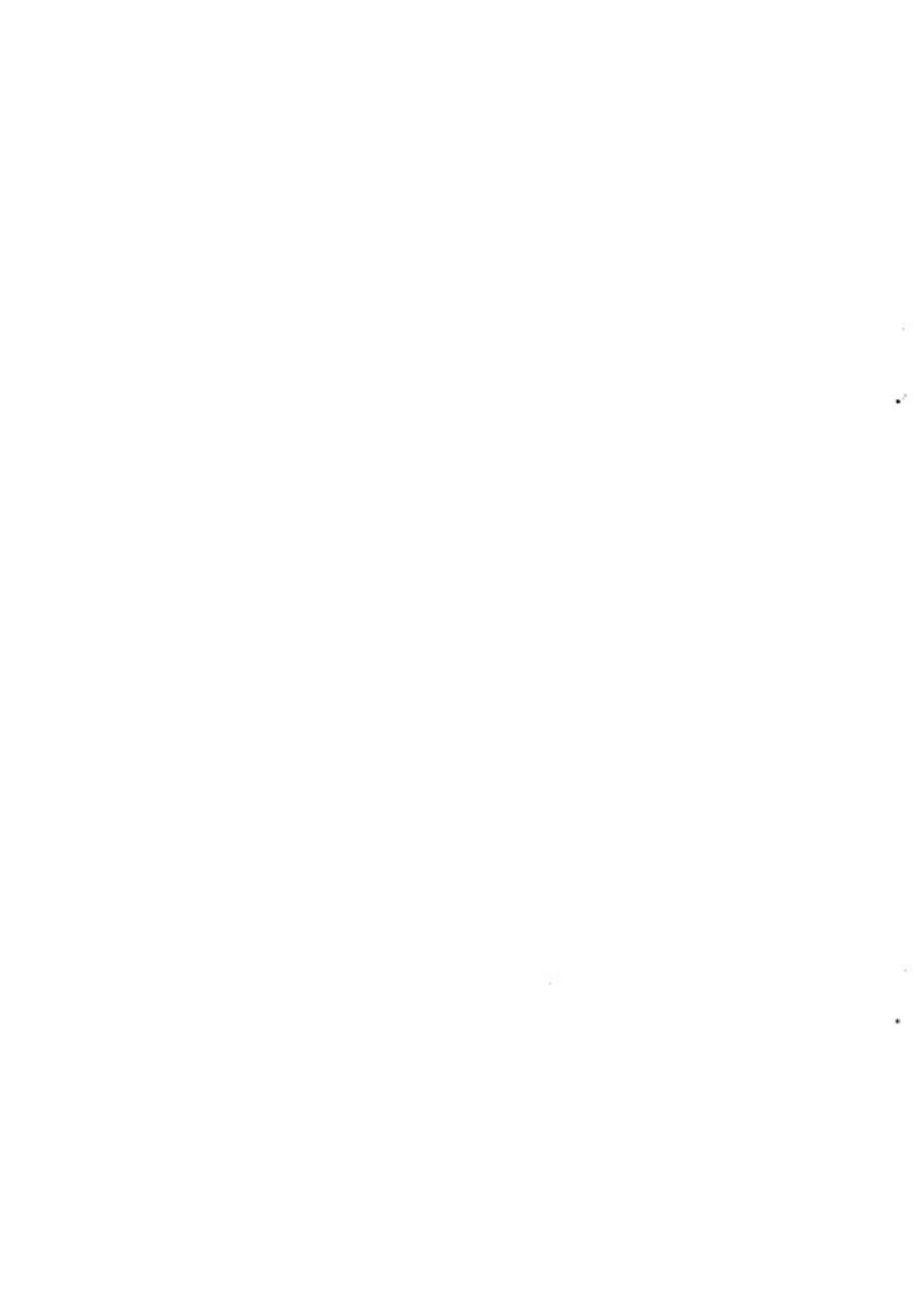


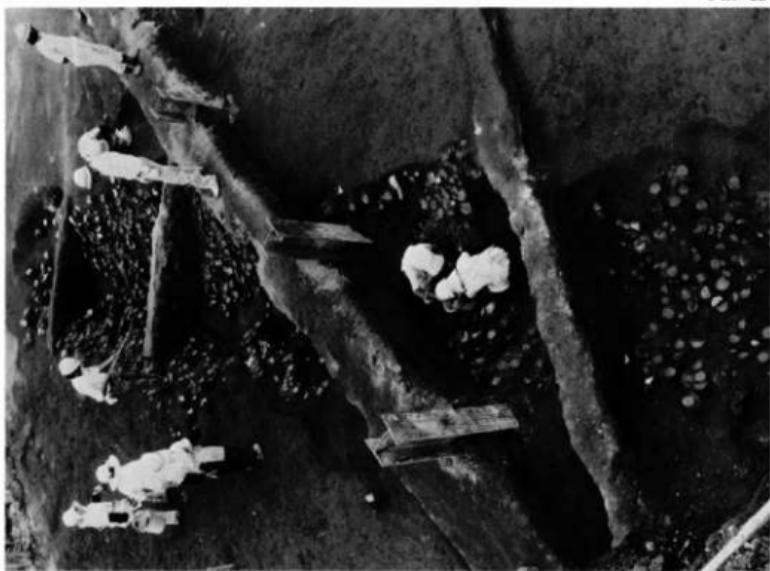


1. A — 2区 2号溝（上面）遺物出土状態（北西より）



2. A — 2区 2号溝遺物出土状態（東西より）

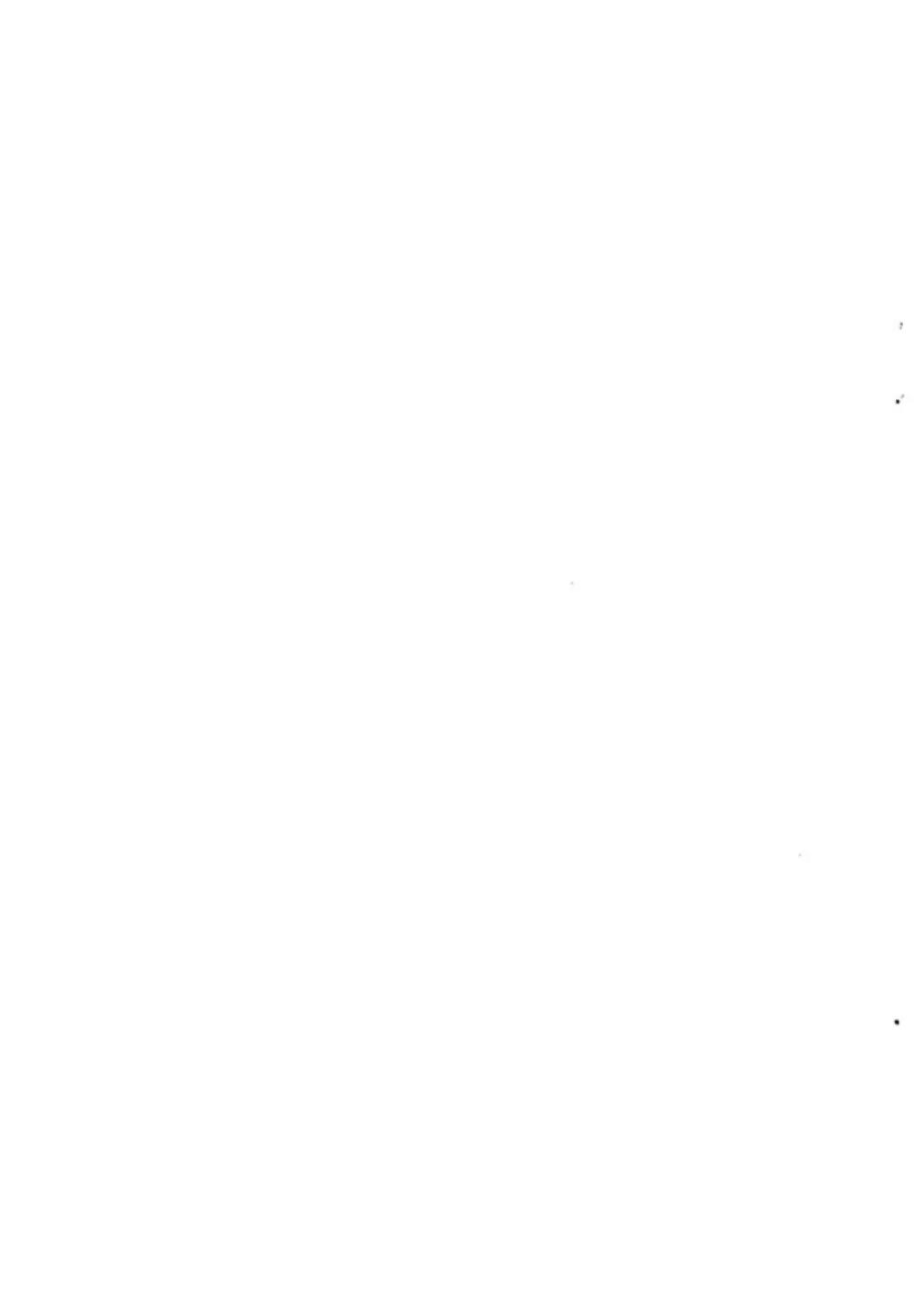


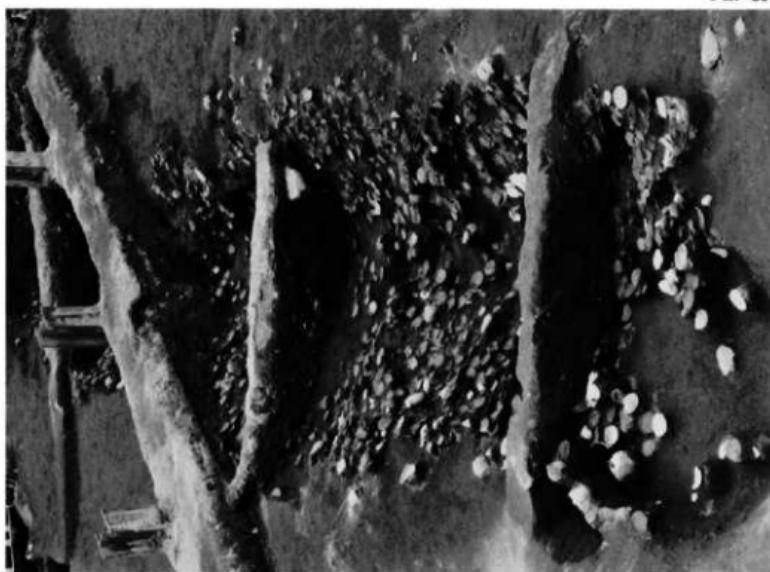


1. B区 2号溝（5号溝）調査風景（西より）

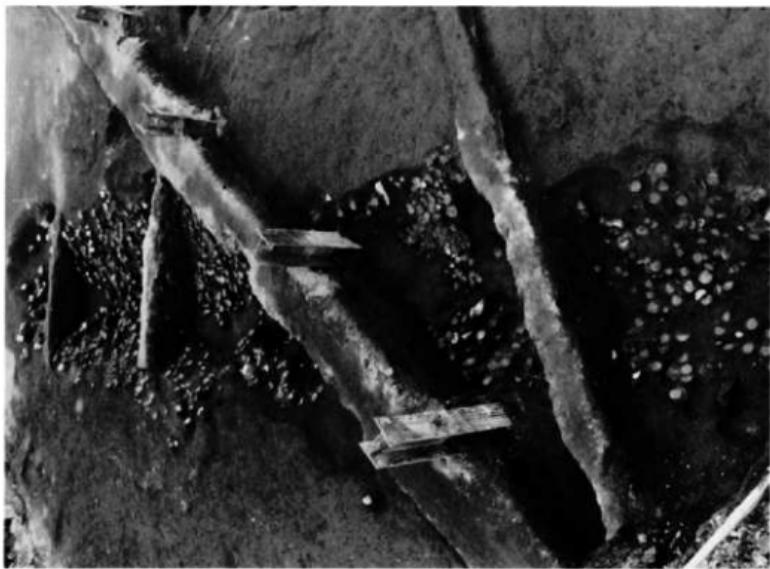


2. 2号溝（5号溝）調査風景

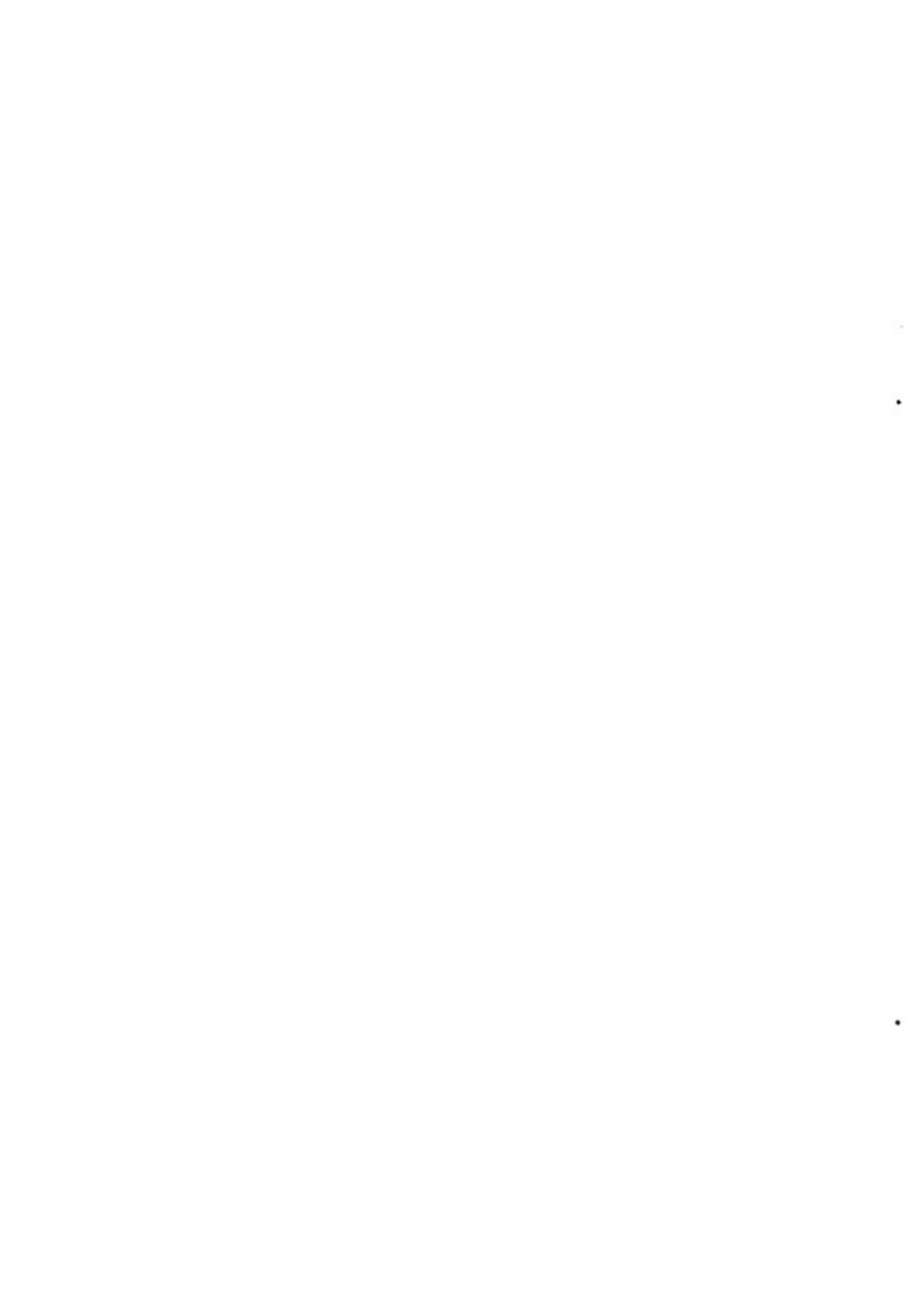




1' 2号溝（5号溝）全貌（東44°）

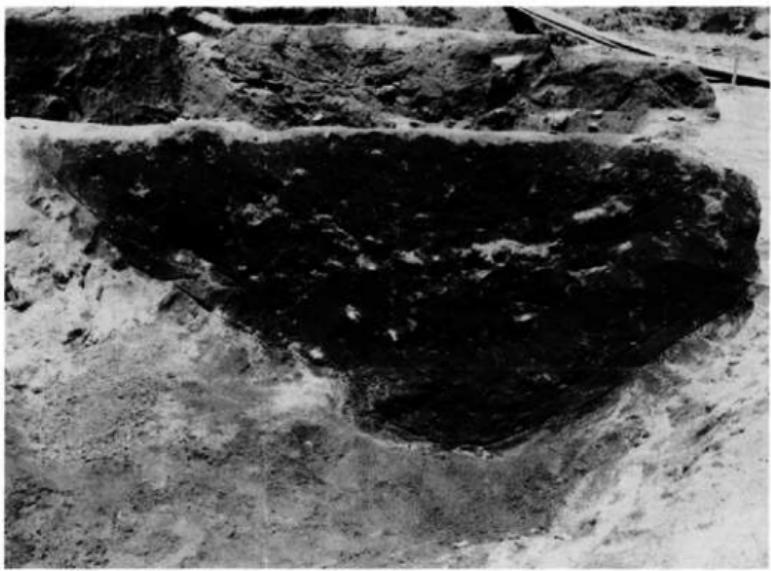


2' 2号溝（5号溝）全貌（西44°）





1. 2号溝(5号溝)土層断面1と上部遺物出土状態



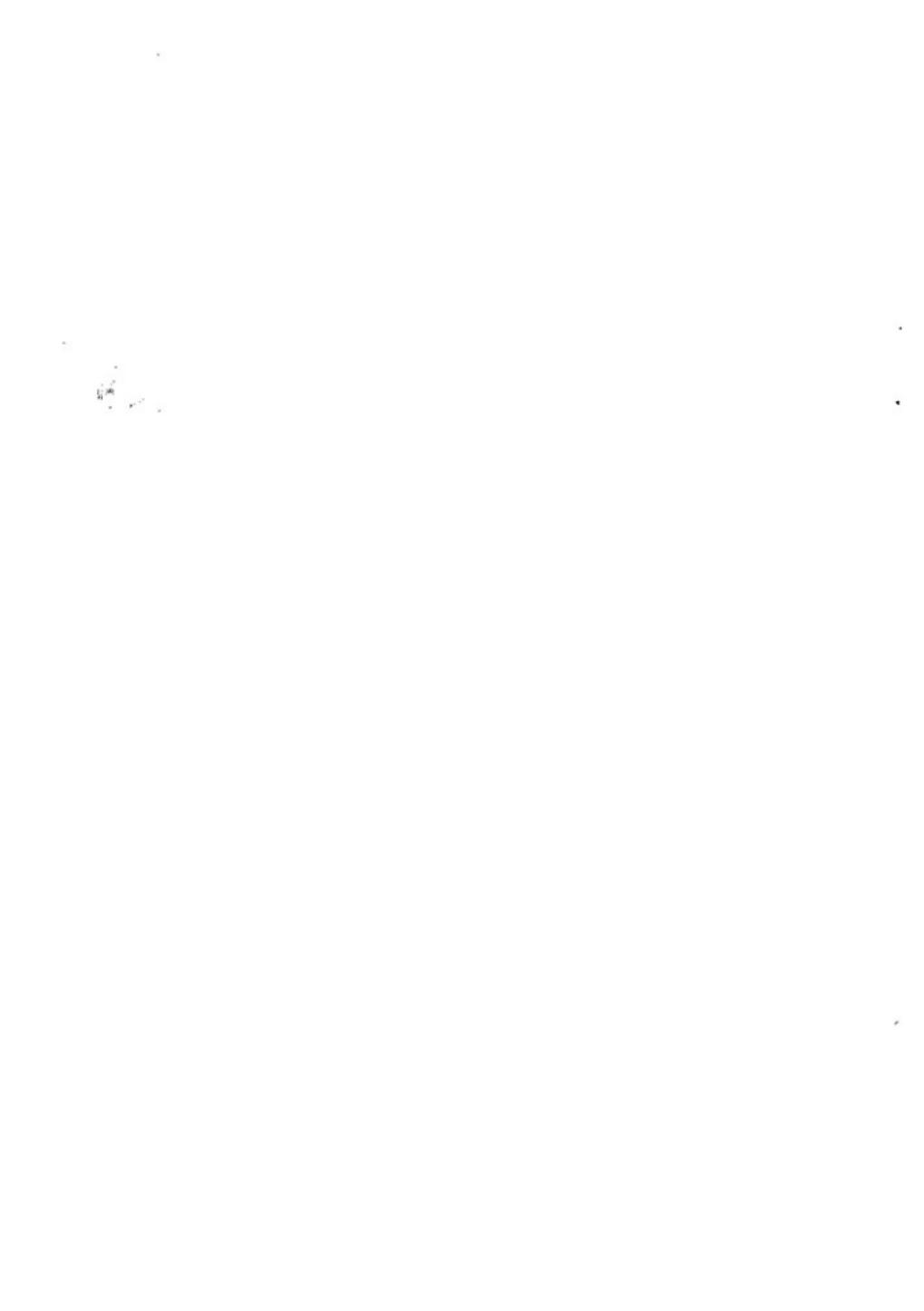
2. 2号溝(5号溝)土層断面1(下部掘下後)



1. 2号溝(5号溝)土層断面2と上部遺物出土状態

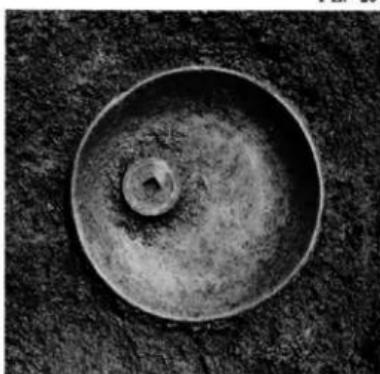


2. 2号溝(5号溝)土層断面2(下部掘下げ後)





1. 2号溝（5号溝）遺物出土狀態



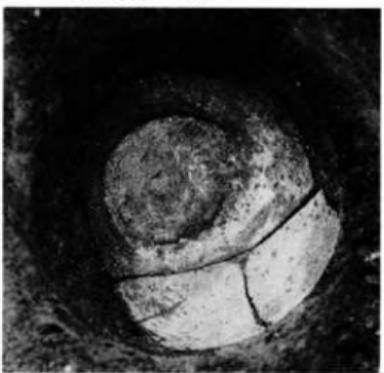
2. 2号溝（5号溝）遺物出土狀態



3. 3号溝遺物出土狀態



4. 3号溝遺物出土狀態



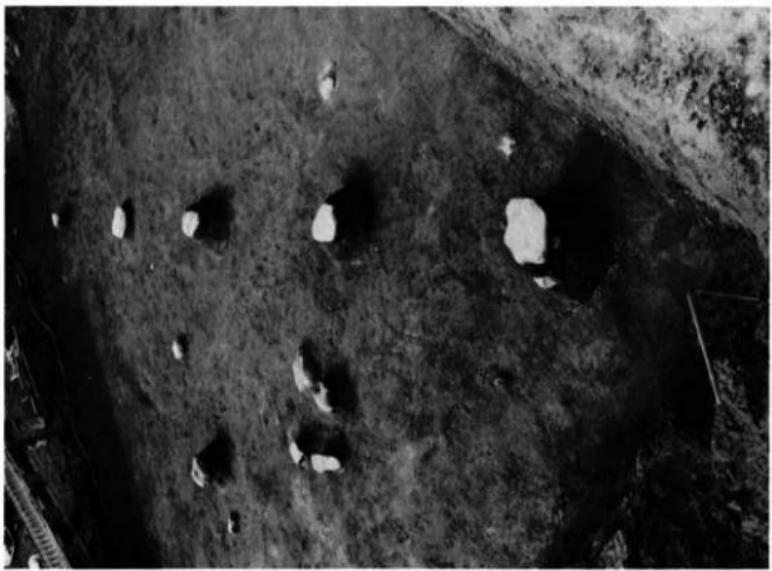
5. 3号溝遺物出土狀態



6. 3号溝牛齒（左上顎骨）出土狀態



1. 4号溝（南+47）



2. A-1区礫石列（東+64）





1. 8号蛋棺墓



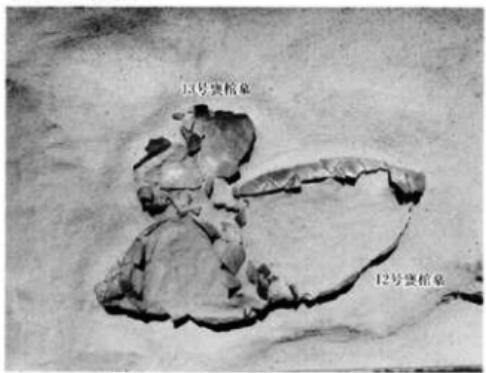
2. 9号蛋棺墓



1. 10-11号陶棺墓



2. 11号陶棺墓



3. 12·13号陶棺墓



1. 出入口 2・3区夜間調査風景



2. 出入口 2・3区夜間調査風景



1. 出入口 2・3区 35号土塁（石組井戸）

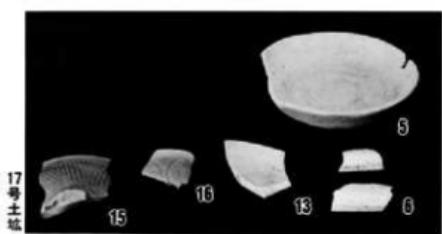
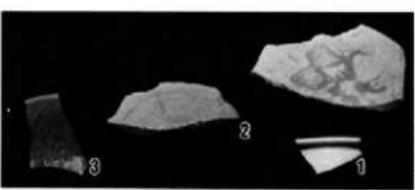
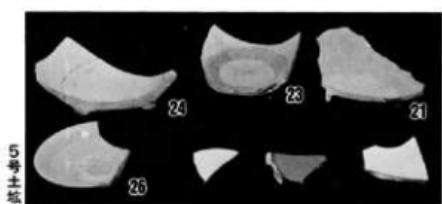
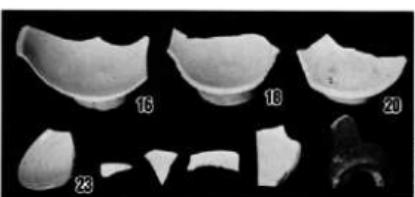
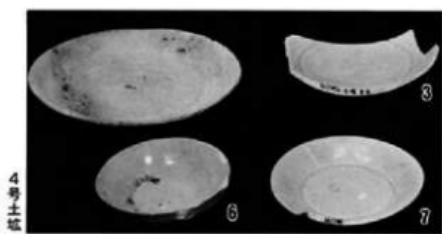
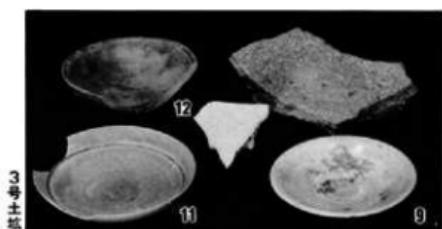
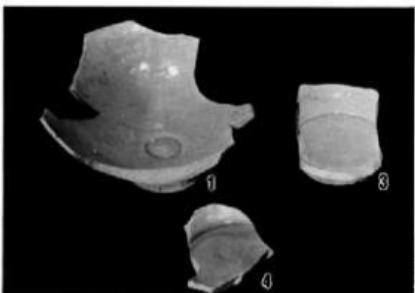
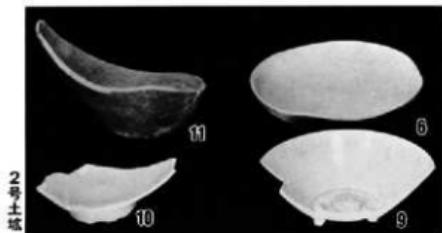


2. 出入口 2・3区 35号土塁（石組井戸）内面

A区

道桥出土遗物

18号土坑



34号土坑

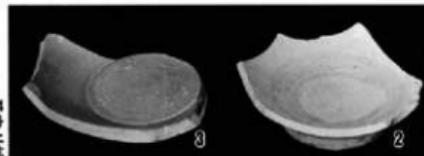
42号土坑

43号土坑

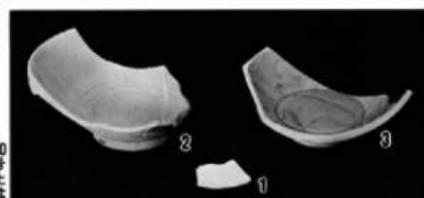
A·B区

遺構出土遺物

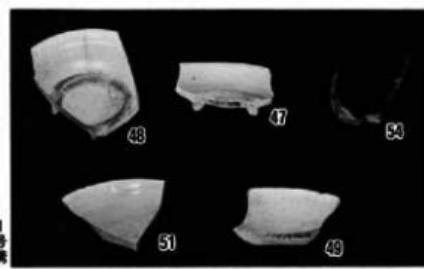
44号土坑



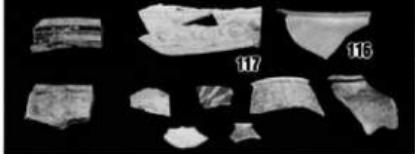
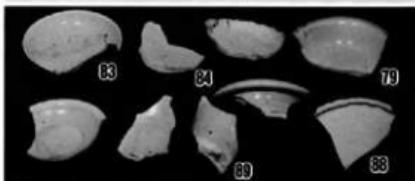
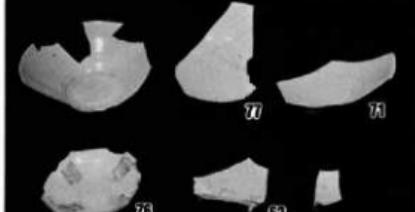
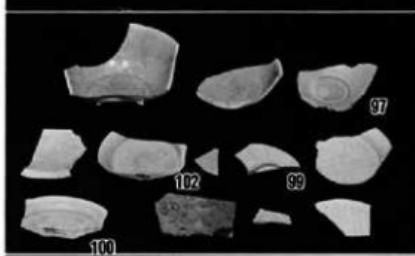
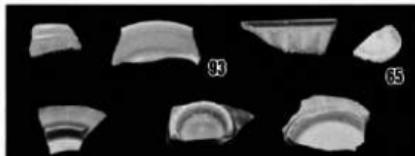
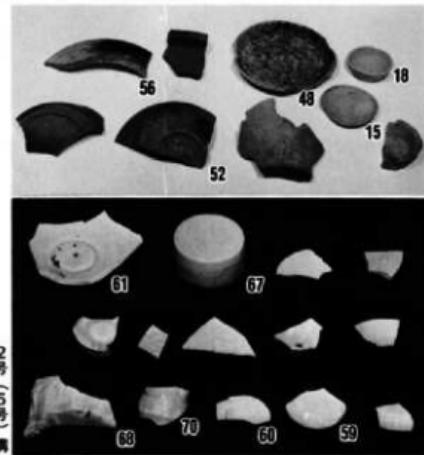
80号土坑



1号溝



2号(5号)溝

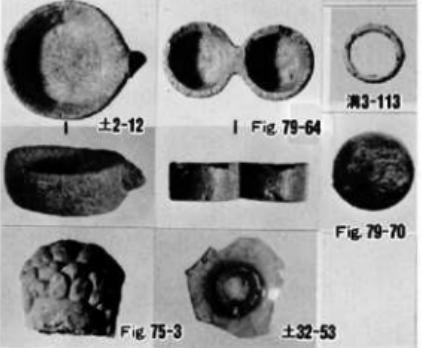
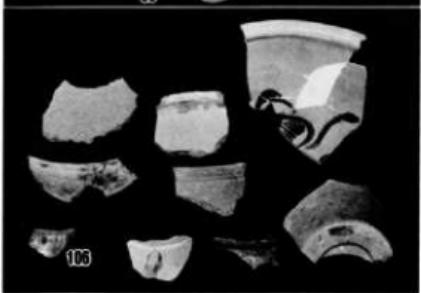
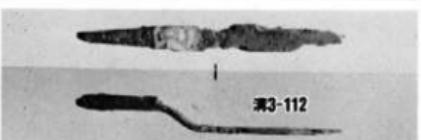
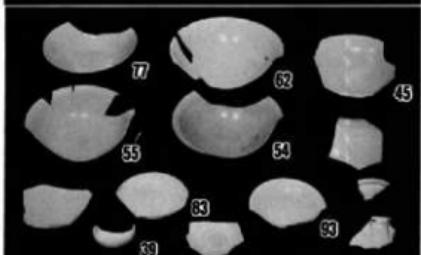
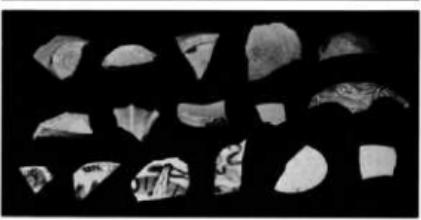
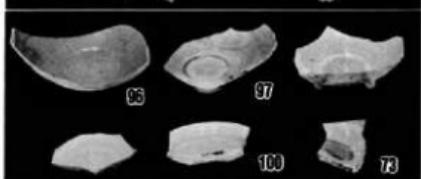
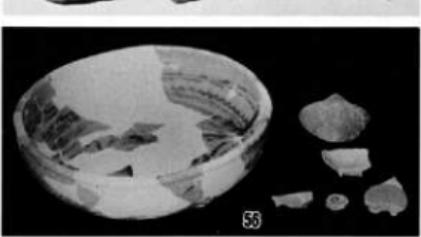
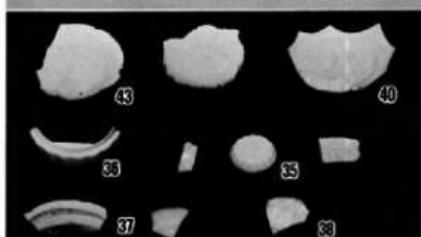
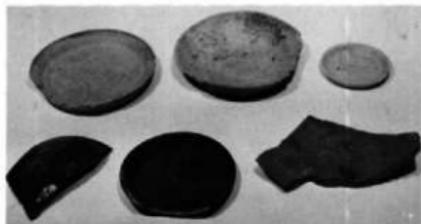


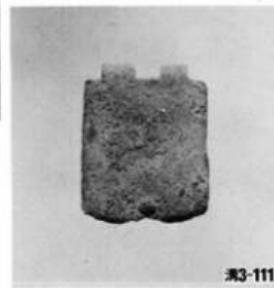
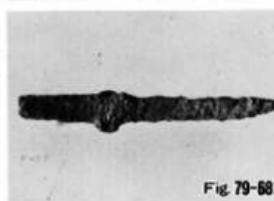
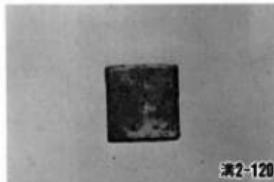
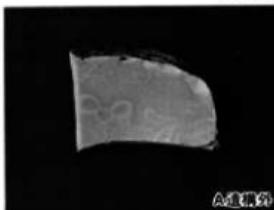
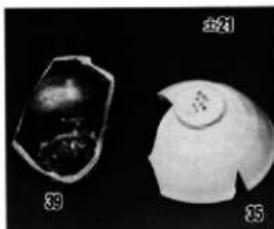
2号(5号)溝

A・B区
遺構および遺構外出土の遺物
3号溝

A区遺構外

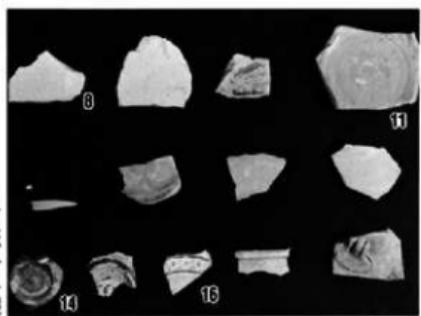
B区遺構外



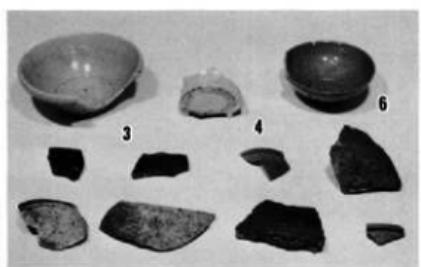


出入口2・3区

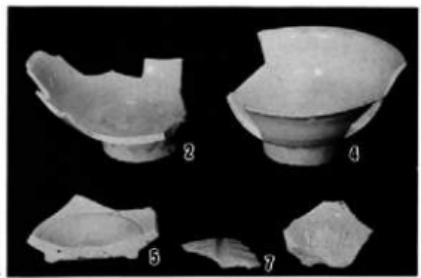
遺構出土遺物

2号土坑
(測量) 1号土坑

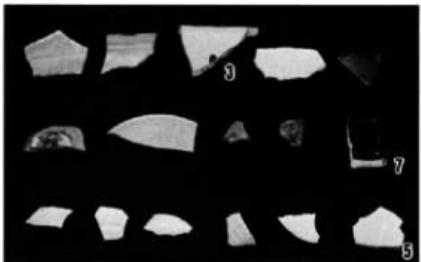
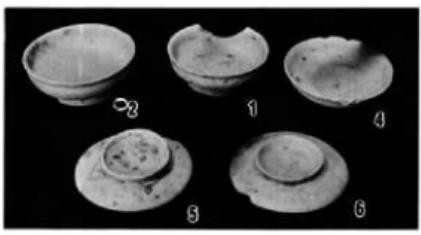
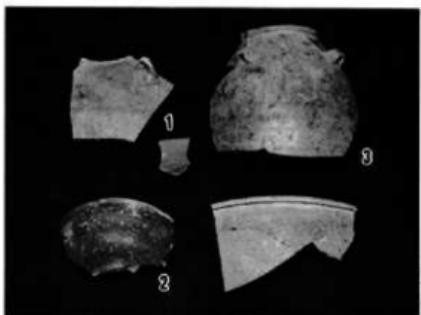
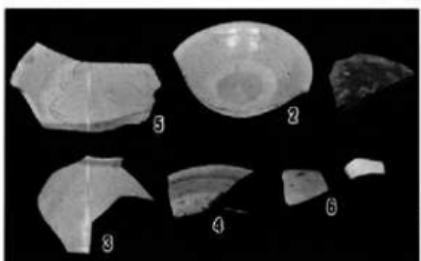
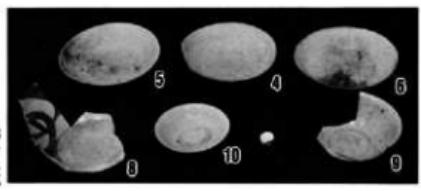
7号土坑



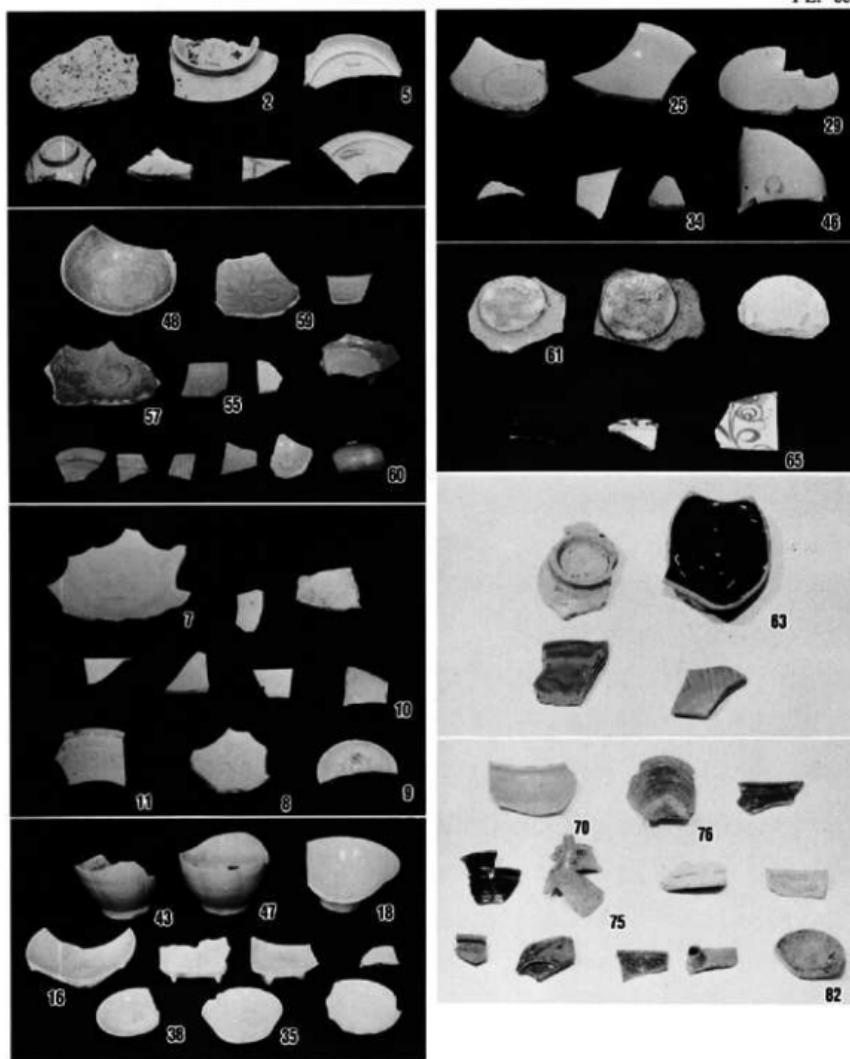
41号土坑



43号土坑

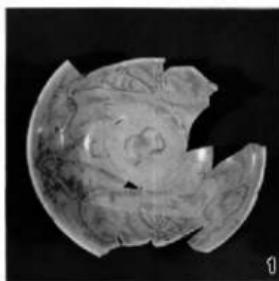


67号土坑

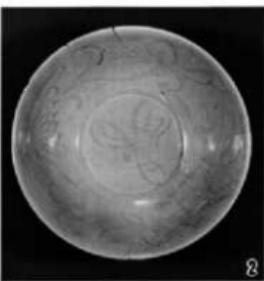


出入口2・3区

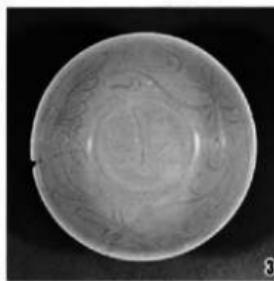
1号土塚（井戸）出土遺物(1)



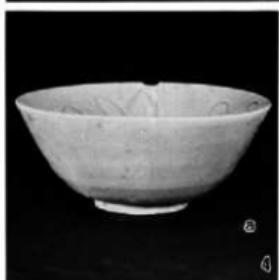
1



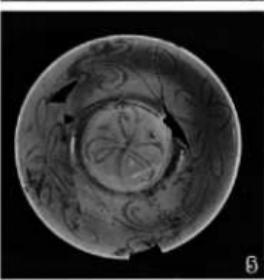
2



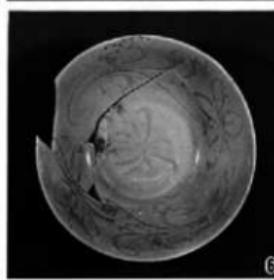
3



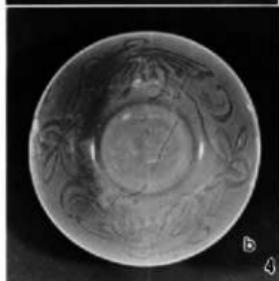
4



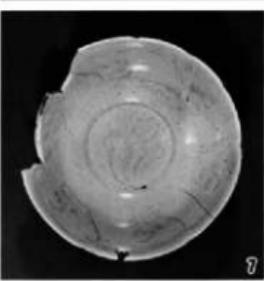
5



6



7



8



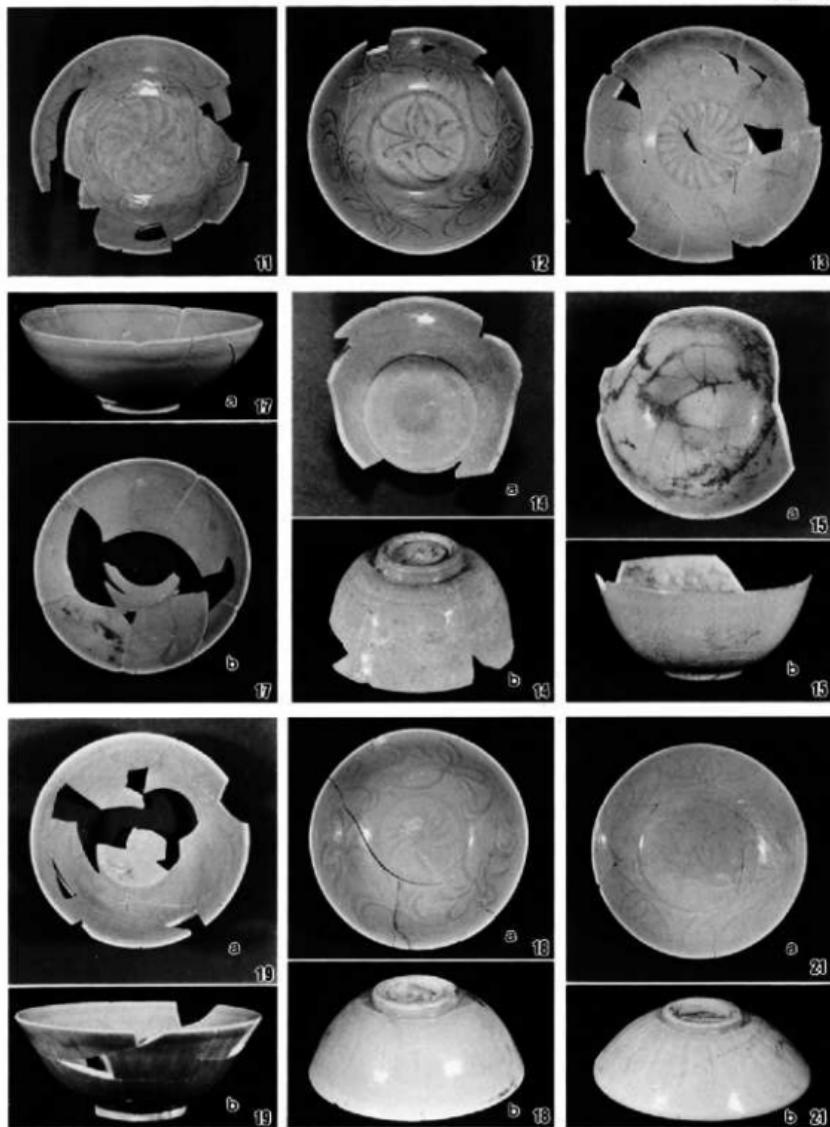
9

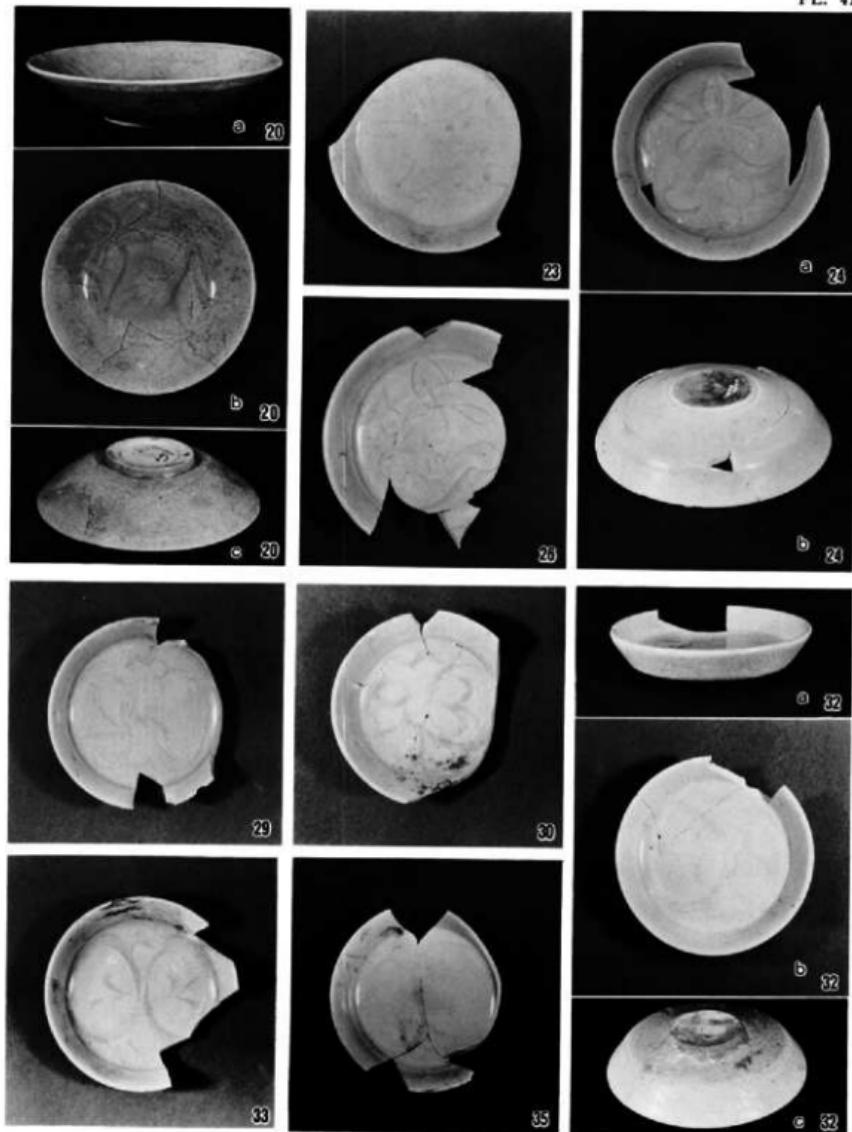


10

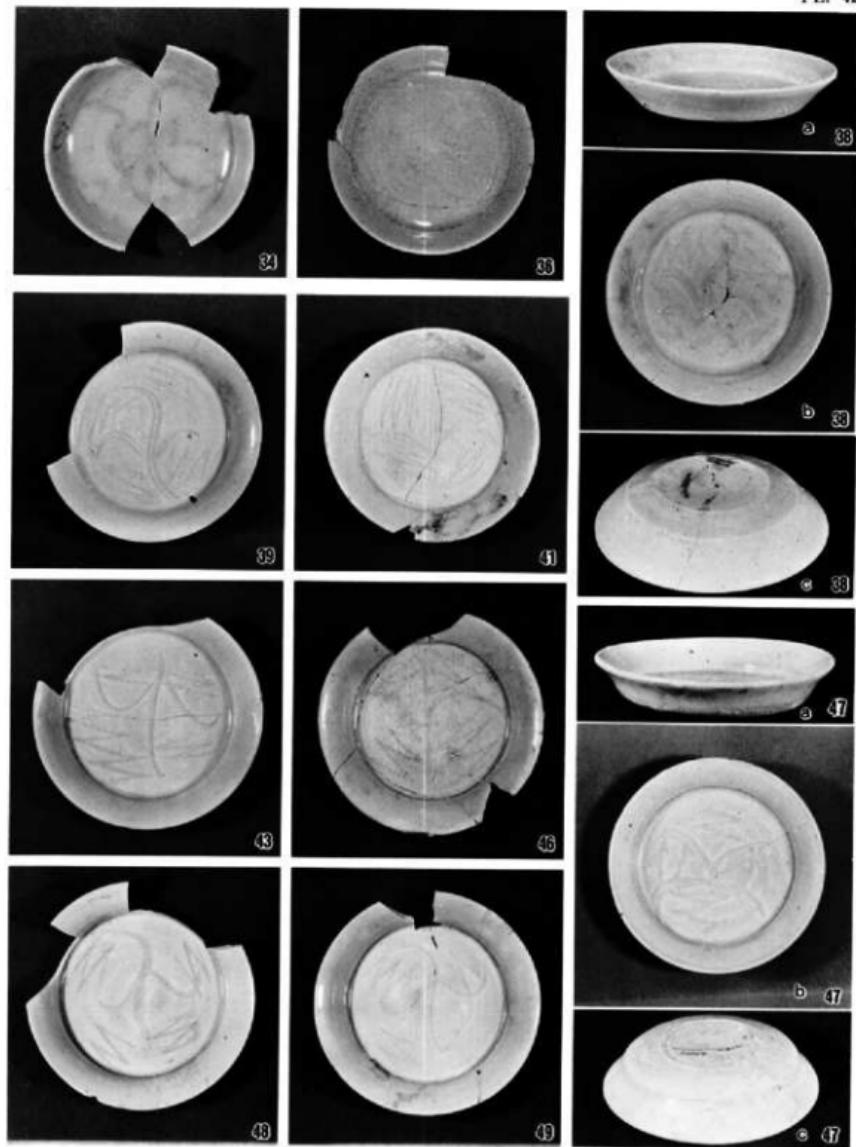
出入口2・3区

1号土塁(井戸)出土遺物(2)





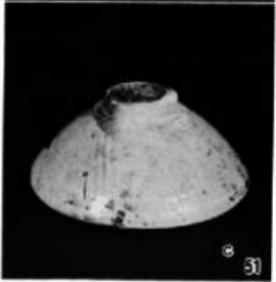
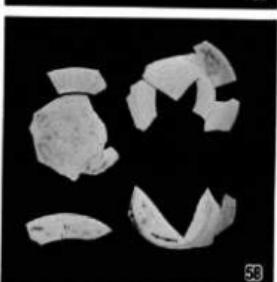
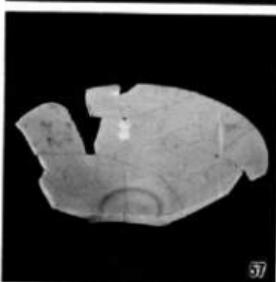
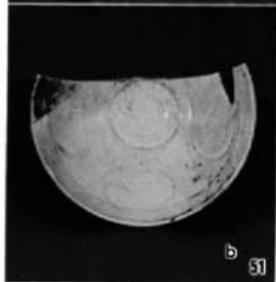
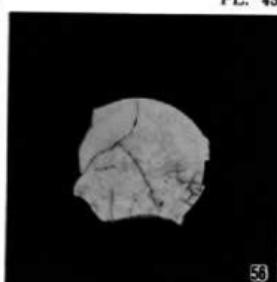
出入口A・B区
1号土坑（井戸）出土遺物(4)





出入口2・3区

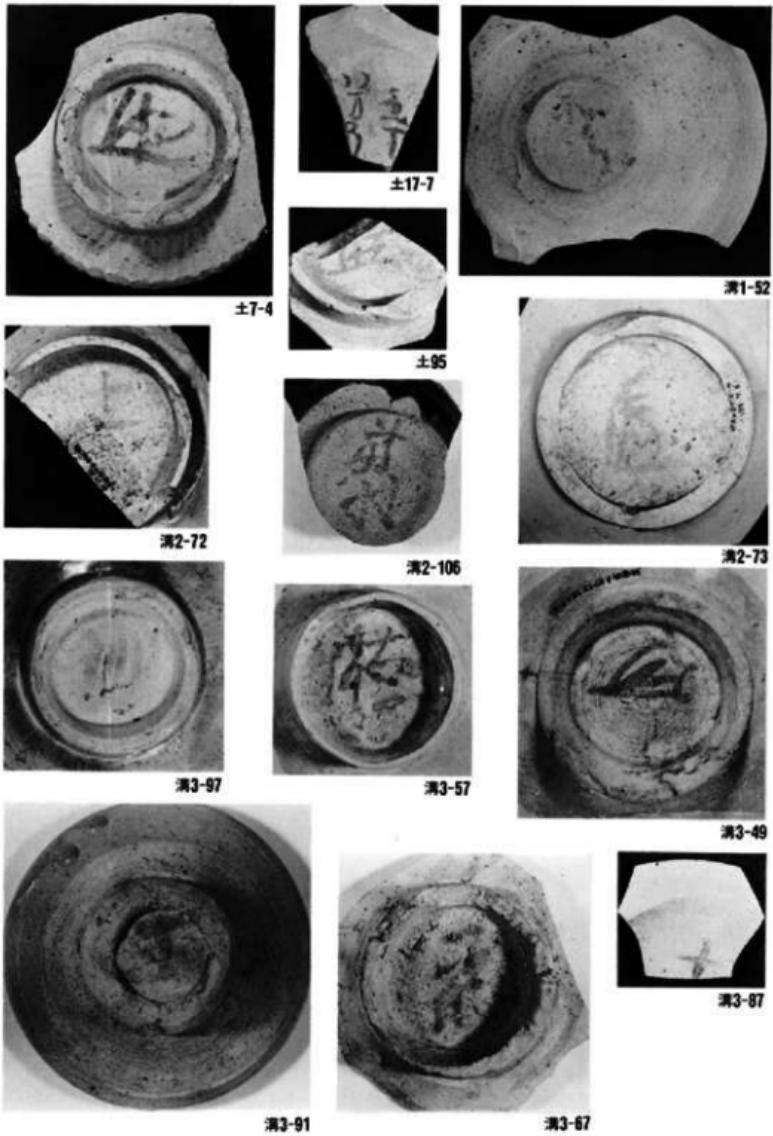
1号土塁(井戸)出土遺物(5)

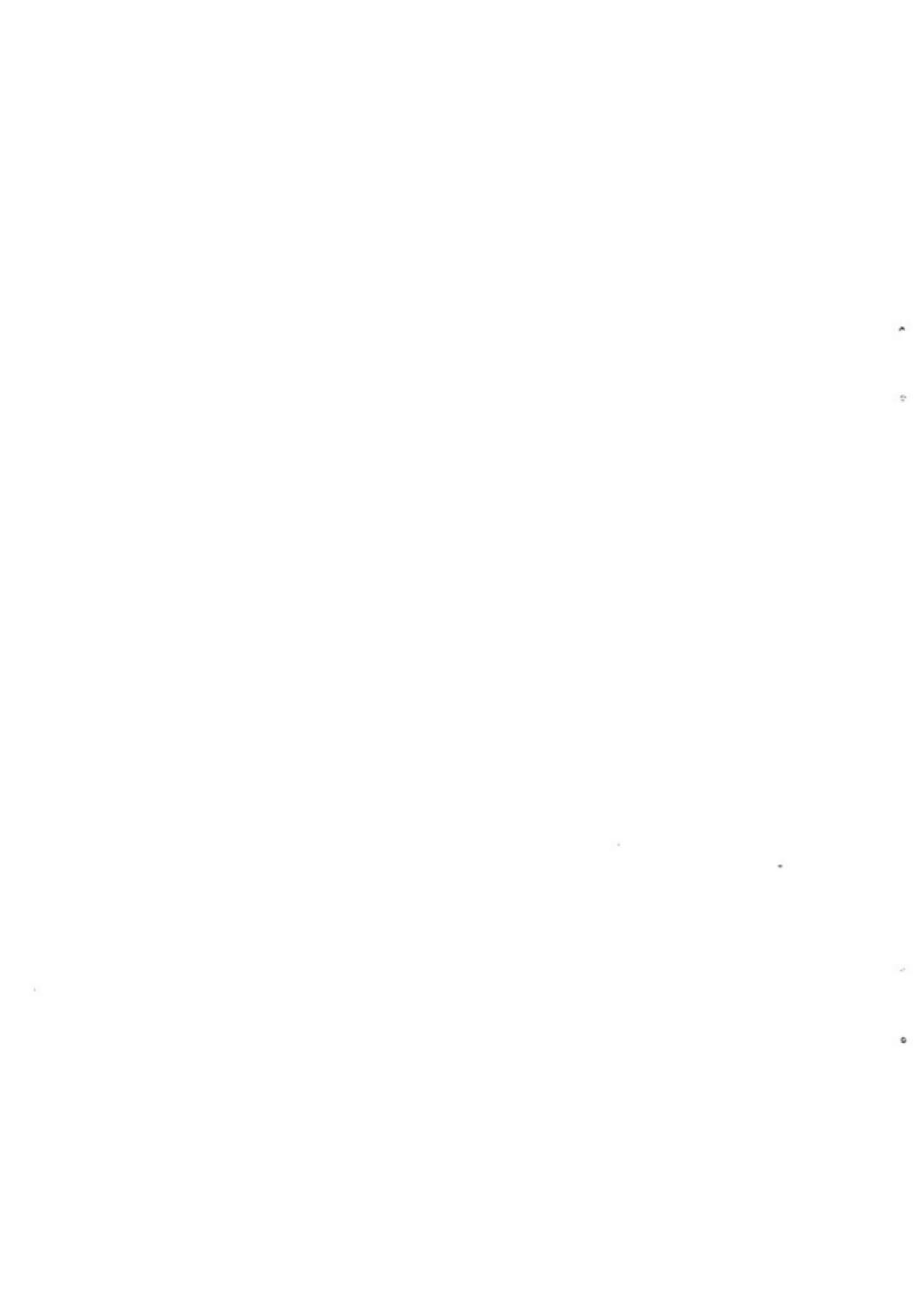












A · B 区

墨書集成 (2)

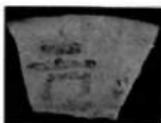


Fig. 75-1

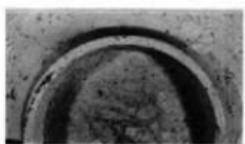


Fig. 75-15

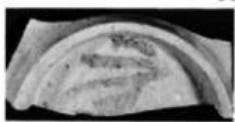


Fig. 76-25

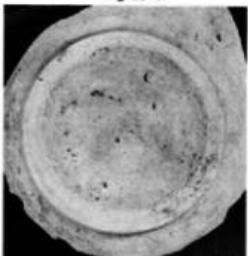


Fig. 76-20

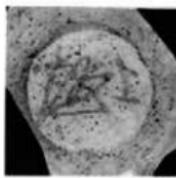


Fig. 76-27

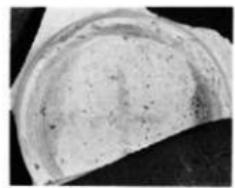


Fig. 75-17

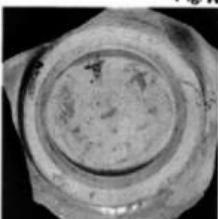


Fig. 77-44

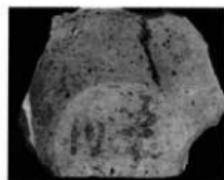


Fig. 77-46

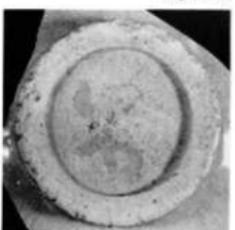


Fig. 77-41



Fig. 81-12

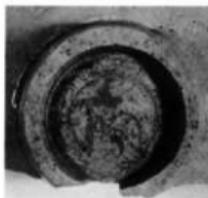


Fig. 81-15



Fig. 77-53



Fig. 82-26



Fig. 81-18

a

c

t

d

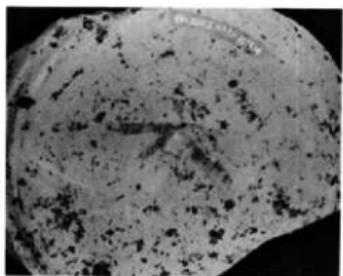


Fig. 121-1

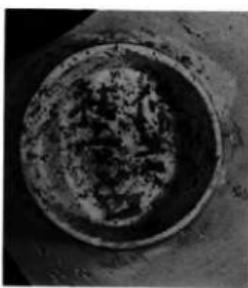


Fig. 122-18

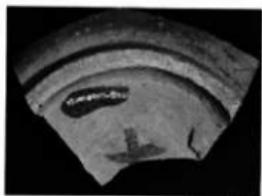


Fig. 121-5



Fig. 121-13



Fig. 122-23

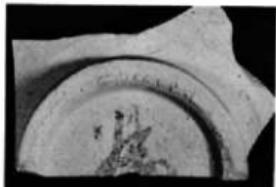


Fig. 121-14

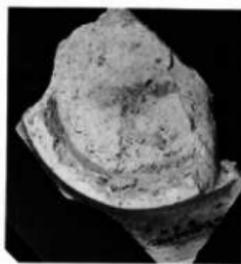


Fig. 122-24

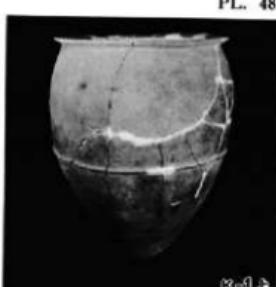
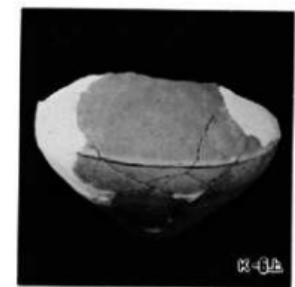


±32-3



Fig. 122-20





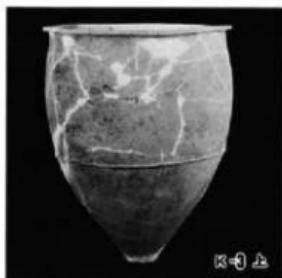
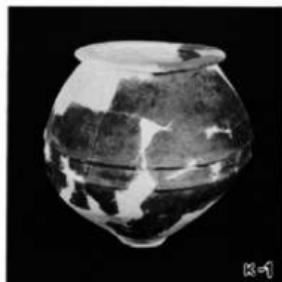
9

2

4

8

出入口
2·3区
出土陶器



福岡市
高速鉄道関係埋蔵文化財報告Ⅳ
博 多

1984(昭和59)年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 福岡印刷株
福岡市博多区東那珂1丁目10番15号

高速鐵道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集

1984

福岡市教育委員会